

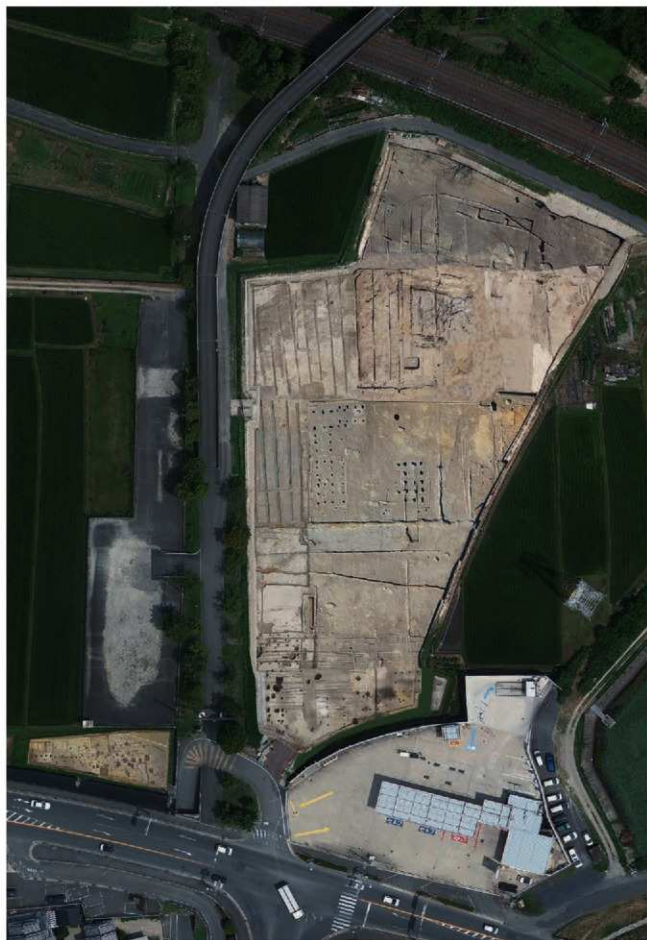
京都府遺跡調査報告集

第180冊

一般国道163号木津東バイパス関係遺跡 岡田国遺跡第3～6次

2020

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



調査区全景(オルソ画像、左が北)

巻頭図版 2 岡田国遺跡第3～6次



(1) 掘立柱建物 S B 1～6 (東から)



(2) 道路 S F 1 (北から)

序

今年度から文化財保護法の一部改正が施行され、文化財の保護とともにその活用が一層重視されます。京都府においても新しい総合計画が策定され、その基本計画の中で文化財の保存・継承・活用を進める具体的な方策が示されています。

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年4月に設立されて以来、38年間にわたって埋蔵文化財の発掘調査を実施して、その調査成果を『京都府遺跡調査報告集』として刊行するとともに、速報展やセミナーなどを通じて公表してまいりました。

本書は、平成27～30年度に国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施した岡田国遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書を学術研究の資料として、また地域の歴史や埋蔵文化財への関心と理解を深めるために、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された上記の各機関をはじめ、木津川市教育委員会、地元自治会などの関係各機関、ならびに調査にご参加、ご協力をいただきました多くの皆さまに厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

一般国道163号木津東バイパス関係遺跡 岡田国遺跡第3～6次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	岡田国遺跡 第3～6次	木津川市木津馬場 南・八色	平成27年11月2日～ 平成28年1月29日 平成28年5月26日～ 平成29年2月28日 平成29年4月19日～ 同年9月14日 平成30年10月10日～ 同年12月25日	国土交通省近畿地 方整備局京都国道 事務所	福山博章・ 高野陽子・ 田中秀弥・ 新尺雅弘

3. 現地調査・整理作業・報告書作成については下記の方々から、ご指導、ご助言を受けました。記して感謝いたします(五十音順、敬称略)。

栗野翔太・網 伸也・池田裕英・稲垣 僚・伊野近富・岩井照芳・上島智史・浦 蓉子・大坪州一郎・小沢 毅・小田裕樹・尾野善裕・門井直哉・鐘方正樹・金原裕美子・川北奈美・国武貞克・桑田調也・古閑正浩・小森俊寛・坂井秀弥・狭川真一・狭川典磨・佐藤聖聖・芝康次郎・鳥田敏男・清水みき・十文字健・庄田慎矢・神野 恵・鈴木景二・鈴木拓也・鈴木智大・鈴木郁哉・妹尾一樹・高橋 敦・高橋克壽・高橋照彦・玉田芳英・塚本敏夫・辻本裕也・辻 康男・鶴来航介・永澤拓志・中島和彦・中谷俊哉・中塚 良・中村武生・新田知央・丹羽崇史・箱崎和久・馬場 基・原田憲一郎・肥後弘幸・福岡澄男・藤田裕嗣・藤間温子・藤本祥人夢・星野安治・堀口智彦・前田仁暉・松葉竜司・松本秀人・三浦一樹・三井 淳・三好美穂・三輪夏美・村上由美子・森下恵介・安井宣也・山中 章・山本 崇・山本祥隆・和田晴吾

4. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

6. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

7. 現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係田中 彰の指導の下、武本典子が行った。

本文目次

一般国道163号木津東バイパス関係岡田国遺跡第3～6次発掘調査報告	1
1. はじめに	1
2. 位置と環境	3
3. 調査の経過と方法	7
4. 調査の概要	10
5. 検出遺構	14
6. 出土遺物	68
7. 遺構・遺物の検討	136
8. まとめ	155
付編1 岡田国遺跡における自然科学分析	165
付編2 溝1・2の花粉・寄生虫卵分析	188
付編3 岡田国遺跡出土井戸枠部材及び柱根の樹種同定・年輪年代調査	192
付編4 岡田国遺跡井戸S E540出土木製品の樹種	202

挿図目次

一般国道163号木津東バイパス関係岡田国遺跡第3～6次

第1図 調査地周辺地形分類図	3
第2図 調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図	5
第3図 調査グリッド配置図	9
第4図 調査次数別調査区配置図及び土層柱状図	11
第5図 調査区土層断面図	12
第6図 弥生・古墳・飛鳥時代遺構配置図	13
第7図 溝S D195実測図	15
第8図 掘立柱建物S B 9実測図	16
第9図 掘立柱建物S B 10実測図	17
第10図 土坑S K 27・30・40実測図	18
第11図 土坑S K 48・390・400実測図	19
第12図 土坑S K 500実測図	20

第13図	自然流路NR560実測図	21
第14図	溝SD590実測図及び遺物出土状況図	22
第15図	奈良時代遺構配置図	24
第16図	道路SF1平面図	25
第17図	道路SF1横断面図	26
第18図	道路SF1東側溝SD160遺物出土状況図1	27
第19図	道路SF1東側溝SD160遺物出土状況図2	28
第20図	道路SF1東側溝SD160遺物出土状況図3	29
第21図	道路SF2平面図	31
第22図	道路SF2断面図	32
第23図	道路SF2北側溝SD165遺物出土状況図	33
第24図	掘立柱建物SB1平面図	35
第25図	掘立柱建物SB1断面図	36
第26図	掘立柱建物SB2・3実測図	37
第27図	掘立柱建物SB4実測図	38
第28図	掘立柱建物SB5実測図	39
第29図	掘立柱建物SB6実測図	40
第30図	掘立柱建物SB7実測図	41
第31図	掘立柱建物SB17実測図	42
第32図	掘立柱建物SB13実測図	43
第33図	掘立柱建物SB14平面図	44
第34図	掘立柱建物SB14断面図	45
第35図	井戸SE152実測図	47
第36図	井戸SE540平面図	48
第37図	井戸SE540立面・断面図	49
第38図	溝群1・2平面図	51
第39図	溝SD460・溝群1・2横断面図	52
第40図	埋納遺構SX475実測図	54
第41図	柱穴SP282・617・土坑SK225実測図	55
第42図	土坑SK550実測図	56
第43図	土坑SK360実測図	56
第44図	落ち込みSX94実測図	57
第45図	平安時代遺構配置図	58
第46図	櫓列SA1実測図	59
第47図	掘立柱建物SB12実測図	60

第48図	掘立柱建物 S B 11 平面図	61
第49図	掘立柱建物 S B 11 断面図	62
第50図	掘立柱建物 S B 8 実測図	63
第51図	掘立柱建物 S B 15 実測図	64
第52図	掘立柱建物 S B 16 実測図	65
第53図	埋納遺構 S X 520・630 実測図	65
第54図	埋納遺構 S X 580 実測図	66
第55図	平安時代後期以降遺構配置図	67
第56図	土坑 S K 466 実測図	68
第57図	溝 S D 195・掘立柱建物 S B 10・土坑 S K 40・48 出土遺物実測図	69
第58図	土坑 S K 198・390・400・500・不明遺構 S X 385・427・434 出土遺物実測図	70
第59図	自然流路 N R 560 (S X 570・675・758) 出土遺物実測図	71
第60図	自然流路 N R 560 (S X 758・764) 出土遺物実測図	73
第61図	自然流路 N R 560 (S X 764・765・766) 出土遺物実測図	75
第62図	自然流路 N R 560 出土遺物実測図 1	76
第63図	自然流路 N R 560 出土遺物実測図 2	77
第64図	石製品実測図	79
第65図	溝 S D 590 出土遺物実測図 1	81
第66図	溝 S D 590 出土遺物実測図 2	83
第67図	道路 S F 1 東側溝 S D 160 出土遺物実測図 1	85
第68図	道路 S F 1 東側溝 S D 160 出土遺物実測図 2	86
第69図	道路 S F 1 東側溝 S D 160 出土遺物実測図 3	87
第70図	道路 S F 1 東側溝 S D 160 出土遺物実測図 4	88
第71図	道路 S F 1 西側溝 S D 190 出土遺物実測図	88
第72図	道路 S F 2 北側溝 S D 165・南側溝 S D 200 出土遺物実測図	90
第73図	掘立柱建物 S B 1・3・4 出土遺物実測図	91
第74図	掘立柱建物 S B 5・6 出土遺物実測図	92
第75図	掘立柱建物 S B 7 出土遺物実測図	93
第76図	掘立柱建物 S B 17 出土遺物実測図	94
第77図	掘立柱建物 S B 13・14 出土遺物実測図	95
第78図	井戸 S E 152 出土遺物実測図	96
第79図	井戸 S E 540 出土遺物実測図 1	97
第80図	井戸 S E 540 出土遺物実測図 2	98
第81図	井戸 S E 540 出土遺物実測図 3	100
第82図	井戸 S E 540 出土遺物実測図 4	101

第83図	井戸 S E 540出土遺物実測図 5	102
第84図	埋納遺構 S X 475出土遺物実測図	102
第85図	柱穴 S P 282・507・617、土坑 S K 225・271・360・550出土遺物実測図	103
第86図	溝 S D 460・溝群 1・溝群 2 出土遺物実測図	105
第87図	落ち込み S X 94出土遺物実測図	106
第88図	埽実測図	107
第89図	丸瓦実測図	109
第90図	平瓦実測図 1	111
第91図	平瓦実測図 2	112
第92図	平瓦実測図 3	113
第93図	井戸 S E 540井戸枳材実測図 1	115
第94図	井戸 S E 540井戸枳材実測図 2	116
第95図	井戸 S E 540井戸枳材実測図 3	117
第96図	井戸 S E 540井戸枳材実測図 4	118
第97図	井戸 S E 540井戸枳材実測図 5	119
第98図	井戸 S E 540井戸枳材実測図 6	120
第99図	井戸 S E 540井戸枳材実測図 7	121
第100図	木製品実測図	122
第101図	金属製品実測図	123
第102図	遺構出土遺物実測図	124
第103図	瓦実測図	126
第104図	掘立柱建物 S B 11出土柱根実測図	126
第105図	銭貨拓本	127
第106図	遺構出土土器実測図	127
第107図	素掘り溝出土土器実測図	128
第108図	瓦・木製品実測図	129
第109図	金属製品実測図	130
第110図	銭貨拓本	131
第111図	遺物包含層出土遺物実測図 1	133
第112図	遺物包含層出土遺物実測図 2	135
第113図	平城宮・京、恭仁宮、上粕北遺跡出土土器	138
第114図	丸瓦・平瓦地点別出土分布図	140
第115図	製塩土器地点別出土分布図	141
第116図	岡田国遺跡周辺における奈良時代の溝平面図	144
第117図	小規模宅地検出例平面図	147

第118図	溝群検出例平面図	149
第119図	緑釉陶器・灰釉陶器地点別出土点数分布図	153
第120図	岡田国遺跡奈良・平安時代遺構変遷図	157
第121図	岡田国遺跡検出遺構及び周辺遺跡変遷図	159

付表目次

一般国道163号木津東バイパス関係岡田国遺跡第3～6次

付表1	溝群主軸一覧	50
付表2	道路SF1東側溝SD160出土土器破片数一覧	84
付表3	道路SF2北側溝SD165出土土器破片数一覧	89
付表4	井戸SE540出土土器破片数一覧	99
付表5	出土土器観察表(弥生・古墳時代)	205
付表6	出土土器観察表(飛鳥・奈良時代)	208
付表7	出土土器観察表(平安時代)	218
付表8	出土土器観察表(中世)	219
付表9	遺物包含層出土土器観察表	221
付表10	出土石製品観察表	223
付表11	出土瓦埴類観察表	223
付表12	出土木製品観察表	225
付表13	出土鉄製品観察表	226
付表14	出土銭貨観察表	226

図版目次

巻頭図版1	岡田国遺跡	調査区全景(オルソ画像、左が北)
巻頭図版2	岡田国遺跡	(1)掘立柱建物SB1～6(東から)
		(2)道路SF1(北から)

一般国道163号木津東バイパス関係岡田国遺跡第3～6次

図版第1	(1)第3次調査地全景(西から)
------	------------------

- (2) 第3次調査地全景(西から)
- 図版第2 (1) 第4・5次調査区全景(南から)
(2) 第4・5次調査区全景(東から)
- 図版第3 (1) 第4・5次調査区全景(南から)
(2) 第4・5次調査区全景(北から)
- 図版第4 (1) 第4・5次調査区全景(北東から)
(2) 第4・5次調査区全景(南から)
- 図版第5 (1) 第4・5次調査区全景(南から)
(2) 第4・5次調査区全景(北から)
- 図版第6 (1) 第4・5次調査区全景(西から)
(2) 第4・5次調査区全景(南東から)
- 図版第7 (1) 第4・5次調査区全景(東から)
(2) 第4・5次調査区全景(西から)
- 図版第8 (1) 第4・5次調査区全景(南から)
(2) 第4・5次調査区全景(北から)
- 図版第9 (1) 第4・5次調査区全景(西から)
(2) 第4・5次調査区全景(北から)
- 図版第10 (1) 第4・5次調査区全景(北から)
(2) 第4・5次調査区全景(東から)
- 図版第11 (1) 第6次調査区全景(南から)
(2) 第6次調査区全景(南東から)
- 図版第12 (1) 第6次調査区全景(南から)
(2) 第6次調査区全景(北から)
- 図版第13 (1) 掘立柱建物S B 9(南から)
(2) 掘立柱建物S B 9(東から)
- 図版第14 (1) 掘立柱建物S B 10(北から)
(2) 掘立柱建物S B 10(北東から)
- 図版第15 (1) 土坑S K 27遺物出土状況(南から)
(2) 土坑S K 30土層断面(南から)
(3) 土坑S K 40土層断面(南から)
- 図版第16 (1) 土坑S K 48遺物検出状況(南から)
(2) 土坑S K 390土層断面(南から)
(3) 土坑S K 400土層断面(南から)
- 図版第17 (1) 土坑S K 500遺物出土状況(南から)
(2) 土器溜まりS X 427(東から)

- (3)車輪石出土状況(南から)
- 図版第18 (1)溝S D195(北から)
 (2)溝S D195(北から)
 (3)溝S D195土層断面(南から)
- 図版第19 (1)自然流路N R560遺物出土状況(南西から)
 (2)自然流路N R560遺物出土状況(東から)
- 図版第20 (1)自然流路N R560土器溜まりS X764遺物出土状況(南から)
 (2)自然流路N R560土器溜まりS X764遺物出土状況(東から)
 (3)自然流路N R560遺物出土状況(西から)
- 図版第21 (1)自然流路N R560土層断面(南東から)
 (2)自然流路N R560土層断面(南から)
- 図版第22 (1)溝S D590遺物出土状況(北東から)
 (2)溝S D590遺物出土状況(東から)
 (3)溝S D590遺物出土状況(東から)
- 図版第23 (1)溝S D590遺物出土状況(南から)
 (2)溝S D590遺物出土状況(東から)
 (3)溝S D590遺物出土状況(東から)
- 図版第24 (1)道路S F 1(南東から)
 (2)道路S F 1(北から)
- 図版第25 (1)道路S F 1(南から)
 (2)道路S F 1(南から)
- 図版第26 (1)道路S F 1轍痕検出状況(南から)
 (2)道路S F 1轍痕検出状況(南から)
 (3)道路S F 1轍痕検出状況(南から)
- 図版第27 (1)道路S F 1東側溝S D160(北から)
 (2)道路S F 1東側溝S D160(南から)
- 図版第28 (1)道路S F 1東側溝S D160遺物出土状況(南から)
 (2)道路S F 1東側溝S D160遺物出土状況(西から)
 (3)道路S F 1東側溝S D160遺物出土状況(南から)
- 図版第29 (1)道路S F 1東側溝S D160遺物出土状況(北から)
 (2)道路S F 1東側溝S D160遺物出土状況(南から)
 (3)道路S F 1東側溝S D160土層断面(南から)
- 図版第30 (1)道路S F 1西側溝S D190(南から)
 (2)道路S F 1西側溝S D190(南から)
- 図版第31 (1)道路S F 1西側溝S D190遺物出土状況(南から)

- (2) 道路 S F 1 西側溝 S D190土層断面(南から)
 (3) 道路 S F 1 西側溝 S D190土層断面(南から)
- 図版第32 (1) 道路 S F 2 (北西から)
 (2) 道路 S F 2 (西から)
- 図版第33 (1) 道路 S F 2 (東から)
 (2) 道路 S F 2 (西から)
- 図版第34 (1) 道路 S F 2 北側溝 S D165(西から)
 (2) 道路 S F 2 南側溝 S D200(西から)
- 図版第35 (1) 道路 S F 2 北側溝 S D165土層断面(東から)
 (2) 道路 S F 2 北側溝 S D165土層断面(西から)
 (3) 道路 S F 2 南側溝 S D200土層断面(東から)
- 図版第36 (1) 掘立柱建物 S B 1 検出状況(南西から)
 (2) 掘立柱建物 S B 1 (東から)
- 図版第37 (1) 掘立柱建物 S B 1 柱穴 S P171遺物出土状況(南から)
 (2) 掘立柱建物 S B 1 柱穴 S P169土層断面(南から)
 (3) 掘立柱建物 S B 1 柱穴 S P170検出状況(南から)
- 図版第38 (1) 掘立柱建物 S B 2・3 検出状況(北東から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2・3 (南東から)
- 図版第39 (1) 掘立柱建物 S B 4 検出状況(東から)
 (2) 掘立柱建物 S B 4 (北から)
- 図版第40 (1) 掘立柱建物 S B 5・6 検出状況(北から)
 (2) 掘立柱建物 S B 5・6 (北から)
- 図版第41 (1) 掘立柱建物 S B 5・6 柱穴 S P 259・264検出状況(南から)
 (2) 掘立柱建物 S B 5 柱穴 S P 264土層断面(東から)
 (3) 掘立柱建物 S B 6 柱穴 S P 259土層断面(北西から)
- 図版第42 (1) 掘立柱建物 S B 7 (東から)
 (2) 掘立柱建物 S B 7 (西から)
- 図版第43 (1) 掘立柱建物 S B13・14(東から)
 (2) 掘立柱建物 S B13・14(北西から)
- 図版第44 (1) 掘立柱建物 S B13(東から)
 (2) 掘立柱建物 S B14(西から)
- 図版第45 (1) 掘立柱建物 S B13柱穴 S P 773遺物出土状況(南東から)
 (2) 掘立柱建物 S B13柱穴 S P 707土層断面(南から)
 (3) 掘立柱建物 S B14柱穴 S P 614土層断面(西から)
- 図版第46 (1) 掘立柱建物 S B17検出状況(東から)

- (2) 掘立柱建物 S B17 柱穴 S P321 遺物出土状況(南から)
(3) 掘立柱建物 S B17 柱穴 S P352 遺物出土状況(北から)
- 図版第47 (1) 井戸 S E 152 土層断面(南から)
(2) 井戸 S E 152(南から)
- 図版第48 (1) 井戸 S E 152 遺物出土状況(南から)
(2) 井戸 S E 152 遺物出土状況(南から)
(3) 井戸 S E 152 遺物出土状況(南から)
- 図版第49 (1) 井戸 S E 540 井戸枠検出状況(南から)
(2) 井戸 S E 540 土層断面(南から)
- 図版第50 (1) 井戸 S E 540(南から)
(2) 井戸 S E 540(南西から)
- 図版第51 (1) 井戸 S E 540 土層断面(南から)
(2) 井戸 S E 540 遺物出土状況(南から)
- 図版第52 (1) 埋納遺構 S X 475 検出状況(南から)
(2) 埋納遺構 S X 475(南から)
- 図版第53 (1) 土坑 S K 360 土層断面(東から)
(2) 土坑 S K 360(東から)
- 図版第54 (1) 土坑 S K 225 遺物出土状況(南から)
(2) 土坑 S K 550 遺物出土状況(南から)
(3) 落ち込み S X 94 遺物出土状況(南から)
- 図版第55 (1) 溝群 1(東から)
(2) 溝群 1(南から)
- 図版第56 (1) 溝群 1(南西から)
(2) 溝群 1(東から)
- 図版第57 (1) 溝 S D 460(南から)
(2) 溝 S D 460(北から)
(3) 溝 S D 460 土層断面(南から)
- 図版第58 (1) 溝 S D 458・459・461(西から)
(2) 溝 S D 462・463・464(西から)
(3) 溝 S D 464・465・467(西から)
- 図版第59 (1) 溝 S D 91(東から)
(2) 溝 S D 90(東から)
(3) 溝 S D 106・141(東から)
- 図版第60 (1) 溝 S D 459 遺物出土状況(東から)
(2) 溝 S D 462 遺物出土状況(東から)

- (3) 溝 S D461土層断面(東から)
- 図版第61 (1) 溝 S D91土層断面(東から)
(2) 溝 S D90土層断面(東から)
(3) 溝 S D141土層断面(東から)
- 図版第62 (1) 溝群 2(西から)
(2) 溝群 2(東から)
- 図版第63 (1) 溝 S D471(東から)
(2) 溝 S D469(東から)
(3) 溝 S D468(東から)
- 図版第64 (1) 溝 S D529(東から)
(2) 溝 S D468遺物出土状況(南から)
(3) 溝 S D469土層断面(東から)
- 図版第65 (1) 掘立柱建物 S B 8(南から)
(2) 掘立柱建物 S B 8(西から)
- 図版第66 (1) 掘立柱建物 S B 8 柱穴 S P 14土層断面(南から)
(2) 掘立柱建物 S B 8 柱穴 S P 55土層断面(北から)
(3) 掘立柱建物 S B 8 柱穴 S P 54遺物出土状況(北から)
- 図版第67 (1) 掘立柱建物 S B 11・12(南から)
(2) 掘立柱建物 S B 11西側柱列(南から)
- 図版第68 (1) 掘立柱建物 S B 11柱穴 S P 492土層断面(西から)
(2) 掘立柱建物 S B 11柱穴 S P 488土層断面(東から)
(3) 掘立柱建物 S B 11柱穴 S P 486土層断面(東から)
- 図版第69 (1) 掘立柱建物 S B 15・欄列 S A 1(南東から)
(2) 掘立柱建物 S B 15・欄列 S A 1(南から)
- 図版第70 (1) 掘立柱建物 S B 15(西から)
(2) 欄列 S A 1(南から)
- 図版第71 (1) 掘立柱建物 S B 16(南から)
(2) 掘立柱建物 S B 16(西から)
- 図版第72 (1) 掘立柱建物 S B 15柱穴 S P 601土層断面(東から)
(2) 掘立柱建物 S B 16柱穴 S P 586土層断面(東から)
(3) 欄列 S A 1 柱穴 S P 605土層断面(東から)
- 図版第73 (1) 埋納遺構 S X 580検出状況(南から)
(2) 埋納遺構 S X 580断面(南から)
- 図版第74 (1) 埋納遺構 S X 520検出状況(南から)
(2) 埋納遺構 S X 630検出状況(南から)

- 図版第75 (1) S K 466土層断面(北から)
(2) 溝 S D92(北から)
(3) 溝 S D92土層断面(南から)
- 図版第76 (1) 素掘り溝群(北から)
(2) 素掘り溝群土層断面(南から)
- 図版第77 (1) 調査区南壁土層断面(北東から)
(2) 道路 S F 1 断ち割り(南東から)
- 図版第78 (1) 調査区西壁土層断面(北から)
(2) 調査区西壁土層断面(南東から)
- 図版第79 (1) 第6次調査区北壁土層断面(南から)
(2) 第6次調査区南壁土層断面(北から)
- 図版第80 出土遺物 1
- 図版第81 出土遺物 2
- 図版第82 出土遺物 3
- 図版第83 出土遺物 4
- 図版第84 出土遺物 5
- 図版第85 出土遺物 6
- 図版第86 出土遺物 7
- 図版第87 出土遺物 8
- 図版第88 出土遺物 9
- 図版第89 出土遺物 10
- 図版第90 出土遺物 11
- 図版第91 出土遺物 12
- 図版第92 (1) 出土遺物 13
(2) 出土遺物 14
- 図版第93 (1) 出土遺物 15
(2) 出土遺物 16
- 図版第94 (1) 出土遺物 17
(2) 出土遺物 18
- 図版第95 (1) 出土遺物 19
(2) 出土遺物 20
- 図版第96 (1) 出土遺物 21
(2) 出土遺物 22
- 図版第97 出土遺物 23
- 図版第98 出土遺物 24

図版第99	出土遺物25
図版第100	出土遺物26
図版第101	出土遺物27
図版第102	出土遺物28
図版第103	出土遺物29
図版第104	出土遺物30

一般国道163号木津東バイパス関係 岡田国遺跡第3～6次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、一般国道163号木津東バイパス建設事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施したものである。

岡田国遺跡は木津川市木津馬場南・八色に所在する旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、調査地は遺跡範囲の北半部に位置する。発掘調査は平成27年度から平成30年度にかけての4次にわたって実施した。平成27年度には調査対象地に11か所のトレンチを設定し、奈良時代の溝や掘立柱建物などを検出した。また、すべてのトレンチにおいて古墳時代から近世にかけての遺物が出土した(第3次調査)。この調査成果を受けて、平成28年度と平成29年度に調査区を拡張して全面的な発掘調査を実施した(第4・5次調査)。その後、調査の追加地点が生じたため、平成30年度にも発掘調査を行った(第6次調査)。

現地調査ならびに報告書作成にあたっては、京都府教育委員会、木津川市教育委員会、京都府立山城郷土資料館をはじめ、各関係機関、地元自治会、近隣住民の方々のご指導とご協力をいただいた。

なお、調査にかかる経費は全額、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所が負担した。

(福山博章)

〔調査体制等〕

<岡田国遺跡3次(平成27年度)>

現地調査責任者	調査課長	有井広幸
現地調査担当者	調査課調査第2係長	中川和哉
	同 調査員	福山博章
調査場所	木津川市木津馬場南	
現地調査期間	平成27年11月2日～平成28年1月29日	
調査面積	900㎡	

<岡田国遺跡4次(平成28年度)>

現地調査責任者	調査課長	森 正
現地調査担当者	調査課調査第2係長	中川和哉
	同 副主査	竹原一彦
	同 調査員	福山博章・橋本 稔・田原葉月・ 藤井陽輔

調 査 場 所 木津川市木津馬場南
 現 地 調 査 期 間 平成28年5月26日～平成29年2月28日
 調 査 面 積 5,500㎡

<岡田国遺跡5次(平成29年度)>

現 地 調 査 責 任 者 調 査 課 長 小池 寛
 現 地 調 査 担 当 者 調 査 課 課 長 補 佐 兼 調 査 第 2 係 長 中川和哉
 同 総 括 主 査 石井清司
 同 主 任 福山博章
 同 調 査 員 荒木瀬奈・藤田智子

調 査 場 所 木津川市木津馬場南
 現 地 調 査 期 間 平成29年4月19日～同年9月14日
 調 査 面 積 2,150㎡

<岡田国遺跡6次(平成30年度)>

現 地 調 査 責 任 者 調 査 課 長 小池 寛
 現 地 調 査 担 当 者 調 査 課 課 長 補 佐 兼 調 査 第 2 係 長 中川和哉
 同 主 任 福山博章

調 査 場 所 木津川市木津八色
 現 地 調 査 期 間 平成30年10月10日～同年12月25日
 調 査 面 積 330㎡

<整理作業(令和元年度)>

整 理 作 業 責 任 者 調 査 課 長 小池 寛
 整 理 作 業 担 当 者 同 調 査 第 2 係 長 高野陽子
 同 主 任 福山博章
 整 理 作 業 期 間 令和元年6月11日～令和2年3月31日

2. 位置と環境

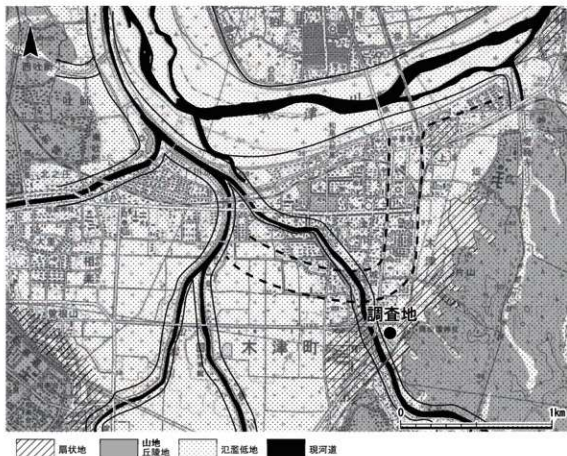
1) 地理的環境

岡田国遺跡の所在する木津川市は、平成19年に木津町・山城町・加茂町の3町が合併して成立した。木津川市は京都府の最南端に位置し、地理的にも京都盆地の南端に位置する。京都盆地は干拓によって消滅した巨椋池を境に、北山城地域、南山城地域に分割される。南山城地域の平野部は、木津川とそれに注ぎ込む中小河川の沖積作用によって形成された河谷地形で南北14km、東西2～3kmの狭長な地形を呈する。木津川は奈良・三重両県に水源を発し、東から西に流れ、旧木津町付近で大きく流れを北に変える。

旧木津町は、北部に木津川が位置し、他の三方を丘陵に囲まれる。東部に位置する丘陵の基盤は半固結～未固結の鮮新世末期から更新世前期の大阪層群で構成される。西側に分布する丘陵の基盤も大阪層群から構成されるが、鹿背山以北の丘陵基盤は後期白亜紀の花崗岩類となる。

丘陵は浸食が進行しており、直線状の谷底低地をなす開析谷が発達する。丘陵の山麓部には台地と扇状地が存在する。このうち、台地は氾濫低地との比高などから離水時期の異なるいくつかの地形面に区分される。

丘陵部から発する小河川の堆積によって、形成された扇状地は完新世以降の地形面と判断される。扇状地の主要な構成層は、後背の大阪層群から再堆積した砂礫と泥砂からなる。扇状地から地形的



第1図 調査地周辺地形分類図(1/25,000)

に低い部分には、木津川及びその支流によって形成された氾濫低地が広がっている。木津川支流の現流路は、いずれも天井川化しており、その堤防沿いに自然堤防を発達させている(第1図)⁽⁸¹⁾。

氾濫低地では、現在の木津川左岸に、木津集落の南をとりまくように規模の大きな旧河道の存在が確認できる。また、木津上津付近では、地形面の西端を浸食して、一段下がった旧河道が形成されている。このように氾濫低地では木津川やその支流による氾濫の痕跡が確認できる。

このような地理的環境のもと、岡田国遺跡の東側には天神山の所在する丘陵が所在する。南側には木津川の支流である井関川が北流し、谷地形と氾濫低地を形成する。岡田国遺跡は丘陵裾部から氾濫低地にかけて立地している。(福山博章)

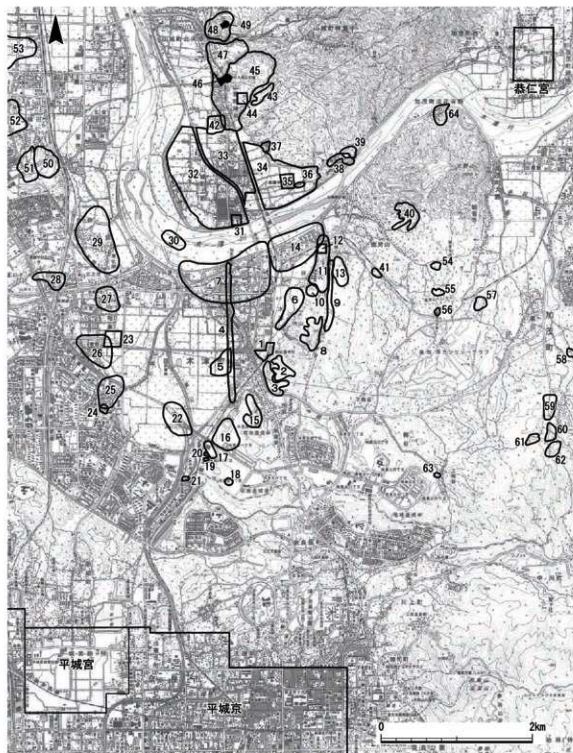
2) 歴史的環境

木津川市には南山城地域を代表する遺跡が多数分布する(第2図)。

岡田国遺跡周辺では旧石器時代・縄文時代の遺跡は多くないが、岡田国神社の裏山から旧石器時代後期の石器が出土している。縄文時代では、千両岩遺跡からサヌカイト製の有茎尖頭器などが出土している。内田山遺跡では、縄文時代の可能性のある落とし穴状遺構が検出され、燈籠寺遺跡では、自然流路から中期後葉(船元Ⅱ期・北白川C式期)～後期末葉(宮滝式)の土器や磨製石斧が出土している。片山遺跡では、縄文時代後期(中津式～福田K2式)の土坑が検出されている。

弥生時代になると、相楽山遺跡出土銅鐸と関係があると思われる大畠遺跡では、弥生時代中期の竪穴建物や方形周溝墓などが確認されている。馬場南遺跡(史跡神雄寺跡)では中期後葉の壺・甕・高杯などの遺物と、方形周溝墓(天神山1号墓)と5基の埋葬施設が確認されている。上人ヶ平遺跡では、後期の竪穴建物や土坑が確認されている。後期初頭の木津城山遺跡では竪穴建物などが検出されており、高地性集落と考えられる。

古墳時代になると、古墳時代前期に三角縁神獸鏡が30面以上出土した史跡椿井大塚山古墳(前方後円墳、全長175m)が築造される。椿井大塚山古墳に引き続き平尾城山古墳(前方後円墳、全長110m)が築造されるが、これ以降は全長100mを超える大型前方後円墳は築造されない。一方、旧木津町内に大型古墳はほとんど存在せず、中・小型古墳が多く分布する。岡田国遺跡周辺では、内田山古墳群・天神山古墳群がある。内田山古墳群は一辺約10～18mの小型の方墳が中心で古墳時代中期に位置づけられる。上人ヶ平遺跡では、中期から後期にかけて古墳が17基築造される。音乗谷古墳(帆立貝形古墳あるいは造り出し付円墳、全長約22m)では、6世紀の円筒埴輪や馬形埴輪、牛形埴輪、須恵器、鉄鏃、刀剣類などが出土している。また、埴輪生産遺跡である瓦谷埴輪窯や上人ヶ平埴輪窯が確認されている。埴輪生産遺跡ではないが、多数の埴輪が出土した弓田遺跡なども知られている。古墳時代の集落は上人ヶ平遺跡・上狛北遺跡・弓田遺跡・大畠遺跡などで確認されている。上人ヶ平遺跡では、前期の竪穴建物15基、掘立柱建物6棟が確認されている。上狛北遺跡では、古墳時代前期～中期後半の竪穴建物11基と土器溜まりなどが検出されている。また、「L字形竈」をもつ竪穴建物や陶質土器が確認されていることから、渡来系集団の存在が考えられる。大畠遺跡では、古墳時代後期の竪穴建物や掘立柱建物、流路が確認されている。



第2図 調査地位位置図及び周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/50,000 奈良)

- | | | | | | |
|---------------|----------------|------------------|-------------------|-------------|--------------|
| 1. 岡田国遺跡 | 2. 天神山古墳群 | 3. 史跡神護寺跡(馬場南遺跡) | 4. 作り道遺跡 | 5. 八後遺跡 | 6. 片山遺跡 |
| 7. 本津遺跡 | 8. 本津城山遺跡・本津城跡 | 9. 奈々谷遺跡 | 10. 内田山遺跡 | 11. 燈籠寺遺跡 | 12. 燈籠寺塚寺跡 |
| 13. 赤々平遺跡 | 14. 上津遺跡 | 15. 西山遺跡 | 16. 瓦谷遺跡 | 17. 上入々平遺跡 | 18. 瀬後谷壙跡群 |
| 19. 五領池東瓦壙群 | 20. 市城瓦壙跡群 | 21. 歌部瓦壙跡群 | 22. 弓田遺跡 | 23. 八ヶ坪遺跡 | 24. 音如ヶ谷瓦壙跡群 |
| 25. 大高遺跡 | 26. 曾根山遺跡 | 27. 相楽遺跡 | 28. 樋ノ口遺跡 | 29. 吐郎遺跡 | 30. 本津北遺跡 |
| 31. 泉橋寺跡(泉橋院) | 32. 上野西遺跡 | 33. 上野北遺跡 | 34. 上野東遺跡 | 35. 史跡高麗寺跡 | 36. 高麗寺瓦壙群 |
| 37. 大竺堂古墳群 | 38. 千賀路古墳群 | 39. 千賀路遺跡 | 40. 鹿野山城跡 | 41. 鹿野山瓦壙跡群 | 42. 柳田遺跡 |
| 43. 宮城古墳群 | 44. 松尾塚寺 | 45. 椿井遺跡 | 46. 史跡椿井大塚山古墳 | 47. 堂ノ上遺跡 | 48. 今城跡 |
| 49. 平尾山城古墳 | 50. 畑の前東遺跡 | 51. 畑の前遺跡 | 52. 政ヶ谷城跡(南福八雲城跡) | 53. 北福遺跡 | 54. 市ヶ谷壙跡 |
| 55. 鹿野山不動壙跡 | 56. 池ノ上遺跡 | 57. 栗田壙跡群 | 58. 栗田壙跡群 | 59. 四反田遺跡 | 60. ナマス谷壙跡 |
| 61. 新池壙跡群 | 62. 西小堂壙群 | 63. 梅谷瓦壙跡群 | 64. 栗原遺跡 | | |

また、土器棺内から布留式土器が出土しており、流路からも古墳時代初頭の土器が出土することから、この時期の集落が周辺にあったと推測される。弓田遺跡でも竪穴建物が確認されている。

飛鳥時代には、旧木津町と奈良県との境に上円下方墳である史跡石のカラト古墳が築造される。横口式石槨で、遺物は大刀装具や琥珀玉、金箔、須恵器などが出土している。また、南山城地域で最も古い古代寺院の1つである史跡高麗寺跡が造営される。高麗寺跡は、出土した瓦が飛鳥寺と同范であることから、創建は7世紀初頭と考えられる。ただし、この時期には伽藍は未整備で、本格的に整備されるのは、出土した軒瓦から7世紀後半と考えられる。また、高麗寺の整備時期の瓦を焼いていた高麗寺瓦窯も確認されている。高麗寺は、中世前半まで存続していたことが確認されている。

奈良時代には、数多くの遺跡がみられる。木津川市の西側に位置する精華町の畑ノ前遺跡では、大型の井戸や掘立柱建物が検出されており、公的な施設と考えられる。樋ノ口遺跡は、二彩・三彩陶器や羊頭硯などが出土しており、離宮跡もしくは寺院跡と考えられる。東部でも木津川付近には上津遺跡・燈籠寺廃寺・釜ヶ谷遺跡・片山遺跡などがある。上津遺跡では、166mの東西溝を検出しており、大量の土師器や須恵器、祭祀遺物などが出土している。他に、奈良三彩や恭仁宮と同范の軒瓦、銅製獸脚付容器などが出土しており、平城宮などに木材などを運搬していたと考えられる泉津関連の公的施設があったと考えられている。燈籠寺廃寺に隣接する旧河道の調査では、奈良時代の土器や「飛」や「浄」と書かれた墨書土器、恭仁宮出土瓦と同范の軒瓦が出土している。なお、燈籠寺廃寺は山背国分尼寺跡との指摘もあるが詳細は不明である。この旧河道の上流にあたる釜ヶ谷遺跡の調査では、旧河道から奈良時代の墨書人面土器や土馬、斎串などの祭祀遺物が多数出土している。片山遺跡では、掘立柱建物、井戸などを検出している。遺物は、須恵器・土師器・軒瓦などが出土しており、軒瓦は平城宮式のものがある。具体的な遺構は未検出ではあるが、故足利健亮(以後、敬称略)が指摘した「作り道」や「賀世山西道」といった奈良時代の道路の存在が考えられる。「賀世山西道」は恭仁京と密接な関係があり、『続日本紀』天平13(741)年9月2日条に「賀世山西道より東を左京、西を右京。」と記載されている。八後遺跡では、足利健亮の指摘した「作り道」と思われる南北方向の道路遺構が検出されている。しかし、現在まで京城を示す具体的な遺構は未検出である。このほか、史跡神雄寺跡(馬場南遺跡)では、川跡と溝から燃灯供養に使用されたと思われる5,000枚以上の灯明皿や三彩陶器、漆塗りの箱蓋、歌木筒、呪符木筒などが出土した。歌木筒は万葉集巻10、2205番の「秋萩の」の上11文字が書かれていた。墨書土器などには「神雄寺」「雄寺」「黄葉」などと書かれており、天神山に「神雄寺」が存在したと考えられ、奈良時代に栄え、平安時代まで続いていたと考えられている。上粕北遺跡では、全長100m以上の南北方向の溝や廃棄土坑、掘立柱建物、井戸などが検出された。溝からは奈良時代中頃の土器が多数出土し、廃棄土坑からは「讃岐國」と記載された文書様木簡や削屑、「代」と書かれた墨書土器、製塩土器・瓦埴類・木製品・漆塗り製品など大量の遺物が出土した。溝と掘立柱建物群は、計画的に配置された可能性が高く、奈良時代中頃に計画的な土地利用がされたと考えられる。

一方、奈良県との境にある平城山丘陵には平城宮や寺院などに瓦を供給していた瓦窯群(奈良山瓦窯群)として、市坂瓦窯・瀬後谷瓦窯・梅谷瓦窯・鹿背山瓦窯・五領池瓦窯・音如ヶ谷瓦窯などが知られている。市坂瓦窯の瓦を製作していた工房跡が隣接する上人ヶ平遺跡で確認されている。梅谷瓦窯跡では、興福寺に瓦を供給していたことが確認されている。また、音如ヶ谷瓦窯跡と五領池瓦窯跡では、法華寺阿弥陀浄土院へ供給していたと考えられる。鹿背山瓦窯では、平城宮で使われていた軒瓦が出土しており、平城宮内に瓦を供給されていたことがわかる。操業時期は遺物から奈良時代の中頃と考えられる。工房跡と考えられる掘立柱建物や通路状遺構、粘土採掘跡が検出されており、粘土の運搬に使われたと考えられる「もっこ」が出土している。

木津川市加茂町周辺を中心に平城宮・京に須恵器を供給していたと考えられる窯が発見されている。鹿背山不動窯跡、新池窯跡群、栗田窯跡群、瀬後谷窯などがある。奈良山丘陵の西半部は瓦窯として利用され、東半部は須恵器窯として利用されていたと考えられている。

平安時代以降の遺跡としては、鹿背山瓦窯跡で、平安時代前半の木炭木柵墓が検出され、土師器と灰軸陶器が出土している。被葬者を示す遺物は出土していない。史跡神雄寺跡(馬場南遺跡)では、中世墓(室町時代後半)と考えられる土坑や近世の礎石建物が検出されている。木津城跡では、二重の堀が確認されており単郭の城跡と考えられる。木津城は、奈良と京都の境に位置し、北東部には谷を挟んで松永久秀の築城と考えられる鹿背山城が位置する。

(田中秀弥)

3. 調査の経過と方法

1) 調査の経過

岡田国遺跡は、昭和52年度に岡田国神社遺跡として木津町教育委員会によって調査が実施され、奈良時代の土坑や中・近世の土師器皿などが出土したほか、丘陵に挟まれた谷斜面にあたるDトレンチから旧石器が出土した。また、奈良時代の須恵器窯である大谷窯が発見され、遺物が採集された(第1次調査)。第1次調査後に岡田国神社周辺にも遺物の散布が見られたため、遺跡範囲を拡大し、旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡として岡田国遺跡に名称が変更された。

一般国道163号木津東バイパス建設事業に伴い、平成26年8月25日に京都府教育委員会が実施した試掘調査により、土坑などが検出され、遺構・遺物の存在が確認された(第2次調査)。そのため、平成27～30年度にかけて4次に渡る発掘調査を当調査研究センターが実施した。

平成27年度は11月2日に調査を開始した。調査対象地に11か所のトレンチを設定した。いずれのトレンチからも古墳時代から近世にかけての遺構・遺物を検出し、調査対象地全域に遺構・遺物が広がることを確認した。調査トレンチは、次年度以降に調査を継続するため、遺構の保護を行ったうえで埋め戻し、平成28年1月29日に調査を終了した。調査面積は900㎡、出土遺物は整理箱10箱である(第3次調査)。

第3次調査の成果を受け、平成28年度と平成29年度の2か年に分けて対象地全域の調査を実施した。工事工程との関わりから調査地を分割して調査を進めた。

平成28年度は5月26日に調査を開始した。対象地の北西部の一部を先行して調査を実施し、対象地の北部を仮設の進入路として利用した。北西部の調査区では中世の素掘り溝群のほか、奈良時代と平安時代の掘立柱建物などを検出した。遺構の検出、掘削、写真と図面による記録を終えた後、埋め戻しを行った。その後、調査地の東部と南部の調査を実施し、奈良時代の道路とこれに区画された建物群を検出した。これらの調査成果について、平成29年1月28日に現地説明会を開催し、約290名の参加があった。遺構の検出、掘削を終えた後、平成29年2月16日にセスナ機による空中写真撮影を実施した。その後、断ち割りなどの補足調査と記録作業を行い、平成29年2月28日に調査を終了した。調査面積は5,500㎡、出土遺物は整理箱70箱であった(第4次調査)。

平成29年度は4月19日に調査を開始した。前年度の未調査部分である対象地南部から調査を開始し、仮設進入路の付け替え後に対象地北部の調査を実施した。北部の調査区では奈良時代の道路の延長部分と溝群などを検出した。また、北西部では奈良時代の井戸と平安時代の掘立柱建物を検出した。遺構の検出、掘削を終えた後、平成29年8月23日にセスナ機による空中写真撮影を実施した。これらの調査成果について、平成29年8月27日に現地説明会を開催し、約90名の参加があった。その後、北西部の井戸SE540の調査のため、調査区を部分的に拡張し、平成29年9月14日に調査を終了した。調査面積は2,150㎡、出土遺物は整理箱40箱であった(第5次調査)。

平成30年度に工事予定地の追加があり、平成30年5月29日に京都府教育委員会が遺跡範囲の北側隣接地の試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が確認されたため、岡田国遺跡の範囲が拡大されることになった。それを受けて、前年度までの調査地の北西側の地点の調査を平成30年10月10日から開始した。奈良時代と平安時代の掘立柱建物、飛鳥時代の溝、弥生から古墳時代の自然流路などを検出した。遺構の検出、掘削、写真と図面による記録を終えた後、埋め戻しを行い、平成30年12月25日に調査を終了した。調査面積は330㎡、出土遺物は整理箱20箱であった(第6次調査)。

2) 調査グリッドの設定

調査にあたっては、検出遺構と出土遺物の位置を記録する目的で調査グリッドを設定した。調査グリッドは国土座標(世界測地系)に基づいて設定し、基準線は南北・東西ともに国土座標系に一致させ、 $X=-140,000$ 、 $Y=-15,000$ を起点とし、岡田国遺跡全体を覆う1km四方の区割りを設定した。1km四方を10分割し、100m四方の区割りを基準として大グリッドを設定した。さらにその中を25等分して4m四方のグリッドを設定し、小区画とした。グリッドの基準線は南北の基準線にアルファベット大文字を、東西の基準線には算用数字を用い、その組み合わせによって小地区名とした(第3図)。調査グリッドは第3次調査で設定し、第6次調査までの全調査で使用した。

3) 調査の方法

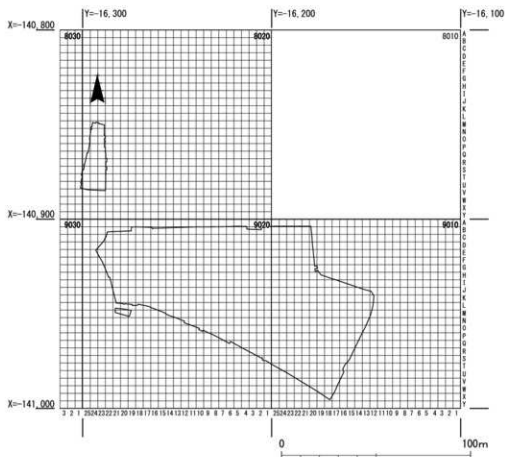
調査にあたっては、試掘調査の成果に基づき、遺構検出面まで重機による掘削を行い、その後、人力により遺物包含層の掘削と精査作業を行い、遺構の検出を行った。遺物包含層の出土遺物については4m四方の調査グリッドごとに取り上げを行った。

調査の進行に伴い、記録図面の作成と写真撮影を実施した。遺構の図化作業にあたっては、調査地全体の平面図を縮尺1/100で作成し、個別遺構の平面図・断面図を基本的に縮尺1/10・1/20で作成した。また、遺物出土状況図などは必要に応じて縮尺1/5・1/10で作成したほか、オルソ画像による平面図作成を行った。

調査地の真上には高圧線が設置されているほか、JRの路線や国道24号が隣接していることから、ラジコンヘリによる空中写真撮影が不可能であったため、セスナ機による空中写真撮影を合計2回実施した。セスナ機による空中写真撮影では、高高度からの撮影のため写真測量による図化が不可能であることから、オルソ画像を作成した。また、調査地を分割して調査を行ったため、空中写真撮影を実施できなかった調査区については、調査区ごとにオルソ画像を作成した。これら各調査区と空中写真のオルソ画像を合成し、垂直方向の全景写真を作成した(巻頭図版第1)。

4) 遺構番号について

遺構番号は、第3次調査では調査トレンチごとに検出した遺構に遺構番号を付与したが、第4次調査から第6次調査では調査の進捗に伴って検出した遺構に一連の通し番号を付与し、遺構の性格を示す略号を付与した。使用した略号は、橋列：S A、掘立柱建物：S B、溝：S D、井戸：S E、道路：S F、土坑：S K、柱穴：S P、不明遺構・その他：S Xである。また、本報告で



第3図 調査グリッド配置図(1/2,000)

使用した遺構番号は調査時のものであるが、調査時に番号のなかった遺構、第3次調査で調査を完了した遺構に関しては報告書作成時に新規に番号を付与した。

なお、SA・SB・SFの各遺構番号については、複数の遺構からなるため、上記の通し番号とは別に、遺構毎の番号を1から付与した。

5) 報告書作成について

平成27～29年度は発掘調査と並行して出土遺物の洗浄や注記などの基礎的な整理作業を行った。平成30・令和元年度は出土遺物の実測のほか、図面等の整理作業と報告書作成作業を実施した。整理作業では、遺物の洗浄・接合・注記を行い、報告書に掲載する遺物の選別を行った。これらについては実測、拓本を行った。実測した遺物のうち、復元可能なものについては石膏による復元を実施した。復元できた遺物や重要な遺物は写真撮影を行い、図版として掲載した。

井戸SE540から持ち帰った井戸枠内埋土の洗浄を実施し、土器、瓦、木製品、種子などを確認した。また、道路側溝や井戸枠内埋土など土壌サンプルの採取を行った遺構の自然科学分析を委託した。SE540の井戸枠材は、年輪年代測定を行った後に、井戸枠材の保存処理を実施した。

以上のような整理作業の成果を受けて、岡田国遺跡検討会を令和元年11月1日に開催し、調査担当者による遺構・遺物の報告を元に、関係機関の職員ならびに当調査研究センター理事・職員で調査成果の検討を行い、その成果を報告書にまとめた。^(註2) (福山博章)

4. 調査の概要

1) 遺跡の立地について

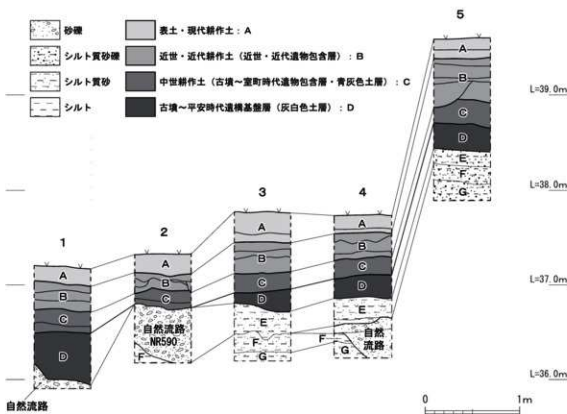
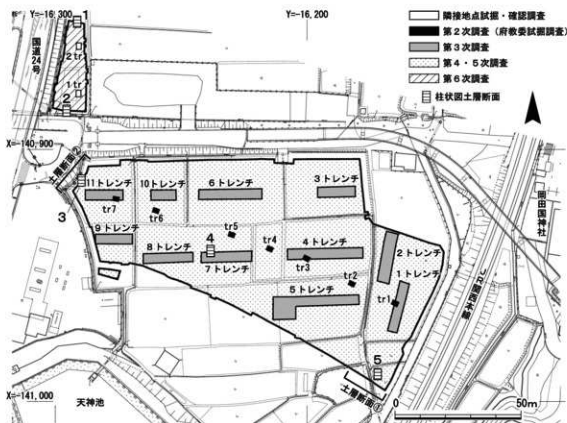
調査地は、東側に位置する天神山の所在する丘陵先端の張り出し部と井関川によって形成された氾濫低地に位置する。現地表面の標高は、調査地東部で約38.7m、西部で約37.5mを測る。また、南部で約39.6m、北部で約37.2mを測る。現地形における比高は東西で約1.2m、南北で約2.4mとなる。現地形は東から西に、南から北に向かって低くなる。

遺構面も現地形と同様に傾斜しており、標高36.4～38.6mで遺構を検出した。遺構面の比高は東西で約1.9m、南北で約2.2mとなる。標高の高い調査区南部と東部では、中世の遺物包含層が削平されていることから、中世から近世の段階に土地の改変が行われたと考えられる。一方、標高の最も低い調査区中央部では、削平を受けた痕跡はあまり見られない。

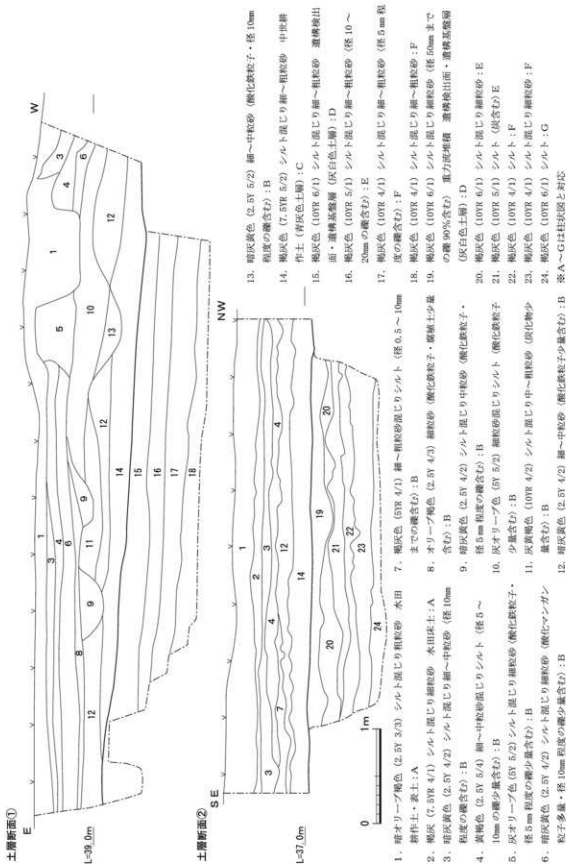
2) 基本層序

調査区の土層断面図と柱状図を第4・5図に示した。調査区の基本層序は、7層で構成される。A層は調査区全面に広がる現在の耕作土・床土である。

B層は腐植の多い黄褐色の粗粒砂混じりのシルトで形成されており、部分的に砂礫を含む。壁面では溝や素掘り溝が確認できたことから耕作土であると考えられる。近世から近代の陶磁器などが出土しており、遺物包含層を形成する。



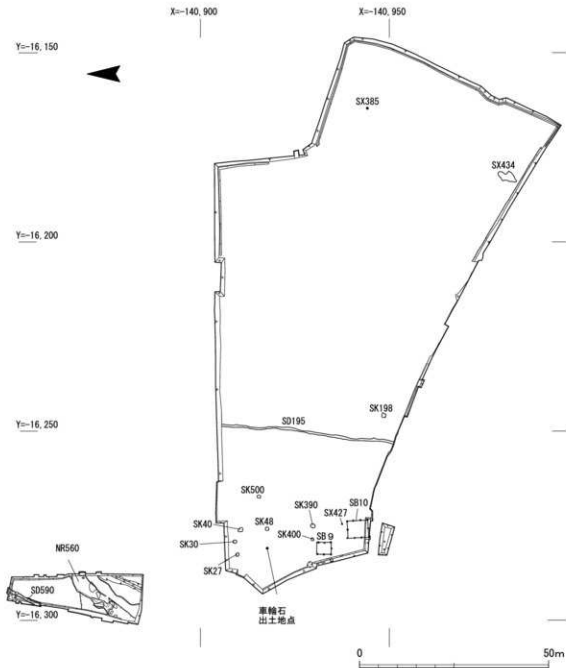
第4図 調査次数別調査区配置図及び土層柱状図(1/1500・1/40)



第5図 調査区土層断面図(1/40)

C層は褐灰色の細～中粒砂混じりのシルト層である。腐植を多く含んでおり、全体的に砂礫が攪拌された痕跡や植物相が確認された。また、壁面では溝や素掘り溝が確認でき、耕作土であると考えられる。素掘り溝などの平安時代以降の遺構埋土としてみられるのもこの層である。室町時代から古墳時代までの遺物が出土する遺物包含層である。遺物は青灰色土層として取り上げた。

C層からB層では上層に向けて堆積物が粗粒化していることから、近世段階には洪水により冠水する場所であったと考えられる。洪水の痕跡は調査区内の土層で部分的に確認したのみであるが、これは洪水堆積物を母材として耕作地を形成したために、洪水の痕跡の多くが消失したためと考えられる。洪水の発生は周辺に位置する丘陵における森林の乱伐と井関川の天井川化が原因



第6図 弥生・古墳・飛鳥時代遺構配置図(1/1,000)

であると考えられる。

D層は丘陵部に近接する調査区東側部分では褐灰色の極細粒砂から小礫が混じるシルト層であるが、氾濫低地に位置する調査区中央部から西部では褐灰色の極細粒砂混じりのシルト層となる。これらの土層の違いは地形の差違による下層基盤面に起因すると考えられる。D層上面で平安時代から古墳時代の遺構を検出した。また、D層上面で出土した遺物は灰白色土層として取り上げた。

遺構検出面以下の様相を確認するため、調査地の5か所で重機もしくは人力による断ち割りを行った結果、グライ化した褐灰色の細粒砂混じりのシルト層(E～G層)の堆積を確認したが、遺物は出土しなかった。また、道路S F 1下層と第6次調査区北部と南部で旧流路を確認した。第6次調査区南部で検出した自然流路N R 590はD層から切り込んでおり、埋土からは弥生時代中期と古墳時代前期の土器が出土している。他の流路からは遺物は出土しておらず時期は不明である。

洪水痕跡の多くは奈良から平安時代の遺構基盤層の上層と下層において確認できた。奈良から平安時代には洪水の痕跡がみられないことから、比較的安定した場所であったと考えられる。

(福山博章)

5. 検出遺構

調査の概要でも述べたとおり、弥生・古墳時代から室町時代までの遺構を同一面で確認した。各遺構を時代別に古い時期から報告する。

1) 弥生・古墳時代(第6図)

弥生時代の遺構は溝1条を検出したほか、自然流路N R 560の下層や遺物包含層などから弥生時代中期の壺や甕、器台などが出土している。

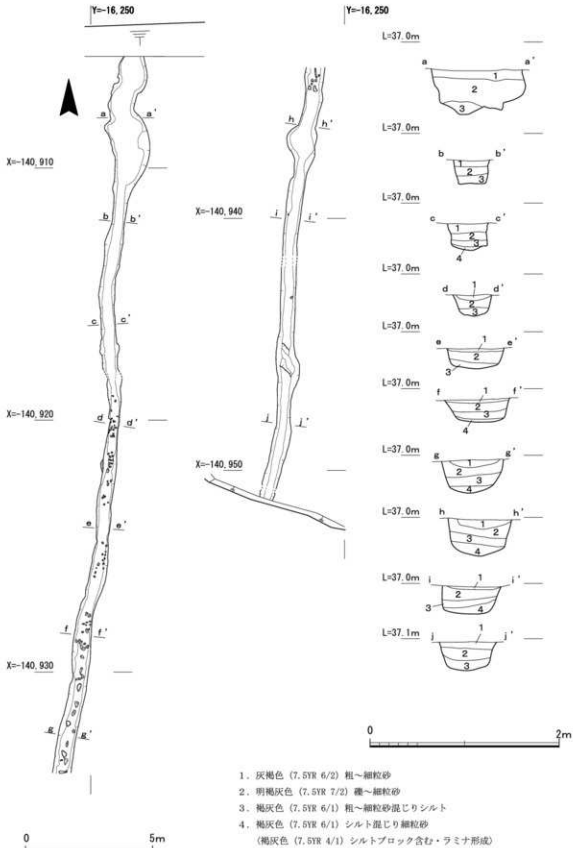
古墳時代の遺構は、調査区西半部に集中しており、掘立柱建物2棟、土坑8基、不明遺構3基を検出した。

(1) 溝

溝SD195(第7図) 第4・5次調査区西半部で検出した溝で、調査区を南北方向に蛇行しながら縦断する。溝は調査区外に続く。検出長285m、幅0.37～1.57m、深さ0.9～1.72mを測る。断面形は方形を呈し、溝底は起伏に富む。埋土は礫混じりの粗粒砂ないし細粒砂で、上方粗粒化しており、葉理を形成している。埋土の堆積状況から洪水で埋没したと考えられる。北半部の東壁面は抉れており、洪水による影響と考えられる。埋土からは弥生土器壺・甕などが出土しているが、いずれも破片で、内外面ともに摩滅が著しい(第57図1)。弥生時代中期後半に埋没したと考えられる。

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物S B 9(第8図) 第4・5次調査区南西部で検出した。桁行2間(3.38m)、梁行2間(3.18m)の掘立柱建物である。北側柱列の柱穴S P 413と柱穴S P 415の間の柱穴は確認できなかった。柱間寸法は、桁行方向が1.62～1.98m、梁行方向が1.58～1.60mである。建物主軸はN1°29'Wを測る。柱穴は楕円形もしくは方形を呈し、長軸0.34～0.44m、短軸0.32～0.44m、深さ0.18～0.32mを測る。柱穴S P 409・411・412において径0.12～0.16mの柱痕跡を確認した。柱穴から



第7図 溝S D195実測図(1/150・1/40)

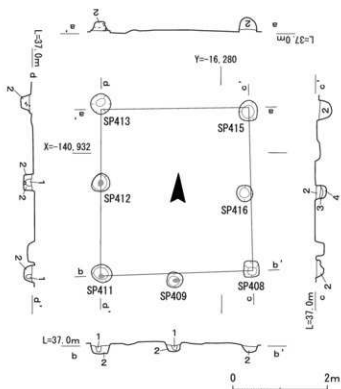
遺物は出土しなかったが、建物の方位と柱穴の埋土が同じことから、南側の掘立柱建物S B10や周辺の土坑と同じ古墳時代の遺構と考えられる。

掘立柱建物S B10(第9図) 第4・5次調査区南西部で検出した。桁行3間(5.61m)、梁行2間(4.73m)の南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は、桁行方向が1.58~1.98m、梁行方向が2.22~2.42mである。建物主軸はN 2° 56'Wを測る。柱穴は楕円形を呈し、長径0.32~0.40m、短径0.28~0.34m、深さ0.11~0.24mを測る。柱穴S P397・398・402・404・420では、径0.11~0.22mの柱痕跡を確認した。柱穴S P420の柱痕跡から土師器高杯・甕が出土した(第57図2・3)。出土遺物から、古墳時代前期前葉の遺構と考えられる。

(3)土坑

土坑S K27(第10図左上) 第4・5次調査区西半部で検出した土坑で、平面形は不整形である。長軸0.86m、短軸0.82m、深さ0.3~0.35mを測る。底は起伏を呈する。埋土はシルトのブロックのほか、平面的に炭が広がる範囲を検出した。埋土から土師器甕のほか、粘板岩が出土した(第57図4・5)。

土坑S K30(第10図右上) 第4・5次調査区西半部で検出した土坑である。平面形はいびつな円形を呈し、長径0.96m、短径0.90m、深さ0.59~0.85mを測る。底は起伏を呈し、段差を設ける。



1. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (炭・明褐色 (7.5YR 7/2) シルト三角礫ブロック・径5mm以下の礫・鉄分含む)
2. 青灰色 (5B 6/1) シルト混じり細粒砂 (鉄分含む)
3. 青灰色 (5PB 6/1) シルト混じり細粒砂 (鉄分含む)
4. 緑灰色 (10GY 5/1) シルト (炭・灰色 (N 5/0) シルトをブロック状に含む)

第8図 掘立柱建物S B 9実測図(1/80)

埋土にはシルトのブロックや炭が混じる。遺物は出土しなかったが、埋土が土坑S K40と類似することから、周辺と同様に古墳時代前期の遺構と考えられる。土坑の深さと断面の形状から井戸の可能性も考えられる。

土坑S K40(第10図下) 第4・5次調査区西半部で検出した土坑で、平面形は隅丸方形を呈し、長辺1.24m、短辺1.07m、深さ0.94mを測る。底は平坦で壁面は垂直に立ち上がり、断面形は方形を呈する。埋土には上層から下層までシルトのブロックや炭、礫が混じるほか、最下層から花崗岩の礫や粘板岩が出土した。埋土から土師器甕・壺・高杯が出土した(第57図6~19)。土坑の深さと断面の形状から井戸の可能性も考えられる。

土坑S K48(第11図左上) 第4・5次調査区西半部で検出した土坑で

ある。平面形は方形を呈し、長辺2.05m、短辺1.88m、深さ0.44mを測る。底は平坦で壁面は垂直に立ち上がり、断面形は方形を呈する。埋土は全体的にシルトのブロックや炭が混じる。埋土から土師器甕・高杯などが出土したが、いずれも細片である(第57図20～26)。

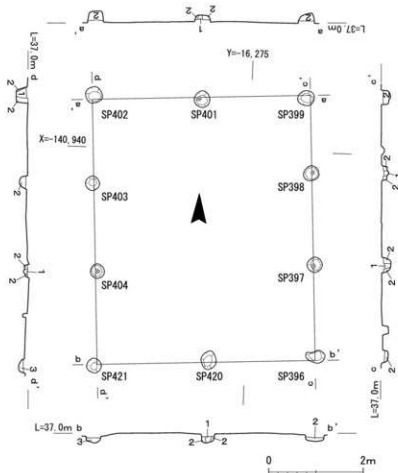
土坑SK198(第6図) 第4・5次調査区中央部南寄りで検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、長径1.3m、短径1.1m、深さ0.41mを測る。他の土坑とは検出位置が異なる。埋土より土師器鉢が出土した(第58図27)。

土坑SK390(第11図右上) 第4・5次調査区西半部で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、長径1.2m、短径1.1m、深さ0.74mを測る。埋土には上層から下層までシルトのブロックや炭が混じる。埋土から土師器甕・小形丸底壺などが出土した(第58図28・29)。土坑の深さと断面の形状から井戸の可能性も考えられる。

土坑SK400(第11図下) 第4・5次調査区西半部で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、長径1.2m、短径1.07m、深さ1.2mを測る。埋土には上層から下層までシルトのブロックや炭、礫が混じる。埋土から土師器甕・高杯が出土した(第58図30・31)。土坑の深さと断面の形状から井戸の可能性も考えられる。

土坑SK500(第12図) 第4・5次調査区西半部で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、長径0.89m、短径0.82m、深さ0.35mを測る。底は平坦で壁面は垂直に立ち上がり、断面形は方形を呈する。埋土にはブロックや炭が混じる。土坑の底から土師器甕1点が出土したが、全体の半分以下の残存であった(第58図32)。

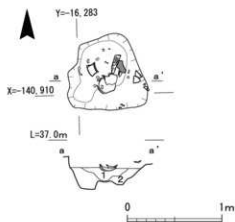
土坑から出土した土器は、全て古墳時代前期前葉の年代である。したがって、これらの土坑は、同時期の遺構と考えられる。



1. 褐色(7.5YR 5/1)シルト混じり細粒砂(明褐色(7.5YR 7/2)細粒砂ブロック10%・炭・径5mm以下の礫含む)柱状跡
2. 褐色(7.5YR 5/1)シルト混じり細粒砂(黒褐色(7.5YR 3/1)細粒砂混じりシルトブロック30%・炭含む)掘形
3. 青灰色(5BG 6/1)シルト(緑灰色(10G 5/1)シルトブロック含む)掘形

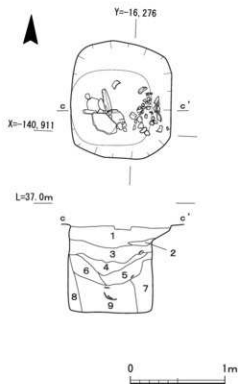
第9図 掘立柱建物SB10実測図(1/80)

SK27



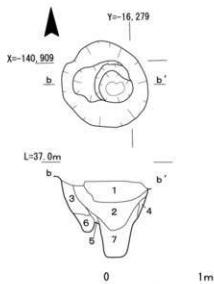
1. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂
(褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂を
ブロック状に30%・炭・鉄分・径2~5mmの
礫含む)
2. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (炭含む)

SK40



1. 灰褐色 (7.5YR 5/2) シルト混じり細粒砂 (明褐色 (7.5YR 7/2)
細粒砂ブロック15%・径2~20mmまでの礫・鉄分・炭含む)
2. 灰褐色 (7.5YR 6/2) 細粒砂 (径2~50mmまでの礫含む)
3. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1)
シルト歪円礫ブロック30%・炭・鉄分含む)
4. 褐灰色 (10YR 4/1) シルト (褐灰色 (10YR 6/1)
シルト歪角礫ブロック20%・炭含む)
5. 褐灰色 (10YR 4/1) シルト (褐灰色 (10YR 6/1)
シルト歪角礫ブロック10%・炭含む)
6. 褐灰色 (10YR 4/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (10YR 6/1)
シルト歪角礫ブロック10%・炭含む)
7. 褐灰色 (10YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (10YR 6/1)
シルト歪円礫ブロック20%含む)
8. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト混じり細粒砂 (灰色 (7.5Y 6/1)
シルト歪角礫ブロック30%・炭含む)
9. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト (灰色 (7.5Y 5/1)
シルト混じり細粒砂を塊状に30%・炭含む)

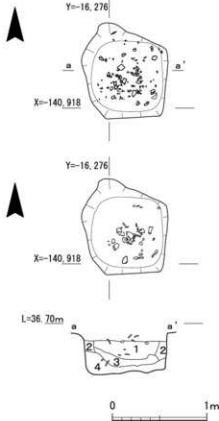
SK30



1. 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト混じり細粒砂 (褐灰 (7.5YR5/1)
シルトをブロック状に10%・明褐色 (7.5YR7/2) 細粒砂を
10%・炭・土器片含む)
2. 明褐色 (7.5YR7/1) シルト (褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト
を塊状に30%・炭・鉄分含む)
3. 灰褐色 (7.5YR 6/2) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR
6/1) シルトをブロック状に20%・炭含む)
4. 灰褐色 (7.5YR6/2) シルト
5. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂
6. 褐灰色 (10YR 4/1) シルト混じり細粒砂
7. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR
6/1) シルトをブロック状に10%・炭含む)

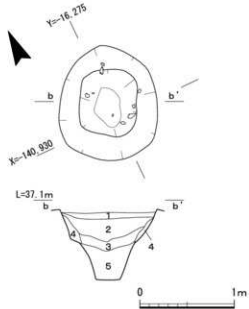
第10図 土坑SK27・30・40実測図(1/40)

S K 48



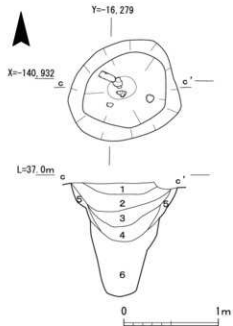
1. 褐色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂 (灰褐色 (7.5YR 6/2) シルト亜角礫ブロック 30%・炭・鉄分・径 2～50mm の礫含む)
2. 褐色 (7.5YR 6/1) シルト (径 2～10mm の礫・炭含む)
3. 褐色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (径 2mm の礫・炭含む)
4. 褐色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂 (褐色 (7.5YR 5/1) シルトをブロック状に 20%・炭・径 2～10mm の礫含む)

S K 390



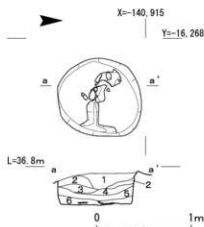
1. 灰色 (5Y 6/1) 細～中粒砂 (褐色 (10YR 5/1) 細～中粒砂を塊状に含む・鉄分含む)
2. 黄灰色 (2.5Y 5/1) シルト混じり細粒砂 (灰色 (5Y 6/1) 細～中粒砂を塊状に含む・鉄分・炭含む)
3. 褐色 (10YR 5/1) シルト混じり極細粒砂 (鉄分・炭含む)
4. 黄灰色 (2.5Y 6/1) シルト混じり細粒砂 (鉄分含む)
5. 黄灰色 (2.5Y 6/1) 極細粒砂 (黄灰色 (2.5Y 6/1) 極細～細粒砂を塊状に含む・炭含む)

S K 400



1. 青灰色 (5BG 6/1) シルト混じり細粒砂 (径 40mm 以下の中礫を 5%・鉄分含む)
2. 暗青灰色 (5B 4/1) シルト混じり細粒砂 (鉄分含む)
3. 灰色 (N 5/0) シルト (黒 (N 1.5/0) シルトをブロック状に 10%・径 10mm 以下の中礫含む)
4. 灰色 (N 5/1) 極細粒砂混じりシルト (黒色 (N 1.5/0) シルトをブロック状に 30%含む)
5. 灰色 (10Y 5/1) シルト混じり細粒砂 (鉄分わずかに含む)
6. 黄灰色 (2.5Y 5/1) シルト (黒色 (N 1.5/0) シルトブロック 5%・径 0.5mm 程度の中礫を含む)

第11図 土坑 S K 48・390・400 実測図 (1/40)



1. 褐灰色 (10YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (黄灰黄色 (2.5Y) 細粒砂ブロック・鉄分・炭含む)
2. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) シルト混じり細粒砂 (鉄分・炭・極粗砂含む)
3. 灰色 (5Y 5/1) シルト (鉄分・炭・極粗砂含む)
4. 灰色 (10Y 5/1) シルト (鉄分・炭含む)
5. 灰色 (10Y 5/1) シルト (褐灰色 (10YR 5/1) シルトブロックを10%含む)
6. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト (鉄分・炭含む)

第12図 土坑 S K 500実測図(1/40)

N R 560の幅と深さ、堆積状況を確認するため、中央部に直交するサブトレンチを設定し、一部を深掘りして流路の深さを確認した。また、遺物が集中して出土した地点を土器溜まり(遺構記号 S X)として遺物を取り上げた。

N R 560内の埋土は砂礫層である。埋土は上方粗粒化しており、シルトや細～中粒砂は葉理を形成し、レンズ状の堆積構造をなす。また、ラグ堆積物と考えられるシルトの塊も確認できた(第9層)。N R 560内の埋土は氾濫堆積物であり、堆積構造に切り合いが確認できることから、複数回の洪水により、大きく4層の埋没が確認できる。上層の第1～5層と、第4・10・12層では、堆積物の粒径が細くなるため、流路が埋没するにつれて、洪水の影響が少なくなると考えられる。全ての段階での流向は南から北である。第11・7層からは弥生土器壺・甕・高杯、石鉢など(第63図98～107・第64図109)が、また、第1・2層からは土器器壺・甕・高杯・鉢などが出土した(第59図36～第62図97)。第1・2層から出土した土器には摩滅が少ないことから、水深の浅い流路となった時点において遺物が投棄されたと考えられる。

2) 飛鳥時代(第6図)

第6次調査区北西部で溝1条を検出した。調査区内にはこの溝以外に同時期の遺構はなく、遺物包含層からは同時期の須恵器杯Hが1点出土しているのみである。

溝 S D 590(第14図) 第6次調査区北西部で検出した直線状の素掘りの溝である。検出長9.6m、幅0.52～1.03m、深さ0.21～0.26mを測る。溝底は緩やかな起伏を呈し、断面形は方形を呈する。

(4) 不明遺構

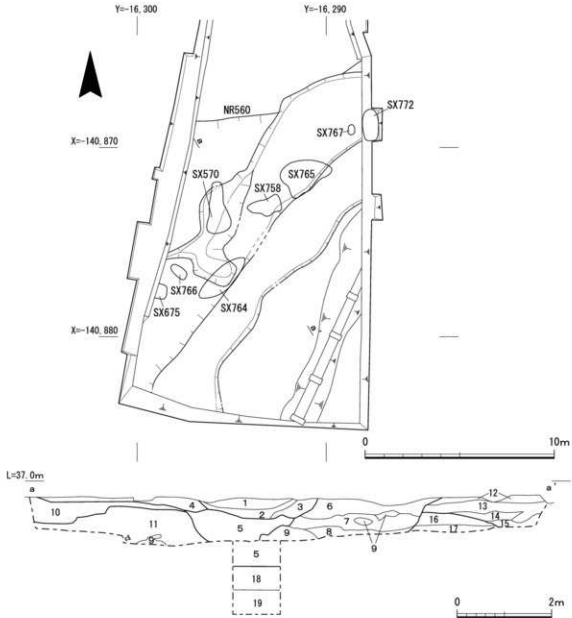
不明遺構 S X 385(第6図) 第4・5次調査区東半部で土器器壺の底部を検出した(第58図33)。約0.2mの範囲で土器器壺を検出したため、周辺の遺構精査を行ったが、土質や土色の変化は見られなかった。

落ち込み S X 427(第6図) 第4・5次調査区西半部で土器器壺を検出した。周辺の遺構精査を行ったが、土質や土色の変化は見られなかった。壺は0.3～0.4m程度の範囲から横位の状態で細片となって出土した(第58図34)。

落ち込み S X 434(第6図) 第4・5次調査区南東部で検出した。長軸4.8m、短軸2.8m、深さ0.1～0.18mを測る。平面形は不整形で浅い形状であるので、自然地形の落ち込みと考えられる。埋土から土器器壺が出土した(第58図35)。

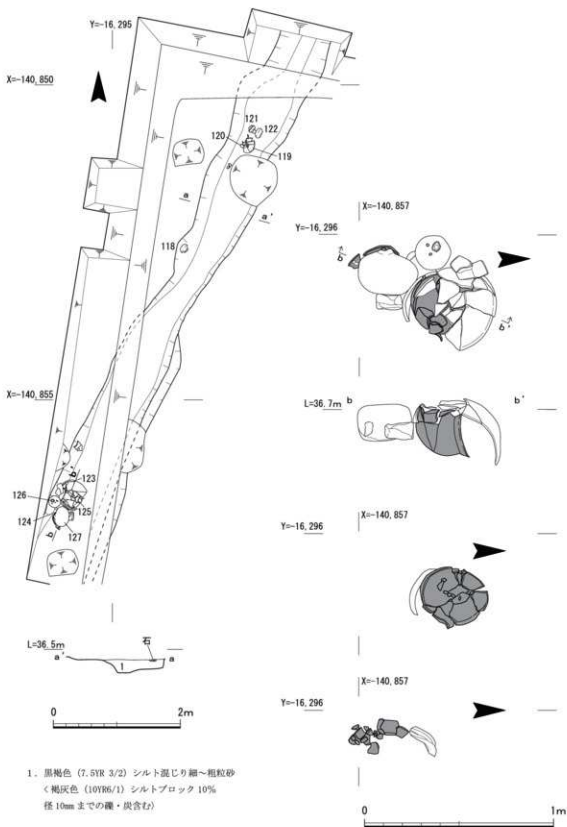
(5) 自然流路

自然流路 N R 560(第13図) 第6次調査区南半部で検出した自然流路である。北東方向に蛇行して流れる。検出長18m、幅5.6～7.2m、深さ1.44mを測る。



- | | |
|---|---|
| <p>1. ぶい黄褐色 (10YR 7/2) 礫～細粒砂 (上方粗粒化)</p> <p>2. 黒褐色 (2.5Y 3/1) シルト混じり細粒砂 (土器・径50mmまでの礫・炭含む)</p> <p>3. 灰黄褐色 (10Y 6/2) シルト混じり細粒砂</p> <p>4. 灰褐色 (7.5YR 4/2) シルト混じり細～粗粒砂 (土壌化) 遺構検出面・遺構基盤層 (灰白色土層)</p> <p>5. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 礫～細粒砂 (上方粗粒化)</p> <p>6. 浅黄色 (2.5Y 7/3) 礫～細粒砂 (上方粗粒化)</p> <p>7. 灰黄色 (2.5Y 7/2) 礫～細粒砂 (上方粗粒化・ラミナ形成)</p> <p>8. 黄灰色 (2.5Y 6/1) 礫～細粒砂 (上方粗粒化)</p> <p>9. 灰色 (7.5Y 6/1) 細粒砂混じりシルト</p> <p>10. 褐灰色 (10YR 5/1) シルト混じり細～粗粒砂</p> | <p>11. 褐灰色 (7.5YR 5/1) 礫～シルト (土器・9層を構成に含む・上方粗粒化)</p> <p>12. 灰褐色 (7.5YR 5/2) 細～粗粒砂 (土壌化) 遺構基盤層</p> <p>13. 褐灰色 (10YR 6/1) 細～粗粒砂 (ラミナ形成)</p> <p>14. 灰黄褐色 (10Y 5/2) 礫～細粒砂 (上方粗粒化・ラミナ形成)</p> <p>15. 黄灰色 (2.5Y 5/1) 礫～細粒砂 (上方粗粒化・ラミナ形成)</p> <p>16. 灰色 (5Y 6/1) 礫～細粒砂 (上方粗粒化・ラミナ形成)</p> <p>17. 灰色 (5Y 5/1) シルト混じり細～粗粒砂 (ラミナ形成)</p> <p>18. 灰色 (10Y 5/1) 粘土</p> <p>19. 灰黄色 (5Y 7/3) 粘土</p> |
|---|---|

第13図 自然流路NR560実測図(1/200・1/80)



第14図 溝 S D590 実測図及び遺物出土状況図(1/60・1/20)

溝は調査区の南西側と北東側の調査区外に延びるため、調査地内で可能な限り調査を行った。

埋土は1層で粗～細粒砂が多く混じるシルトである。流水の痕跡は確認されず、シルトブロックや礫、炭を含む埋土である。

遺物は溝内の3か所でまとまって出土しており、いずれも残存状態が良好で完形品に近い。

溝の北部では、土師器蓋、須恵器甕・壺C・平瓶がまとまって出土した(第65図119～122)。蓋は破損した状態で、逆位で出土した。その西側では甕が横位で出土した。壺Cと平瓶はともに口縁部を西に向けた横位の状態で出土した。また、周辺から須恵器杯Hが出土した(第65図116・117)。

溝の中央付近では、須恵器壺C 1点が口縁部を東に向けた横位で出土した(第65図118)。

溝の南部では、土師器鉢・甕、須恵器平瓶・横瓶・甕がまとまって出土した(第66図124～127)。平瓶は口縁部を上に向けた正位置で出土した。横瓶は口縁部を西に向けた横位で出土し、横瓶の下には鉢の破片を置いて固定していた。鉢はほぼ完形品に復元できたことから、破片にした後に固定材として用いたと考えられる。また、横瓶と須恵器甕の間には礫を置いて固定していた。横瓶の北側から須恵器甕が出土した。須恵器甕の内部からは土師器甕を検出した。いずれも土圧を受けて上部が破損し、破片が胴部に落ち込んでいた。須恵器甕は口縁部を下に向けて置かれていたが、口縁部が半分しか残っておらず、胴部の破片も欠落していた。土師器甕は口縁部を北に向けた横位で出土したが、須恵器甕が完存している状態では土師器甕を入れ込むことは不可能であるため、口縁部と胴部が欠損した状態の須恵器甕を逆位置に置いた後、欠損部分から土師器甕を横向きに入れたと考えられる。

出土した土師器甕、須恵器壺C、甕、平瓶、横瓶、甕についてはX線ラジオグラフィによる調査と土器内部の埋土の洗浄を行ったが、内容物は確認できなかった。

このような出土状況と遺物の残存状況から、溝内には意図的に選択した土器を据え置いて埋めたと考えられる。土器以外の遺物、植物遺体などは確認できなかった。

3) 奈良時代(第15図)

奈良時代の遺構は道路2条、掘立柱建物10棟、井戸2基、溝群、埋納遺構1基、柱穴2基、土坑4基、不明遺構2基を検出した。

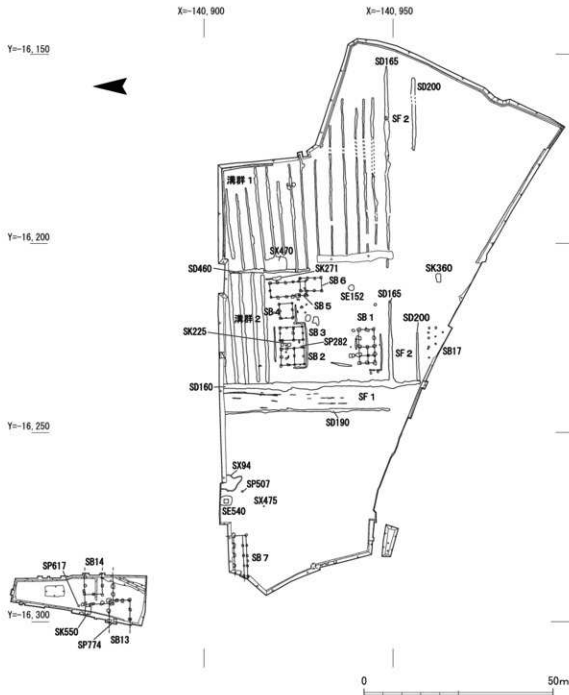
(1) 道路

第4・5次調査区中央部で南北方向の道路SF1を、調査区南半部から西半部にかけて東西方向の道路SF2を検出した。いずれの地点においても、並行する溝2条を検出した。溝は主軸を揃え、溝心間の距離が一定であるため、道路側溝と判断した。SF1とSF2は調査区中央部南寄り直交し、交差点となる。

道路SF1(第16～20図) 道路側溝となる南北方向の並行する溝2条を検出した。溝SD160が東側溝、溝SD190が西側溝となる。SF1の北端は調査区外に続いているため、総延長は51.7m以上を測る。溝心間距離は6.72m～6.9m、路面幅は4.8～6.2mを測る。道路心座標はX=-140930、Y=-16240.8であり、道路主軸はN0°43'Wを測る。路面は遺構基盤層である灰白色土層と同一で

ある。路面は平坦で、標高は北端で36.7m、南端で37.1mと、0.4mの比高で北に向かって緩やかに傾斜する。中央部で断ち割りを行ったところ、盛り土などの路面舗装の痕跡は認められなかった。路面中央部から北側は、後世の削平をほとんど受けておらず、道路SF1の中央部から北側の路面には轍と考えられる痕跡を検出した。SD160・190では、花粉・珪藻・種実分析を行った。(付編1)

東側溝SD160(第16~20図) 検出長51.75m、幅0.51~2.21m、深さ0.05~0.66mを測る。溝心座標は $X=-140'930$ 、 $Y=-16'237.4$ であり、溝主軸方位は $N0^{\circ}54'W$ を測る。南側で道路SF2の南側溝SD200とは接続しないが、SF2の北側溝SD165に「T」字形に接続する。また、北



第15図 奈良時代遺構配置図(1/1,000)

側で溝群2の溝S D533・529・468と接続する。S D200付近で途切れているため、南側の延長部分を拡張し、断ち割り調査を行ったが、延長部分は確認できなかった。

断面形は箱形もしくは皿形を呈する。埋土には全ての土層にシルトブロックや礫を含み、流水の痕跡はみられない。

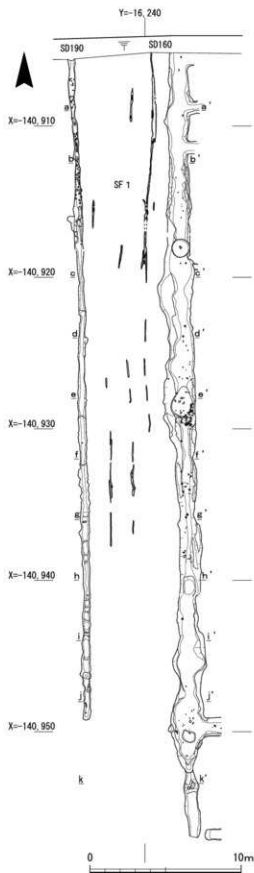
溝幅は一定せず、中央部南寄りが最も狭い。中央部北寄りで溝幅が最も広く、落ち込み状の形状になっている。落ち込み状の地点の東側から遺物がままとって出土した。

溝底は起伏に富む。道路交差点東側では深さ0.08mであるが、S D165と接続する部分では深さ0.66mを測り、急激に深くなり、浅い円形の土坑状に落ち込み形態を呈する。溝底は接続部分から0.14mの比高で南から北に向かって緩やかに傾斜する。北半部では円形の土坑状の落ち込みを検出した。落ち込みからは硯に転用された須恵器杯Aが出土した(第67図143)。溝底は北側の落ち込み付近で傾斜が急になり、北に向けて徐々に浅くなる。このような溝底の形状から、S D160は南北に長い土坑状の溝であり、流水機能に乏しい、滞水する溝であったと考えられる。

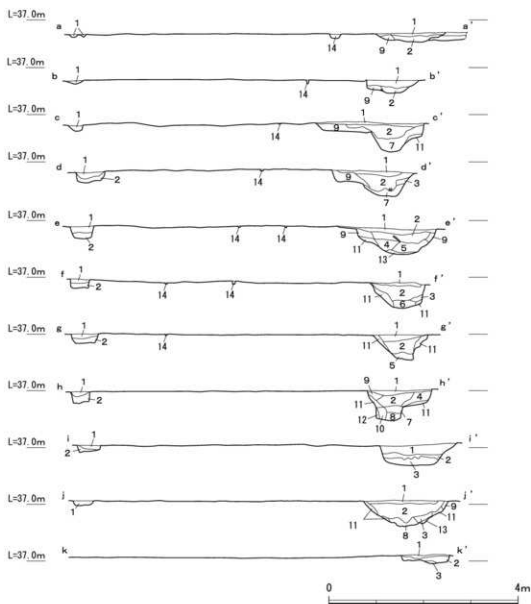
遺物は、溝壁面に沿って東側から流れ込んだように出土していたことから、掘立柱建物群の位置する東側から投棄されたと考えられる。

S D160からは土師器皿A・B・C、高杯、壺、甕、須恵器杯A・B・E、皿B・C・E、蓋、甕、黒色土器、製塩土器、平瓦、丸瓦のほか、墨書人面土器、ミニチュア竈などが出土している(第67図128～第70図189・第89図442・第91図454・455・第92図462・463)。遺物は層位を越えて接合した。出土遺物から奈良時代中頃の遺構と考えられる。

西測溝S D190(第16・17図) 検出長43.6m、幅0.2～0.57m、深さ0.06～0.25mを測る。溝心座標は

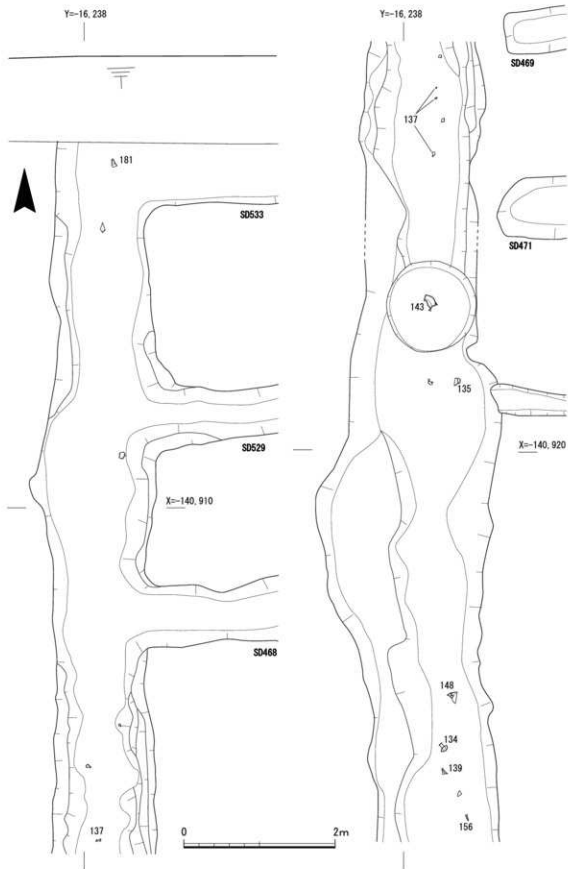


第16図 道路SF 1平面図(1/250)

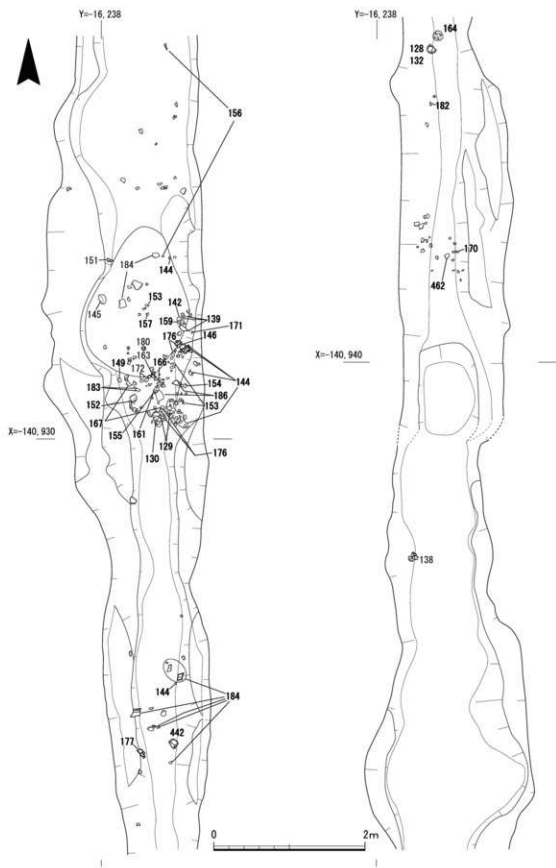


1. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト垂直礫ブロック 30%・明褐灰色 (7.5YR 7/2) 細粒砂を構成に 5%・径 5mm 以下の礫・炭含む)
2. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) 垂直礫シルトブロック 30%・褐灰色 (7.5YR 4/1) 細粒砂を構成に 10%・径 10mm 以下の礫・土器片・炭含む)
3. 褐灰色 (7.5YR 6/1) 細～粗粒砂混じりシルト (褐灰色 (7.5YR 4/1) 垂直礫シルトブロック 40%含む)
4. 明褐灰色 (7.5YR 7/2) 細粒砂混じりシルト (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト垂直礫ブロック 5%含む)
5. にぶい褐 (7.5YR 6/3) 粗～細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂を構成に 30%含む)
6. 褐灰色 (7.5YR 6/1) 細～粗粒砂混じりシルト (褐灰色 (7.5YR 4/1) 垂直礫シルトブロック 30%含む)
7. 褐灰色 (7.5YR 6/1) 細～粗粒砂混じりシルト (褐灰色 (7.5YR 6/1) シルトを構成に 20%・径 10mm 以下の礫含む)
8. 褐灰色 (7.5YR 6/1) 粗～細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) 垂直礫シルトブロック 10%含む)
9. 明褐灰色 (7.5YR 8/2) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト垂直礫ブロック 10%含む)
10. 褐灰色 (7.5YR 6/1) 細～粗粒砂 (褐灰色 (7.5YR 6/1) 垂直礫シルトブロック 10%含む)
11. 褐灰色 (7.5Y 6/1) 細粒砂混じりシルト (褐灰色 (7.5YR 4/1) 垂直礫シルトブロック 10%含む)
12. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂 (炭含む)
13. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (にぶい褐色 (7.5YR 6/3) 粗～細粒砂を構成に 10%含む)
14. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (垂直礫)

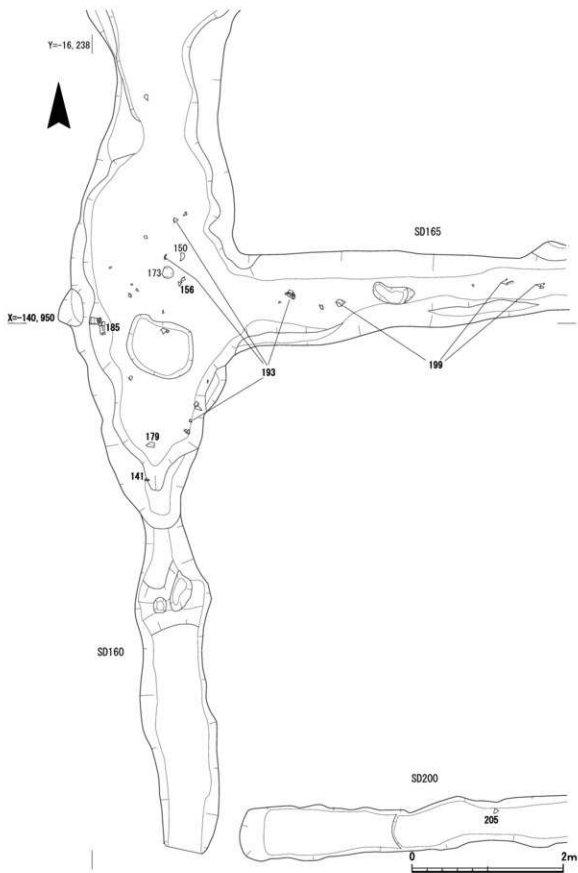
第17図 道路 S F 1 横断面図(1/80)



第18図 道路SF 1 東側溝SD160遺物出土状況図1 (1/50)



第19図 道路SF1東側溝SD160遺物出土状況図2 (1/50)



第20図 道路SF1東側溝SD160遺物出土状況図3(1/50)

X = -140°930, Y = -16°244.3であり、溝の主軸はN 1°59' Wを測る。交差点のS D160とS D165の接続点に対応する位置で溝が途切れている。溝肩は直線にならず、溝幅は一定せずに北半部で溝幅を減じる。断面形は箱形もしくは皿形を呈する。溝底は起伏に富む形状であり、0.30mの比高で南から北に向かって緩やかに傾斜するが、東側溝S D160と同様に北側付近で溝底の傾斜が急になり、北に向けて徐々に浅くなる。埋土はシルトブロックや礫を含み、流水の痕跡はみられない。東側溝S D160と同様に南北に長い土坑状の溝である。

出土遺物は須恵器杯Bや甕体部片、平瓦が出土したのみで点数は数少ない(第71図190~192)。

轍痕(第15・16図) 道路S F 1の中央部から北側の路面上で細長い溝を検出した。検出長0.55~15.0m、幅0.05~0.3m、深さ0.02~0.1mを測る。溝の断面形は方形、三角形、「U」字形を呈する。溝は重複する部分もあるが、少なくとも27条確認できる。道路中央部分で並行する溝も確認でき、溝心間の距離は1.1~1.5mを測る。このようなことから、車輪の轍痕と考えられる。

埋土は、S D160の第1層に類似する締まりのない細粒砂混じりのシルトである。轍痕埋土と路面の状況を詳細に観察するため、路面を断ち割って土層観察を行った。その結果、本来の路面が、車輪により掘り窪められて形成されたと考えられる。道路北半部では轍痕が重複しており、路面が軟弱な所を複数回通行したと考えられる。なお、轍痕跡埋土の土層観察からも道路S F 1には整地土などによる路面舗装はなかったと考えられる。

道路S F 2(第21~23図) 道路側溝である東西方向の並行する溝2条を検出した。溝S D165が北側溝、溝S D200が南側溝となる。

道路S F 2の検出長は83.0mを測る。側溝心間の距離は7.0m~7.25m、路面幅は6.2~6.3mを測る。道路心座標はX = -140°952.9, Y = -16°230.0であり、道路主軸方位はW 0°41' Sを測る。

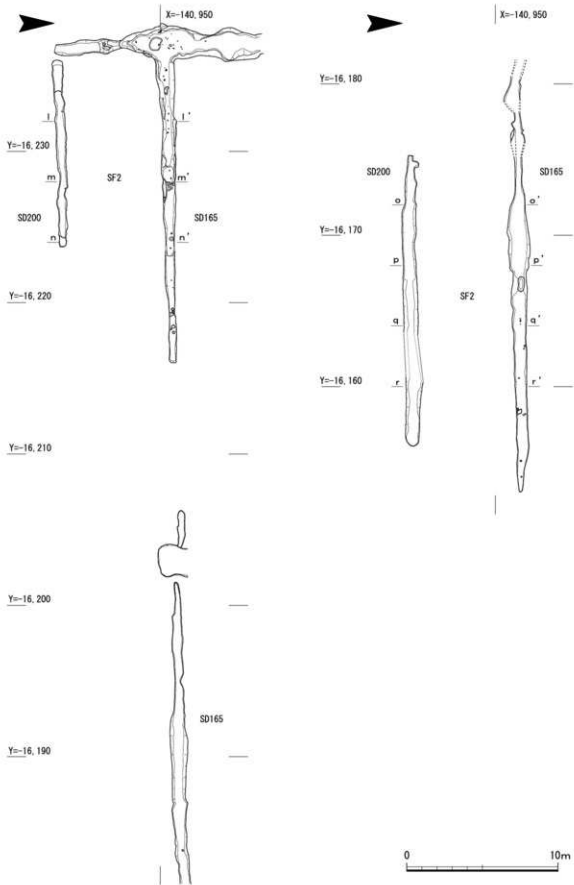
路面は遺構基盤層である灰白色土層と同一である。路面の標高は37.1m~37.9mを測り、0.79mの比高で西に向かって傾斜している。路面の比高は丘陵から氾濫低地に向かって傾斜する地形に由来している。S F 2の西側と東側で断ち割ったところ、S F 1と同様に盛り土などの路面舗装の痕跡は認められなかった。

S F 2の中央部、井戸S E152の南側でS D165が途切れており、調査区の中央部南寄りと東半部の2か所に分かれて検出した。

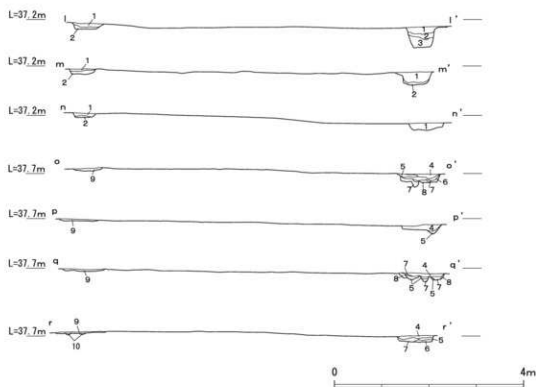
北側溝S D165(第21~23図) S D165の溝心座標はX = -146°949.4, Y = -16°230.0であり、溝の主軸はW 0°51' Sを測る。交差点北側でS F 1のS D160と接続する。

西半部は検出長20.0m、幅0.43~1.35m、深さ0.02~0.41mを測る。断面の形状は箱形または皿形を呈し、溝底は起伏に富み、0.51mの比高で東から西に向かって傾斜し、S F 1のS D160との接続点に至る。埋土は3層に分かれるが、全てシルトブロックや礫を含み、流水の痕跡はみられない。

埋土から土師器杯B・鉢A、須恵器皿B・甕、瓦などが出土した(第72図193・197・199・201)。出土遺物は、層位を越えて接合した。また、S D165から出土した土師器杯BはS D160出土の破片と接合した(第72図193)。S D165に流水した場合、接合部からS D160へ流入するが、S D160には排水機能がないため、滞留すると考えられる。



第21図 道路SF2平面図(1/250)

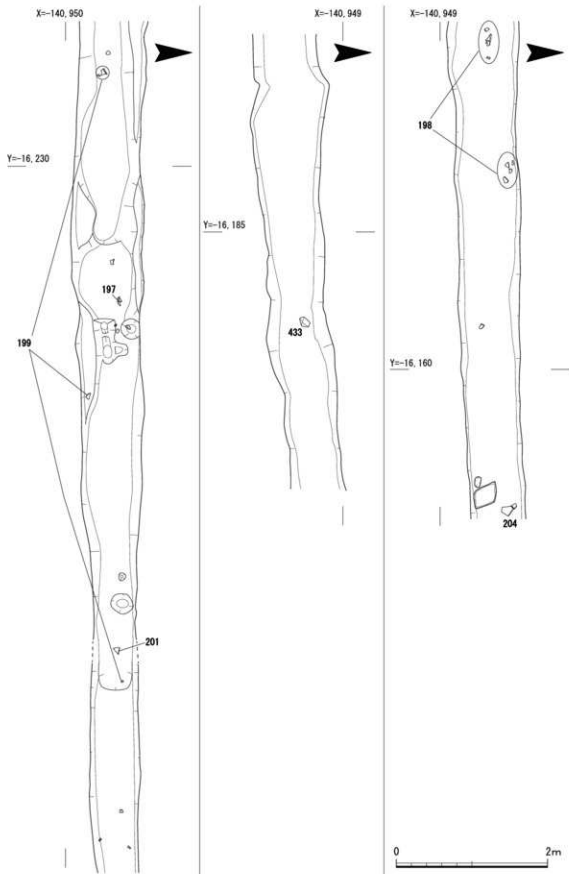


1. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜角礫ブロック 30%・明褐灰色 (7.5YR 7/2) 細粒砂を縞状に5%・径5mm以下の礫・炭含む)
2. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) 亜角礫シルトブロック 30%・褐灰色 (7.5YR 4/1) 細粒砂を縞状に10%・径10mm以下の礫・土器片・炭含む)
3. 褐灰色 (7.5YR 6/1) 細～粗粒砂混じりシルト (褐灰色 (7.5YR 4/1) 亜円礫シルトブロック 40%含む)
4. 暗黄灰色 (2.5Y 2/2) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) 亜円礫ブロック 30%)
5. 暗黄灰色 (2.5Y 2/2) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) 亜円礫ブロック 10%)
6. 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) 亜円礫ブロック 20%)
7. 灰白色 (7.5Y 7/2) 粗粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) 亜円礫ブロック 10%)
8. 黄灰色 (2.5Y 5/1) 細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) 亜円礫ブロック 10%)
9. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) 亜円礫ブロック 30%)
10. 黄褐色 (2.5Y 5/3) シルト混じり細粒砂

第22図 道路S F 2断面図(1/80)

東半部は検出長53.2m、幅0.25～1.04m、深さ0.02～0.29mを測る。断面の形状は箱形を呈する。溝底は西側とは異なる起伏を呈する。溝底は、0.65mの比高で東から西に向かって地形に沿って傾斜する。埋土は全てシルトブロックや礫を含み、流水の痕跡はみられない。埋土から土師器皿A、須恵器杯B・甕、埴が出土した(第72図195・196・198・200・202～204・第88図432・433)。出土遺物から奈良時代中頃の遺構であると考えられる。

南測溝SD200(第21・22図) SD200の溝心座標はX=-140°946.4、Y=-16°230.0であり、溝主軸方位はW0°51' Sを測る。S F 1の東測溝SD160とは接続しない。西半部は検出長12.4m、幅0.47～0.70m、深さ0.08～0.14mを測る。調査区南半部は上層からの削平が見られるため、SD200は後世の削平を受けていると考えられる。溝底は起伏に富み、0.16mの比高で傾斜はない。埋土は、全てシルトブロックや礫を含み、流水の痕跡はみられない。埋土から須恵器甕片が出土した(第72図205)。



第23図 道路S F 2北側溝S D165遺物出土状況図(1/50)

東半部は検出長19.2m、幅0.44～1.15m、深さ0.04～0.07mを測る。断面形は箱形もしくは皿形を呈する。溝底は起伏に富み、底部は0.11mの比高で東から西に向かって傾斜する。埋土はシルトブロックや礫を含み、流水の痕跡はみられない。東半部から遺物は出土しなかった。

S F 1・2の交差点西側を精査して遺構検出を行ったが、西側に道路側溝は検出されず、道路の延長部分は確認されなかった。また、道路の南側を拡張したが、道路の延長部分は検出できなかった。このように、交差点の形状は北側と東側しか判明しなかった。

(2)掘立柱建物

第4・5次調査区の中央部と西半部、第6次調査区の南半部で検出した。

掘立柱建物 S B 1 (第24・25図) 第4・5次調査区中央部南寄りで検出した。桁行4間(8.8m)、梁行2間(3.8m)の東西棟の掘立柱建物である。建物内側に柱穴 S P 172・173があることから、間仕切り、もしくは床張りの建物と考えられる。柱間寸法は桁行2.0～2.4m、梁行1.8～2.0mを測る。建物主軸はN 1°30' Wを測る。柱穴掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.6～0.9m、深さ0.2～0.7mを測る。

大半の柱は抜き取られている。柱穴 S P 166・167・168の土層断面において柱痕跡が確認でき、直径0.2～0.5mを測る。柱穴 S P 170では底で礫を検出した。柱の根固めを行ったと考えられる。柱穴 S P 174は不整形な掘形であり、柱痕跡を2か所検出した。埋土の切り合いから、柱の付け替えと考えられる。S B 1の南側で検出した溝 S D 197は検出長6.4m、幅0.2～0.3m、深さ0.08～0.12mを測る。建物を取り巻くように西側で「L」字状に屈曲することから、S B 1の雨落ち溝と考えられる。

遺物は、柱穴 S P 171の柱抜き取り穴から須恵器盤Aが出土した(第73図210)。S P 172とS P 178の柱抜き取り穴から土師器甕の破片が出土しており、接合した(第73図206)。柱穴 S P 177抜き取り穴から須恵器杯Bが出土した(第73図207)。

このほか、S B 1の周辺で同時期の柱穴を複数検出した。北側に位置する柱穴 S P 180と201は柱間寸法は南北1.5mと短い、S B 1と柱筋を揃え、埋土も類似することから、S B 1に関連する柱穴の可能性が高い。S P 180から須恵器杯B蓋が出土した(第73図208)。

柱穴 S P 202・203は一辺0.2m、深さ0.2mを測る。隅丸方形を呈する小規模な柱穴であるが、建物の柱穴に近接することから、建物の足場穴と考えられる。また、建物からはやや離れているが、柱穴 S P 204からは須恵器皿B蓋が出土した(第73図209)。

掘立柱建物 S B 2・3 (第26図) 第4・5次調査区中央部で検出した南側に廂を有する掘立柱建物である。S B 2は桁行2間(4.4m)、梁行2間(3.5m)の建物である。柱間寸法は桁行2.0～2.4m、梁行1.8～1.9m、廂の出は2.5mを測る。建物主軸はN 1°32' Wを測る。柱穴掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.5～0.6m、深さ0.2～0.4mを測る。柱は抜き取られている。遺物は出土しなかった。

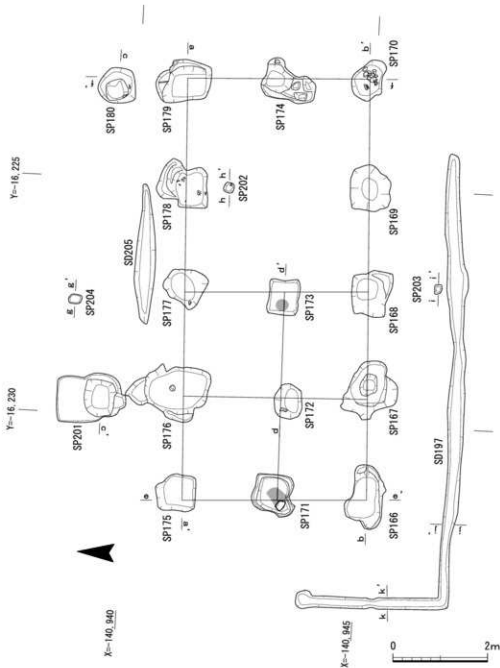
S B 3は桁行2間(3.5m)、梁行2間(3.3m)の建物である。柱間寸法は桁行1.7～1.8m、梁行1.5～2.0m、廂の出は2.4mを測る。建物主軸はN 1°32' Wを測る。柱穴掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.3～0.5m、深さ0.2～0.7mを測る。柱は抜き取られている。

柱穴 S P 213の底面において柱当たりを確認し、直径0.18mを測る。遺物は、柱穴 S P 216の柱抜き取り穴から須恵器杯B・皿Aが出土した(第73図212・213)。S B 2・3は、S B 1と南北方

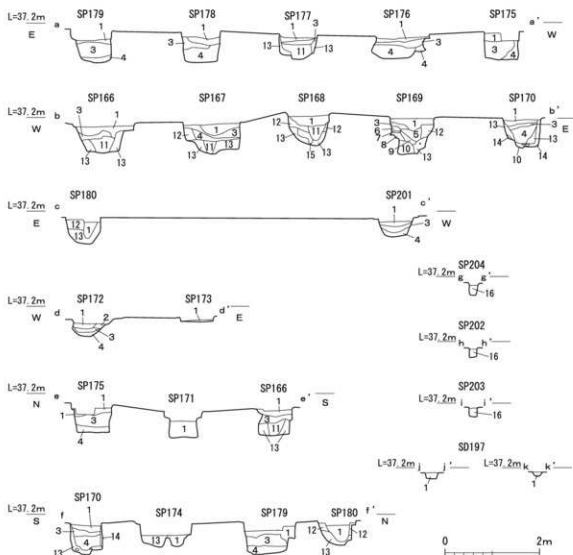
向に柱筋を合わせる。

S B 2・3の南側で検出した溝S D 250は、全長16.6m、幅0.2～0.4m、深さ0.02～0.05mを測る。断面形が皿形の浅い溝で、建物を取り囲むように「コ」字状に巡ることから、S B 2・3の雨落ち溝と考えられる。

また、北側で東西方向の溝S D 233を検出した。全長9.1m、幅0.2～0.4m、深さ0.03～0.10mを測る。断面形が皿形の浅い溝である。溝の東西端は身舎東西端の柱筋と一致するため、雨落ち溝と考えられる。S D 233埋土からは、土師器ⅢA、須恵器椀A、平瓦が出土した。(第73図211・214・第92図469)

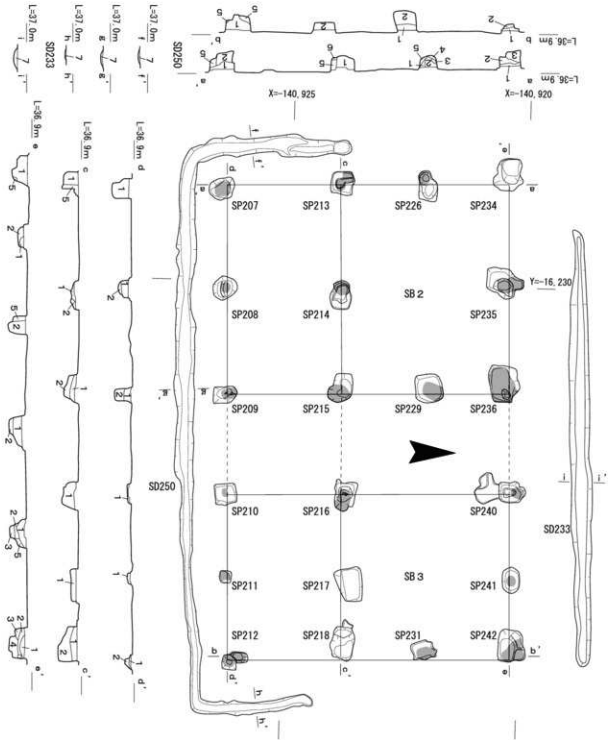


第24図 掘立柱建物S B 1平面図(1/80)



- | | |
|---|--|
| <p>1. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト面円礫ブロック 30%・炭含む) 柱抜き取り</p> <p>2. 褐灰色 (7.5YR 6/2) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 6/3) シルト面円礫ブロック 20%・灰褐色 (7.5YR 6/2) 細粒砂を織状に 20%含む) 柱抜き取り</p> <p>3. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト面円礫ブロック 30%・灰褐色 (7.5YR 6/2) シルト面円礫ブロック 10%・径 10mm 以下の礫・鉄含む) 柱抜き取り</p> <p>4. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト面円礫ブロック 40%含む) 柱抜き取り</p> <p>5. 灰色 (5Y 6/1) シルト混じり細粒砂 (灰色 (7.5Y 5/1) シルト混じり中粒砂ブロック 20%・白色砂粒を微量に含む) 柱抜き取り</p> <p>6. 黄灰色 (2.5Y 5/1) シルト混じり細粒砂 柱抜き取り</p> <p>7. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト混じり中粒砂 柱抜き取り</p> <p>8. 灰色 (5Y 4/1) シルト混じり細粒砂 (灰黄色 (2.5Y 6/2) シルト混じり中粒砂ブロック 25%含む) 柱抜き取り</p> | <p>9. 灰黄色 (2.5Y 6/2) シルト混じり細粒砂 (灰黄色 (10YR 6/2) 中粒砂ブロック 5%・白色粒子を微量に含む) 柱抜き取り</p> <p>10. 灰色 (5Y 4/1) シルト混じり細粒砂 柱抜き取り</p> <p>11. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (明褐色 (7.5YR 7/1) シルト面円礫ブロック 5%含む) 柱頭跡</p> <p>12. 灰色 (5Y 6/1) シルト混じり細粒砂 (灰色 (5Y 5/1) 中粒砂をブロック状に含む) 掘形</p> <p>13. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 6/1) 面円礫シルトブロック 20%・褐灰色 (7.5YR 4/1) 面円礫ブロック 10%・明褐色 (7.5YR 7/2) 細～粗粒砂ブロック 10%含む) 掘形</p> <p>14. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト面円礫ブロック 10%含む) 掘形</p> <p>15. 灰色 (7.5Y 5/1) 細粒砂 (黄灰色 (2.5Y 5/1) シルト混じり細粒砂を織状に含む) 掘形</p> <p>16. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルトブロック 10%・炭含む)</p> |
|---|--|

第25図 掘立柱建物 S B 1 断面図 (1/80)



1. 褐灰色 (10YR 6/1) シルト混じり細粒砂 柱抜き取り
2. 褐灰色 (10YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (10YR 5/1) シルトブロック 10%含む) 柱抜き取り
3. 褐灰色 (10YR 5/1) シルト (褐灰色 (10YR 6/1) シルト面円礫ブロック 10%含む) 柱抜き取り
4. 褐灰色 (10YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (10YR 6/1) シルト面円礫ブロック 10%含む) 柱抜き取り
5. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト面円礫ブロック 10%含む) 掘形
6. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト面円礫ブロック 30%含む) 掘形
7. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト面円礫ブロック 30%含む)

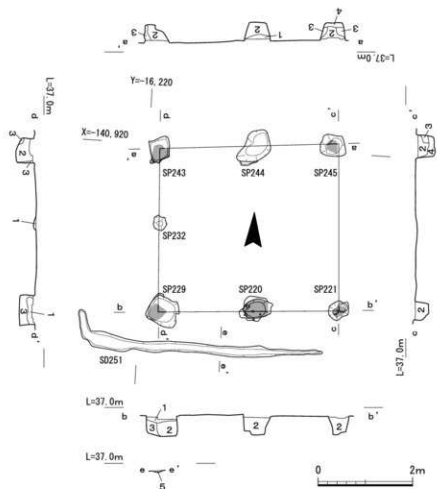
第26図 掘立柱建物 S B 2・3実測図(1/80)

身舎中央において桁行方向の柱列主軸がずれているため、別棟の建物と復元したが、雨落ち溝が巡ることから、上部構造が同一の建物、もしくは桁行5間(10.2m)、梁行3間(5.9m)の東西棟の建物である可能性も考えられる。同一の建物とした場合は、建物主軸はN1°28'Wを測る。

掘立柱建物SB4(第27図) 第4・5次調査区中央部で検出した。SB2・3の東側に位置し、桁行2間(3.74m)、梁行2間(3.44m)と考えられる掘立柱建物である。建物内部の柱穴及び、柱穴SP245と柱穴SP221の中間の柱穴は確認できなかった。柱間寸法は桁行1.65~2.12m、梁行1.56~1.88mを測る。建物主軸はN1°58'Wを測る。柱穴掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.2~0.46m、深さ0.32~0.44mを測る。柱は抜き取られている。柱痕跡は確認できなかった。

SB4の南側で検出した溝SD251は、検出長5.69m、幅0.06~0.34m、深さ0.05~0.5mを測る。断面形が皿形の浅い溝で、建物の西側で「L」字状に曲がることから、SB4の雨落ち溝と考えられる。

柱穴SP220から須恵器杯A・杯B、柱穴SP243土師器皿A、溝SD251から須恵器杯B蓋が

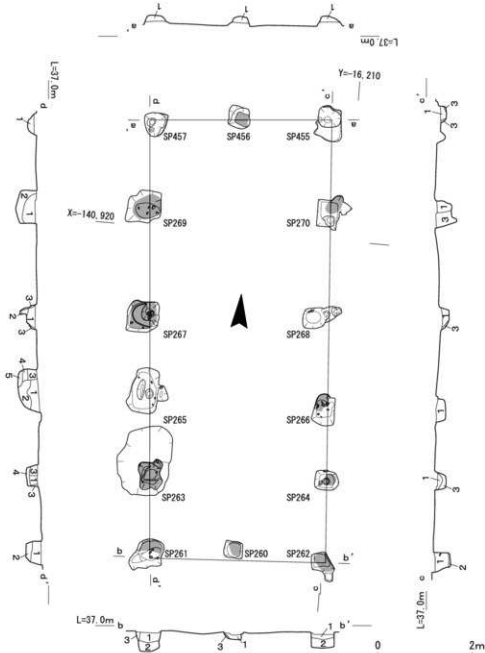


1. 褐灰色(10YR 6/1)シルト混じり細粒砂 柱抜き取り
2. 褐灰色(10YR 6/1)シルト混じり細粒砂(褐灰色(10YR 5/1)シルトブロック10%含む)柱抜き取り
3. 褐灰色(7.5YR 6/1)シルト混じり細粒砂(褐灰色(7.5YR 5/1)シルト重円礫ブロック10%含む)掘形
4. 褐灰色(7.5YR 6/1)シルト混じり細粒砂(褐灰色(7.5YR 5/1)シルト重円礫ブロック30%含む)掘形
5. 褐灰色(7.5YR 5/1)シルト混じり細粒砂(褐灰色(7.5YR 6/1)シルト重円礫ブロック10%・炭・鉄分含む)

第27図 掘立柱建物SB4実測図(1/80)

出土している(第73図215～218)。

掘立柱建物SB5(第28図) 第4・5次調査区中央部で検出した。SB4の東側に隣接する、桁行5間(9.2m)、梁行2間(3.6m)の南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.5～2.0m、梁行1.8～2.2mを測る。建物主軸はN3°32'Wを測る。柱穴掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.3～0.7m、



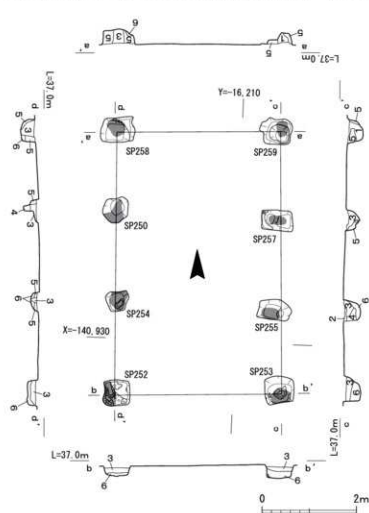
1. 褐灰色(7.5YR 5/1)シルト混じり細粒砂(灰褐色(7.5YR 6/2)面円礫シルトブロック20%・
褐灰色(7.5YR 6/1)面円礫シルトブロック20%・炭・鉄分含む)柱抜き取り
2. 褐灰色(7.5YR 4/1)シルト混じり細粒砂(褐灰色(7.5YR 6/1)面円礫シルトブロック20%・炭含む)柱抜き取り
3. 褐灰色(7.5YR 6/1)シルト混じり細粒砂(褐灰色(7.5YR 5/1)面円礫シルトブロック30%・炭多く含む)掘形
4. 褐灰色(7.5YR 5/1)シルト混じり細粒砂(褐灰色(7.5YR 6/1)シルトブロック20%・炭含む)掘形
5. 褐灰色(7.5YR 6/1)シルト混じり細粒砂(褐灰色(7.5YR 5/1)面円礫シルトブロック10%・炭含む)掘形

第28図 掘立柱建物SB5実測図(1/80)

深さ0.2~0.4mを測る。全ての柱は抜き取られている。柱穴SP264の底面において柱当たりが確認でき、直径0.15mを測る。全ての柱穴の掘形埋土に炭が多量に含まれる。SB6と重複しており、他の掘立柱建物と主軸の振れ幅が異なるが、SB2・3、SB4と東西方向で柱筋を合わせる。

遺物は周辺の掘立柱建物の中で最も多く、柱抜き取り穴から土師器杯C、皿A、鉢B、壺B、甕、須恵器杯C、杯B蓋、皿A、甕Cなどが出土した(第74図219~237)。奈良時代中頃の遺構である。

掘立柱建物SB6(第29図) 第4・5次調査区中央部で検出した。桁行3間(5.4m)、梁行1間(3.5m)の南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.7~2.0mを測る。建物主軸はN1°40'Wを測る。



1. 黒色(7.5YR 2/1)シルト混じり細粒砂(黄灰色(2.5Y 5/1)面円礫シルトブロック20%含む)炭層 柱抜き取り
2. 褐灰色(7.5YR 6/1)シルト混じり細粒砂 柱抜き取り
3. 黄灰色(2.5Y 5/1)シルト混じり細粒砂(黄灰色(2.5Y 6/1)シルトブロック10%・炭含む)柱抜き取り
4. 黄灰色(2.5Y 5/1)シルト混じり細粒砂(黄灰色(2.5Y 6/1)シルトブロック20%・炭含む)柱抜き取り
5. 褐灰色(7.5YR 6/1)シルト混じり細粒砂(褐灰色(7.5YR 5/1)シルト面円礫ブロック10%含む)掘形
6. 黄灰色(2.5Y 5/1)シルト混じり細粒砂(褐灰色(7.5YR 5/1)シルト面円礫ブロック5%含む)掘形

第29図 掘立柱建物SB6実測図(1/80)

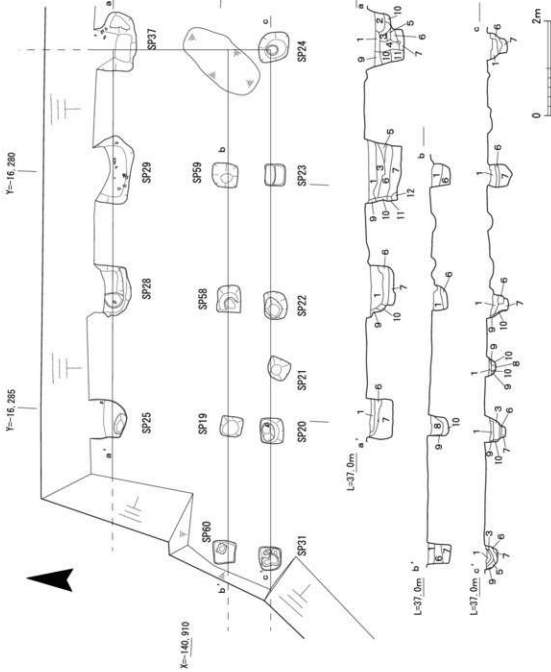
北端の柱列は掘立柱建物SB2・3南側の廂と柱筋を合わせる。柱穴掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.3~0.5m、深さ0.1~0.3mを測る。大半の柱は抜き取られている。柱穴SP253の底面において柱当たりが確認でき、直径0.3mを測る。

柱穴SP259の平面と断面で特に明瞭であるが、SB6の柱穴は、柱抜き取り穴埋土に炭が多量に含まれているのに対して、柱穴掘形埋土にはほとんど炭を含まないという特徴が見られる。柱穴埋土における炭の混入状況と建物の重複関係から、SB6が火災で焼失した後に、SB5が建てられたと考えられる。また、SB5・6周辺の遺構基盤層上には炭が広がっており、火災後の片づけがあったと考えられる。

SP259から須恵器皿Aが出土した(第74図239)。

以上、第4・5次調査区の中央部で検出したSB1・2・3・4・6はいずれも大半の柱穴で柱の抜き取り穴を確認しており、柱穴埋土の状況も同じである。建物の重複もなく、主軸もほぼ

1. 黒灰色 (7.5IR 6/1) シルト混じり粗粒砂 (黒灰色 (7.5IR 7/1) シルト重円礫
プロッタ30%含む) 柱抜き取り
2. 黒灰色 (7.5IR 5/1) シルト混じり粗粒砂 (黒灰色 (7.5IR 4/1) シルト重円礫
プロッタ30%含む) 柱抜き取り
3. 黒灰色 (10IR 5/1) シルト混じり細粒砂 (黒灰色 (10IR 6/1) シルト重円礫
プロッタ30%含む) 柱抜き取り
4. 黒灰色 (7.5IR 5/2) シルト混じり細粒砂 柱抜き取り
5. 黒灰色 (10IR 5/1) シルト混じり細粒砂 柱抜き取り
6. 黒灰色 (10IR 4/1) シルト混じり細粒砂 (黒灰色 (10IR 5/1) シルト重円礫
プロッタ20%含む) 柱抜き取り
7. 黒灰色 (10IR 4/1) シルト混じり細粒砂 (黒灰色 (10IR 5/1) シルト重円礫
プロッタ40%含む) 柱抜き取り
8. 黒灰色 (7.5IR 6/1) シルト混じり細粒砂 (黒灰色 (7.5IR 6/1) シルト重円礫に30%・赤・灰含む) 柱抜き取り
9. 黒灰色 (7.5IR 6/1) シルト混じり粗粒砂 (黒灰色 (7.5IR 7/1) シルト重円礫に30%含む) 粗形
10. 黒灰色 (7.5IR 6/1) シルト混じり粗粒砂 (黒灰色 (7.5IR 5/1) シルト重円礫プロッタ30%含む) 粗形
11. 黒灰色 (7.5IR 5/1) シルト混じり粗粒砂 (黒灰色 (7.5IR 6/1) シルト重円礫プロッタ40%含む) 粗形
12. 黒灰色 (10IR 5/1) シルト混じり細粒砂 (黒灰色 (10IR 5/1) シルト重円礫プロッタ20%含む) 粗形

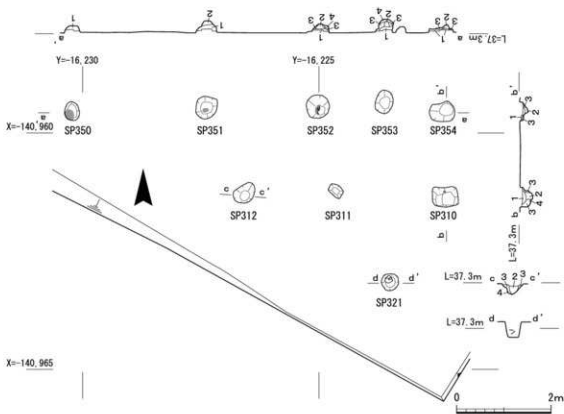


第30図 掘立柱建物 S B 7 実測図 (1/80)

同じであることから、出土遺物は少ないが奈良時代中頃の建物群と考えられる。全体に規模の小さい建物であるが、方位と柱筋を描いて計画的に配置された建物群と考えられる。

掘立柱建物SB7 (第30図) 第4・6次調査区北西部で検出した。建物の北側と西側が調査区外に延びるため、全体の規模は不明であるが、桁行3間(3.50m)以上、梁行5間(10.72m)以上の東西棟の掘立柱建物と考えられる。身舎の南側で柱筋を描える2列の柱列を検出した。柱列の間隔が0.85~1.04mと近接するため、廂と欄間に復元するのは難しく、床東と廂を持つ建物と考えられる。柱間寸法は梁行2.54~2.76m、廂の出は3.34~3.39mを測る。建物主軸はN1°40'Wを測る。柱穴掘形は隅丸方形を呈するが、身舎、床東と廂では大きさが異なる。身舎の柱穴掘形は一辺0.8~1.4m、深さ0.56~0.86mを測る。床東と廂の柱穴掘形は一辺0.43~0.5m、深さ0.32~0.62mを測る。柱は抜き取られていたが、床東の柱穴SP19では柱痕跡を確認し、直径0.18mを測る。身舎の柱穴では柱痕跡を確認できなかった。遺物は、柱抜き取り穴から土師器皿A、須恵器杯B、瓦、掘形から須恵器杯B蓋などが出土した。また、柱穴SP20の柱抜き取り穴から埴が出土した(第75図240~251・第88図433)。出土遺物から奈良時代中頃の遺構と考えられる。

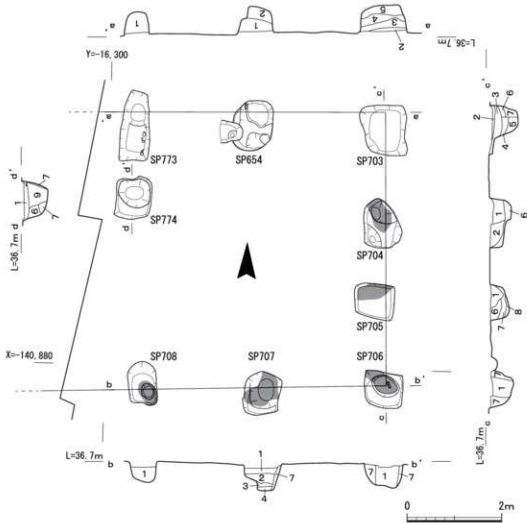
掘立柱建物SB17 (第31図) 第4・5次調査区の中央部南寄り、SF2の南側で検出した掘立柱建物である。掘立柱建物は調査区外に延びるため、南側を一部拡張したが、南側の柱穴は中



1. 灰褐色 (7.5YR 6/2) シルト混じり細粒砂 (灰褐色 (7.5YR 6/2) シルト面内礫ブロック20%・炭含む)
2. 灰褐色 (7.5YR 5/2) シルト混じり細粒砂 (暗灰色 (7.5YR 5/1) 細粒砂を織状に20%・炭含む)
3. 褐色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂 (にぶい褐色 (7.5YR 6/3) 粗~細粒砂を織状に10%含む)
4. 褐色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂 (にぶい褐色 (7.5YR 6/3) 粗~細粒砂を織状に10%含む)

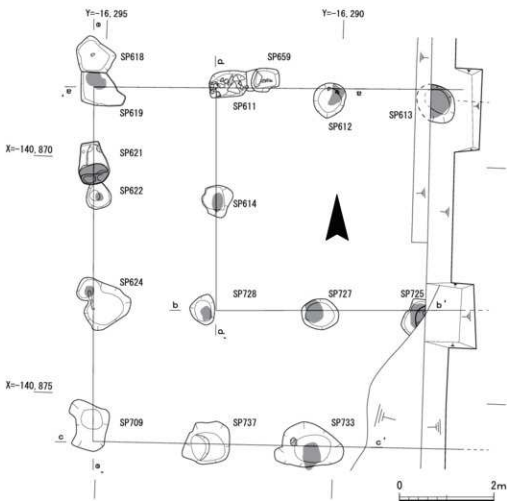
第31図 掘立柱建物SB17実測図(1/80)

世の溝により削平されていたため、建物規模を確定できなかった。柱間は不揃いであり、柱間寸法は桁行1.28～2.80m、梁行2.0m以上を測る。柱穴掘形は隅丸方形を呈し、長辺0.56m、短辺0.24m、深さ0.16～0.36mを測る。柱は抜き取られており、柱痕跡は確認できなかった。柱穴S P321の柱抜き取り穴から須恵器甕の体部片が出土した。柱穴S P352の柱抜き取り穴から須恵器平瓶が出土した(第76図252・253)。出土遺物、柱穴の形と埋土から奈良時代の遺構と考えられる。



1. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂 (黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト面円礫ブロック 30%・灰褐 (7.5YR 4/2) 細粒砂をブロック状に10%含む) 柱抜き取り
2. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂 (黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト面円礫ブロック 10%・灰褐 (7.5YR 5/1) 細粒砂混じりシルトをブロック状に30%含む) 柱抜き取り
3. 黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂・黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト面円礫ブロック 10%含む) 柱抜き取り
4. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト面円礫ブロック 10%含む) 柱抜き取り
5. 黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト 柱抜き取り
6. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂 (黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト面円礫ブロック 20%含む) 掘形
7. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト面円礫ブロック 20%含む) 掘形
8. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト面円礫ブロック 10%含む) 掘形
9. 黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂面円礫ブロック 30%・土器・炭含む) 柱痕跡

第32図 掘立柱建物S B13実測図(1/80)

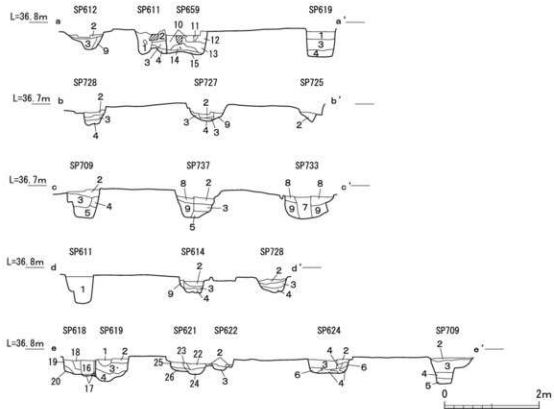


第33図 掘立柱建物 S B 14 平面図 (1/80)

掘立柱建物 S B 13 (第32図) 第6次調査区南部で検出した。建物の西半部は調査区外へ延びるため、調査区西辺を拡張したが、建物規模は確定できなかった。そのため、桁行3間(6.70m)以上、梁行3間(5.86m)の東西棟の掘立柱建物と考えられる。柱間寸法は桁行2.46~2.64m、梁行1.66~1.94mを測る。建物主軸はN 0°51' Wを測る。柱穴掘形は隅丸方形を呈するが、柱の抜き取りにより楕円形や隅丸長方形を呈するものがある。一辺0.50~0.80m、深さ0.46~0.62mを測る。柱穴 S P 708の底面では柱当たりが残っており、直径0.28mを測る。柱穴同士の切り合い関係はないが、北東隅の柱穴 S P 703が S B 14と重複している。

S P 703の柱抜き取り穴から土師器皿Aが出土したほか、柱穴 S P 773の柱抜き取り穴から土師器杯C・椀C、須恵器杯A・杯C・杯B蓋・盤A、黑色土器杯、製塩土器などが出土した(第77図254~276)。

S P 773の南側で柱穴 S P 774を検出した。柱穴掘形は隅丸方形を呈し、長軸0.84m、短軸0.74m、深さ0.56mを測る。柱抜き取りにより、柱痕跡は確認できなかったが、S B 13を構成する柱穴と同一の埋土であった。S B 13に伴う柱穴または別の建物の柱穴と考えられる。S P 774の抜き取り穴からは土師器杯C、須恵器杯B蓋・鉢A、製塩土器が出土し、掘形からは須恵器杯B蓋などが出



1. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック 20%・灰褐色 (7.5YR 5/2) 細～粗粒砂をブロック状に10%・炭・土器・植物灰含む) 柱抜き取り
2. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック 20%・灰褐色 (7.5YR 5/2) 細～粗粒砂をブロック状に10%含む) 柱抜き取り
3. 褐灰色 (7.5YR 5/1) 細粒砂混じりシルト (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック 10%含む) 柱抜き取り
4. 灰褐色 (7.5YR 6/2) シルト混じり細粒砂 (にぶい褐色 (4.5YR 6/3) 細～粗粒砂を塊状に10%含む) 柱抜き取り
5. 黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック 30%・炭含む) 柱抜き取り
6. 灰褐色 (7.5YR 5/2) 細～粗粒砂 柱抜き取り
7. 黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック 10%・炭含む) 柱抜き取り
8. 黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト混じり細粒砂 (灰褐色 (7.5YR 5/2) 細～粗粒砂を20%・径30mm以下の礫含む) 掘形
9. 黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) 亜円礫シルトブロック 20%・炭含む) 掘形
10. 褐灰色 (10YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック 30%・炭含む)
11. 褐灰色 (10YR 5/1) シルト混じり細粒砂
12. 褐灰色 (10YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック 20%)
13. 褐灰色 (10YR 5/1) 細粒砂混じりシルト (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック 15%含む)
14. 灰褐色 (10YR 5/2) シルト混じり細粒砂
15. 灰褐色 (10YR 6/2) シルト混じり細粒砂 (にぶい褐色 (4.5YR 6/3) 細～粗粒砂を塊状に5%含む)
16. 黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト混じり細～粗粒砂 (褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト亜円礫ブロック 10%・黒褐色 (7.5YR 2/2) シルト亜円礫ブロック 20%・径20mm以下の礫・にぶい褐色 (7.5Y 6/1) 細～粗粒砂ブロック状10%・炭含む)
17. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細～粗粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック 20%含む)
18. 灰褐色 (7.5YR 4/2) シルト混じり細～粗粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルトブロック 10%・径20mm以下の礫含む)
19. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) 亜円礫シルトブロック 20%含む)
20. 黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト混じり細～粗粒砂 (灰褐色 (7.5YR 5/2) 亜円礫シルトブロック 30%・炭含む)
21. 黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト混じり細～粗粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/2) 亜円礫シルトブロック 20%・炭含む)
22. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック 30%・炭含む)
23. 黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト混じり細～粗粒砂 (灰褐色 (7.5YR 5/2) 亜円礫ブロック 40%含む)
24. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック 5%含む)
25. 灰褐色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (灰褐色 (7.5YR 5/2) シルト亜円礫ブロック 40%含む)
26. 灰褐色 (7.5YR 5/2) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック 5%含む)

第34図 掘立柱建物S B14断面図(1/80)

土した(第77図277~286)。S B13とS P774は、出土遺物から奈良時代中頃の遺構と考えられる。

掘立柱建物 S B14(第33・34図) 第6次調査区南部で検出した掘立柱建物である。南側と西側に廂を有する。身舎と廂の東半部は調査区外に延びる。東側に調査区を一部拡張したが、柱穴は現代の掘削により失われていた。建物規模は確定できなかったが、桁行4間(7.4m)以上、梁行3間(7.6m)の二面廂もしくは三面廂の東西棟の掘立柱建物と考えられる。柱間寸法は桁行2.1~2.8m、梁行2.2~2.8m、廂の出は2.4~2.8mを測る。建物主軸はN1°39'Wを測る。柱穴掘形は本来、隅丸方形を呈するが、柱抜き取りにより不整形な隅丸方形や楕円形を呈し、一辺0.5~0.9m、深さ0.14~0.5mを測る。柱穴S P733で柱痕跡を確認しており、直径0.32mを測る。

柱穴S P611の柱抜き取り穴から須恵器杯B蓋・堯C、黒色土器、平瓦、柱穴S P619の柱抜き取り穴から須恵器皿B、S P733から製塩土器が出土した(第77図287~291・第90図447・453)。出土遺物から奈良時代中頃の遺構と考えられる。

南西隅でS B13と重複しているが、柱穴同士の切り合い関係はない。出土遺物からも両者の前後関係を明らかにすることは難しいが、S B13とS B14は建て替えが行われた可能性もある。

(3)井戸

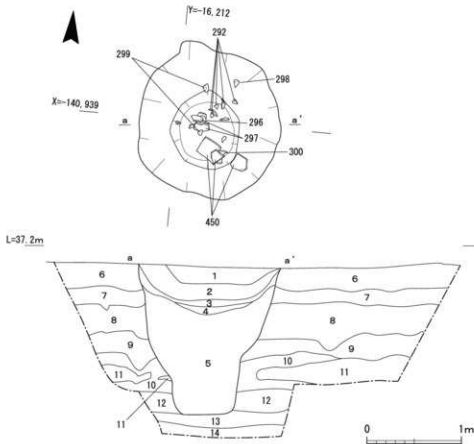
井戸 S E152(第35図) 第4・5次調査区中央部で検出した。平面形が楕円形を呈する素掘りの井戸である。長径1.59m、短径1.50m、深さ1.55mを測る。壁面はほぼ垂直で、井戸の底付近に段差を設ける。井戸枠材を固定していた痕跡が見られないことから、素掘りの井戸と判断した。井戸の最下層の調査は安全を考慮して、重機と人力で半載した後に実施した。最下層は湧水層である砂層(第12・13層)に達しているが、最下層における機能時の堆積層は確認できなかった。井戸の埋土は5層に分かれ、全ての土層は構造を成さずにシルトのブロックが混入する。

埋土から土師器杯A・高杯、須恵器杯B・杯B蓋・高杯・杯E、平瓦などのほか、須恵器杯Bの底部に「越後」と記された墨書土器が出土した(第78図292~300・第92図450・467)。墨書土器は第5層から斜めに出土したことから、投棄されたと考えられる。平瓦は第2・3・5層の各層から出土し、全ての破片が接合した。出土遺物から、奈良時代中頃の井戸と考えられる。第5層からは5点程度の貝殻が出土し、同定の結果、ヤマトシジミと判明した。また、埋土については、花粉分析、種実同定、寄生虫卵分析を実施した(付編1)。

検出位置からみて、S B1~6に伴う井戸と考えられる。埋土の状況や異なる層位から出土した遺物が接合したことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

井戸 S E540(第36・37図) 第4・5次調査区北西部で検出した。調査区北壁付近で検出したため、調査区を拡張したが、井戸掘形が調査区外へ広がったため、完掘には至っていない。遺構の遺存状態が良好であることから、安全を考慮して重機で井戸掘形を半載し、井戸枠内の調査や井戸枠材の取り上げを行った。井戸掘形は隅丸方形を呈し、長辺3.05m以上、短辺2.77m、深さ2.08mを測る。

掘形内で方形縦板組閣柱横棧留の井戸枠を検出した。井戸枠は長辺1.18~1.27m、短辺1.02~1.18m、深さ1.98mを測る。井戸枠の四隅には建築部材を転用した隅柱を用いており、横棧とともに内側から縦板を支持する。



- | | |
|--|---|
| <p>1. 黄灰色 (2.5Y 6/1) シルト混じり中粒砂
(灰黄色 (2.5Y 6/2) シルトブロック 10%混じる・
径 10mm 程度の小礫混じる・しまり良好) 井戸埋土</p> <p>2. 黄灰色 (2.5Y 5/1) シルト混じり中粒砂
(灰黄色 (2.5Y 6/2) シルトブロック 10%混じる・
径 30mm 程度の礫が少量混じる・しまり良好) 井戸埋土</p> <p>3. 灰色 (5Y 5/1) シルト (しまり良好) 井戸埋土</p> <p>4. 灰色 (5Y 5/1) 極細粒砂混じりシルト (しまり良好・
貝殻を含む) 井戸埋土</p> <p>5. 灰色 (5Y 6/1) 細粒砂混じりシルト
(灰色 (5Y 5/1) ブロック 30%混じる・
オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 細粒砂 10%混じる) 井戸埋土</p> | <p>6. 灰褐色 (7.5YR 6/2) シルト混じり細粒砂
(鉄分・植物灰・径 2～5mm の礫・灰白色 (7.5Y 8/2)
細粒砂をブロック状に 20%含む)</p> <p>7. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂
(鉄分・植物灰・灰白色 (7.5Y 8/2) 細粒砂を
ブロック状に 20%含む)</p> <p>8. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト (鉄分・植物灰含む)</p> <p>9. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり粗～細粒砂</p> <p>10. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト</p> <p>11. 褐灰色 (7.5YR 6/1) 粗～細粒砂 (重力流堆積)</p> <p>12. 暗緑灰色 (10GY 4/1) 粗～細粒砂混じりシルト</p> <p>13. 緑灰色 (10GY 5/1) 粗～細粒砂混じりシルト</p> <p>14. 緑灰色 (10GY 6/1) シルト</p> |
|--|---|

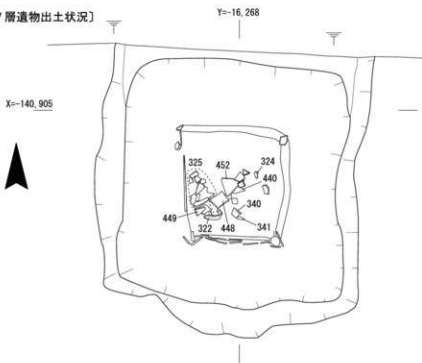
第35図 井戸 S E 152実測図 (1/40)

横棧は隅柱に納穴を穿孔して組み立てられており、南北両側に 2 段、東西両側に 3 段検出した。西側・北側は、東側・南側に比べて長い横棧を用いるため、井戸枠の平面形は四角形を呈する。東西両側の最下段の横棧には小径木の芯持ち丸木材を用いており、他の横棧とは木取りと樹種が異なる。最下段の横棧は隅柱に納穴を穿孔せずに、縦板と隅柱の間に挟み込んでいた。このほか、井戸枠内からは横棧 4 本が出土しており、横棧は本来、南北両側に 3 段、東西両側に 4 段であったと考えられる。

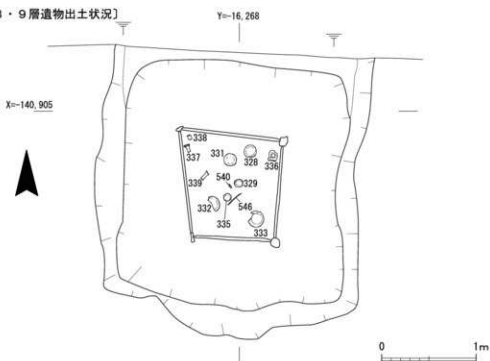
縦板は全て割材を用いる。縦板同士は重ねずに設置する。縦板には分厚い材と薄い材があり、

薄い縦板は縦板間の目地を塞ぐように当てていた。縦板は、南側では18枚2列、東側には10枚1列、北側には8枚1列、西側には14枚2列の合計50枚が使用されており、南側に最も多くの縦板が使用されていた。また、井戸枠内部の第13層で、隔柱と縦板の間から須恵器壺の体部片(第79図307)が出土した。井戸枠の固定材として使用されたと考えられる。井戸枠材は年輪年代測定を実施すると同時に、全点樹種同定を行った(付編3 第1・2節)。また、井戸枠の総合的な検討については付編3 第3節を参照されたい。

【第6・7層遺物出土状況】



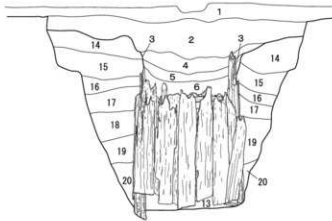
【第7・8・9層遺物出土状況】



第36図 井戸S E540平面図(1/40)

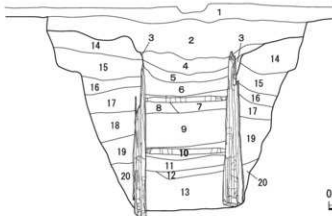
【立面図】

L=37.7m



【断面図】

L=37.7m



0 1m

- | | |
|--|---|
| <p>1. 褐灰色 (7.5YR 5/2) シルト混じり細～粗粒砂 中世耕作土(青灰色土層)</p> <p>2. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) 重円礫シルトブロック 40%・炭含む) 井戸埋土</p> <p>3. 褐灰色 (7.5YR 6/1) 細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト重円礫ブロック 20%含む) 井戸枠立ち腐れ</p> <p>4. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト (褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト重角礫ブロック 10%・褐灰色 (7.5YR 5/1) 細粒砂をブロック状に 20%含む) 井戸枠内埋土</p> <p>5. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト (灰色 (7.5Y 5/1) 細粒砂をブロック状に 20%含む) 井戸枠内埋土</p> <p>6. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト (灰色 (7.5Y 5/1) 細粒砂を塊状に 20%含む) 井戸枠内埋土</p> <p>7. 灰褐色 (7.5YR 4/2) シルト混じり細粒砂 (灰褐色 (7.5YR 5/2) シルト重円礫ブロック 20%・刀子・皿・壺・木屑・炭化物を含む) 井戸枠内埋土</p> <p>8. 灰褐色 (5YR 4/2) シルト (同色の細粒砂をブロック状に 10%・木屑・炭化物を多く含む) 井戸枠内埋土</p> <p>9. 褐灰色 (5YR 4/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (5YR 4/1) 細粒砂を塊状に 40%・井戸枠材出土・木屑・炭化物を多く含む) 井戸枠内埋土</p> <p>10. 灰色 (7.5Y 4/7) シルト混じり細粒砂 (灰色 (7.5Y 4/7) の細粒砂を塊状に 30%・木屑・炭化物を多く含む) 井戸枠内埋土</p> | <p>11. 灰色 (10Y 4/1) シルト (褐灰色 (10YR 4/1) シルト重円礫ブロック 30%・木屑・炭化物を多く含む) 井戸枠内埋土</p> <p>12. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト (暗オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) シルト重円礫ブロック 20%含む) 井戸枠内埋土</p> <p>13. 暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) シルト混じり細粒砂 (暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) シルト重円礫ブロック 30%含む) 井戸枠内埋土 最下層</p> <p>14. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂 (灰褐色 (7.5YR 4/2) シルト混じり細粒砂重円礫ブロック 30% (ベースブロック)・径 2～30mm の礫含む) 掘形</p> <p>15. 褐灰色 (10YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (10YR 6/1) シルト重角礫ブロック 30%含む・灰褐色 (7.5YR 4/2) シルト混じり細粒砂重円礫ブロック 10%) (ベースブロック) 径 2～50mm の礫含む掘形</p> <p>16. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (15層と同じベースブロックを含む) 掘形</p> <p>17. 灰色 (7.5Y 6/1) シルト混じり細粒砂 (灰色 (7.5Y 5/1) シルト重円礫ブロック 20%含む) 掘形</p> <p>18. 灰色 (7.5Y 5/1) 中粒砂混じりシルト (黒褐色 (7.5YR 2/2) 細粒砂混じり中粒砂重円礫ブロック 10%含む) 掘形</p> <p>19. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト混じり細粒砂 (黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト重円礫ブロック 20%含む) 掘形</p> <p>20. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト (灰色 (7.5Y 5/1) 中粒砂・黒褐色 (7.5YR 2/2) シルト重円礫ブロック 10%含む) 掘形</p> |
|--|---|

第37図 井戸S E540立面・断面図(1/40)

井戸枠内の埋土は10層に分かれ、全ての層に木、種子、炭化物などの有機物と、シルトのプロックを含む。また、第9層では木材片を多く含む木屑層を形成していた。これらの木屑は、割肌を呈する板材が大多数を占めるため、縦板をはじめとする井戸枠材に由来すると考えられる。井戸枠内の最下層は湧水層である砂礫層に達しているが、機能時の堆積層は確認できなかった。また、21~45cmの礫が3点出土したが、礫数などの浄化施設は認められなかった。井戸枠内の埋土や有機物に関しては、花粉・寄生虫卵・種子同定などの自然科学分析を実施した(付編1)。

遺物は井戸掘形からは土師器杯C、須恵器杯Aなどが出土した(第79図301~307)。井戸枠内の埋め戻し時の埋土から、土師器皿A・C、壺B、甕B、須恵器杯A・B、杯B蓋、高杯、皿E、甕C、製塩土器、平・丸瓦、刀子、横櫛、木蓋、獣骨などが出土した(第80図308~第820図351、第83図352~359、第89図437~441、第90図445~449、第91図452、第100図540~544、第101図546)。埋め戻し土出土の土器は層位を越えて接合した。土師器杯Aには暗文が施されており、出土土器は奈良時代中頃である。

第8・7層の下層及び第9層の上層では、土師器皿C、壺B、須恵器杯A、皿Eが口縁部を上に向けた正位置の状態出土した。また、同じ標高で横櫛と刀子も出土した。井戸を埋める過程で意図的に据え置いたと考えられる。そのほか、第10~13層で獣骨が出土した。獣骨は寛骨の部位であり、DNA鑑定の結果、牛の可能性が高いとの結果を得た(付編1)。

以上のことから、井戸は人為的に埋め戻されたと考えられる。井戸枠内の埋没過程は、まず、礫を放り込み、土砂とともに獣骨が埋没する。その後井戸枠の上部を破壊し、縦板や横櫛を落とし込み、土器や刀子・横櫛を置いた後に完全に埋没したと考えられる。

付表1 溝群主軸一覧

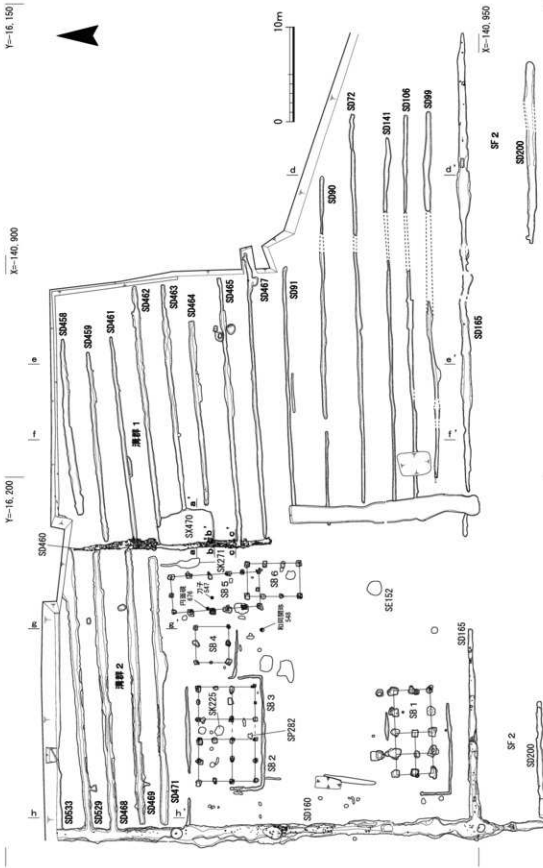
遺構番号	振角
SD 460	N 0° 22' W
溝群 1	
SD 458	W 6° 46' S
SD 459	W 5° 21' S
SD 461	W 6° 36' S
SD 462	W 5° 15' S
SD 463	W 5° 42' S
SD 464	W 4° 34' S
SD 465	W 4° 7' S
SD 467	W 3° 53' S
SD 91	W 1° 49' S
SD 90	W 1° 2' S
SD 72	W 1° 33' S
SD 141	W 1° 18' S
SD 106	W 1° 54' S
SD 99	W 0° 8' S
溝群 2	
SD 533	—
SD 529	W 4° 7' S
SD 468	W 3° 31' S
SD 469	W 3° 4' S
SD 471	W 3° 26' S

(4) 溝群

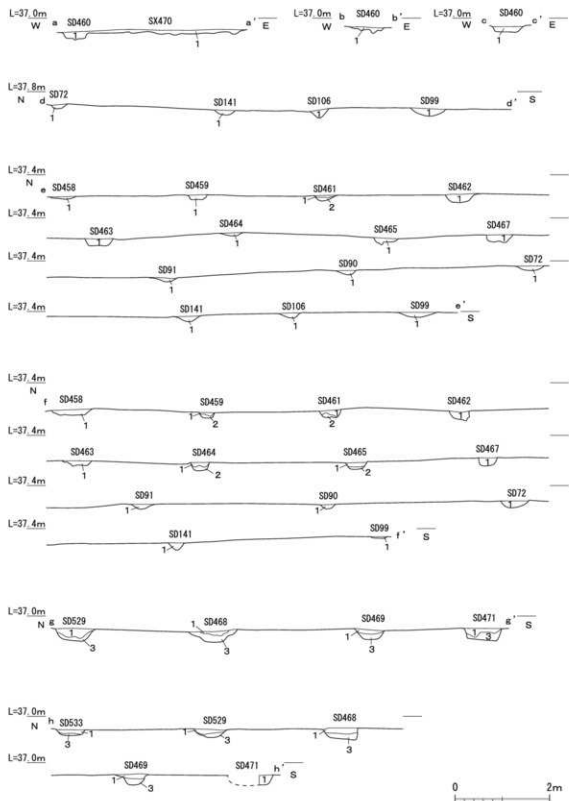
第4・5次調査区中央部北寄り東半部にかけて溝群を検出した。

溝群は、道路SF1の東測溝SD160を西限、道路SF2の北側溝SD165を南限とするが、北側の調査区外へと続くため、その広がり不明である。溝群は溝SD460を境に主軸を違え、東側の溝群(溝群1)と西側の溝群(溝群2)に分かれる。

溝SD460(第38図) 調査区中央部北寄りで検出した南北方向の溝である。検出長20.8m、幅0.01~0.3m、深さ0.06~0.16mを測る。落ち込みSX470や溝群1の溝SD461、溝群2のSD469と重複関係にあるが、埋土が同じであり、前後関係にはないと考えられる。建物の東側に位置し、東西方向の溝群1・2とは主軸が異なることから、SD460は区画溝と考えられる。溝底は起伏を呈することから、跡踏や踏み込み跡と考えられる。浅い溝であるが、溝底が深く掘り込まれているところでは、断面形は箱形を呈する。溝底は0.26mの比高を有する。埋土は遺構基盤層由来のシルトブロックと炭を多量に含むシルト混じり細粒砂である。流水の痕跡はみられ



第381号 溝群 1・2 平面図(1/400)



1. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細～中粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂を円礫ブロック 10%・鉄分・炭含む)
2. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂
3. 黄灰色 (2.5Y 6/1) シルト混じり細粒砂

第39図 溝 S D460・溝群 1・2 横断面図(1/80)

ない。埋土から土師器甕、須恵器杯B蓋、製塩土器が出土した(第86図385～387)。

溝群1 (第38図) 調査区東半部で検出した東西方向の溝群である。溝は合計14条検出した(溝SD458・459・461・462・463・464・465・467・91・90・72・141・106・99)。道路SF2の北側溝SD165を南限とし、溝SD460を西限とする。溝は全長20.5～40.9m、幅0.1～0.2m、深さ0.05～0.2mを測る。溝心間の距離は2.0～4.0mを測る。溝の主軸はW0°8'S～W6°46'Sを測る。

溝群1の南部の溝は、道路SF2北側溝SD165におおむね並行するが、北部に向かって主軸の振れ幅が徐々に大きくなる。南部から北部にかけて扇形に開くように配置されたと考えられる。

溝底には不規則な起伏がみられることから、鋤跡や踏み込み跡と考えられる。溝の断面形は皿形もしくは箱形を呈する。溝底は0.17～0.45mの比高で東から西へ向かって傾斜する。溝は丘陵から氾濫低地に向かって傾斜する地形に対応している。また、SD90・72・141・106・99では後世の攪乱により、溝が途中で途切れている。溝埋土は、1層もしくは2層に分かれる。同一の溝においても、溝底の標高が低い場所では、2層に分かれていることから、滞水した地点にシルトが堆積したと考えられる。

第1層は遺構基盤層由来のシルトブロックと炭を多量に含むシルト混じり細砂である。流水の痕跡はみられないが、筋状に細粒砂を含む。第2層は、シルト層であり、わずかにシルトブロックを含む。出土遺物は溝埋土から土師器高杯、甕、須恵器杯B、皿が出土した(第86図388～397)。出土遺物から奈良時代中頃の遺構と考えられる。

溝群2 (第38図) 調査区中央部で検出した東西方向の溝群である。溝は合計5条検出した(溝SD533・529・468・469・471)。道路SF1の東側溝SD160を西限、溝SD460を東限とし、北側は調査区外へ続く。南側は掘立柱建物SB2・3・4・5に隣接するが、重複はしない。全長28.5～29.5m、幅0.5～1.1m、深さ0.17～0.25mを測る。溝群1よりも溝幅が広く、溝底も深い。溝心間の距離は2.6～3.2mを測り、溝の主軸はW3°26'～W4°7'Sを測る。溝群1と同様に北部に向かって主軸の振れ幅が徐々に大きくなる。溝底には不規則な起伏がみられることから、鋤跡や踏み込み跡と考えられる。溝の断面形状は箱形を呈する。溝底は0.04～0.15mの比高で傾斜はない。埋土は遺構基盤層由来のシルトブロックと炭を多量に含むシルト混じり細砂である。流水の痕跡はみられないが、筋状に細粒砂を含む。

SD533・529・468は、SF1のSD160に接続する。溝底の形態から、溢れた水がSD160に流入する程度であったと考えられる。

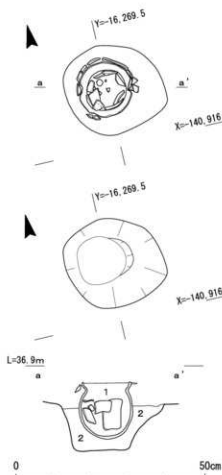
一方、SD469・471は、SF1のSD160には接続せず、区画溝SD460とも重複しないことから、東西に長い土坑状となる。このため、溝SD469・471は他の溝と異なる機能が推定される。出土遺物は溝埋土から土師器杯、皿、甕、須恵器杯A・B、杯B蓋、皿C、壺Aなどが出土した(第86図398～420)。出土遺物から、奈良時代中頃の遺構と考えられる。

溝SD460と重複する落ち込みSX470及び溝群1・2は同じ埋土で出土遺物も同時期であることから、これら一連の遺構は、おおむね同時期に廃絶したと考えられる。そのために埋土の重複関係において明確な前後関係を把握することができなかったと考えられる。しかし、溝SD460

完掘後に溝S D 461・465の底部を検出したこと、溝S D 463底部が落ち込みS X 470に削平されたと考えられることから、溝S D 460で土地の区画を行った後に溝群1・2を掘削し、その後、落ち込みS X 470が形成されたと考えられる。溝群1・2に関しては花粉・寄生虫卵・珪藻・植物珪酸体・粒度分析を実施した(付編1・2)。

(5) 埋納遺構

埋納遺構S X 475(第40図) 第4・5次調査区西半部で検出した、土師器の甕を埋めた遺構である。掘形はいびつな隅丸方形を呈し、長軸0.26m、短軸0.23m、深さ0.12mを測る。甕は口縁部を上に向けた正位置の状態出土した。甕口縁部の周囲からは土師器皿の口縁部が出土した。甕内部の埋土は、取り上げ後に室内で洗浄を行ったが、甕内部から皿の破片が落ち込んだ状態で出土したのみで、内容物は確認されなかった。甕内部の土砂は、流入土と考えられる。皿の破片は、ほぼ完形品に復元できた。このような出土状況から、甕の口縁部に皿を被せて蓋にした状態で埋められていたと考えられる。土師器皿Aの年代から、奈良時代中頃の遺構と考えられる。



1. 灰褐色(7.5YR 4/2) シルト混じり細粒砂
(灰褐色(7.5YR 6/2) シルト混じり細粒砂
10%・鉄分・炭化物含む) 流入土
2. 褐灰色(7.5YR 5/2) シルト混じり細粒砂
(径4mm程の中礫・土師器皿・甕片を含む・
鉄分・炭含む) 掘形

第40図 埋納遺構S X 475実測図(1/10)

(6) 柱穴

柱穴S P 282(第41図) 第4・5次調査区中央部北側で検出した柱穴である。掘形はいびつな隅丸方形を呈し、長軸0.41m、短軸0.37m、深さ0.1mを測る。埋土は1層で浅い。埋土からほぼ完形品の須恵器杯B蓋が内面を上に向けた状態で出土した(第85図362)。

柱穴S P 507(第47図) 第4・5次調査区中央部西側で検出した掘形が隅丸方形の柱穴で、東側を素掘り溝により削平され、南側は掘立柱建物S B 12の柱穴S P 501に切られる。長軸0.47m、短軸0.4m、深さ0.27mを測る。埋土から須恵器壺底部が出土した(第85図363)。

柱穴S P 617(第41図) 第6次調査区中央部で検出した柱穴である。掘形は隅丸方形を呈し、長軸0.63m、短軸0.6m、深さ0.47mを測る。柱痕跡が残っており直径0.29mを測る。周辺には柱筋を描える柱穴は確認できなかった。掘形埋土から須恵器皿Aが出土した(第85図364)。

(7) 土坑

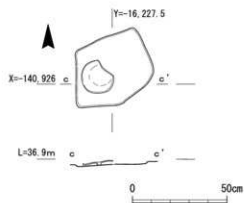
土坑S K 225(第41図) 第4・5次調査区中央部、掘立柱建物2・3の中央に位置する土坑である。平

面形は不整形な隅丸方形を呈し、長軸0.99m、短軸0.91m、深さ0.08～0.17mを測る。底には起伏がみられる浅い土坑である。埋土は1層で、炭が混じる。埋土から土師器杯Aが土圧で押しつぶされた状態で出土した(第85図365)。全ての破片が接合したが、口縁部を全て欠損する。建物の中央部に位置することや、土師器1点がほぼ完形で出土したことから、埋納遺構の可能性も考えられる。

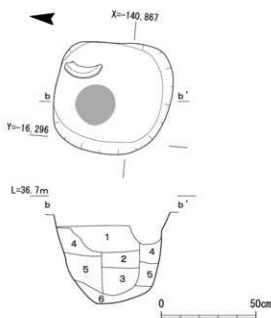
土坑 S K 271 (第38図) 第4・5次調査区中央部で検出した土坑である。平面形は縦長の楕円形を呈し、断面形は皿形を呈する。長辺2.4m、短辺1.0m、深さ0.1mを測る。埋土は溝 S D 460 や溝群と類似しており、シルトブロックや炭が混じる。埋土から土師器甕、須恵器杯、皿 C が出土した(第85図366～368)。

土坑 S K 550 (第42図) 第6次調査区中央部で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形を呈

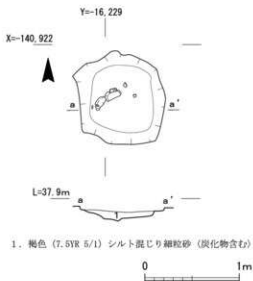
S P 282



S P 617



S K 225

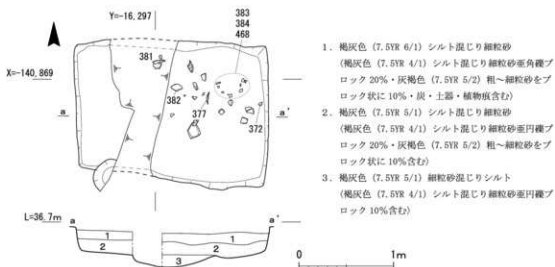


1. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂
(径 30mm までの礫・褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂重円礫ブロック 20%・灰褐色 (7.5YR 6/2) 中～細粒砂をブロック状に 10%含む)
2. 褐灰色 (7.5YR 8/1) シルト混じり細粒砂
(褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト重円礫ブロック 30%含む)
3. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂
(褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂・褐灰色 (7.5YR 5/1) シルトを藕状に 30%含む)
4. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂
(褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト重円礫ブロック 20%含む)
5. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂
(褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト重円礫シルトブロック 30%含む)
6. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂
(褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト重円礫ブロック 10%含む)

第41図 柱穴 S P 282・617・土坑 S K 225実測図(1/20・1/40)

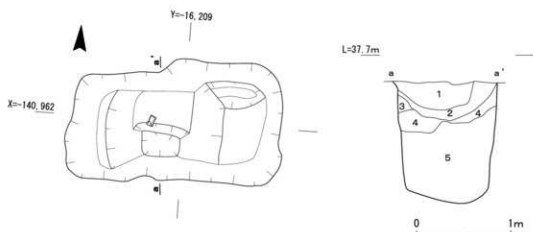
し、長辺2.05m、短辺1.58m、深さ0.24～0.44mを測る。断面形は方形を呈する。埋土にはシルトブロックや炭が混じる。埋土から土師器杯A、須恵器杯A・杯B蓋・皿B・壺A、製塩土器、瓦などが出土した(第85図373～384)。

土坑S K360(第45図) 第4・5次調査区中央部南寄りで検出した。長辺2.30m、短辺1.28m、深さ0.78～1.34mを測る東西に長い隅丸長方形の土坑である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底には段差が認められ、土坑の中央部分が最も深くなる。最下層は湧水層である砂層に達しているが、最



1. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト混じり細粒砂
(褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂亜円礫ブロック20%・灰褐色 (7.5YR 5/2) 粗～細粒砂をブロック状に10%・炭・土器・植物炭含む)
2. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂
(褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂亜円礫ブロック20%・灰褐色 (7.5YR 5/2) 粗～細粒砂をブロック状に10%含む)
3. 褐灰色 (7.5YR 5/1) 細粒砂混じりシルト
(褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂亜円礫ブロック10%含む)

第42図 土坑S K550実測図(1/40)



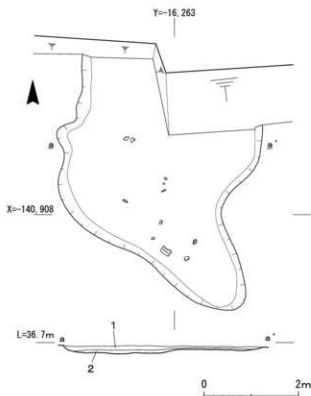
1. 明褐色 (7.5YR 7/1) シルト混じり粗～細粒砂
(径2～100mmの褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜円礫ブロック10%・径2～200mmの褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト亜円礫ブロック20%・径2～50mmの灰褐色 (7.5YR 5/2) 細粒砂混じりシルト亜角礫ブロック10%・炭・植物炭含む)
2. 灰褐色 (7.5YR 5/2) 細粒砂混じりシルト
(明褐色 (7.5YR 7/1) シルト亜円礫ブロック10%・径2～100mm・にぶい橙色 (7.5YR 7/1) 粗～細粒砂5%・植物炭含む)
3. 明褐色 (7.5YR 7/1) シルト
4. 明褐色 (7.5YR 7/1) シルト
(灰褐色 (7.5YR 5/2) 粗～細粒砂混じりシルト亜角礫ブロック5%・径2～200mmのにぶい橙色 (7.5YR 7/4) 粗～細粒砂亜円礫ブロック10%・径2～100mmの褐灰色 (7.5YR 3/1) シルト亜角礫ブロック5%含む)
5. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト (径2～200mmの灰褐色 (7.5YR 5/2) シルト亜角礫ブロック30%含む)

第43図 土坑S K360実測図(1/40)

下層における滞水状況は確認できなかった。埋土は5層に分かれる。最下層の第5層が井戸SE152の第5層と類似している。このような状況から、井戸の可能性も考えられる。埋土から土師器皿C・甕、須恵器杯・鉢Dが出土した(第85図369～372)。出土遺物から奈良時代の遺構と考えられる。

(8)不明遺構

落ち込みS X94(第44図) 第4・5次調査区北西部で検出した。平面形は不定形な形状で、検出長5.32m、幅4.32m、深さ0.08～0.2mを測る。埋土はシルトブロックで充填され、炭や礫が混じる。遺物の残りもよいことから、浅い落ち込みを人為的に埋めたと考えられる。土師器皿A、須恵器杯A、杯B、杯C、甕片、平瓦、埴などが出土した(第87図421～431・第88図434・第92図471)。奈良時代中頃の遺構と考えられる。



1. 褐色色 (5YR 5/1) シルト (灰色 (7.5Y 6/1) シルトブロック 75%、径 10～30mmの礫・鉄分多く含む)
2. 灰色 (7.5Y 6/1) 細粒砂混じりシルト

第44図 落ち込みS X94実測図(1/80)

落ち込みS X470(第38図) 第4・5次調査区中央部北寄りで検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺297m、短辺200m、深さ0.07～0.14mを測る。底は踏み込みと考えられる起伏がみられる。溝S D460及び溝群1の溝S D462・463と重複するが、前後関係を確認することはできなかった。埋土は溝S D460及び溝群と同様であり、シルトブロックや炭が混じることから、周辺の遺構と同時代に埋没したと考えられる。遺物は細片だが、須恵器杯、平瓦、製塩土器が出土した。

4)平安時代(第45図)

平安時代の遺構は、第4・5次調査区の西半部及び第6次調査区に位置し、横列1条、掘立柱建物5棟、埋納遺構3基・溝5条などを検出した。

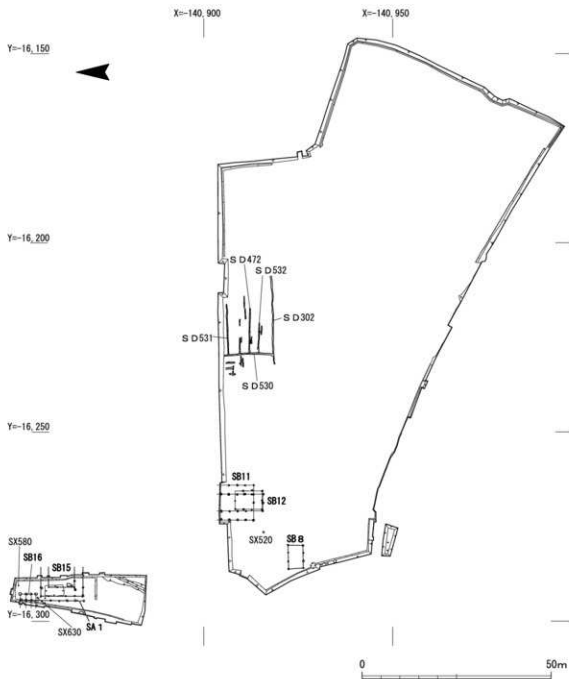
(1)横列

横列S A1(第46図) 第6次調査区の北西部で検出した。南北方向の6間の横列で、全長13.36mを測る。柱間寸法は2.06～2.36mを測る。柱穴S P605のみ柱列からわずかにずれる。横列の主軸はN1°8'Eを測る。柱穴掘形は楕円形、もしくは不整形な隅丸方形を呈し、一辺0.34～0.43m、深さ0.10～0.36mを測る。柱穴S P607・608の柱は抜き取られたと考えられる。柱穴S P605・606・609・632では柱痕跡が残っており、柱の直径は0.18～0.26mを測る。柱穴S P608の底で礫を

検出した。根石として、柱の根固めを行ったと考えられる。掘立柱建物S B15と柱筋を揃え、間隔は1.30mを測る。横列南端で建物の隅を揃える。柱穴S P605から黑色土器、柱穴S P606の柱痕跡から土師器皿、柱穴S P605の柱痕跡から須恵器杯B蓋が出土した(第102図549～551)。

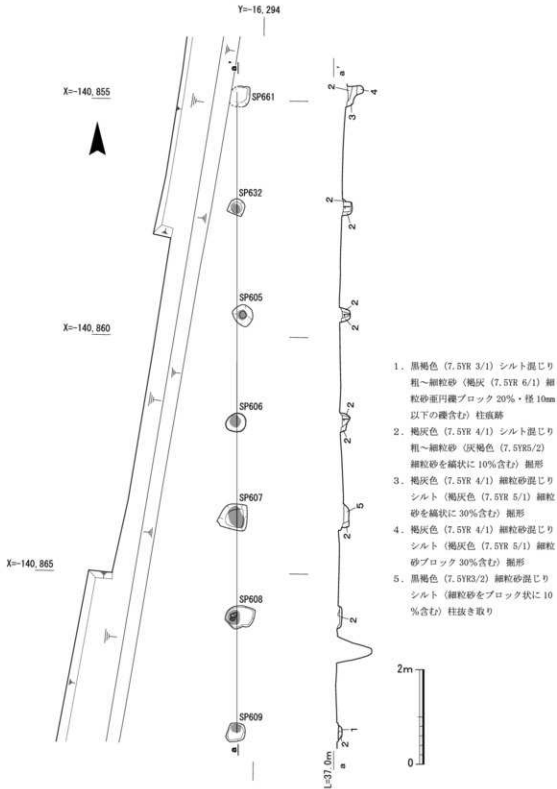
(2) 掘立柱建物

掘立柱建物S B12(第47図) 第4・5次調査区西側で検出した南北棟の掘立柱建物である。後述する掘立柱建物S B11と重複する。建物を構成する全ての柱穴は中世の素掘り溝による削平を受け、北東隅の柱穴は後世の掘乱により失われているが、柱間は桁行3間(7.16m)、梁行2間(4.94m)である。柱間寸法は桁行2.14～2.76m、梁行2.20～2.46mを測る。建物の主軸はN0°40'



第45図 平安時代遺構配置図(1/1,000)

Eを測る。柱穴は楕円形に近い隅丸方形を呈する。一辺0.3～0.46m、深さ0.16～0.2mを測る。柱痕跡が残っており、柱穴S P 498、505の断面では柱の直径は0.12～0.22mを測る。出土遺物は、柱穴S P 501から須恵器鉢A、柱穴S P 498から須恵器杯B蓋が出土した(第102図552・553)。出土遺物が数少なく小片のため、時期を決定することは難しいが、建物主軸方位や掘立柱建物S B

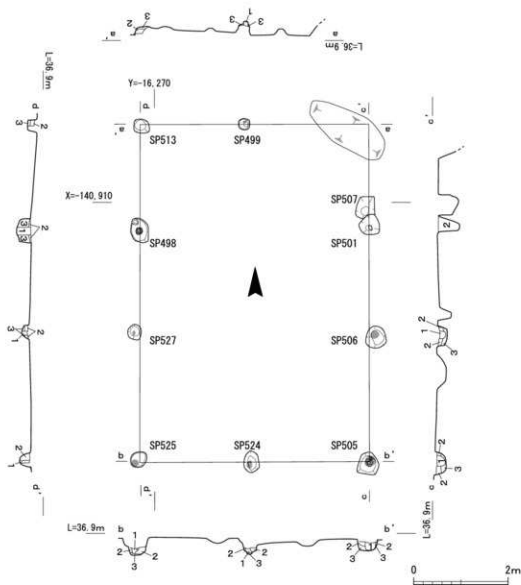


第46図 横列S A 1実測図(1/80)

11との重複関係から奈良時代末から平安時代前期の遺構と考えられる。

掘立柱建物 S B 11 (第48・49図) 第4・5次調査区西半部で検出した。建物を構成する柱穴はいずれも中世の素掘り溝による削平を受け、身舎南西隅の柱穴は後世の攪乱により失われている。

南側と東西両側に廂を有する。身舎と廂の北側は調査区外に延びるため、調査区を拡張したが、身舎の桁行方向と東面の廂の延長部分の柱穴を検出したのみであり、建物規模は確定できなかった。そのため、桁行6間(11.68m)以上、梁行4間(9.08m)以上の三面廂もしくは四面廂の南北棟の掘立柱建物と考えられる。柱間寸法は桁行2.08~2.6m、梁行2.2~2.4m、廂の出は2.16~2.56mを測る。建物主軸はN 1°13' Eを測る。柱穴は楕円形に近い隅丸方形を呈し、一辺0.36~0.72m、深さ0.24~0.38mを測る。柱穴 S P 483・486・488・492では柱根が残っており、直径0.08~0.13m



1. 灰褐色 (7.5YR 5/2) シルト混じり細粒砂 (灰褐色 (7.5YR 4/2) シルト面円礫ブロック10%含む) 柱痕跡
2. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト面円礫ブロック10%・炭分含む) 掘形
3. 灰褐色 (7.5YR 5/2) シルト混じり細粒砂 (灰褐色 (7.5YR 4/2) シルト面円礫ブロック10%含む) 掘形

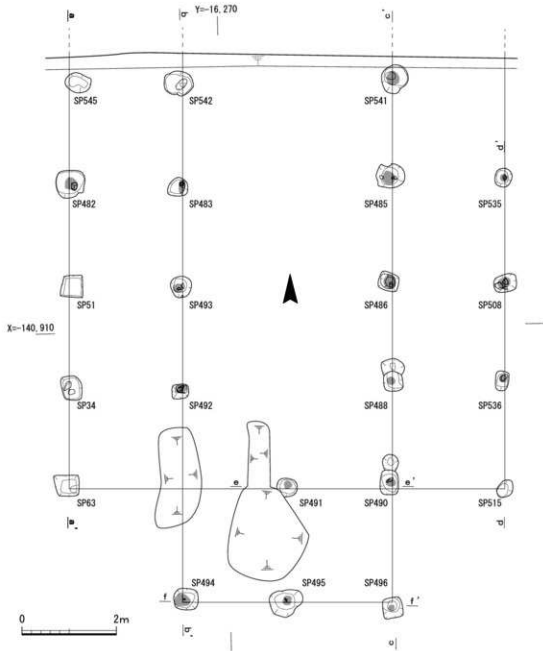
第47図 掘立柱建物 S B 12実測図(1/80)

を測る(第104図587～590)。柱根の樹種はいずれもヒノキであった(付編3 第1節)。

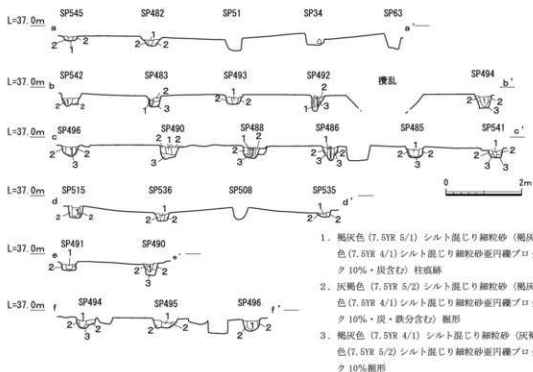
柱穴490から須恵器杯B、柱穴S P 482から須恵器杯B蓋、柱穴S P 485掘形から黒色土器碗、柱穴S P 492の柱根の下から土師器皿、柱穴S P 541柱痕跡から土師器皿、黒色土器碗、柱穴S P 545から黒色土器碗が出土した(第102図554～568)。

S B 12と重複しているが、柱穴同士の切り合い関係はなく、出土遺物からS B 11が新しく、S B 12を建て替えたと考えられる。平安時代前期の遺構と考えられる。また、S B 12周辺からは緑釉陶器や灰釉陶器、延喜通寶(第105図591)などが出土した。

掘立柱建物S B 8(第50図) 第4・5次調査区西半部で検出した。桁行3間(6.28m)、梁行1間(3.96m)の東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.94～2.26mを測る。建物の主軸はN 1°



第48図 掘立柱建物S B 11平面図(1/80)

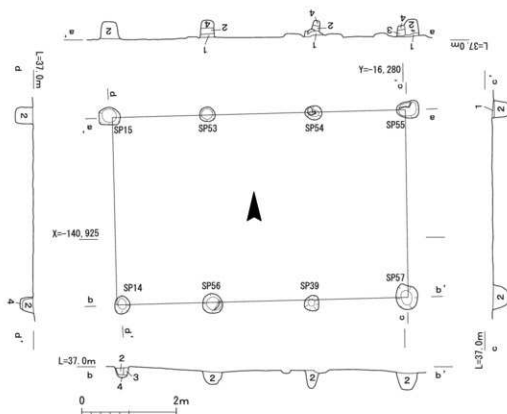


第49図 掘立柱建物 S B 11断面図(L/100)

25° Eを測る。柱は抜き取られており、柱穴の平面形は隅丸方形もしくは楕円形を呈する。一辺0.28~0.44m、深さ0.24~0.39mを測る。柱痕跡は確認できなかった。出土遺物は、柱穴 S P 14の抜き取り穴から黒色土器、柱穴 S P 54の抜き取り穴から土師器皿と黒色土器、柱穴 S P 55の抜き取り穴から土師器甕、灰釉陶器、瓦が出土した(第102図569~572)。

掘立柱建物 S B 15(第51図) 第6次調査区中央部で検出した。建物を構成する柱穴はいずれも中世の素掘り溝に削平される。南北両側と西側に廂を持つが、身舎と廂の東側部分は調査区外に延びるため、桁行3間(5.36m)以上、梁行5間(11.24m)の三面廂もしくは四面廂の掘立柱建物と考えられる。柱間寸法は桁行2.22~2.28m、梁行2.1~2.38m、廂の出は2.10~2.30mを測る。建物主軸はN1°29'Eを測る。柱穴は楕円形もしくは隅丸方形を呈し、一辺0.30~0.42m、深さ0.12~0.4mを測る。柱穴の平面及び断面観察から柱痕跡が確認でき、柱の直径は0.18~0.22mを測る。出土遺物は、柱穴 S P 591から土師器、柱穴 S P 594から黒色土器、緑釉陶器、柱穴 S P 601から灰釉陶器、瓦が出土した(第102図573~577・第103図586)。

掘立柱建物 S B 16(第52図) 第6次調査区北半部で検出した。建物内部に柱穴を持つ総柱の掘立柱建物と考えられる。建物の西側は調査区外に延びる。桁行2間(2.92m)以上、梁行3間(4.12m)の掘立柱建物と考えられる。柱間寸法は桁行1.28~1.52m、梁行1.60~1.84mを測る。建物主軸はN1°6'Eを測る。柱穴は楕円形と隅丸方形を呈し、一辺0.4~0.72m深さ0.28~0.52mを測る。柱穴の平面及び断面から柱痕跡が確認でき、柱の直径は0.24mを測る。横列 S A 1と重複しているが、柱穴 S P 583、柱穴 S P 609が上層から形成されていることから、S A 1より後出する建物と考えられる。柱穴 S P 584から黒色土器が出土した(第102図578)。



1. 褐灰色 (10YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜角礫ブロック 10%・炭含む) 柱抜き取り
2. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト亜角礫ブロック 30%・炭含む) 柱抜き取り
3. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト亜角礫ブロック 40%含む) 掘形
4. 褐灰色 (7.5YR 6/1) シルト 掘形

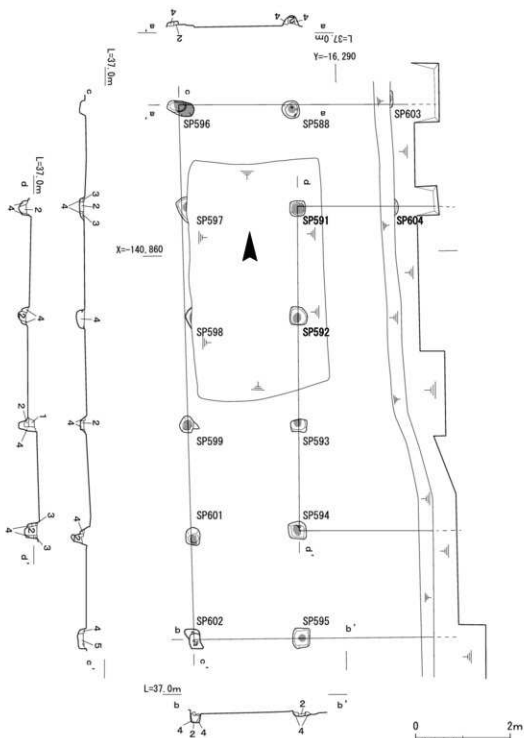
第50図 掘立柱建物SB8実測図(1/80)

以上のように、調査地西半で検出した掘立柱建物SB8・11・15・16は、平安時代前期から中期における同時期の建物群で、建て替えが行われたと考えられる。また、SA1で区画を行い、建物主軸も近似していることから、北に方位を揃えた計画的な建物配置が行われていたと考えられる。

(3) 埋納遺構

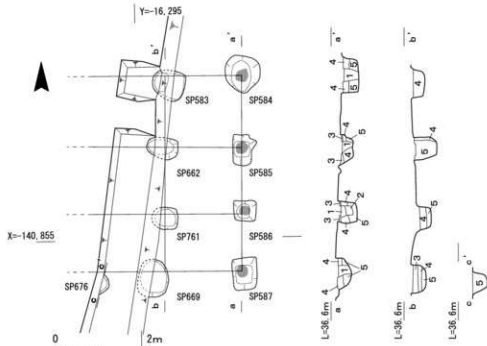
埋納遺構 S X 520 (第53図左) 第4・5次調査区西半部で検出した須恵器壺を埋納した土坑である。素掘り溝SD10による削平を受けており、東側は失われているが、円形もしくは楕円形の掘形と推定される。最大残存長0.13m、深さ0.6mを測る。壺は口縁部が失われた胴部のみを検出したが、口縁部を上向きにした正位置の状態出土した。削平を受けていない掘形西側の埋土には炭が集中し、壺胴部にも炭が付着していた。素掘り溝SD10埋土から壺口縁部が出土し、接合した。壺の内容物については、X線ラジオグラフィによる調査と壺内部の埋土の洗浄を行ったが、内容物は確認できなかった。平安時代前期の遺構と考えられる。

埋納遺構 S X 580 (第54図) 第6次調査区北東部で検出した須恵器壺を埋納した土坑である。南側は素掘り溝により削平を受ける。掘形は隅丸方形で、長辺0.33m、短辺0.31m、深さ0.19mを測る。壺は口縁部を上向きにし、南に傾いた状態で出土した。壺内部の埋土の洗浄を行ったが、内容物は確認されず、口縁部の破片が出土したのみであった。壺内部の埋土は、流入土と考えら



1. 黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト混じり粗～細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルトブロック 30%含む) 柱痕跡
2. 灰褐色 (7.5YR 4/2) シルト混じり粗～細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト面円礫ブロック 30%含む) 柱痕跡
3. 褐灰色 (7.5YR 4/2) シルト混じり粗～細粒砂 (径 50mm 以下の礫・土器・炭含む) 窠形
4. 暗褐色 (7.5YR 3/3) シルト混じり粗～細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト面円礫ブロック 20%含む) 窠形
5. 黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト混じり粗～細粒砂 (褐灰色 (7.5YR 5/1) シルトを塊状に 40%含む) 柱抜き取り

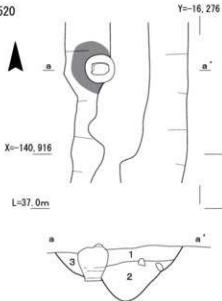
第51図 掘立柱建物 S B15実測図(1/80)



1. 黒褐色 (7.5YR 3/3) シルト混じり細～粗粒砂
(灰褐色 (7.5YR 5/2) 細粒砂を織状に30%・
径3mmまでの礫含む) 柱痕跡
2. 黒褐色 (7.5YR 3/3) シルト混じり細～粗粒砂
(褐灰色 (7.5YR 5/1) 細粒砂面円礫ブロック
30%含む) 柱痕跡
3. 灰褐色 (7.5YR 5/2) シルト混じり細～粗粒砂
(灰褐色 (7.5YR 4/2) シルト面円礫ブロック含む) 断面
4. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細～粗粒砂
(にぶい褐色 (7.5YR 6/3) 細粒砂を織状に・径40mm
までの礫・土器含む) 断面
5. 灰褐色 (7.5YR 4/2) シルト混じり細～粗粒砂 断面

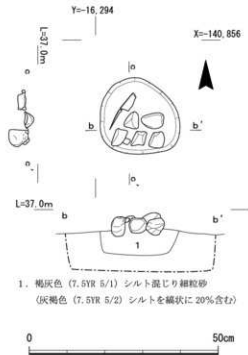
第52図 掘立柱建物S B 16実測図(1/80)

S X 520



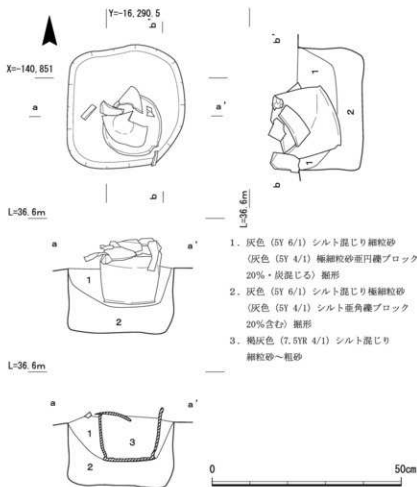
1. 褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト混じり細粒砂
(面円礫ブロック30%・炭含む)
2. にぶい橙色 (7.5YR 7/3) シルト混じり細粒砂
(褐灰色 (7.5YR 4/1) シルト面円礫ブロック10%含む)
3. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂 (礫・炭含む)

S X 630



1. 褐灰色 (7.5YR 5/1) シルト混じり細粒砂
(灰褐色 (7.5YR 5/2) シルトを織状に20%含む)

第53図 埋納遺構S X 520・630実測図(1/10)



第54図 埋納遺構 S X 580実測図(1/10)

素掘りの溝である。南北方向の溝 S D530と東西方向の溝 S D531・472・532・302を検出した。検出長7.5～1.3m、幅1.0～3.5m、深さ0.05～0.2mを測る。いずれも幅が狭く、深さは浅い。断面形は皿形を呈する。溝の底面と壁面は起伏があり、踏み込みや鋤跡と考えられる。埋土にはシルトブロックと炭が混じる。耕作に関連する溝の可能性がある。

溝 S D531・472・532・302と溝 S D530は重複関係が見られないことから、同時期に存在していたと考えられる。また、奈良時代の溝群2の溝 S D533・529・468・469・471と重複関係にあり、奈良時代の溝を削平している。出土遺物はいずれも細片であるが、溝 S D530・532から須恵器鉢 A、溝 S D531から土師器皿が出土した(第102図582・585)。平安時代の遺構と考えられる。

5) 平安時代後期以降(第55図)

平安時代後期以降の遺構は、土坑1基のほか、溝と素掘り溝群を検出した。

(1) 土坑

土坑 S K 466(第56図) 第4・5次調査区北東部に検出した土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、長辺1.48m、短辺1.43m、深さ0.32mを測る。底は平坦で、断面形は方形を呈する。埋土

れる。平安時代前期の遺構と考えられる。

埋納遺構 S X 630(第53図右) 第6次調査区北西部で検出した礫を埋納した土坑である。南側は素掘り溝により削平を受ける。掘形は楕円形で、長径0.41m、短径0.4m、深さ0.17mを測る。径3～6cmの礫が5点、東西方向に千鳥状に出土した。礫の北西側から土師器皿の破片が出土した。平安時代の遺構と考えられる。

(4) 溝

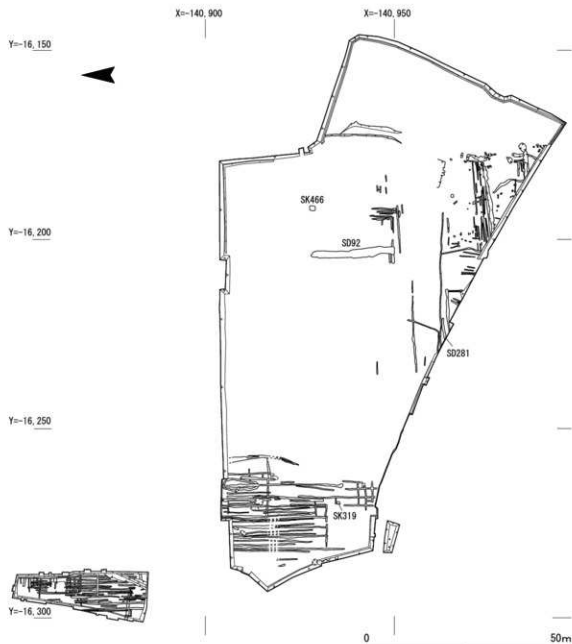
溝 S D 530・531・472・532・302(第45図)

第4・5次調査区中央部北寄りで検出した

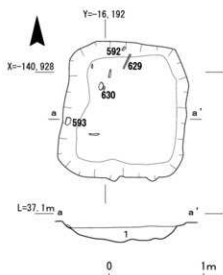
にはシルトブロックが混入している。埋土から土師器鍋、青磁碗、漆碗、不明木製品が出土した
が、いずれも破片である(第106図592・593・第108図629・630)。14世紀代の遺構と考えられる。

(2)溝

溝SD92(第55図) 第4・5次調査区中央部で検出した南北方向の素掘りの溝である。検出
長2.21m、幅0.11～0.25m、深さ0.4～0.21mを測る。溝の深さは浅く、壁面は直線形に立ち上がる
ため、断面形は方形を呈する。溝の底面と壁面には、踏み込みや鋤跡もしくは植物の根跡と考え
られる痕跡がみられる。埋土は遺構検出面由来のシルトブロックが混入している。埋土から土師
器と瓦器の破片が出土した(第106図594～596)。素掘り溝よりも幅の広い溝であるため、区画溝
の可能性も考えられる。12世紀代の遺構と考えられる。



第55図 平安時代後期以降遺構配置図(1/1,000)



1. 灰色(10Y 4/1)シルト混じり細粒砂
(径60mm程度の灰オリーブ色(SY 5/2)
細～中粒砂ブロック70%混じる)

第56図 土坑S K 466実測図(1/40)

溝SD281(第55図) 第4・5次調査区中央部南側で検出した直線状の素掘りの溝である。検出長5.7m、幅0.4～0.6m、深さ0.05～0.2mを測る。東西方向の溝で、溝の深さは浅く、断面形は皿形を呈する。埋土から土師器と瓦器が出土した(第106図597)。

素掘り溝群(第55図) 第4・5次ならびに第6次調査区の各所より検出した。これらの溝は調査区の西半部、南半部及び第6次調査区において特に密集して検出した。最大検出長27.6m、幅0.1～0.7m、深さ0.05～0.2mを測る。いずれの溝も幅が狭く、深さは浅く、断面形は皿形を呈する。溝の底面と壁面には、踏み込みや鋤跡と考えられる痕跡がみられる。素掘り溝は東西または南北方向に直線状に掘削される溝と、円弧状に掘削される溝が確認できた。重複関係から、東西方向の溝が先に、南北方向の溝が後に掘削されている。

耕作に伴う溝と考えられる。素掘り溝の埋土より、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・東播系須恵器・瓦などが出土した(第107図598～525)。奈良及び平安時代の遺構を削平しているため、古い遺物が多数混入している。出土遺物から平安時代後期頃には耕作地化が進行していたと考えられる。

(福山博章)

6. 出土遺物

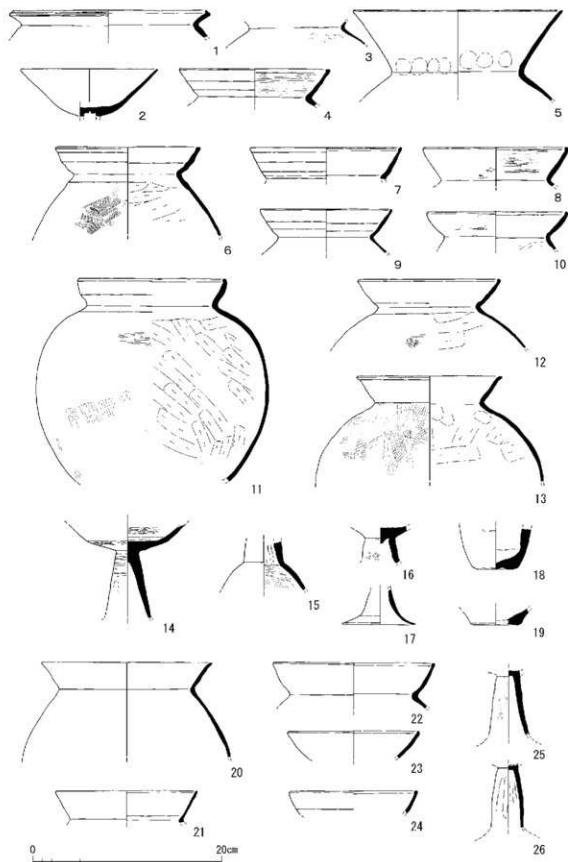
1) 弥生時代～古墳時代

(1) 土器

溝SD195(第57図1) 1は、口縁部が上下に肥厚して拡張し、端部を跳ね上げる瀬戸内系の甕である。口縁端面に一条の凹線文を施す。畿内第IV様式後半に併行する弥生時代中期後半の土器である。

掘立柱建物SB10(第57図2・3) 2は、杯底部外面に刺突痕をもつ山陰系の脚部接合技法をもつ高杯である。3は、口縁端部を欠くが、内面は頸部屈曲部をやや下がる位置からハラケズリを施す布留形甕とみられる。甕は小片にとどまるが、2の高杯は杯底径が口径に比して小さいことから、山城佐山Ⅲ式前半に併行する古墳時代前期前葉と推定する。^(註3)

土坑SK27(第57図4・5) 5は直線的に拡張する口縁をなす短頸直口甕で、頸部接合部に顕著な指頭圧痕を残す。4は、頸部径に比して、口縁部が長く拡張し、口縁端部の内傾がわずかにとどまる甕で、布留形甕としては古式の特徴を有する。調整は、口縁部の内外面に横方向の丁寧なナデを施す。時期は、佐山Ⅲ式前半の古墳時代前期前葉と推定される。



第57図 溝S D195・掘立柱建物S B10・土坑S K40・48出土遺物実測図(1/4)

土坑S K40(第57図6~18) 6~13の甕のうち、6~12は布留形甕であり、13は「く」字口縁甕である。布留形甕は、口縁部が長く拡張するもの(7~10・12)と、やや短くおさめるもの(11)、強く内湾して立ち上がるもの(6)がある。口縁部径は、15cm前後を測る。11・12は、肩部に横方向のハケを施す。13は、体部外面に斜め縦方向のハケを施し、口縁端部を外方にわずかに引き出す特徴をもつ。14~17は高杯である。14は、杯部に稜をなし、脚部の一部を欠損するが、屈曲して大きく開く形式とみられる。脚部が屈曲してやや内湾気味に開く裾部をなす15や、裾部が緩やかに開く17などがある。18は、器壁が厚く粗製で、粘土積み痕があり、手捏ね土器とみられる。19は、平底の壺の底部である。

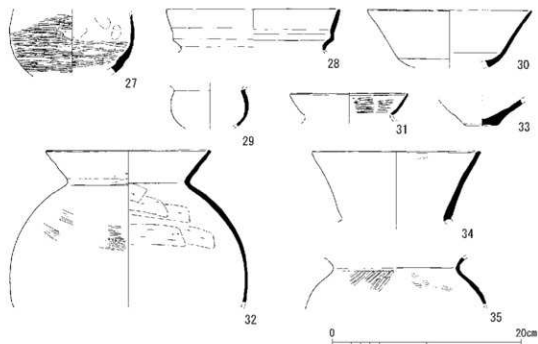
土坑S K48(第57図20~26) 20・21は、「く」字口縁甕で、22~24は布留形甕である。25・26の高杯は、前者は脚柱部が直線的にのびるが、後者はややエンタシス状に張り出すもので、裾部が屈曲して開く、いわゆる畿内系高杯の一部とみられる。

土坑S K198(第58図27) 27は、口縁部と底部を欠損するが、体部内外面に横方向のヘラミガキを施すもので、鉢の一部とみられる。

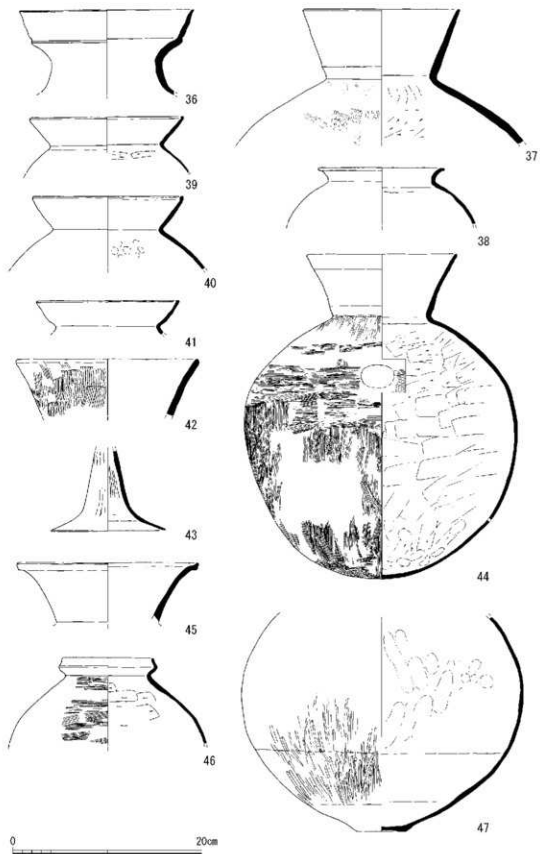
土坑S K390(第58図28・29) 28は、複合口縁をなす山陰系甕である。口縁屈曲部の内外面に強い横方向のナデを施す。胎土に赤色斑粒を含む、在地産の甕とみられる。29は、小形丸底壺の一部とみられる。

土坑S K400(第58図30・31) 30の高杯は、杯部に明瞭な屈曲をもたず、深い杯部をなすもので、山陰系高杯と推定する。やや内湾し、端部をつまみあげる口縁部をなす。31の小型甕は、いわゆる布留傾向甕とみられる。

土坑S K500(第58図32) 32は、口縁部がやや直線的に延びる布留形甕である。端部がわずか



第58図 土坑S K198・390・400・500、不明遺構S X385・427・434出土遺物実測図(1/4)



第59図 自然流路NR560(S X 570・675・758)出土遺物実測図(1/4)

に肥厚するタイプであり、布留形甕のなかでも古相を示すものである。肩部外面に横方向のハケ、体部内面にヘラケズリを施す。

落ち込みS X 385(第58図33) 33は、小さな平底をなす壺の底部である。

落ちこみS X 427(第58図34) 34は、直口壺の口縁部である。口縁端部がわずかに肥厚する布留系の壺である。

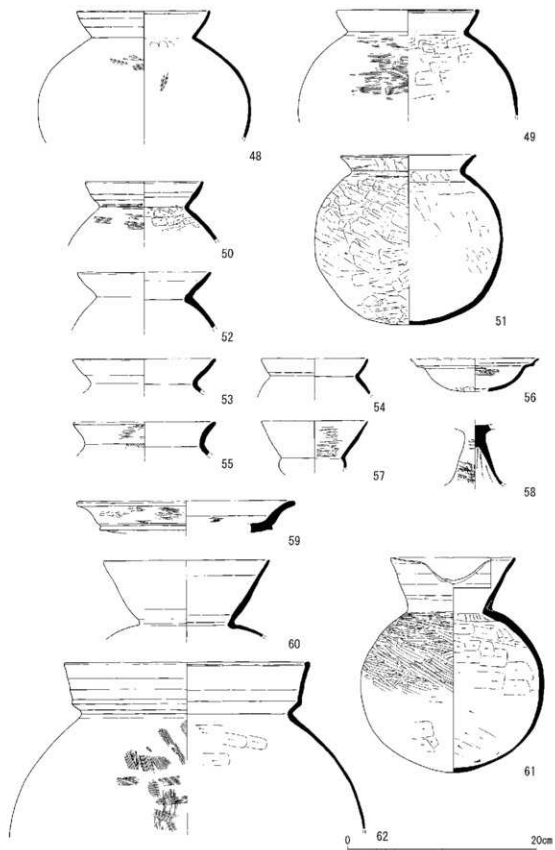
落ち込みS X 434(第58図35) 35は、右上がりのタタキ整形痕を残す弥生系甕である。内面は摩耗が著しいが、ハケのちなデ調整を施す壺とみられる。

自然流路NR560では、土器溜まりを6か所で検出しており、これらを土器溜まりS X 570、S X 675、S X 758、S X 764、S X 765、S X 766とし、一括性の高い土器群として、流路内取り上げの遺物と分けて報告する。

土器溜まりS X 570(第59図36～41) 36は、口縁部が斜め上方に拡張するタイプの山陰系の複合口縁壺である。口縁部の立ち上がりが短く、端部を丸くおさめるもので、布留式の基本組成を構成する壺である。37の短頸直口壺は、直線的に延びる口縁をなし、体部外面に一部ハケ調整、内面にヘラケズリを施す。口縁端部は丸くおさめるもので、布留系の直口壺と異なるタイプである。38は、口縁部が短く外反する短頸壺で、肩部が大きく張る特徴をなす。39～41は、布留形甕である。39は、直線的に延びる口縁をなし、40は、口縁部が頸部径に対して長く拡張するもので、布留形甕のなかでも古式の形態である。これらの帰属時期は、山陰系複合口縁壺の口頸部形態や、布留形甕の特徴から、山城佐山Ⅲ式後半の古墳時代前期中葉前半の資料とみられる。

土器溜まりS X 675(第59図42・43) 42は直口壺の口縁部で、43は裾部が緩やかに大きく開く高杯の脚部で、山陰系高杯と推定される。

土器溜まりS X 758(第59図44～第60図58) 44は、短頸直口壺である。直線的に延びる口縁部は、端部を丸くおさめ、体部最大径を中位にもつ。体部外面は、縦方向のハケを全体に施した後、肩部に横方向のハケを施し、内面はヘラケズリを施す。体部外面の上半に、幅3.5cm、高さ2.5cmの穿孔が認められる。焼成後の穿孔で、細かく内面から打ち欠いたものとみられる。45は、広口壺の口縁部である。口縁部は大きく開き、口縁端部外面に面をなし、端部は上方につまみ上げる。46は、口縁部が内傾するタイプの山陰系複合口縁壺である。体部径に対して、頸部は大きく締まり、屈曲する口縁部の端部内面には、強いナデを施す。体部の外面調整は、横方向のハケを基調とするが、頸部に一部ミガキが認められ、内面はヘラケズリを施す。47は、口縁部形態が不明であるが、やや窪み底をなす壺の体部である。外面下半に丁寧なミガキを施し、内面はナデ調整を基調とする。48～50は、布留形甕である。頸部径に比して、口縁部が長く拡張する48・50と、やや短くおさめる49がある。50は、1次調整のハケを施した後、肩部に古式の布留形甕に特徴的なヨコハケを施す。51～55は、「く」字口縁甕である。51は、外面調整を板状工具によるヘラケズリ及びナデで仕上げる特徴的な手法による。内面はナデ調整による。「く」字口縁甕にも、内湾気味に立ち上がる52～54や、外反する51・55がある。52は口縁端部の肥厚はみられないが、内湾して立ち上がる口縁部断面の形状から、布留系の甕と推定される。56・57は、いわゆる小形精製土器である。



第60図 自然流路N R560(S X 758・764)出土遺物実測図(1/4)

56は、短く外反する口縁部をなす有段口縁鉢で、内外面に丁寧なヘラミガキを施す。57は口縁部が長く拡張する小形丸底鉢である。内面に細かく丁寧なヘラミガキを施す。58は、中実の高杯脚部で、外面にハケ後ヘラミガキを施す。

以上、S X 758出土土器は、平底を残す壺や、古式の山陰系壺46や、外面ヘラケズリ調整の甕、矮小化していない有段口縁鉢や、中実高杯の存在など、山城佐山Ⅲ式前半(布留古段階新相～布留古段階古相)の古墳時代前期前半に帰属する土器群とみられる。

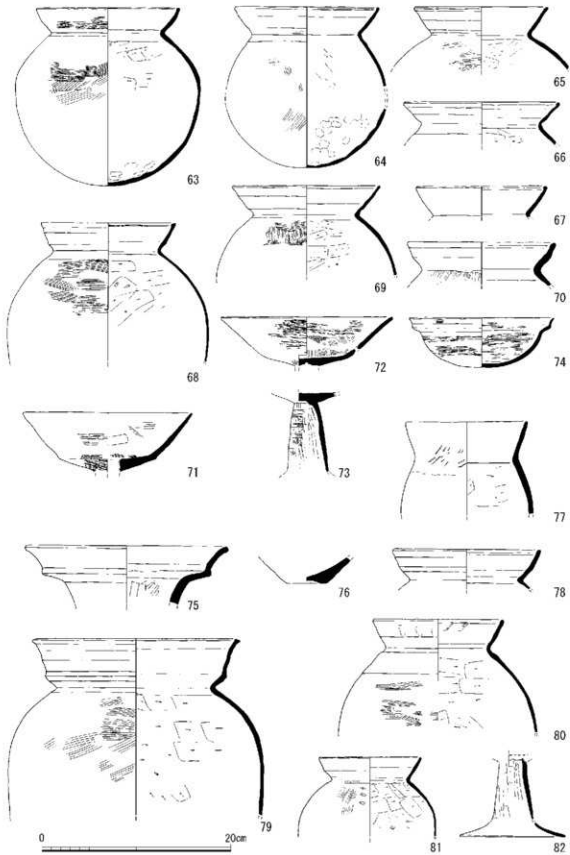
土器溜まり S X 764 (第60図59～第61図74) 59は、二重口縁壺の口縁部で、外反して開く口縁部と頸部を擬口縁手法によって接合し、内外面にミガキ調整を施す。60・61は、直口壺である。60は、やや内湾気味に立ち上がる口縁をなすが、61は直線的に延びる口縁をなす。61は、体部外面に丁寧なミガキを、内面にヘラケズリを施す。また、口縁部には、工具による打ち欠きが認められる。細かく弧状に打ち欠かれたものであり、意図的に施されたものとみられる。62は、山陰系の複合口縁甕である。口径25.5cmと大形の甕であり、斜め上方に延びる口縁部外面に丁寧な横方向のナデを施す。外面は斜めタテハケ後、肩部にヨコハケを施しており、内面はヘラケズリ調整による。肩部のハケ調整後に、2か所の刺突文が施される。

63～70は布留形甕である。口縁部が長く拡張し、肩部に1次調整後のヨコハケを残す古相を示す一群が含まれる(65・68・69)。一方、短く内湾して立ち上がる布留形甕でも新しい様相を示す63・70を含む。71～73は、高杯である。71は、深い杯部をもつ高杯で、やや内湾気味に立ち上がる杯部をなす。東海系高杯の要素が影響を与えた形式とみられる。73は、杯底部外面に、刺突痕をもつ山陰系の手法がみられる高杯である。脚柱部が直線的に長く、高い脚高をもつタイプで、畿内系高杯との折衷的な要素をもつ。74は、有段口縁鉢である。深い鉢部をなし、器高は高く、内外面に丁寧なヘラミガキを施す。S X 766の燔属時期は、山陰系壺・高杯の型式から、山城佐山Ⅲ式(前半の古墳時代前期前半)と推定される。

土器溜まり S X 765 (第61図75～78) 75は二重口縁壺である。口縁部が外反して立ち上がるいわゆる畿内系二重口縁壺である。76は、壺ないし甕の底部で、窪み底を呈する。77は製塩土器の甕で、体部をタタキ整形した後、ナデ調整を施す。2次的な被熱痕跡がみられる。78は、布留形甕の口縁部で、口縁端部はわずかに肥厚する。

土器溜まり S X 766 (第61図79～82) 79は、山陰系の複合口縁甕である。複合口縁甕の口縁端部の変化は、端部を平坦におさめるものから、内傾して肥厚するものへと変化するが、79は端部を外方に引き出す点特徴的である。在地的な変容とみられる。80は、肩部にヨコハケを施す布留形甕である。81は、口縁端部の明瞭な肥厚がみられないが、口頸部形態や、内外面の調整から、布留形甕と判断される。外面には、古式の布留形甕に特徴的な刺突文を縦方向に3か所に入れる。82は、山陰系高杯の脚部である。杯底部外面に刺突痕が認められる。脚柱部上半の軸径が大きく、山陰系高杯のなかでも、古式の形態を示す。

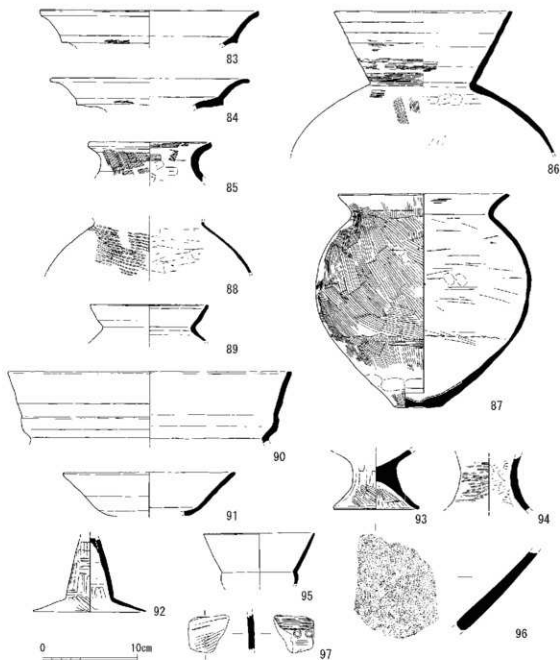
自然流路 N R 560 (第62図83～97、第63図98～108) N R 560出土土器には、上記した一括性の高い土器溜まりとして取り上げた土器群のほか、流路内各地点から出土した古式土器器の一群と、



第61図 自然流路NR560(S X764・765・766)出土遺物実測図(1/4)

包含層的な性格をもつ弥生土器の一群がある。

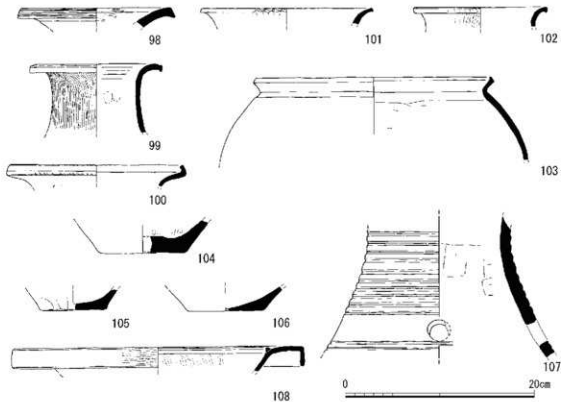
83～97は、N R560の各所から出土した古式土師器である。83・84は、二重口縁壺である。83は、緩やかに外反する口縁部をなし、口縁端面を立ち上げるが、84は強く外反する口縁の端部を丸く取める。85の広口壺は、強く外反する口縁をなし、外面は荒いハケ調整、内面にヘラケズリを施すもので、弥生系の壺とみられるが畿入土器の可能性もある。86は、布留系の短頸直口壺である。口縁部は直線的に長く拡張し、端部が肥厚する。外面はハケ調整を基調とし、体部内面はヘラケズリを施す。87の「く」字口縁壺は、底部は平底をなし、体部外面下部に分割整形痕を残す。外面調整は、斜め縦方向のハケを、内面はナデ調整を基調とする弥生系甕である。88は、口縁部は



第62図 自然流路N R560出土遺物実測図1 (1/4)

欠くが、左上がりの細筋タタキ成形痕をもち、内面に細かなヘラケズリがみられる大和型庄内形甕である。胎土に堆積岩類を含むにぶい橙色を呈し、搬入土器と推定される。89は、口縁端部をわずかに肥厚する布留形甕である。口径12.6cmを測る小形品である。90は、山陰系複合口縁甕である。口縁端部を内側に肥厚させるタイプで、頸部上端の二次口縁外面にシャープな稜はみられず、在地における生産品とみられる。口径30.0cmを測る大形品である。91は、杯部に明瞭な稜線を認めず、山陰系高杯の杯部と推定する。92は、脚部が屈曲して「ハ」字状に開く山陰系高杯である。93は、台付鉢の脚部と推定する。94は、器台の胴部であり、外面にミガキ調整を施す。95は、口縁部が大きく拡張する小形丸底鉢である。96は、大形甕の体部下半の一部とみられる。外面は摩耗が著しいがナデを基調とし、内面はハケ調整による。色調は、暗褐色を呈し、胎土に雲母等を含むことから、讃岐系大形甕の体部下半の一部と推定する。97は、壺の体部であるが、外面に円形竹管文の上下に櫛描直線文が施され、内面はハケ調整が認められる。庄内系の加飾甕の一部とみられる。

98～108は、弥生土器である。98は、大きく開く口縁部の端部を外方に拡張し、端面に凹線文A種を施す広口甕である。98の広口甕は、筒状に立ち上がる頸部に外反する口縁部をなす。外面は荒い縦方向のハケを施す。99・100は、壺ないし甕の口縁部である。99は、口縁部端面にキザミを列状に施す。100は、短く外反する口縁部をなし、口縁端面に棒状工具による連続した押圧を加える。101は、受口状口縁をなす近江系甕である。口縁端部外面の下半に列状に工具によるキザミを施す。102の「く」字状口縁甕は、口縁端部を跳ね上げ、端面に一条の凹線文を施す瀬戸内系甕である。



第63図 自然流路N R560出土遺物実測図2 (1/4)

104～106は、甕ないしは壺の平底の底部である。104は、底部中央に径約0.8cmの焼成後の穿孔が施されたもので、甕として使用された可能性がある。107は、器台の胴部である。胴部下半に円形のスカシを穿ち、6条を単位とする凹線文を施す。108は、端部が垂加する水平口縁高杯である。杯部の突帯はわずかに突出するもので、内外面に丁寧なミガキを施す。以上の弥生土器の帰属時期は、跳ね上げ口縁をなし凹線文を施す瀬戸内系甕や、口縁部が短く立ち上がる近江系甕、水平口縁高杯の口縁形態や、多条の凹線文を施す器台が組成を成すことから、おおよそ畿内第Ⅳ様式後半に帰属する土器群とみられる。これらは、小片で著しく摩耗したものが多く、古墳時代の流路に削平された遺構や流路に関わる資料か、あるいは周辺から混入した遺物と推定される。

NR560の出土土器のうち、弥生土器を除いた、一括性が高いとみられる古墳時代の各土器溜まりの土器群の帰属時期は、いずれもおおよそ佐山Ⅲ-1型式前半(布留式古段階新相～中段階古相)に並行する古墳時代前期前葉～中期初葉の資料である。一方、NR560内の各地点から出土した土器は、佐山Ⅱ式後半(庄内式新相)の遺物が一定量認められ、土器溜まり出土土器よりも、古相を示す土器群を含む。これらのなかには、完形品に復元できるものも含まれることから、流路の存続期間を示すとみられ、NR560の存続期間をおおよそ佐山Ⅱ式後半～佐山Ⅲ式前半の古墳時代初頭～中期初葉とみることができる。

(高野陽子)

(2) 石製品(第64図109～115)

109は有蓋式の石罫である。NR560の第11層から出土した。完形品であるが、全面はわずかに摩耗している。厚みのある素材の縁辺に丁寧な押圧剥離による調整がみられる。両面の中央部に剥離は及ばず、素材面を残している。石材はサヌカイトである。

110は磨製石庖丁である。青灰色土層から出土した。全面に丁寧な研磨を施す。刃面は腹面側のみに存在する。刃面は欠損しているが、わずかに研磨面が残る。紐部は両面から穿孔を行い、径5.5mmを測る。大型の石庖丁の未成品もしくは失敗品であると考えられる。石材は粘板岩である。

111は有孔石製品である。灰白色土層の土石流による礫層の中から出土した。全面に摩滅している。背腹両面に研磨を施す。中央部には両面から穿孔を行い、径5mmを測る。石製紡錘車であると考えられる。石材は粘板岩である。

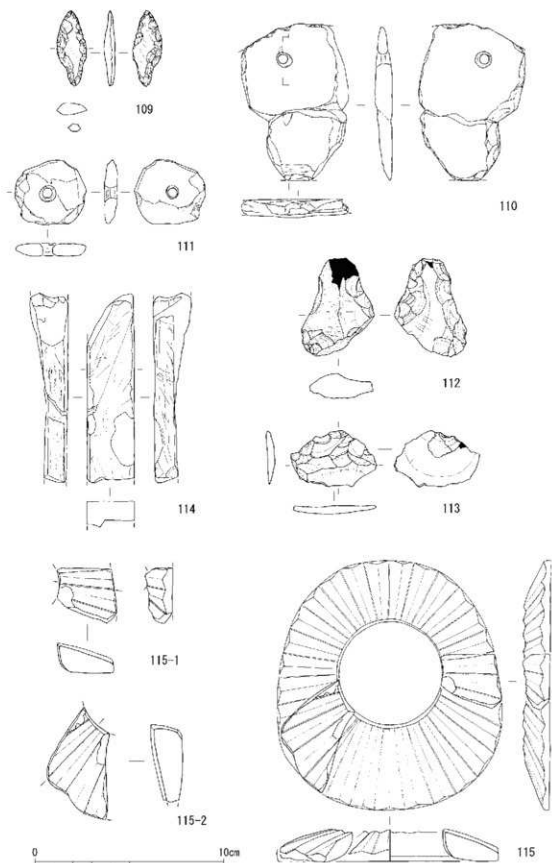
112は、背面側に浅い平坦剥離のみられる横長剥片である。サヌカイトを石材としている。灰白色土層の土石流による礫層の中から出土した。

113は、加工痕のある剥片または削器である。背面を自然の礫表とする厚い不定形剥片を素材に、腹面側の縁辺部を細かく調整している。石材はサヌカイトである。灰白色土層から出土した。

114は砥石である。青灰色土層から出土した。直方体状の厚みのある形状を呈する。両端部と片面を欠損する。砥面は3面にみられ、細かな擦痕が確認できる。

115-1・115-2は腕輪形石製品の車輪石である。2点とも調査区西側の土石流による礫層付近の灰白色土層から出土した。全面はわずかに摩滅している。光沢のない軟質な緑色凝灰岩製である。

外端の輪郭線はなめらかな曲線を描き、外側面は直立に近い内反りを呈する。斜面彫刻は凹帯



第64図 石製品実測図(1/2)

のみであり、1mm程度の谷刻線を施す。底面は環体の外側面から内孔に向かって膨らみを持つ。外側面から内孔に向かっての挟りは1.5mmを測る。内孔部での環体の厚さは、115-2では1.4cm、115-1では1.3cmを測る。115-1と115-2は接合関係にはないが、出土地点や斜面彫刻から同一個体であると考えられ、形態の違いは部位による法量の差であると考えられる。全体を復元すると環体外形は卵形で内孔は円形となる。最大長13.2cm、最大幅11.9cm、内孔形5.5cm、環体外縁部での凹帯の最大幅は1.5cm、最小幅1.3cmであり、29条に復元できる。

このほか、古墳時代の遺構が集中する調査区西部の遺物包含層やS K27・40・48・400で棒状の粘板岩が出土した。調査地付近で採集できる石材ではないので、他所から持ち運んできたと考えられる。(福山博章)

2) 飛鳥時代

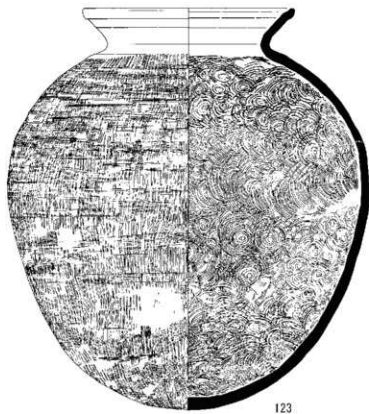
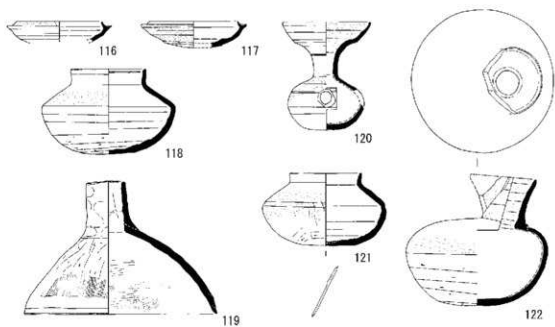
溝S D590 (第65図116～第66図127) 土師器蓋・鉢・甕、須恵器杯H・壺C・甕・横瓶・甕などが出土している。今回の報告では、出土した土器のまとまりごとに記述する。^(注4)

116・117は、須恵器杯Hである。いずれも、口縁端部を丸くおさめ、底部外面はヘラ切り後未調整である。116は、立ち上がり部外面に降灰がみられ、蓋を被せて焼成されている。117は、底部に降灰がみられるため、底部を上にして焼成されている。116は、立ち上がりが緩やかなのに対し、117は屈曲して立ち上がる。118は、須恵器壺Cである。口縁端部は内傾する面を持ち、内面へやや肥厚させる。底部は丸底になる。底部外面はロクロヘラケズリ調整を施す。外面の降灰から蓋をのせて焼成されている。

119は、土師器蓋である。縁部は丸くおさめる。頂部の形状は、中空になり煙突状を呈する。頂部外面は、ヘラケズリ後ハケ調整。頂部内面は、ハケ調整を施す。粘土の接合痕がみられ、右上がりに残る。120は、須恵器甕である。口縁端部は丸くおさめる。底部外面は、ヘラ切り後ナデ調整、平底を呈する。外面口縁部と頸部の間に沈線を2条施す。頸部内面にはしほり痕がみられる。胴部は球形を呈し、肩部外面に沈線を1条施す。胴部中央には径約1.5cmの孔を穿つ。孔は、外面から穿たれており内面に孔を穿った際の粘土が残存する。口縁部内面から胴部外面に降灰がみられる。121は、須恵器壺Cである。口縁端部を丸くおさめ、底部は平底になる。底部外面は手持ちヘラケズリ調整を施す。肩部外面に沈線を1条施す。底部外面にはヘラ記号を刺す。外面の降灰から蓋をのせて焼成されている。

122は、須恵器平瓶である。円盤閉塞法で成形される。口縁端部は丸くおさめる。体部は肩部があまり張らず、丸底になる。口縁部は一部打ち欠かれている。外面は、口縁部から頂部にロクロナデ調整、肩部から底部にかけてロクロヘラケズリ調整を施す。口縁部外面から頂部に降灰がみられる。底部外面は、摩滅しており使用痕と考えられる。

123は、須恵器甕である。口縁端部は、つまみあげ外へ肥厚させる。胴部は楕円形を呈する。口縁部は胴部を成形した後、粘土を足して成形する。胴部は、底部から成形されており、外面を横方向の平行タタキで成形する。粘土を足し、胴部外面全体に縦方向の平行タタキで成形した後、



第65図 溝S D590出土遺物実測図1 (1/4)

肩部から胴部中央までカキメを施す。胴部内面は、あて具痕がみられる。

124は、土師器鉢である。口縁端部は内傾する面を持つ。内面は、口縁部上半をナデ調整、下半をヨコハケ調整、見込み部には指頭圧痕が輪状にみられる。外面は、口縁部に指頭圧痕がのこり、口縁部から底部にかけてハケ後ヘラケズリ調整を施す。底部外面に黒斑が見られる。125は、土師器甕である。口縁端部は丸くおさめる。内面は、口縁部の一部にハケ調整、底部からの立ち上がり付近にはナデ調整を施す。外面は、胴部にヘラケズリ調整を施す。2方向のヘラケズリ調整が確認でき、胴部中央から頭部方向と胴部中央から底部方向がみられる。切り合いから胴部中央から底部方向のヘラケズリ調整を先に施す。胴部中央からヘラケズリの方向が逆転するため、成形途中で土器の向きを変えている。内面は黒化しており、口縁部を下にして焼成されたため、燻されたものと考えられる。外面には被熱痕がみられず、内面に炭化物が付着していないため、煮炊などには使用されていない。底部外面に黒斑がみられる。126は、須恵器平瓶である。円盤閉塞法で成形される。口縁部はすべて打ち欠かされている。体部は122と比べ大型で肩部が張り、台形となり底部が平底になる。外面は、口縁部から頂部までロクロナデ調整、肩部から底部にかけてロクロヘラケズリ調整を施す。体部外面に径1cm程度のボタン状のツマミが2つ付く。口縁部と体部の外面に降灰がみられる。底部外面には、気泡による焼き影れがみられる。127は、須恵器横瓶である。片面閉塞で製作される。口縁端部は、折り返し外面へ肥厚させる。口縁部は、胴部と口縁部の接合部には指頭圧痕がみられ、胴部を成形した後に穿孔し、粘土を足した後、口縁部を成形している。内面は青海波紋を基調とし、閉塞側面ではあて具痕の単位が変わるため、工具を変えている。外面は、底部側面では格子タタキ、閉塞側面では平行タタキ後、胴部中央部までカキメを施す。底部側面の内面では、工具痕がみられ、成形時の痕跡と思われる。閉塞側面は、丸くなるのに対し、底部側面は、やや平滑になり自立する。また、胴部底面と閉塞側面の外面は、摩滅しており、製作時か使用時の痕跡と思われる。胴部内面に褐色の付着物がみられる。

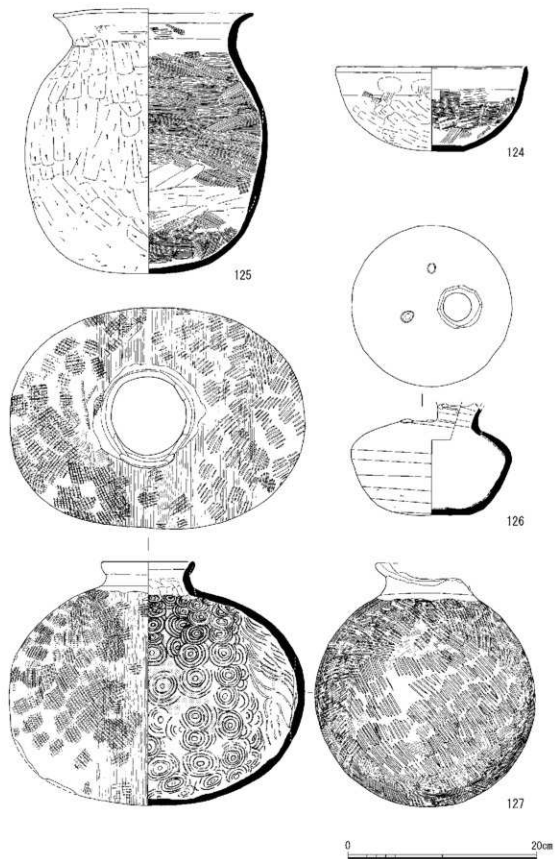
(田中秀弥)

3) 奈良時代

(1) 土器

道路SF1 東側溝SD160 土師器ⅢA・ⅢB・ⅢC・高杯・壺B・甕、須恵器杯A・杯B・杯E・ⅢB・ⅢC・ⅢE・杯B蓋・ⅢB蓋・壺A・鉢D・甕・土製品が出土している。^(R3・6)

土師器(第67図128~142) 128~130は、ⅢAである。外面調整はいずれもa0手法。128は、口縁端部を外反させ丸くおさめる。内面に1段放射暗文を施す。129・130は、口縁端部を内側に折り返し肥厚させ、丸くおさめる。129は、内外面は摩滅しており暗文は確認できないが、口縁部に油煙がみられ、灯火器として使用されている。130は、内面に1段放射暗文と螺旋暗文を施す。また、底部外面には、墨痕がみられる。131・132は、ⅢCである。外面調整はいずれもe0手法され、口縁端部を丸くおさめる。131は、口縁部にススが付着しており灯火器に使用されている。133は、ⅢBの底部である。外面調整と暗文は摩滅しているため確認できない。高台は台形を呈



第66図 溝S D590出土遺物実測図2 (1/4)

する。134は、高杯の脚部である。縁部は、内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。脚部は、11面と細かく面取りを施す。135～139は、壺Bである。いずれも口縁端部は外反させ丸くおさめる。138は、体部に指頭圧痕がみられる。139は、墨書人面土器である。内面は、ナデ調整を施す。

付表2 道路SF1東側溝
SD160出土土器
破片数一覧

土師器	器種	破片数
供膳具	杯A	2
	杯C	3
	皿A	4
	皿C	2
	杯または皿	19
	高杯	3
	計	33
貯蔵具	壺B	8
	壺類	2
	計	10
煮炊具	甕類(胴部)	36
	甕(口縁部)	7
	計	43
土製品	ミニチュア 壺	3
合計		89

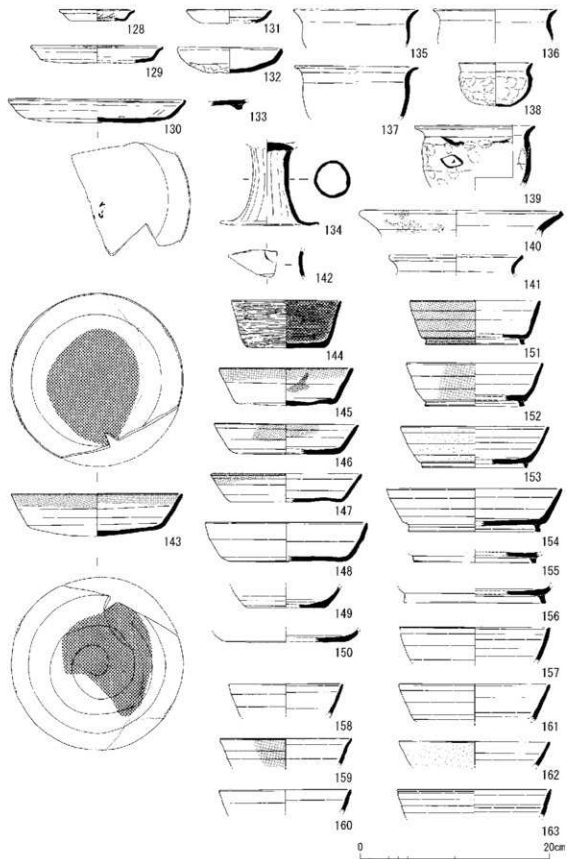
外面には指頭圧痕と粘土紐の接合痕が右上がりにみられ、胴部に目と眉が墨書される。140・141は、甕の口縁部である。いずれも口縁端部は、つまみ出し丸くおさめる。内外面は摩擦しており、調整を確認できない。142は、小片であるため、器種は不明である。内面にハケ調整を施す。外面に墨書がみられる。

須恵器(第67図143～第69図186) 143～150は、杯Aである。口縁端部が残っているものはいずれも丸くおさめる。143は、底部内外面に墨が付着しており、研磨されているため転用甕である。口縁部内外面には重ね焼き痕がみられる。144は、口縁部内外面には密にヘラミガキを施し、底部内外面に4方向のミガキを施す。内面全面に墨が付着しており、研磨されているため転用甕である。145は、口縁部をロクロナデ調整、底部内面には不定方向のナデ調整を施す。底部はヘラ切り後未調整である。内面に黒漆が付着している。口縁部内外面には重ね焼き痕が見られる。146は、底部ヘラ切り後ナデ調整を施す。口縁部にスガが付着しているため灯火器に転用されている。147

須恵器	器種	破片数
供膳具	杯A	22
	杯B	6
	杯E	1
	皿B	2
	皿C	6
	皿E	1
	杯または皿	37
	杯B蓋	8
	皿B蓋	3
	計	86
貯蔵具	壺A	1
	壺類	6
	鉢D	3
	甕(体部)	4
	計	14
合計		100

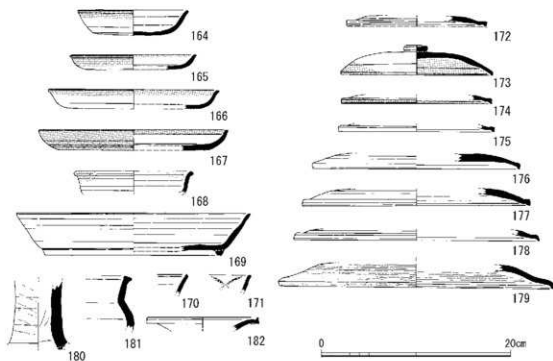
は、底部ヘラ切り後未調整である。口縁部に重ね焼き痕がみられる。148は、底部ヘラ切り後未調整である。149・150は、底部のみ残存する。いずれも底部ヘラ切り後未調整である。149の底部外面は、他の杯Aと比べ平滑である。151～156は、杯Bである。いずれも口縁端部は丸くおさめる。151は、底部ヘラ切り後ロクロナデ調整。152は、底部ヘラ切り後未調整。底部外面に爪状圧痕がみられる。重ね焼き痕がみられる。153は、底部ヘラ切り後未調整。重ね焼き痕がみられる。154は、底部ヘラ切り後ロクロヘラケズリ調整を施す。155・156は、底部のみ残存する。155は底部ヘラ切り後ロクロヘラケズリ調整を施す。156は、ヘラ切り後ロクロナデ調整を施す。157は、杯Eである。口縁端部は、内傾する面を持つ。158～163は、杯Aないしは杯Bである。いずれも、口縁端部を丸くおさめる。159・161は、口縁部にスガが付着しているため灯火器に転用されている。164～167、170・171は、皿Cである。いずれも口縁端部は平滑にする。164は、底部ヘラ切り後未調整で内外面に重ね焼き痕がみられる。165は、摩擦しており底部の調整は不明である。内外面に重ね焼き痕がみられる。166は、底部ヘラ切り後ナデ調整を施す。内外面に重ね焼き痕がみら

その他	器種	破片数
製塩土器		5
黒色土器	不明	1
計		6
総計		195

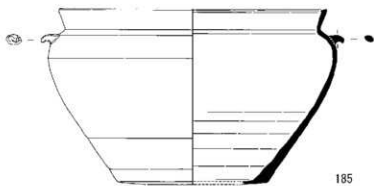
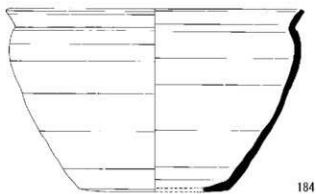
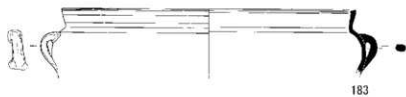


第67図 道路SF1東側溝SD160出土遺物実測図1(1/4)

れる。167は、底部ヘラ切り後ナデ調整を施す。重ね焼き痕がみられる。170・171は、口縁部のみで、171の内面に火槽がみられる。168は、皿Eである。口縁端部は、強く外反させ丸くおさめる。灯火痕はみられない。169は、皿Bである。口縁端部は丸くおさめる。外面は、底部から口縁部にかけてロクロヘラケズリを施す。172～175は、杯B蓋である。いずれも縁部をつまみ出し丸くおさめる。172は、頂部外面ヘラ切り後未調整。内外面に気泡による焼き影れがみられる。173は、頂部外面ヘラ切り後口縁部にかけてロクロナデ調整。縁部外面に重ね焼き痕がみられ、内面全体が黒化しており、内面を上にして焼成されている。縁部内面に2か所の灯火痕が見られるため、灯火器に転用される。174・175は、縁部のみで、頂部まで残存していないため調整は確認できない。174は、内外面に重ね焼き痕がみられる。176～179は皿B蓋である。178以外は、縁部をつまみ出し丸くおさめる。176は、頂部をヘラ切り後ロクロヘラケズリ調整。頂部に、粗くヘラミガキを施す。177は、縁部をつまみ出した後、工具で沈線を施す。頂部ヘラ切り後頂部から縁部にかけてロクロナデ調整。頂部には、乾燥時の圧痕がみられる。178は、縁部をつまみ出した後、工具で沈線を施す。頂部まで残存していないため調整は確認できない。179は、頂部をヘラ切り後ロクロヘラケズリ調整。内外面に密にヘラミガキを施す。180は、壺の頸部である。内面にしほり痕がみられる。181は、甕Cないしは鉢Dの口縁部である。口縁端部は平滑にする。胴部まで残存していないためタキ痕などはみられない。182は、壺の口縁部である。口縁端部は、つまみ出し丸くおさめる。183～185は、鉢Dである。口縁端部はいずれも平滑にする。肩部の張りは弱い。外面は、底部から立ち上がり部にかけてロクロヘラケズリ調整を施す。183・185の肩部には、把手を付す。186は、甕である。口縁部は残存していない。外面は、平行タキで成形する。内面は、



第68図 道路S F 1 東側溝 S D 160出土遺物実測図 2 (1/4)

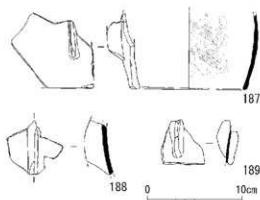


0 20cm

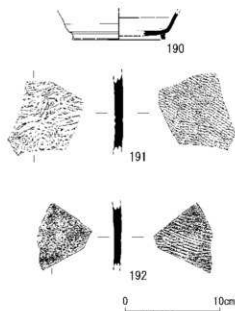


0 40cm

第69図 道路SF1東側溝SD160出土遺物実測図3(1/4・1/8)



第70図 道路 S F 1 東側溝 S D 160
出土遺物実測図 4 (1/4)



第71図 道路 S F 1 西側溝 S D 190
出土遺物実測図 (1/4)

あて具痕をナデ消す。

土製品 (第70図187~189) 187~189は、ミニチュア甕である。いずれも底部と胴部のみで、底部下端は斜めに成形する。189は、胴部下端を平滑にし、一側面を大きく切り取る。胴部内面にハケ調整を施す。

道路 S F 1 西側溝 S D 190 (第71図190~192) 須恵器杯 B・甕が出土している。190は、杯 B である。底部はヘラ切り後クロコナデ調整。底部外面に爪状圧痕がみられる。191・192は、甕の体部である。191は、外面を縄タタキ、内面にあて具痕がみられる。192は、外面を平行タタキで成形し、内面のあて具痕をナデ消す。

道路 S F 2 北側溝 S D 165 (第72図193~204) 土師器杯 A ないしは杯 B・杯 B・皿 B・鉢 A、須恵器杯 B・皿 B・甕が出土している。

193は、土師器杯 B である。口縁端部は内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。b0手法で調整され、1段放射暗文と螺旋暗文を施す。底部の螺旋暗文は3周程度である。口縁部と外面にススが附着しているため、灯火器に転用されている。道路 S F 1 東側溝 S D 160の破片と接合関係にある。194は、土師器杯 A ないしは杯 B である。口縁端部は内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。外面調整は、口縁部の

みであるため不明である。195・196は、土師器皿 A である。器表面が摩滅しているため調整は確認できない。195は、口縁端部をやや肥厚させ丸くおさめる。暗文は確認できない。196は、内面に1段放射暗文を施す。197は、土師器鉢 A の胴部である。いわゆる鉄鉢形の土器である。口縁端部は残存していない。外面は、ヘラケズリ後密にヘラミガキを施す。内面に指頭圧痕がみられる。

198は、須恵器杯 B である。口縁端部は丸くおさめる。底部は、ヘラ切り後ナデ調整。底部内面はクロコナデ後不定方向のナデを施す。199は、須恵器皿 B である。口縁端部は丸くおさめる。外面は、底部から口縁部までクロコヘラケズリを施す。底部内面はクロコナデ後不定方向のナデを施す。200~204は、須恵器甕である。200は、須恵器甕 C である。口縁端部は外傾し平滑にする。201は、内外面はあて具痕をナデ消す。外面は全面に降灰がみられ一部ガラス化している。202は、外面を平行タタキ、内面にあて具痕がみられる。203は、外面を格子タタキ、内面にあて具痕がみられる。204は、外面平行タタキ後カキメを施し、内面にあて具痕がみられる。

道路SF2南側溝SD200(第72図205) 須恵器甕1点が出土している。205は、須恵器甕の胴部である。外面は密にカキメを施し、内面はあて具痕をナデ消す。

付表3 道路SF2北側溝SD165出土土器破片数一覧

土師器	器種	破片数
供膳具	杯A	1
	杯B	1
	皿A	1
	杯または皿	3
	鉢A	1
	計	7
貯蔵具	壺	1
	計	1
煮炊具	甕類(胴部)	3
	甕(口縁部)	1
	計	4
合計		12

掘立柱建物SB1(第73図206～210) 土師器甕Aと須恵器杯B・杯B蓋・皿B蓋・盤Aが出土している。206は、土師器甕Aである。口縁端部は丸くおさめる。口縁部はナデ調整、体部内外面に指頭圧痕がみられ、体部外面にヨコハケ調整を施す。外面にはススが付着する。柱穴SP172と柱穴SP178から出土し、接合した。207は、須恵器杯Bである。口縁端部は丸くおさめる。底部は、ヘラ切り後ロクロヘラケズリ調整を施す。内外面に火禱がみられる。口縁部内外面に漆が付着している。柱穴SP177から出土した。208は、須恵器杯B蓋である。縁部をつまみ出し丸くおさめる。頂部外面はロクロヘラケズリ調整を施す。内面に重ね焼き痕がみられる。柱穴SP180から出土した。209は、須恵器皿B蓋である。口縁部をつまみ出した後、沈線を施す。頂部外面は、ロクロヘラケズリ調整を施す。柱穴SP171抜き取り穴から出土した。210は、須恵器盤Aである。口縁端部は内傾する面を持つ。器表面が荒れているため調整は確認できない。口縁部外面には重ね焼き痕がみられる。

須恵器	器種	破片数
供膳具	杯B	2
	皿B	1
	計	3
貯蔵具	壺類	2
	甕(口縁部)	2
	甕(胴部)	3
	計	7
合計		10
総計		22

掘立柱建物SB2・3(第73図211～214) 土師器皿A、須恵器杯A・皿A・椀Aが出土している。211は、土師器皿Aである。口縁端部は、内側に折り返さず肥厚させる。a0手法で調整される。雨落ち溝SD233から出土した。212は、須恵器杯Aないしは杯Bである。口縁端部は外反させ、丸くおさめる。213は、須恵器皿Aである。口縁端部は丸くおさめる。口縁部から底部内面にかけてロクロナデ、底部外面は不定方向のナデ調整。212・213は柱穴SP216から、211・214は溝SD233から出土した。214は、須恵器椀Aである。口縁端部は外へ肥厚し、丸くおさめる。器形はコップ状を呈する。

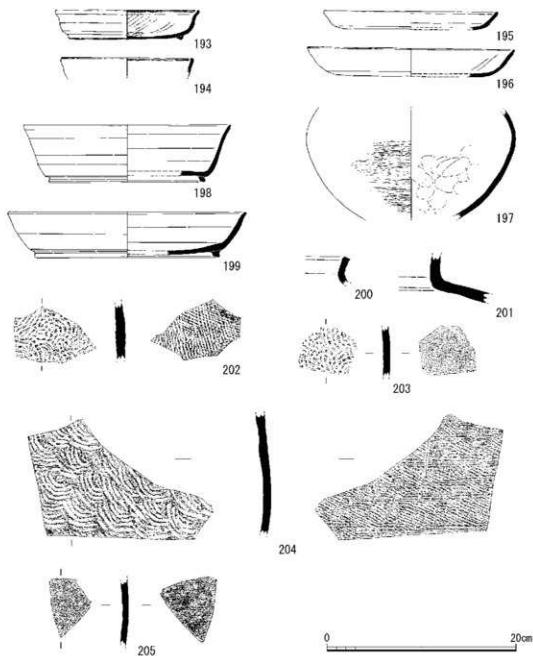
掘立柱建物SB4(第73図215～218) 土師器皿A、須恵器杯A・杯B・杯B蓋が出土している。215は、土師器皿Aである。口縁端部は折り返さず丸くおさめる。器表面は摩滅のため調整は不明である。内面に暗文は確認できない。216は、須恵器杯Aである。口縁端部は丸くおさめる。底部は、ヘラ切り後未調整。217は、杯Bである。口縁端部は丸くおさめる。全体に黒漆が付着し、破断面に黒漆が付着していないことから、黒漆を塗布した可能性が高い。また、黒漆が付着している同一個体と思われる破片も1点出土している。218は、杯B蓋である。縁部は、つまみ出し丸くおさめる。頂部外面はヘラ切り後ロクロナデ調整。

掘立柱建物SB5(第74図219～237) 土師器杯C・皿A・鉢Bないしは鉢C・壺B・甕、須恵器杯Bないしは皿B・杯C・皿A・杯B蓋・甕が出土している。

219は、土師器杯Cである。口縁端部は外反させ、丸くおさめる。内面に暗文は確認できない。

220～223は、土師器皿Aである。いずれも口縁端部は内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。220・222は、b 0手法で調整される。内面に暗文はみられない。223は、器表面が荒れているため調整は確認できない。内面に1段放射暗文を施す。224は、土師器鉢Bないしは鉢Cである。口縁端部は内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。c 0手法で調整される。内面に黒斑を有する。225は、土師器壺Bである。口縁端部は、外反させる。226は、土師器甕である。口縁端部は内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。外面にはススが附着する。

227・228は、須恵器杯Cである。いずれも口縁端部は内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。227は、底部はヘラ切り後クロヘラケズリ調整を施す。内面には重ね焼き痕がみられる。229～232は、須恵器杯Aないしは杯Bである。いずれも口縁端部は丸くおさめる。233は、須恵器杯B



第72図 道路S F 2北側溝S D165・南側溝S D200出土遺物実測図(1/4)

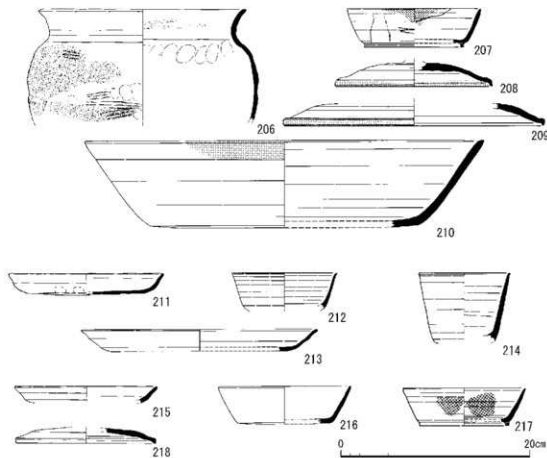
ないしは皿Bの高台である。234は、須恵器皿Cである。口縁端部は、内側に肥厚し丸くおさめる。底部はロクロヘラケズリ調整を施す。内面には、ヘラミガキと思われる痕跡が見られる。235は、須恵器杯B蓋である。縁部は、つまみ出し丸くおさめる。頂部は、ヘラ切り後ナデ調整。内外面に重ね焼き痕がみられ、頂部外面に重ね焼き時の融着がみられる。236は、須恵器甕Cである。口縁端部は、やや内面に肥厚し面をもつ。237は、須恵器甕の胴部である。外面は、平行タタキ後カキメを施し、内面はあて具痕をナデ消す。

掘立柱建物SB6 (第74図238・239) 須恵器杯Aないしは杯B・皿Aが出土している。238は、須恵器杯Aないしは杯Bである。口縁端部は丸くおさめる。239は、須恵器皿Aである。口縁端部は丸くおさめる。底部は、ヘラ切り後口縁部までロクロヘラケズリ調整を施す。

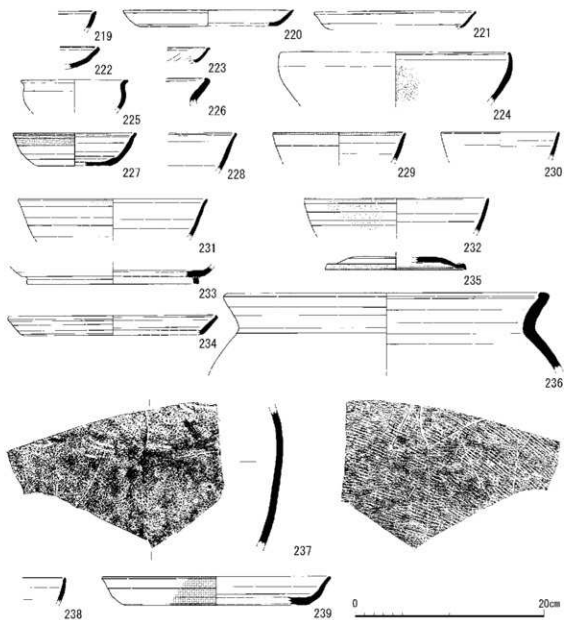
掘立柱建物SB7 (第75図240～251) 土師器皿A、須恵器杯Aないしは杯B・杯A・杯C・杯B蓋・甕が出土している。

240～242は、土師器皿Aである。240は、口縁端部は内傾する面を持ち、内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。a0手法で調整される。内面に1段放射暗文を施す。241・242は、口縁端部を内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。調整は不明で暗文を施さない。

243・244は、須恵器杯Aないしは杯Bである。口縁端部は、丸くおさめる。245・246は、須恵器杯Aの底部である。底部はヘラ切り後未調整である。247は須恵器杯Bである。248は、須恵器



第73図 掘立柱建物SB1・3・4出土土物実測図(1/4)



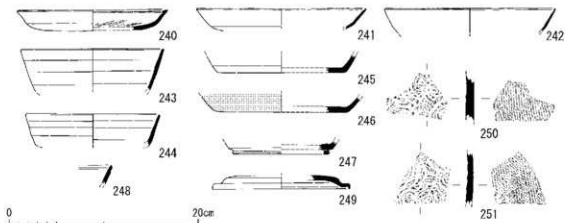
第74図 掘立柱建物SB5・6出土遺物実測図(1/4)

杯Cである。口縁端部は内に折り返さず、沈線を入れる。249は、須恵器杯B蓋である。縁部は、強くロクロナアをし、縁部はつまみ出し丸くおさめる。頂部は、ヘラ切り後未調整である。250・251は、須恵器甕の体部である。250は、外面を縄タタキ、内面にあて具痕がみられる。251は、外面を平行タタキ、内面にあて具痕がみられる。

掘立柱建物SB17(第76図252・253) 252は、須恵器平瓶である。円盤閉塞法で成形される。253は、須恵器甕である。外面は、平行タタキ、内面にあて具痕がみられる。

掘立柱建物SB13(第77図254~276) 土師器杯C・皿A・皿C・碗C、須恵器杯A・杯B・杯C・杯Aないしは杯B・杯B蓋・皿B蓋・盤、黒色土器、製塩土器が出土している。

254は、土師器杯Cである。口縁端部は外反させ、丸くおさめる。内面に1段放射暗文を施す。255~257は、土師器皿Aである。255は、口縁端部を丸くおさめる。a0手法で調整される。256



第75図 掘立柱建物S B 7出土遺物実測図(1/4)

は、口縁端部は残存していない。b 0手法で調整される。内面に、暗文は施していないが、立ち上がり部に細かい切込みが入る。暗文を施そうとしていた可能性が高い。257は、口縁端部を丸くおさめる。c 0手法で調整される。258は、土師器皿Cである。e 0手法で調整され、口縁端部は丸くおさめる。口縁部に油煙が付着しているため灯火器として使用されている。259は、土師器碗Cである。e 0手法で調整される。口縁端部は外反させやや面をもつ。

260・261は、須恵器杯Aである。いずれも口縁端部は丸くおさめる。260は、底部へラ切り後ナデ調整。261は、内面にススが付着しているため灯火器に転用されている。262・263は、須恵器杯Bである。262は口縁端部を丸くおさめる。263は、底部のみである。264は、須恵器杯Cである。口縁端部は内側に肥厚させ、丸くおさめる。底部はへら切り後未調整。外面に重ね焼き痕が見られる。265～267は、須恵器杯Aなしは杯Bである。口縁端部は丸くおさめる。268～270は、須恵器杯B蓋である。いずれも縁部はつまみ出し丸くおさめる。268は、ツマミがボタン状を呈する。268・269は、頂部をへら切り後ナデ調整。271は、須恵器皿B蓋である。縁部は、つまみ出し丸くおさめる。頂部はへら切り未調整である。272は、須恵器盤Aである。外面はロクロへラケズリを施す。

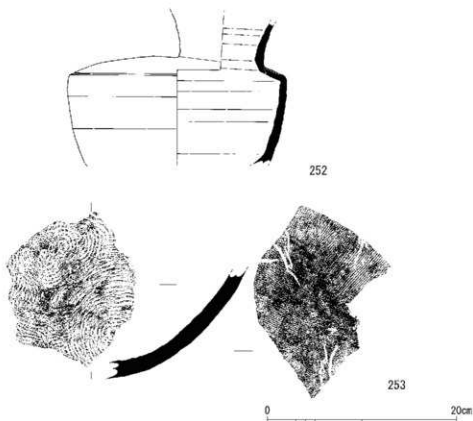
273は、黒色土器杯である。内面は黒色処理を施し、口縁端部外面まで黒化する。口縁端部を外反させ内面に沈線を1条施す。外面は、へラケズリ後へらミガキ、内面はへらミガキを施す。

274～276は製塩土器である。274は、口縁端部は内につまみ出し丸くおさめる。外面は指頭圧痕、内面に粘土の接合痕が残る。275は、口縁端部を丸くおさめる。内外面に粘土の接合痕が残る。276は、口縁端部を丸くおさめる。他の製塩土器と比べ口径が大きい。器形はいずれも、筒形にはならず砲弾形のものと思われる。

柱穴S P 774(第77図277～286) 土師器杯C・杯ないしは皿・鉢A、須恵器杯Aないしは杯B・杯B蓋・壺・鉢A、製塩土器が出土している。

277は、土師器杯Cである。口縁端部は外反させ丸くおさめる。278・279は、土師器杯ないしは皿である。いずれも口縁端部は内側に折り返し、肥厚させる。調整は口縁部のみでa 0手法ないしはb 0手法で調整される。280は、土師器鉢Aである。外面は、へラケズリ調整を施す。

281は、須恵器杯Aないしは杯Bである。口縁端部は丸くおさめる。282は、須恵器杯B蓋であ



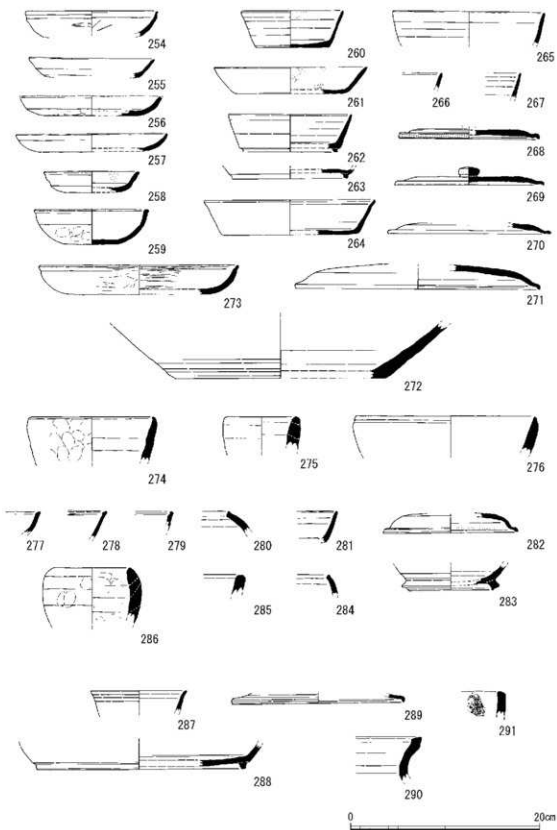
第76図 掘立柱建物S B17出土遺物実測図(1/4)

る。縁部は、つまみ出し丸くおさめる。頂部は、ヘラ切り後ロクロナデ調整を施す。283は、壺の底部である。底部ヘラ切り後未調整である。高台は、「ハ」の字を呈する。284は、須恵器鉢Aである。口縁端部は内傾する面を持つ。

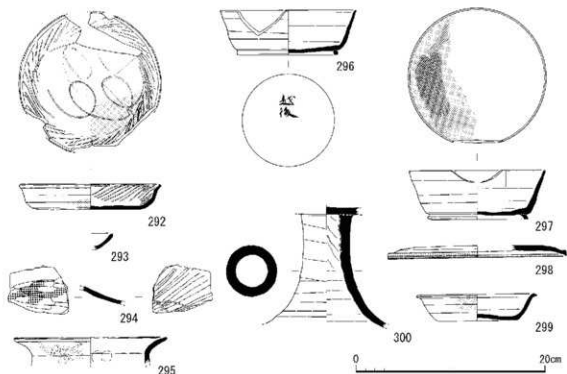
285・286は、製塩土器である。285は、口縁端部をやや平滑にする。286は、口縁端部を丸くおさめる。内外面に指頭圧痕がみられる。器形はいずれも、砲弾形になると思われる。

掘立柱建物S B14(第77図287～291) 須恵器杯Aないしは杯B・皿B・杯B蓋・甕C、製塩土器が出土した。287は、須恵器杯Aないしは杯Bである。口縁端部は、丸くおさめる。288は、須恵器皿Bである。底部はヘラ切り後未調整。289は、須恵器杯B蓋である。縁部は、つまみ出し丸くおさめる。290は、須恵器甕Cの口縁部である。口縁端部は、やや内傾する面を持つ。291は、製塩土器である。口縁端部は外傾する面をもつ。内面には布目痕がみられるため型造りである。

井戸S E152(第78図292～300) 土師器杯A・高杯・甕、須恵器杯B・皿E・杯B蓋・高杯が出土している。292は、土師器杯Aである。口縁端部は内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。a0手法で調整される。内面に1段放射暗文と螺旋暗文を施す。放射暗文は9回の持ち換え、螺旋暗文は内向きである。内外面にススが付着しているため、灯火器に転用された可能性がある。293は、土師器杯Cである。口縁部のみであるため調整は確認できない。294は、土師器高杯である。口縁部は残っておらず杯部の一部のみである。暗文は1段放射暗文と螺旋暗文を施す。外面は、ナデ後ヘラケズリ調整。外面には墨痕がみられる。295は、土師器甕である。口縁端部を丸くお



第77図 掘立柱建物S B13・14出土遺物実測図(1/4)



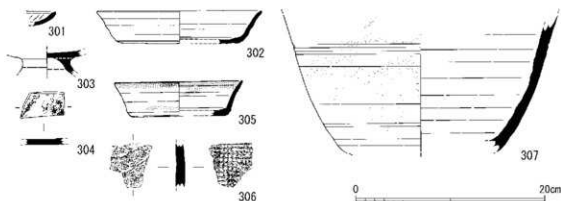
第78図 井戸S E152出土遺物実測図(1/4)

さめる。体部外面にハケ調整を施す。外面にはススが附着する。296・297は、須恵器杯Bである。いずれも口縁端部は丸くおさめ、底部はヘラ切り後ロクロナデ調整。全体的に焼き歪んでおり、底部内面は摩滅しており使用時の痕跡と考えられる。296は、底部外面に「越後」と墨書されている。296・297ともに口縁部を1か所打ち欠いており、内面に褐色の附着物がみられる。298は、須恵器杯B蓋である。縁部は、つまみ出し丸くおさめる。頂部はヘラ切り後未調整。内面に降灰がみられ、内面を上向きに焼成されている。299は、須恵器皿Eである。口縁端部は、外反させ丸くおさめる。底部ヘラ切り後、未調整である。底部に乾燥時の圧痕がみられる。明確な灯明痕は確認できないが、外面に被熱痕がみられるため灯火器として使用された可能性が高い。300は、須恵器高杯である。脚部内面にしほり痕が残る。杯部は摩滅しており、使用時の痕跡と思われる。

井戸S E540

掘形・井戸枠材出土(第79図301～307) 301～304は第14層出土である。301は土師器杯Cである。口縁端部は、外反させる。調整は摩滅しており不明であるが、内面に1段放射暗文を施す。302は須恵器杯Aである。口縁端部は、丸くおさめる。底部はヘラ切り後ロクロヘラケズリ調整を施す。303は、須恵器高杯の脚部である。杯部は底部内面に不定方向のナデを施す。304は、須恵器の杯または皿の底部である。底部はロクロヘラケズリ調整を施す。内面は、底部に不定方向のナデを施す。内面は研磨されており、墨が附着しているため、転用硯とみられる。

305・306は第15層出土である。305は、須恵器杯Aである。口縁端部は、丸くおさめる。底部はヘラ切り後未調整。内外面に降灰がみられる。口縁端部内外面には重ね焼き痕がみられる。306は須恵器甕の体部である。外面は格子タタキ、内面にあて具痕がみられる。



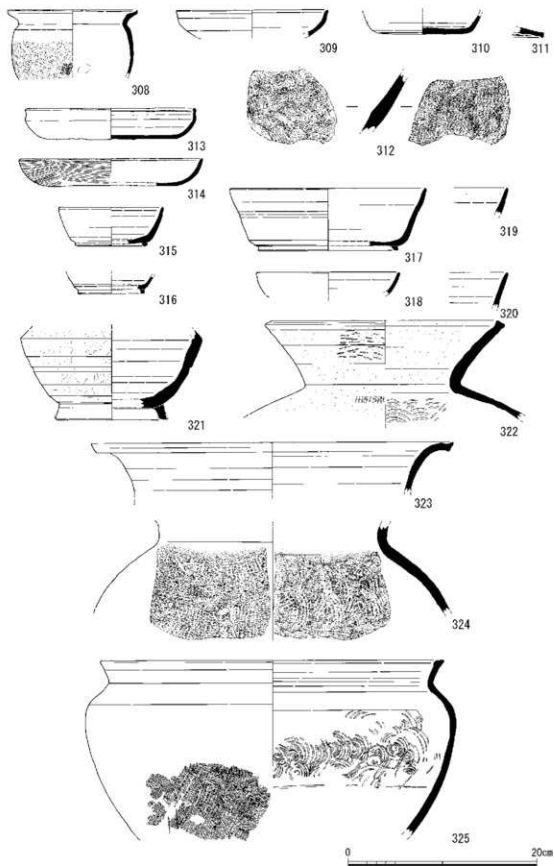
第79図 井戸SE540出土遺物実測図1(1/4)

307は第13層出土である。307は、須恵器壺の胴部である。外面に沈線を2条施す。立ち上がり部はロクロヘラケズリを施す。外面全面に自然釉が附着する。

井戸枠内出土(第80図308～第83図359) 308～312は第2層出土である。308は、土師器甕Aである。口縁端部はつまみ出し丸くおさめる。胴部は球形を呈し、頸部に強いナデを施す。外面にハケ調整を施し、内面には指頭圧痕がみられる。309は、須恵器杯ないしは皿である。口縁端部は、外反させ丸くおさめる。口縁部は、垂直に落ち、屈曲する。310は須恵器杯Aである。底部はヘラ切り後未調整。311は須恵器杯B蓋である。縁部は、つまみ出し丸くおさめる。312は、須恵器甕である。内面にあて具痕、外面に平行タタキがみられる。

313～325は第6層出土である。313は、土師器鉢Bである。口縁端部は、内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。a 0手法で調整される。314は、土師器杯Eである。口縁端部は丸くおさまり、c 3手法で調整される。外面は密にヘラミガキを施す。315～317は、須恵器杯Bである。315は、口縁端部を丸くおさめる。底部ヘラ切り後未調整で爪状圧痕がみられる。316は底部のみである。317は、口縁端部を丸くおさめる。口縁部外面に沈線を1条施す。底部から立ち上がり部にかけてロクロヘラケズリを施す。見込み部には、工具の痕跡がみられる。摩滅しており、使用痕と思われる。318は、須恵器皿Aである。口縁端部は、丸くおさめる。319・320は、須恵器杯ないしは皿である。いずれも口縁端部は丸くおさめる。321は、須恵器壺Kである。肩部が張り陵を持ち、平底で高台を付す。底部はロクロヘラケズリを施す。外面に自然釉がみられ、内面は気泡による焼き膨れがみられる。第12層から口縁部(339)が出土している。322～325は須恵器甕である。322は、口縁端部を平滑にする。全面に降灰がみられ、内外面には鉄分が附着している。口縁部外面には、爪状圧痕がみられる。323は、口縁端部を逆「ハ」の字に面を持つ。324は、外面に降灰がみられる。胴部は内面にあて具痕、外面に平行タタキがみられる。内面のあて具痕は、ナデ消されている。325は、須恵器甕Cである。肩部はあまり張らず、広口の口縁をもつ。口縁端部は平滑にし、内面にやや肥厚させる。頸部は「く」の字になる。胴部は、外面を格子タタキ、内面にあて具痕がみられる。胴部内面には、工具の痕跡がみられる。

326・330～342は第7層、327は第8層、328・329は第9層の出土である。326は、土師器皿A



第80図 井戸S E540出土遺物実測図2 (1/4)

の底部である。a手法で調整される。内面に内向きの螺旋暗文を施す。底部には、ハリ書きを刻す。内面にススが付着しており、灯火器に転用された可能性がある。327・328は、土師器皿Cである。いずれも口縁端部を外反させ、丸くおさめる。調整はe0手法。329・330は、土師器壺Bである。口縁端部を強くナデ外反させ、丸くおさめる。329は、土師器皿Cとともに口縁部を上に向けて出土した。粘土紐は右上に巻き上げる。内面はナデ調整、底部は丸底になる。330は粘土紐の巻き上げ痕が確認できない。内面はナデ調整、底部は平底になる。外面に黒斑を有する。

331～333は、須恵器杯Aである。いずれも口縁端部は丸くおさめる。口縁部をロクロナデで成形し、内面底部には不定方向のナデが入る。底部はヘラ切り後未調整である。降灰からいずれも内面外面に重ね焼き痕跡がみられる。334は、須恵器杯B蓋である。ツマミは宝珠形を呈する。335は、須恵器皿Eである。口縁端部は外反させ、丸くおさめる。内面は、ロクロナデ後底部に不定方向のナデ調整を施す。外面は、底部ヘラ切り後未調整である。灯火器であり、灯芯痕は3本確認できる。口縁部から底部外面まで油煙が確認できる。336・337は、須恵器高杯である。ともに、杯部は摩滅しており、打ち欠かされている。336は、脚部の端部をつまみ出し丸くおさめる。336・337は、内面にはしぼり痕がみられる。338は、須恵器壺の頸部である。ロクロナデで調整され、内面にしぼり痕が残る。339は、須恵器壺Kの頸部である。口縁端部は外傾する面をもち外側へ肥厚する。内外面に降灰がみられる。内面は、鉄分が付着する。340～342は、須恵器甕である。340は、外面を平行タタキ後カキメ、内面にあて具痕がみられる。341は、外面を平行タタキ、内面はあて具痕をナデ消す。外面に自然軸がみられる。342は、外面を平行タタキ、内面にあて具痕がみられる。タタキで成形した後内外面にロクロナデ調整を施す。

343・344は第12層出土である。343は、須恵器甕である。外面を平行タタキ、内面にあて具痕がみられる。344は、土管である。接続部はソケット状を呈する。外面は、タタキで成形した後ロクロナデを施す。内面は、接続部をロクロナデ調整、胴部に板ナデを施す。

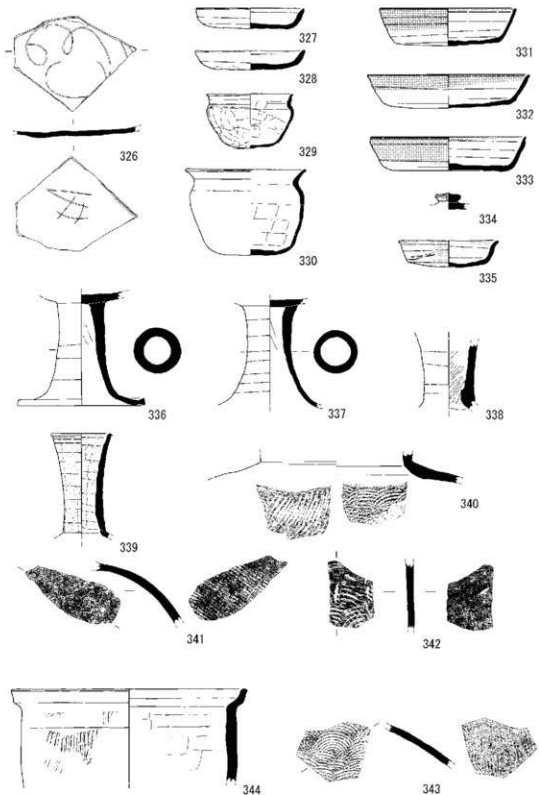
345は第9層出土である。345は、土師器甕Bである。口縁端部は上につまみ出し、内側へ肥厚させる。胴部は球形で、胴部中央に把手を付す。頸部には強いナデ調整を施し、「く」の字にする。最大径は胴部にくる。外面は、口縁部から頸部に粗いハケ調整後口縁部にナデ調整を施し、胴部に細かいハケ調整を施す。内面は、

付表4 井戸SE540出土土師器破片数一覧

土師器	器種	破片数
供膳具	杯A	3
	杯C	1
	杯E	1
	皿A	1
	皿C	3
	杯または皿	8
	鉢B	1
	計	18
	貯蔵具	壺B
計		2
煮炊具	甕A	1
	甕B	1
	甕類(胴部)	15
	甕(口縁部)	4
	計	21
土製品	土管	1
合計		42

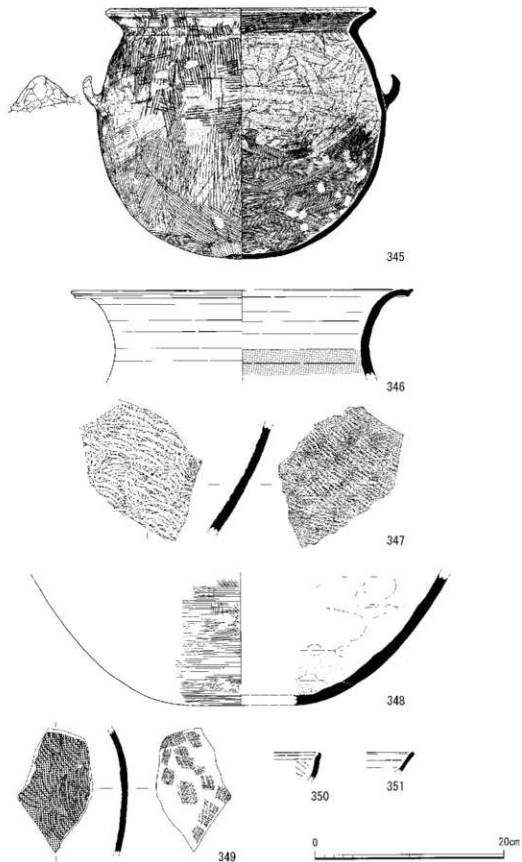
須恵器	器種	破片数
供膳具	杯A	13
	杯B	3
	皿A	1
	皿E	1
	杯または皿	11
	高杯	3
	杯B蓋	2
	計	34
貯蔵具	壺K	1
	壺	6
	甕C	1
	甕(口縁部)	6
	甕(胴部)	47
	計	61
合計		95

その他	器種	破片数
製塩土器		64
	総計	201



0 20cm

第81図 井戸SE540出土遺物実測図3 (1/4)



第82図 井戸SE540出土遺物実測図4(1/4)

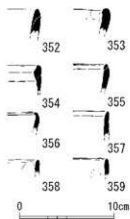
口縁部に粗いハケ調整を施し、胴部に板ナデを施す。把手には指頭圧痕がみられ、粗いハケ調整で胴部と接合させる。内外面ともにススが附着する。

346～348は第10層出土で、いずれも須恵器甕である。346は、口縁端部をつまみ出し、外に面をもつ。内面に黒色物が附着する。347は、胴部である。外面は格子タタキ後カキメを施し、内面にあて具痕がみられる。348は、底部である。内面は指頭圧痕がみられる。外面は、平行タタキの後カキメを施す。

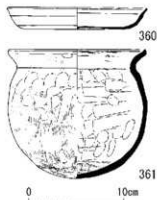
349は第11層出土である。349は、須恵器甕の胴部である。外面は、格子タタキ、内面にあて具痕がみられる。内面は研磨されており、墨が附着しているため、転用甕とみられる。

350～351は第13層(最下層)出土である。350は、土師器の杯または皿である。口縁端部は、内側へ折り返さず、ナデ調整で内へ肥厚させる。調整は、a 0またはb 0手法で調整される。内面に左上がりの1段放射暗文を施す。351は須恵器皿Aないしは皿Bである。口縁端部は、丸くおさめる。

352～359は製塩土器である。352は、口縁端部を丸くおさめる。内外面は、ナデと指頭圧痕がみられる。353は、口縁端部を丸くおさめる。内外面にナデを施す。354は、口縁端部を強くナデ、内傾する面をもつ。外面には粘土紐の接合痕がのこる。355は、内傾する面をもち、口縁端部を



第83図 井戸S E 540出土
遺物実測図(1/4)



第84図 埋納遺構S X 475
出土遺物実測図(1/4)

丸くおさめる。外面には粘土の接合痕がのこる。356は、口縁端部を内に折り返す。器壁は他の製塩土器と比べ薄い。357は、口縁端部をやや外反させ、丸くおさめる。358は、口縁端部を丸くおさめ、やや内傾する面をもつ。内面には指頭圧痕が残る。359は、口縁端部を丸くおさめる。外面には粘土の接合痕がのこる。断面と器表面で粘土の接合痕が観察できるものはすべて右上りにみられる。また、口縁部形態や胎土などが異なるため生産地が違う可能性がある。352は第15層、353・354は第7層、355は第10層から出土した。

埋納遺構S X 475(第84図360・361) 360は、土師器皿Aである。口縁端部は内へ折り返し肥厚させ、丸くおさめる。全体的に摩滅しており暗文の有無は確認できないが、a 0手法で調整される。361は、土師器甕である。口縁端部はつまみ出し、丸くおさめる。全体的に摩滅している。外面口縁部から頸部をナデ、「く」の字にする。外面胴部は、指頭圧痕後ハケ調整を施す。内面は、口縁部をナデ調整し、胴部を指頭圧痕後板ナデで調整し、底部内面に茶褐色の痕跡がみられる。底部外面には輪状に径約8cmの痕跡がみられる。

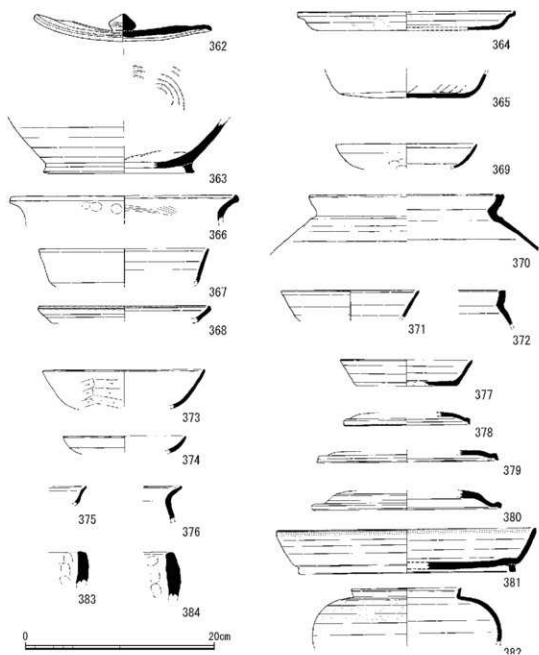
柱穴S P 282(第85図362) 362は、須恵器杯B蓋である。縁部は、つまみ出し丸くおさめる。ツマミは宝珠形を呈する。頂部はヘラ切り後未調整である。頂部外面と内面の一部に自然軸がみられる。また、全体的に激しく焼き歪んでおり、二次被熱を受けている。

柱穴S P507(第85図363) 363は、須恵器壺である。底部外から立ち上がり部にかけてロクロヘラケズリ調整を施す。見込み部には、青海波紋のあて具痕がみられる。

柱穴S P617(第85図364) 364は、須恵器皿Aである。口縁端部は内へ折り返し肥厚させ、丸くおさめる。土師器皿Aを模した器形を呈している。内外面に火樺がみられる。

土坑S K225(第85図365) 365は、土師器杯Aである。調整は、摩滅しており確認できない。内面に1段放射暗文と螺旋暗文を施す。

土坑S K271(第85図366～368) 366は、土師器甕である。口縁端部は、内側に折り返し肥厚し、丸くおさめる。口縁部内面にハケ調整、外面には指頭圧痕がのこる。367は、須恵器杯Aないし



第85図 柱穴S P282・507・617、土坑S K225・271・360・550出土遺物実測図(1/4)

は杯Bである。口縁端部は、丸くおさめる。368は、須恵器皿Cである。口縁端部は、外傾する面をもつ。口縁端部には、重ね焼き痕がみられる。

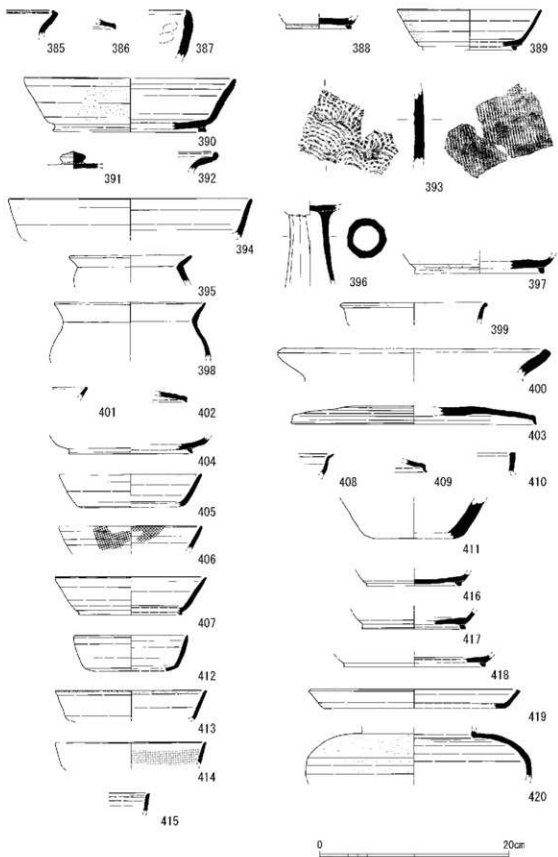
土坑S K 360 (第85図369～372) 369は、土師器皿Cである。口縁端部は丸くおさめる。b 0手法で調整される。370は、土師器甕である。口縁端部は、平滑にし、内へやや肥厚させる。頸部内面は、面をもち、内面には工具痕がみられる。体部は内外面に板ナデを施す。371は、須恵器杯Aないしは杯Bである。口縁端部は丸くおさめる。372は、須恵器鉢Dである。口縁端部は、平滑にする。肩部はあまり張らない。

土坑S K 550 (第85図373～384) 373は、土師器杯Aである。口縁端部は肥厚せず丸くおさめる。c 0手法で調整される。374は、土師器皿Aである。口縁端部は、内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。調整は不明である。内面に暗文はみられない。375は、土師器杯ないしは皿である。口縁端部を内側に折り返され肥厚し、丸くおさめる。a 0手法ないしはb 0手法で調整される。内面に暗文は確認できない。376は、土師器甕である。口縁端部は、内側に折り返される。口縁部は、ナデ調整を施す。377は、須恵器杯Aである。口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後未調整。378～380は、須恵器杯B蓋である。縁部は、いずれもロクロナデでつまみ出し、内面に沈線を施す。378は、摩滅しており頂部の調整は不明だが、379・380はロクロヘラケズリ調整を施す。381は、須恵器皿Bである。口縁端部は丸くおさめる。底部はロクロヘラケズリ調整。口縁端部内外面に重ね焼き痕がみられる。382は、須恵器壺Aである。口縁端部は内傾する面をもつ。頸部に重ね焼き時の融着がみられる。383・384は、製塩土器である。いずれも、口縁端部は平滑にする。内面には指頭圧痕がみられる。

溝S D 460 (第86図385～387) 385は、土師器甕である。口縁端部は、内へ折り返され肥厚し、丸くおさめる。386は、須恵器蓋である。縁部は、つまみ出し丸くおさめる。387は、製塩土器である。口縁端部は、内へつまみ出し丸くおさめる。

溝群1 (第86図388～397) 388・389は、須恵器杯Bの底部である。いずれも底部ヘラ切り後未調整。389は、口縁端部を丸くおさめる。外面には、気泡による焼き膨れがみられる。390は、須恵器皿Bである。口縁端部は丸くおさめる。底部ヘラ切り後ロクロヘラケズリ調整。口縁部外面は、降灰がみられる。高台には、重ね焼き時の融着がみられる。391は、須恵器杯B蓋である。つまみは宝珠形を呈する。392は、土師器甕である。口縁端部は、内へ折り返され肥厚し、丸くおさめる。393は、須恵器甕である。外面を平行タキ後カキメ、内面にあて具痕がみられる。394は、須恵器皿Aないしは皿Bである。口縁端部は丸くおさめる。395は、土師器甕である。口縁端部は、丸くおさめる。396は、土師器高杯の脚部である。面取りを11面持つ。397は、須恵器杯Bないしは皿Bである。底部のみである。底部ヘラ切り後ロクロナデ調整。

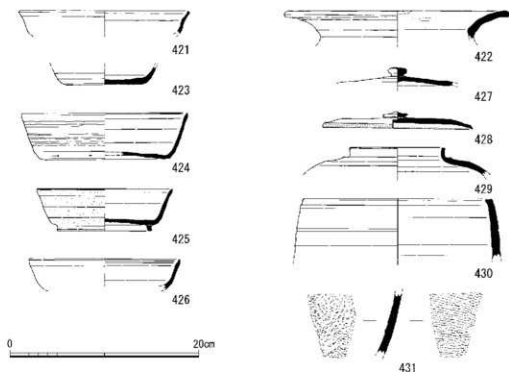
溝群2 (第86図398～420) 398は、土師器甕である。口縁端部は、内に巻きこまず丸くおさめる。頸部は、「く」の字に曲がる。399は、須恵器皿Eである。口縁端部は、外反させ丸くおさめる。内面には油煙が付着しており灯火器に使用されている。内外面に重ね焼き痕がみられる。400は、土師器甕である。口縁端部は、内面を強くナデ面を持つ。器表面が荒れているため調整は不明で



第86図 溝S D460・溝群1・溝群2出土遺物実測図(1/4)

ある。401は、土師器杯ないしは皿である。口縁端部は、内へ折り返され肥厚し、丸くおさめる。摩滅しており調整は確認できない。402は、須恵器蓋である。縁部は、つまみ出し丸くおさめる。403は、須恵器皿B蓋である。縁部は、つまみ出しやや外反させ、丸くおさめる。頂部ヘラ切り後ロクロヘラケズリ調整。内面は、ロクロナデ後中央部に不定方向のナデ調整を施す。404は、土師器杯Bないしは皿Bである。高台は、「ハ」の字を呈する。器表面が荒れているため、調整などは不明である。405・406は、須恵器杯Aないしは杯Bである。口縁端部は、丸くおさめる。406は、内外面にスガが付着しており灯火器に転用されている可能性がある。407は、須恵器杯Bである。口縁端部は、丸くおさめる。408は、須恵器杯Fないしは杯Lである。口縁端部は、外反させ丸くおさめる。409は、須恵器蓋である。縁部は、つまみ出しやや外反させ、丸くおさめる。410は、須恵器鉢Dないしは甕Cである。口縁端部は、平滑にし、内へやや肥厚させる。411は、須恵器壺である。摩滅しており、調整は確認できない。412は、須恵器杯Aである。底部ヘラ切り後未調整。413～415は、須恵器杯Aないしは杯Bである。口縁端部は、丸くおさめる。いずれも重ね焼き痕がみられる。内外面に重ね焼き痕がみられる。416～418は、須恵器杯Bである。いずれも、底部ヘラ切り後未調整である。419は、須恵器皿Cである。口縁端部は、平滑にし、内へ肥厚させる。底部ヘラ切り後ロクロヘラケズリ調整。420は、須恵器壺Aである。口縁端部は、残存していない。体部外面には降灰がみられる。

落ち込みS X94 (第87図421～431) 421は、土師器杯ないしは皿である。口縁端部は巻き上げ肥厚させ、丸くおさめる。器表面は荒れているため暗文や調整は確認できない。422は、土師器甕である。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面にハケ調整を施す。被熱した痕跡はみられない。



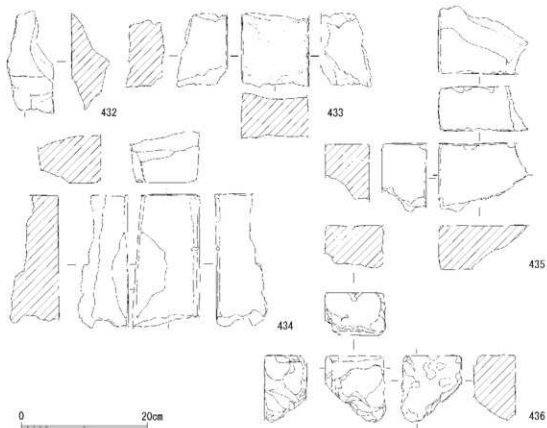
第87図 落ち込みS X94出土遺物実測図(1/4)

423・424は、須恵器杯Aである。423は、底部のみである。底部へラ切り後未調整である。424は、口縁端部を丸くおさめる。底部から立ち上がり部までロクロヘラケズリ調整を施す。外面全面にヘラミガキを施す。425は、須恵器杯Bである。口縁端部は丸くおさめる。底部へラ切り後未調整。外面底部から口縁部にかけて降灰がみられる。また、立ち上がり部外面には重ね焼き時の融着がみられる。426は、須恵器杯Cである。口縁端部は工具で沈線を1条施す。427・428は、須恵器杯B蓋である。427は、頂部へラ切り後ロクロナデ調整。ツマミはボタン状を呈する。428は、縁部をつまみ出し丸くおさめる。頂部外面をヘラケズリ後、縁部付近をロクロナデ調整。ツマミは、宝珠形を呈する。重ね焼き痕がみられ、縁部が焼き歪んでいる。429は、須恵器壺Aである。口縁端部は平滑にし、直立する短い口縁部を持つ。肩部に蓋を重ね焼きした際の融着がみられる。430は、須恵器鉢Eである。バケツ状の形態になる。口縁端部は、平滑にする。体部外面に沈線を1条施す。431は、須恵器甕である。外面を平行タタキ、内面に於て具痕がみられる。

(田中秀弥)

(2) 瓦埴類

①埴(第88図432～436) 432～436は埴である。埴は全5点、総重量4,990gが出土した。完形品はなく、全て破片である。434は直方体を呈するが、他の形態は不明である。粘土の継ぎ目を確認でき、粘土を何度か重ね合わせて成形した後に丁寧なナデ調整を施す。胎土は精良であるが、砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻である。436は還元焙焼成となっており、青灰色を呈する。



第88図 埴実測図(1/6)

それ以外の個体では黒斑が見られる。432・433は道路S F 2北側溝S D165、434は落ち込みS X 94、435は掘立柱建物S B 7柱穴S P 20の柱抜き取り穴、436は灰白色土層から出土した。

②丸瓦(第89図437~444) 丸瓦は6,600gと出土数が少なく、抽出できる属性も少ないので、平瓦のような製作技法上の類別には至らなかった。本項では、比較的残存率の高い資料を抽出し、概説する。なお、丸瓦で端部の残存する資料はすべて玉縁式で、平面形態が台形の個体は存在しないため、行基式の丸瓦は用いられていなかったと考えられる。また、凹面に模骨痕が認められる個体も存在しなかった。

438・440・442・443・444は、凸面にナデやケズリ調整を施すことで、成形時のタタキ調整を完全に消す。凹面は無調整である。442のように白色で軟質のものや、440のようにいぶし風の黒色を呈するものなど、焼成や色調はさまざまで、胎土も多様である。442は道路S F 1東側溝S D160、443は掘立柱建物S B13の柱穴S P 654、444は土坑S K550、437~441は井戸S E540から出土。その他、同様の丸瓦が柱穴S P 626、柱穴S P 774といった遺構からも少量出土している。

③平瓦(第90図445~第92図471) 平瓦は、出土量が29,230gと少ないうえ、摩滅の激しい細片資料がほとんどである。そのため、ここでは調整などの残存が比較的良好な19,886gを対象とし、タタキ具の形状(格子のサイズ、縄の粗密なども含む)、凸・凹面調整、焼成、色調といった製作技法上のまとまりごとに類別し、報告する。なお、本項の分類は製作技法上の特徴に基づいているため、異なる分類の瓦は製作地や工人集団が異なると考えてよいが、同一分類内の瓦がすべて同一製作地、同一工人集団の手によるものとは限らないことをお断りしておく。

1類(第90図445・第92図460) 凸面は、一辺3mm×3mmの細かい格子タタキした後、全面的に軽くナデ。端縁付近には指頭痕が残り、側縁付近に凹型台圧痕が残るものもある。凹面は、側縁付近を中心としてナデ。模骨痕が残るため、桶巻づくりの可能性もあるが、布織じや粘土織じ合わせの痕跡を持つ個体は確認できない。布目は3cm四方あたり、およそ縦糸18本×横糸21本。焼成は堅緻で暗オリーブ色を呈する。井戸S E540から出土。総量1,461g。

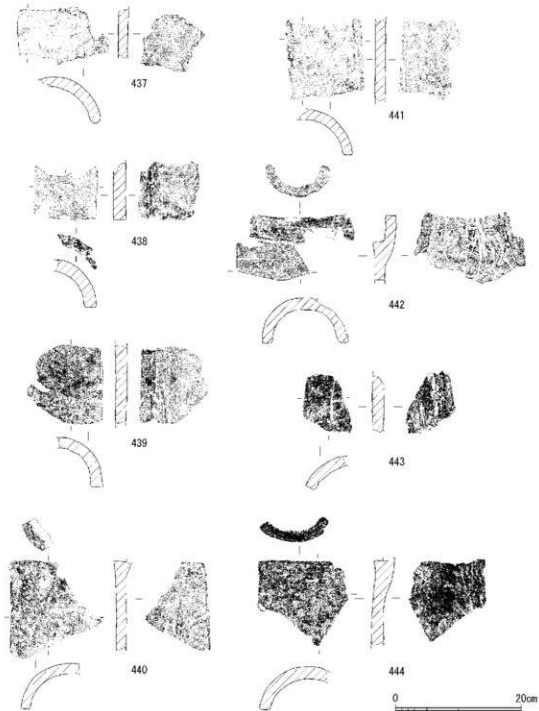
2類(第90図446・第92図466) 凸面は、格子タタキをするが摩滅によりその形状が明瞭ではない。凹面は、縦方向に部分的なナデ。模骨痕のような凹凸が認められるものの、凸面には離れ砂を使用しており、薄く層状に剥離する個体があるため一枚づくりの可能性もある。布目は3cm四方あたり、およそ縦糸20本×横糸22本。焼成は堅緻で、凹面と側面のいぶし風に仕上がる。井戸S E540や掘立柱建物S B14の柱穴S P 611から出土。総量1,200g。

3類(第90図447・第92図459) 凸面は、一辺10mm×10mmの粗い格子タタキをした後、部分的にナデ。凹面は無調整であり、模骨痕が残らないので、一枚づくりの可能性はある。布目は3cm四方あたり、およそ縦糸20本×横糸24本。焼成は堅緻で灰色を呈するが、焼成が甘い箇所は浅黄橙色を呈し、赤色粒子を含む。井戸S E540や掘立柱建物S B14のS P 611から出土。総量575g。

4類(第90図448・第92図457) 凸面は、2cmあたり85本の縄を束ねた細かいタタキ原体で縄タタキを施し、ナデ調整などはおこなわない。凹面は無調整で側縁をケズリ。模骨痕が認められるうえ、凸面狭端側のタタキが斜行し、縄目には不整合が見られるため、これをタタキ締めの日

弧と捉えると桶巻きづくりの可能性がある。布目は3cm四方あたり、およそ縦糸21本×横糸26本。焼成は堅微で、灰色から白色を呈する。井戸SE540から出土。総量1.015g。

5類(第90図449・第92図467・468) 凸面は、2cmあたり6本の縄を束ねたタタキ原体で縦位縄タタキを施し、全面的なナデ調整などはおこなわないが、端縁付近はナデや指頭痕の痕跡が残る個体もある。凹面は無調整で摸骨痕が残るが、桶巻きづくりと断定する根拠は見いだせない。布



第89図 丸瓦実測図(1/6)

目は3cm四方あたり、およそ縦糸25本×横糸25本。焼成はやや軟質で、表面がいぶし風に黒色に仕上がる。井戸S E152、井戸S E540、土坑S K550から出土。総量745g。

6類(第90図450・第92図458・461) 凸面は、2cmあたり4本の縄を束ねた粗いタタキ原体で縦縄タタキを施し、狭・広端縁付近をユビオサエする。また、凸面にのみ離れ砂や粘土塊の痕跡が明瞭に認められる。凹面は無調整で糸切り痕が認められるも、明瞭な模骨痕は認められないため、凸面の状況(離れ砂、粘土塊痕跡)と勘案して一枚づくりと考えられる。側面はケズリ調整だが、凸面側から2度以上にわたってケズリをおこなったため、段を有する。布目は3cm四方あたり、およそ縦糸21本×横糸23本。焼成は非常に堅緻で須恵質に仕上がりに、色調は灰色からオリブ灰色を呈する。6類は本遺跡で唯一の完形資料があり、その法量は広端25cm、狭端22cm、全長33cm、重量2680gとなる。井戸S E152、井戸S E540で出土。総量3540g。

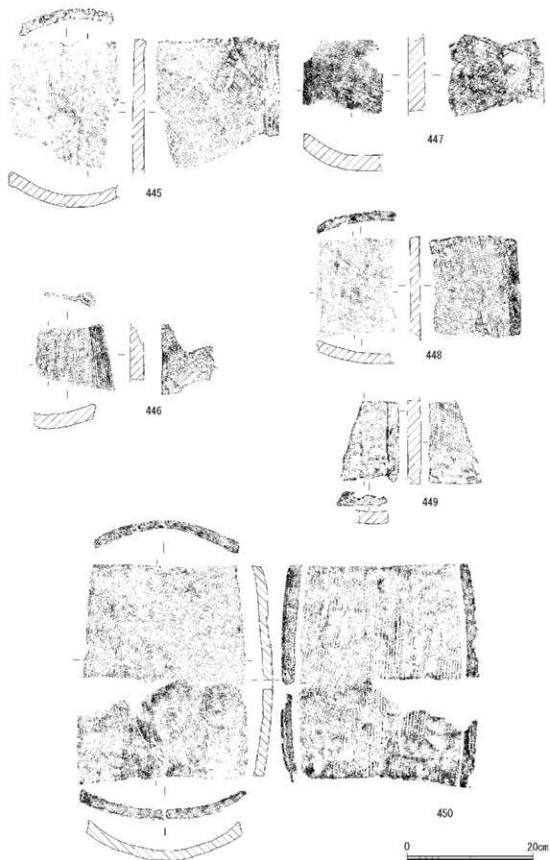
7類(第91図451・第92図463・464・471) 凸面は、2cmあたり5本の縄を束ねたタタキ原体で縦縄タタキを施す。ナデ調整はおこなわないが、縄目が全体的に平滑となっているため、凹型台に乗せていた可能性がある。凹面は部分的にナデ調整し、側縁を面取りする。また、分割凸帯の痕跡が明瞭に残るため、桶巻づくりであったことが分かる。布目は3cm四方あたり、およそ縦糸30本×横糸24本。焼成はやや軟質で、全面的にいぶし風のオリブ黒色を呈する。胎土に砂粒子や直径2～6mmの鉱物を多量に含む。掘立柱建物S B14の柱穴S P733、道路S F1東側溝S D160、掘立柱建物S B5の柱穴S P269、落ち込みS X94から出土。総量2325g。

8類(第91図452) 凸面は、おそらくタタキ締めの際を描く縄タタキを施した後、全面をヨコナデする。凹面も全面的なヨコナデを施す。ナデによって模骨痕は明瞭ではないが、布織じ痕が認められるため、桶巻づくりであったことが分かる。布目は3cm四方あたり、およそ縦糸33本×横糸28本。焼成は極めて堅緻で須恵質に焼き上がり、色調は青灰色を呈する。井戸S E540から出土。総量2055g。

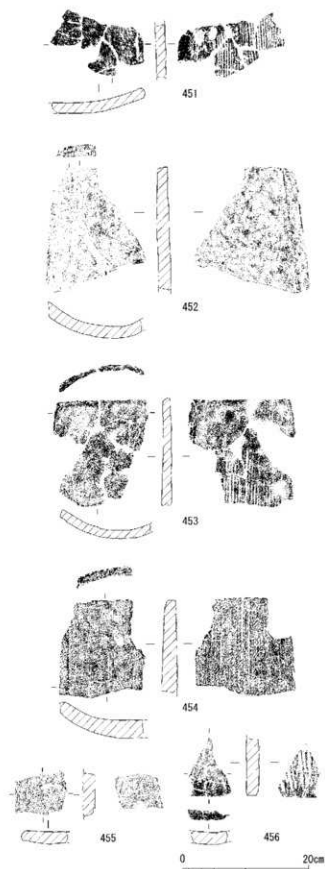
9類(第91図453) 凸面は2cmあたり5本の縄を束ねたタタキ原体で縦縄タタキを施した後、全体的にナデを施すも、わずかに縄目は残存する。凹面も全体的にナデするが、部分的に糸切り痕や布目痕が残る。模骨痕が認められず、凸面に離れ砂が認められるので、一枚づくりであった可能性がある。布目は摩滅のため計測ができない。焼成はやや軟質で、色調は黄灰色を呈する。掘立柱建物S B14の柱穴S P611で出土。総量1910g。

10類(第91図454・第92図462・465・469・470) 凸面は、2cmあたり8本の縄を束ねたタタキ原体で縦縄タタキを施す。摩滅によって調整が詳らかではないが、部分的にナデを施していた可能性もある。凹面も同様に調整の詳細が分からないが、側縁はケズリ調整する。摩滅を考慮しても明瞭な模骨痕が認められないため、一枚づくりの可能性はある。布目は3cm四方あたり、およそ縦糸18本×横糸24本。焼成は非常に軟質で、色調は灰白色を呈する。道路S F1東側溝S D160、井戸S E152、掘立柱建物S B13の柱穴S P706、柱穴S P774から出土。総量4,020g。

11類(第91図455) 凸面は縦縄タタキを施し、縄目を全体的にすり消す。側縁には凹型台片痕が残る。凹面も全面的にすり消し、側縁をケズリ調整する。明瞭な模骨痕は認められないが、



第90図 平瓦実測図1 (1/6)



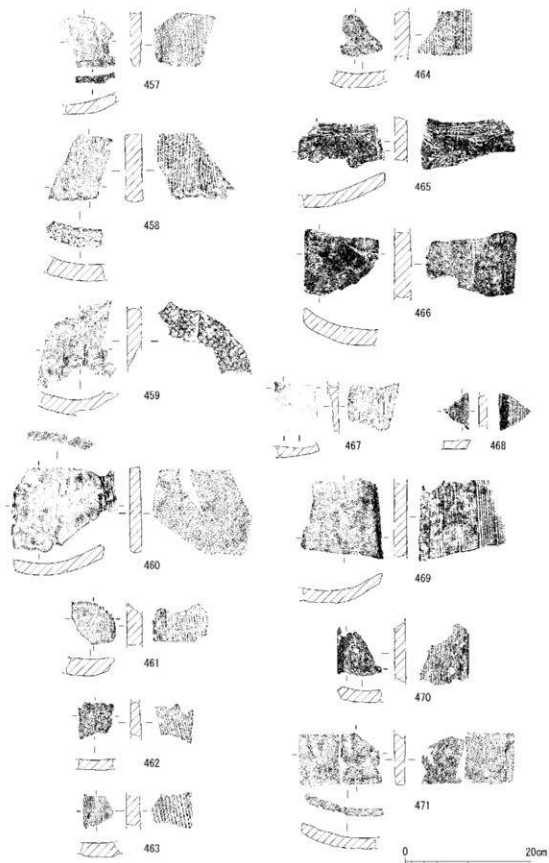
第91図 平瓦実測図2 (1/6)

小片の資料しか出土していないため、桶巻きづくりか一枚づくりかは断定できない。布目は摩滅のため計測ができない。焼成は軟質で、色調はいぶし風の灰色を呈する。道路S F 1 東側溝S D160から出土。総量1,040 g。

この他に、456のように平行タタキの一枚づくりのものも遺物包含層から出土している。また、残存状況や摩滅などにより類別が不可能な資料が9,344 g 出土した。

なお、分類し得た瓦は、すべて奈良時代中頃及びその廃絶時の遺構に伴っているため、その使用時期は奈良時代中頃と考えてよい。また以上の類別を一次成形の技法ごとにまとめると、桶巻きづくりの可能性のあるものは、4類・7類・8類で、一枚づくりの可能性のあるものは、3類・6類・9類・10類である。2類・5類・11類は桶巻きか一枚かの判別がつかない。量比を見ると、桶巻きが5,395 g、一枚が10,045 g、不明が2,985 gとなり、一枚づくりの平瓦が卓越する。

(新尺雅弘)



第92図 平瓦実測図3 (1/6)

(3) 井戸枠材

井戸SE540の井戸枠材は、縦板と横棧、隅柱で構成されていた。以下では、樹種同定の成果(付編3第1節)を踏まえ、部材ごとに報告を行う(第93図472～第99図539)。

縦板(第93図472～第96図521) 472～489は南側に使用された縦板である。南側の縦板は使用枚数が最も多く、縦板間の目地の間を塞ぐように2列に並べられていた。そのうち、472～477は外側(井戸掘形側)に使用されていた縦板である。478～489は内側(井戸枠内側)に使用されていた縦板である。490～499は東側、500～507は北側、508～520は西側に使用された縦板である。

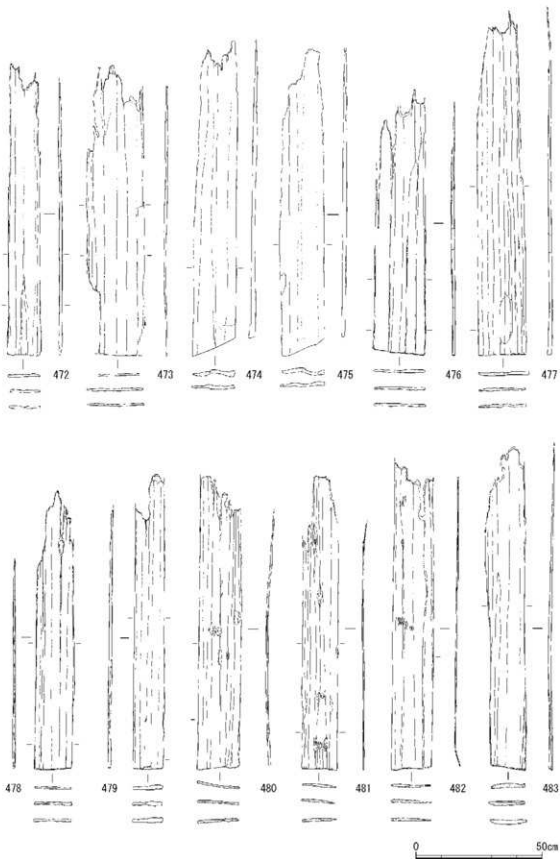
縦板は全50点出土した。全てヒノキの割材である。柁目、板目の材が使用される。上端部は腐朽と欠損により、全長は不明である。両面ともに割肌であり、加工は行わずに凹凸や段差を有する、いわゆるへぎ板である。また、節による円形の凹みも確認できる。側面にはわずかに加工痕が残る。縦板下端は直線もしくは斜めに作り出しており、木口面には加工痕を残す。断面形は平坦な長方形を呈する材と湾曲する材がある。縦板下端を斜めに作り出す材は全て断面が湾曲しており、厚さ1.3～3.8cmを測る。縦板下端を直線に作り出す材は断面が平坦な長方形を呈する材であり、厚さ0.5～2.8cmを測る。495や521のように、他に比べて幅が狭く薄い縦板は縦板間の目地の間を塞ぐように当て並べていた。478は辺材及び樹皮直下の部分が残存しており、年輪年代測定の結果、伐採年代は725年という結果を得た(付編3第2節)。また、縦板の接合検討を実施した結果、南側の縦板474・475、東側の縦板490の3点、北側の縦板505と西側の縦板515の2点が接合した。使用位置の異なる縦板が接合したことから、いくつかの原材を分割して製作されたと考えられる。井戸枠の樹種と木材利用の詳細に関しては付編3第3節に譲る。

横棧(第97図522～第98図535) 横棧は全14点出土した。522・523は南側、524～526は東側、527・528は北側、529～531は西側に使用された横棧である。532～535は井戸枠内から出土した横棧である。横棧は、南・東側と北・西側では全長が異なっており、井戸枠本体はいびつな形の四角形であった。横棧は樹種の異なる3種類の木材で製作されており、ヒノキが8点、スギが4点、サカキが2点用いられている。

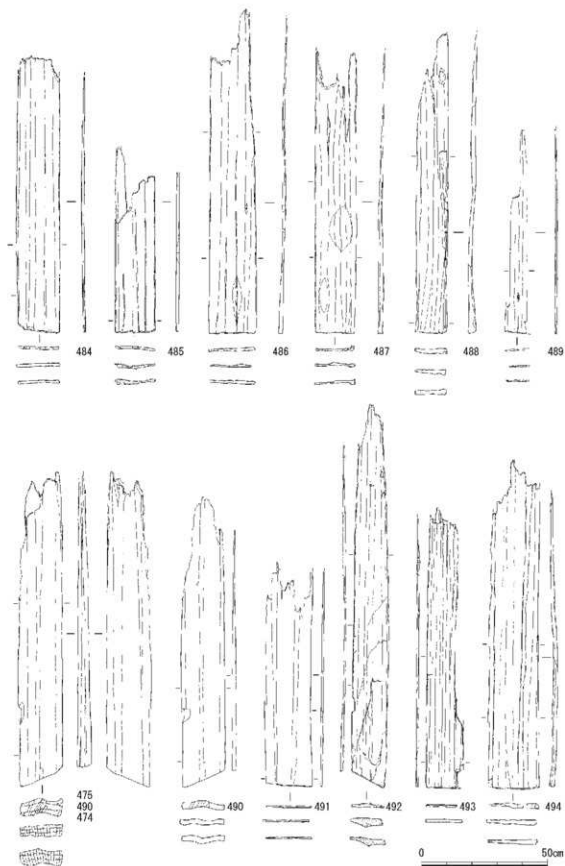
スギとヒノキを用いる横棧はいずれも芯去りの割材である。断面形は方形を呈する。535のみ加工を行わずに割肌を呈するが、それ以外は全て平行切削の加工痕を残す。枝を払った痕跡も確認でき、節を残すものもある。両端部には柄を作り出すが、522・525・527～530のように端部の全面を加工し、テーパー状の柄を製作するもの、523・530・535のように側面形が直線と斜めを組み合わせた柄の形態があり、柄の製作の違いが見られる。木口に加工痕を残す。

サカキを用いる526・531の2点はいずれも、小径木の芯持ち丸木材である。断面形は円形で枝を払った痕跡を残す。木口面には加工痕を残す。いずれも西側と東側の井戸枠の最下段に用いられていた。後述する隅柱の最下段には横棧を挿入する柄穴が穿孔されていないため、井戸枠の最下段では横棧を隅柱と縦板の間に挟みこんで使用していた。

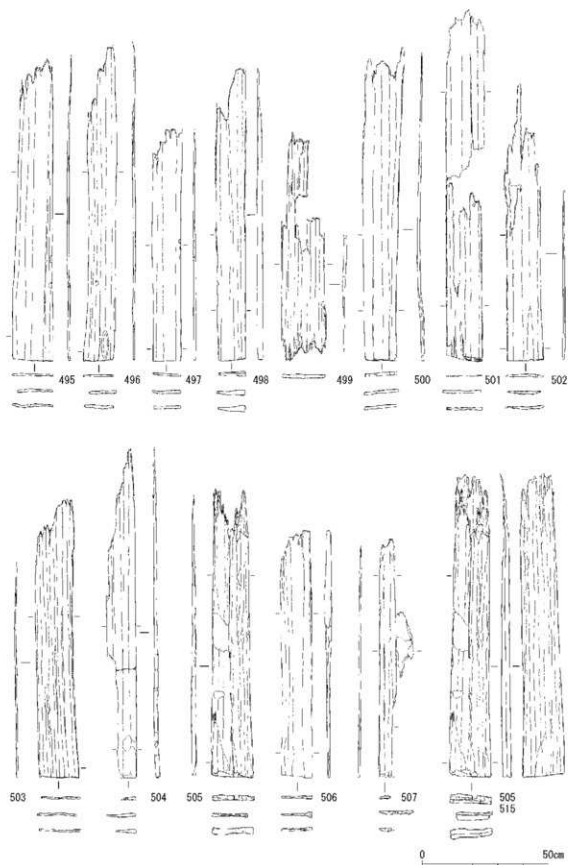
隅柱(第99図536～539) 井戸枠の四隅には隅柱が用いられており、全4本出土した。上端は腐朽により劣化しているため全長は不明である。井戸枠として設置された南側の面を正面として報



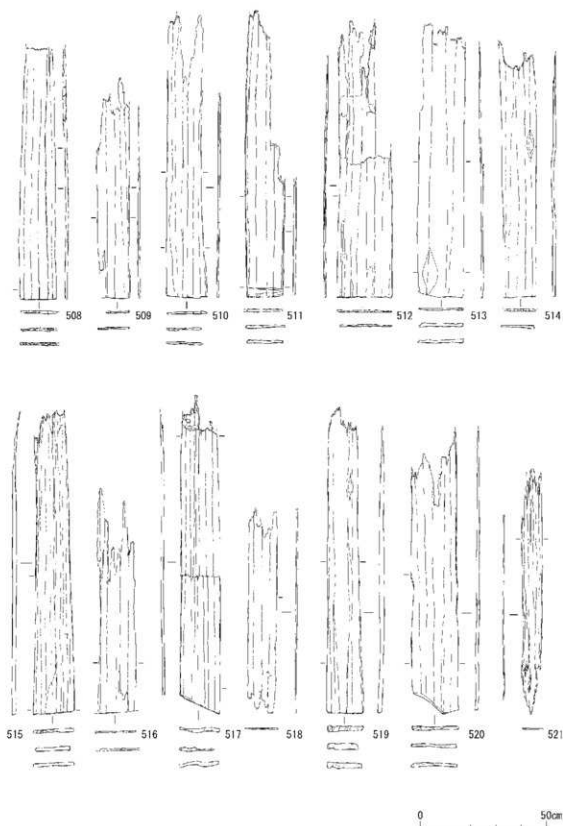
第93図 井戸SE540井戸枠材実測図1(1/15) 南側縦板1



第94図 井戸S E540井戸枠材実測図2 (1/15) 南側縦板2・東側縦板1



第95図 井戸SE540井戸枠材実測図3 (1/15) 東側縦板2・西側縦板1



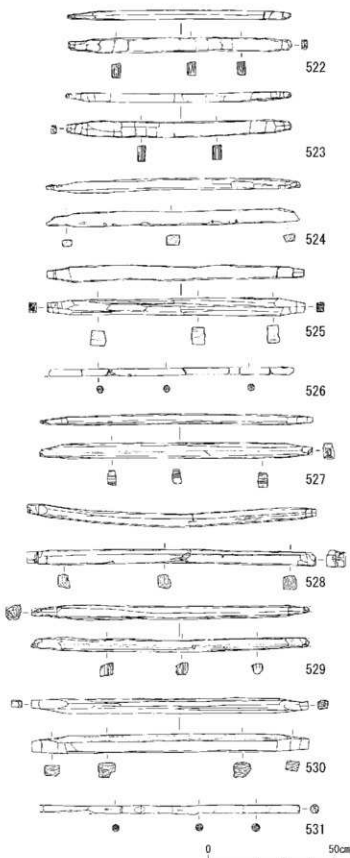
第96図 井戸S E 540井戸枠材実測図4 (1/15) 西側縦板2・北側縦板

告する。いずれも、ヒノキの芯去り材を用いた建築部材の転用材である。刃物の痕跡と考えられる筋状の痕跡と平行切削の加工痕を残す。建築部材本来の穿孔は再利用せずに、二次加工で横棧を挿入するための長方形の柄穴を新たに穿孔する。柄穴は各隅柱の2方面に穿孔され、同一の段においては上下に位置を違えて配置される。柄穴内部には加工痕を残す。

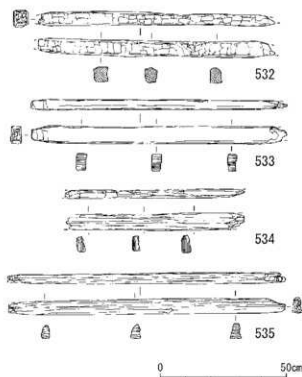
536は南西隅に使用された隅柱である。断面形は長方形を呈する角材である。下端は斜めに加工し、木口には一定方向からの加工痕を残す。正面に向かって北側と東側の各2か所に2次加工の柄穴を穿孔する。柄穴は長辺4.8～5.8cm、短辺3.0～3.6cm、深さ3.4～4.4cmを測る。

537は南東隅に使用された隅柱である。断面形は八角形を呈する。下端は斜めに加工し、木口には加工痕を残す。正面に向かって北側と西側の各2か所に2次加工の柄穴を穿孔する。柄穴は長辺5.2cm、短軸4.0cm、深さ4.0cmを測る。

538は北西隅に使用された隅柱である。断面形は方形を呈する角材である。表面には節が確認できる。下端は斜めに加工しており、木口には一定方向からの加工痕を残し、木口隅には折り取り痕を残す。下部には建築部材本来の仕口である欠込と柄穴を残す。欠込は



第97図 井戸S E 540井戸枠材実測図5 (L/15) 横棧1



第98図 井戸SE540井戸枠材実測図6(1/15) 横棧2

柄穴は長辺28cm、短辺30cm、深さ2.0cmを測る。正面に向かって北側と西側の各2か所に2次加工の柄穴を穿孔する。柄穴は長辺4.8~5.2cm、短辺3.8~4.2cm、深さ4.4cmを測る。

(4)木製品

井戸SE540(第100図540~544) 木製品は横櫓、蓋板、燃えさし、加工木が出土した。横櫓・蓋板及び加工木については樹種同定を行ったため、その結果を踏まえて報告する(付編3・4)。

540は横櫓である。ツゲ材を削り出して製作する。平面形は長方形で、肩部に丸みを持つ。よく磨かれており、全面を平滑に仕上げる。背から親歯側面にかけて稜線を作り出す。棟と歯の間には毛引きの線がみられる。歯は挽歯によって製作されるが、毛引きまで完全に挽かれておらず、挽実が残る。歯に加工痕は残らない。歯は細かく77本遺存しており、3cmあたりの本数は29本である。親歯と歯の間隔は広がっている。親歯先端の歯側を斜めに面取りする。

541は蓋板である。ヒノキの板目材を用いる。半分を欠損しているが、平面形は楕円形を呈する。断面形は中心に向かって幅を広げ、器面の外面は斜めに立ち上がり、内面は直線を呈しており、内外面を作り分けている。外面には刃傷と考えられる筋状の痕跡が見られる。外形側面には面取りを行った際の加工痕を残す。中央部には隅丸方形の穿孔を施す。穿孔内側面には筋状の加工痕を残す。把手用の孔であると考えられる。外面の縁部付近には墨書がみられる。

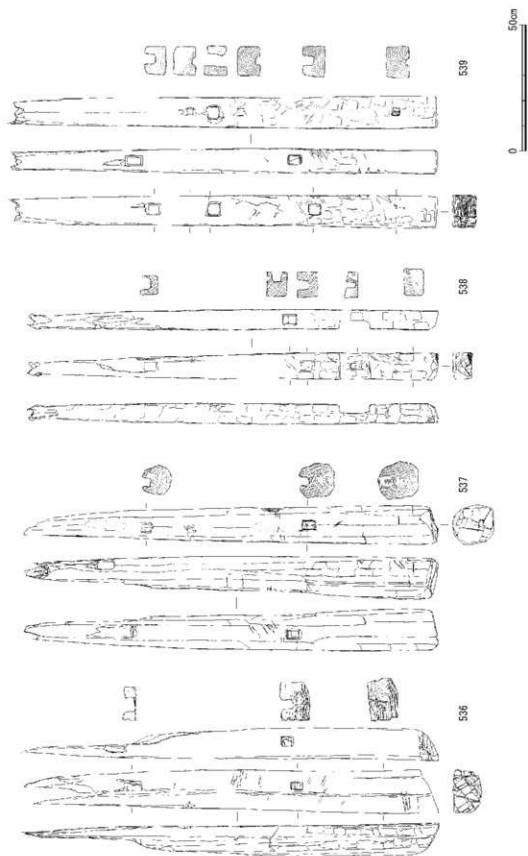
542は燃えさしである。針葉樹の芯去りの割材を用いる。先端部は被熱により炭化している。SE540第13層(井戸枠内最下層)から出土した。

543は加工木である。SE540第4層から出土した。樹種はコウヤマキで割肌を呈する板目材である。井戸枠部材とは樹種が異なる。

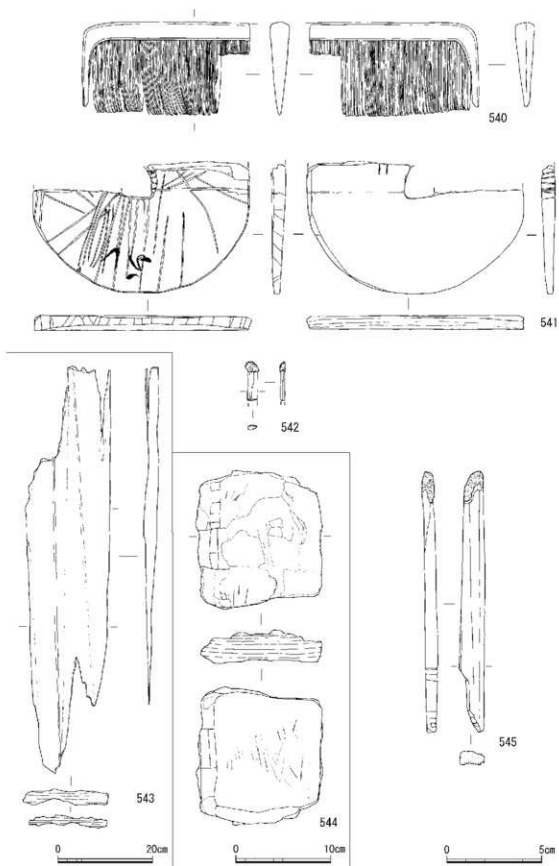
長方形で、長辺12.4cm、短辺10.2cm、深さ2.4~3.2cmを測る。柄穴部分は長方形で、長辺5.0cm、短辺2.45cm、深さ3.6~4.4cmを測る。柄穴正面から向かって南側と東側の各2か所に2次加工の柄穴を穿孔する。柄穴は長辺5.3~6.0cm、短辺4.3~4.4cm、深さ3.9~4.4cmを測る。

539は北東隅に使用された隅柱である。断面形は方形を呈する角材の柱である。下端は直線形に加工し、平坦である。木口には加工痕を残し、木口の中央部には折り取り痕を残す。中央部には建築部材本来の仕口である貫通穴があり、その両側に柄穴が位置する。貫通穴は長辺5.6cm、短辺5.0cmを測る。両側の柄穴は長辺3.2cm、短辺2.8cm、

深さ2.0cmを測る。下部にも柄穴が位置し、



第99図 井戸S.E.5.40井戸枠材実測図7 (L/15) 隅柱



第100図 木製品実測図(1/2・1/4・1/8)

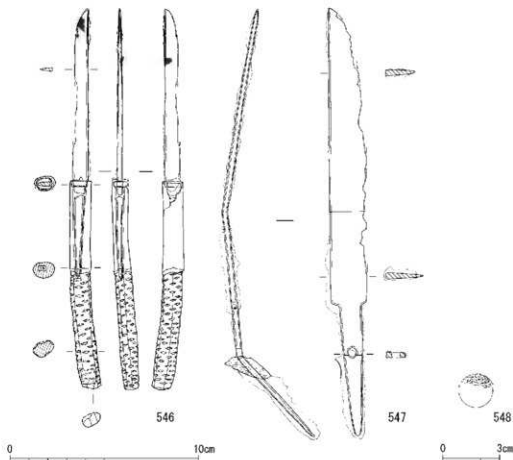
544は加工木である。SE540第13層(井戸枠内最下層)から出土した。広葉樹の板目材である。劣化のため、木肌が荒れているが、両面に長い筋状の加工痕を残す。側面片側では表裏の2方向から加工を行っており、加工痕を残す。木材の切断加工の痕であると考えられる。

溝群2溝SD471(第100図545) 545は燃えさしである。針葉樹の芯去りの割材を用いる。先端部から下端部にかけて幅を広げる。下部は段差を作り出し、加工痕を残す。

(5) 金属製品(第101図546～548)

546は井戸SE540の8層から出土した刀子である。柄に装着された状態で出土した。刀身の茎部と柄の中央部分が破損している。刀身の切先はふくらみを持ち、刃部断面形は二等辺三角形で、鑷を持たずに刃部を作り出す。刃部は使用のために研ぎ減りしている。刃部には漆と考えられる黒色の付着物が見られる。関は背部側に直角の片関を作り出す。茎部は茎尻に向けて幅を減じ、茎尻は円頭形を呈する。茎部の断面形は隅丸方形を呈する。

柄はモクレン属の芯去りの割材を用いる(付編4)。柄断面形は多角形であり、面を作り出す。X線ラジオグラフィによる観察では、柄内部を削り抜き、茎部を柄に差し込んでいる。関部では鉄製の錘により固定する。柄は刀身の背側に湾曲し、柄尻は面取りして整形する。柄は全面を面取りした後に漆を塗布する。漆を塗布した後に柄尻から柄中央部の全面に刻目を施す。刻目は2方向から刃を入れており、平面形はレンズ状を呈する。刻目は重複せず、斜め方向もしくは千鳥



第101図 金属製品実測図(1/2)

状に割り付けられたと考えられる。

547は刀子である。灰白色土層から出土した。刃部中央部と茎部の2か所で湾曲している。切先はふくらみを持つ。刃部断面形は二等辺三角形で、鑄を持たずに刃部を作り出すが、使用のため研ぎ減りしている。関はなで肩状の両関である。茎部は関から茎尻に向かって幅を減じており、茎尻は円頭形を呈する。茎部背部には柄木と考えられる木質が残存している。茎部の断面形は隅丸方形を呈する。茎部中央部には、円形の日釘穴を1つもち、直径5mmを測る。

548は和同開珎の破片である。建物S B 4南側の灰白色土層から出土した。「和」の部分のみ残存する。表面が剝離しており、文字は凹状を呈する。708年初鋳である。

(福山博章)

4) 平安時代

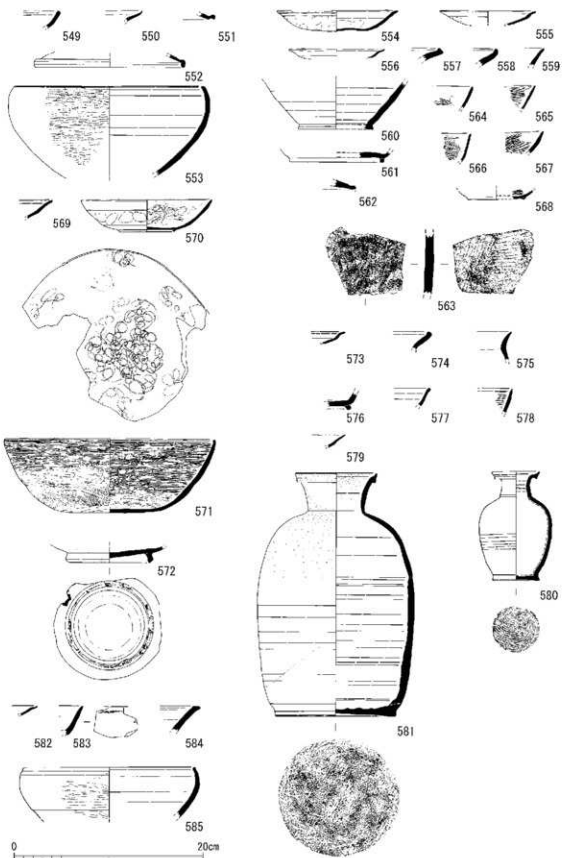
(1) 土器

櫛SA 1 (第102図549～551) 549・550は、土師器皿である。549は、口縁端部を丸くおさめる。550は、口縁端部をつまみ出し丸くおさめる。内面にスガが付着しており灯火器に転用されている可能性がある。551は、須恵器杯B蓋である。縁部はつまみ出し丸くおさめる。

掘立柱建物S B 12 (第102図552・553) 552は、須恵器杯B蓋である。縁部は、重ね焼きの際に融着し残存していない。頂部に、重ね焼き時の融着がみられる。553は、須恵器鉢Aである。口縁端部はやや外傾する面をもつ。外面は、口縁端部から底部にかけてヘラミガキを施す。

掘立柱建物S B 11 (第102図554～568) 554～566は、土師器皿である。554は、口縁端部はやや外反し丸くおさめる。外面には指頭圧痕がみられる。555・566は、口縁端部を強く外反させ、「て」の字を呈する。555は、外面に指頭圧痕がみられる。557～559は、土師器甕である。557・558は口縁端部をつまみ出し丸くおさめる。559は、口縁端部をつまみ出さず丸くおさめる。内面は黒色を呈する。560は、須恵器椀である。深手の形態を呈する。底部は、回転糸切りの平高台である。561は、須恵器杯Bである。底部はヘラ切り後ロクロナデ調整。562は、須恵器杯B蓋である。縁部は、重ね焼きの際に融着し残存していない。頂部に、重ね焼き時の融着がみられる。563は、須恵器甕である。外面を平行タタキ。内面に無文のあて具痕がみられる。564～568は、黒色土器椀である。いずれも内黒である。564～567は、口縁端部を丸くおさめる。564は、口縁部内面に螺旋暗文を施す。565は、口縁端部を丸くおさめ、沈線を1条施す。いずれも内面は、横方向にヘラミガキを施す。568は、底部である。見込み部には、ジグザグ状の暗文を施す。

掘立柱建物S B 8 (第102図569～572) 569は、土師器皿である。口縁端部は、強くナデ外反させ内に肥厚させる。柱穴S P 54出土。570は、内黒の黒色土器椀である。外面には指頭圧痕がみられる。器表面が摩滅しており、外面のヘラミガキはみえない。内面は、口縁部に横向きのヘラミガキ後螺旋暗文を施す。571は、内黒の黒色土器椀である。深手の形態を呈し、口縁端部は内に巻かず沈線を1条施す。外面は全面ヘラケズリ後ヘラミガキ調整。内面は密に横向きのヘラミガキを施し、口縁部内面と見込み部に螺旋暗文を施す。572は、灰釉陶器椀ないしは皿の底部で



第102図 遺構出土遺物実測図(1/4)

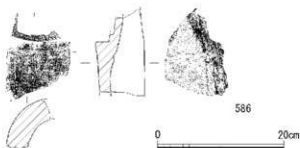
ある。底部外面はロクロヘラケズリを施す。施軸方法は、漬け掛けである。底部外面以外に施軸する。高台は、いわゆる「三日月形」である。高台と見込み部には、軸が剝離した痕跡がみられ、トチンなどを用いず、直接重ね焼きされている。底部は研磨しており、高台には墨が付着している。また、杯部の断面にも墨が付着しており、円形を呈するため、円形に打ち欠き転用硯にされている。

掘立柱建物 S B 15 (第102図573~577) 573は、土師器皿である。口縁端部は、外反させ丸くおさめ「て」の字を呈する。574~575は土師器甕である。574は、口縁端部をつまみ出し丸くおさめる。575は、口縁端部をつまみ出さず丸くおさめる。いずれも摩滅しており、調整は確認できない。576は、須恵器杯Bである。底部はヘラ切り後ナデ調整。577は、灰釉陶器の椀ないし皿である。口縁端部は、外反させ丸くおさめる。

掘立柱建物 S B 16 (第102図578) 578は、黒色土器椀である。口縁端部は沈線を一条施し丸くおさめる。内面は、横方向のヘラミガキを施す。

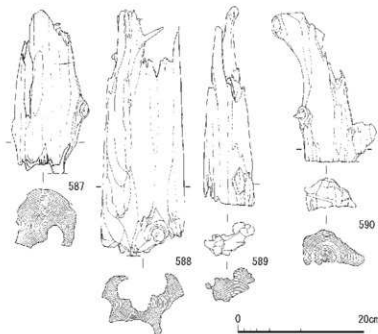
埋納遺構 (第102図579~581) 579は、S X 630出土の土師器皿である。口縁部は、やや外反させ端部を丸くおさめる。

580は、S X 520出土の須恵器壺である。口縁端部は、上へつまみ出し外側に面をもつ。底部外



第103図 瓦実測図(1/6)

面は回転糸切り。581は、S X 580出土の須恵器壺で、口縁端部をつまみ出し丸くおさめる。肩部は張らず緩やかで、肩部から底部は外へ張らずほぼ垂直に落ちる。底部外面は、回転糸切りである。胴部と底部の接合部と胴部中央部、口縁部には粘土の接合痕がみられる。外面は、底部から胴部中央部にかけてロクロヘラケズリ調整。胴部内面には、ロクロ目がよく残る。口縁部から胴部にかけて降灰がみられる。



第104図 掘立柱建物 S B 11 出土柱根実測図(1/6)

溝 (第102図582~585) 582は、S D 531出土の土師器皿である。口縁端部は、強く外反しやや肥厚する。「て」の字を呈する。

583・584は、S D 472出土である。583は、須恵器杯Aまたは杯Bである。口縁端部は、丸くお

さめる。584は、甕の口縁部で、口縁端部を平滑にする。585は、S D 530・532出土で、須恵器鉢Aで、口縁端部が内傾しやや面をもつ。外面は、ロクロヘラケズリ後ヘラミガキを施す。



(田中秀弥)

第105図

銭貨拓本(1/2)

(2) その他の遺物

瓦埴類(第103図586) 586は丸瓦で、胴部と玉縁部凸面に縄タキを施した後、錢貨拓本(1/2)ヨコナデ調整するが完全にはすり消さない。凹面には吊り紐の痕跡が残る点で特徴的である。吊り紐の痕跡を残す資料はこの1点だけで、平安時代の掘立柱建物S B 15の柱穴S P 601から出土している。

(新尺雅弘)

木製品(第104図587～590) 587～590は柱根である。全て平安時代の掘立柱建物S B 11の柱穴から出土した。樹種同定の結果、全点ヒノキ材を用いる(付編3 第1節)。節持ちの芯持ち丸木材である。いずれの柱根も全体的に腐朽しており、587・588は内部が空洞化している。589・590の基部には加工痕が確認でき、平滑であることから、切断後に加工を行ったと考えられる。587・588の平面には面取りの痕跡が確認できる。

錢貨(第105図591) 591は延喜通寶である。調査区西側建物S B 11周辺の素掘り溝S D 289から出土した。鋳上がりが悪く字体は鮮明ではない。907年初鋳である。

(福山博章)

5) 中世

(1) 土器

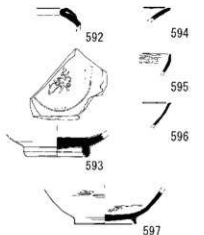
土坑S K 466(第106図592・593) 592は土器器釜である。口縁端部を折り返して成形する。胎土は精良である。593は青磁の椀である。底部高台部分のみ残存する。底部内面見込みには圏線と草花文を施す。底部はロクロヘラケズリで調整し、ロクロの回転方向は左回りである。高台の底面は摩滅している。

溝S D 92(第106図594～596) 594は土器器皿である。口縁部内外面に強いヨコナデを施す。底部外面は未調整で指頭圧痕が残る。595・596は瓦器椀である。胎土は灰白色を呈する。口縁端部に沈線を施す。595は口縁部内外面に粗いミガキを施す。

溝S D 281(第106図597) 597は瓦器椀で、内外面にミガキを施す。底部に高台を貼り付ける。

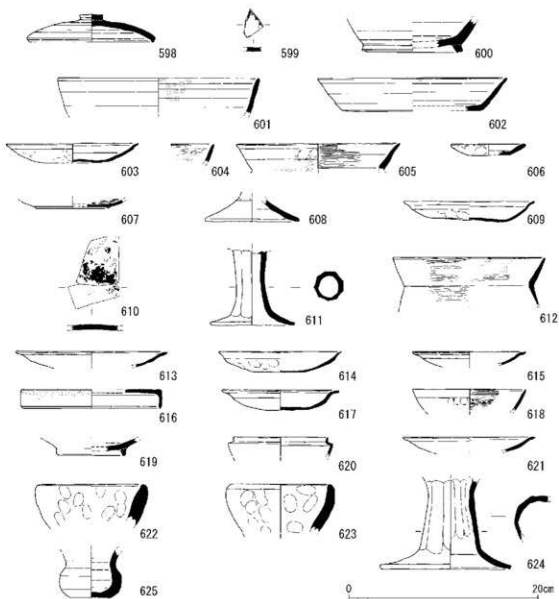
素掘り溝群出土土器(第107図598～625) 素掘り溝群は奈良～平安時代の遺構を削平しており、時期の異なる遺物も出土している。そのため、素掘り溝群との時期は異なるが、重要な遺物は図化して掲載する。出土地点については、観察表を参照されたい。

598は須恵器杯B蓋である。頂部に円形のつまみを張り付ける。頂部外面はロクロヘラケズリを施す。599は須恵器で



第106図 遺構出土土器実測図(1/4)

ある。器面に墨痕が残り、硯に転用されている。600は須恵器壺底部である。体部外面にロクロヘラケズリを施す。底部外面はヘラ切り後にナデを施し、高台を貼り付ける。601は須恵器杯である。内外面は回転ナデによって成形する。口縁部内外面に煤が付着することから、灯火器として用いられたと考えられる。602は須恵器杯Cである。口縁端部は内側に巻き込む。底部内面はヘラ切り後未調整である。内外面の口縁端部に煤が付着することから、灯火器として用いられたと考えられる。603は土師器皿である。口縁部に強いヨコナデを施し、外形は「て」の字状を呈する。底部内面は不定方向のナデを施し、底部外面は未調整で指頭圧痕を残す。604は黒色土器碗である。内黒であるが、口縁部外面も黒化する。口縁端部内面には沈線を施し、内外面には細かいミガキを施す。605は黒色土器甕である。内面に黒化処理を行い、口縁部内面に細かいミガキを施す。口縁部外面には煤が付着している。噴きこぼれ痕と考えられる。606は土師器皿である。口縁部が肥厚する。口縁部内外面にナデを施すが、外面には指頭圧痕を残す。607は黒色土器碗である。内黒で



第107図 素掘り溝出土土器実測図(1/4)

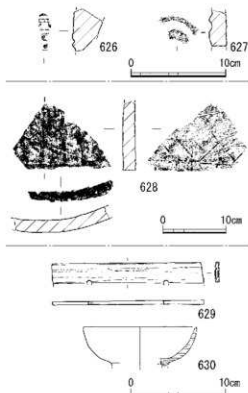
底部内面にミガキを施す。底部外面に断面三角形の低い高台を貼り付ける。608は土師器高杯である。脚部外面に面取りを施す。脚端部は丸くおさめる。胎土は精良で褐色を呈する。609は土師器皿である。口縁部に強いヨコナデを施し、「て」の字状を呈する。底部内面は不定方向のナデを施し、底部外面は未調整で指頭圧痕を残す。610は須恵器杯底部片である。底部外面はヘラ切り後未調整である。内面に漆の付着が確認できる。611は土師器高杯で、杯部と剝離しており、剝離面には製作時の軸跡と考えられる穴が確認できる。軸部外面を面取りする。胎土は粗く、黄褐色を呈する。612は黒色土器甕である。内面に黒化処理を行い、口縁部から体部の内外面に細かいミガキを施す。613～615は土師器皿である。口縁部に強いヨコナデを施し、「て」の字状を呈する。底部内面はナデを施すが、底部外面は未調整で指頭圧痕を残す。616は須恵器壺A蓋である。頂部外面はロクロヘラケズリ調整。縁部内外面はロクロナデを施す。外面には降灰がみられる。617は土師器皿である。ほぼ完成品である。口縁部に強い2段のヨコナデを施し、口縁端部は玉縁状に作り出し、「て」の字状を呈する。底部外面は未調整で指頭圧痕を残す。618は黒色土器椀である。内黒であるが、口縁部外面も黒化する。口縁端部内面には浅い沈線を施し、細かいミガキを施す。外面は摩滅している。619は灰軸陶器椀ないしは皿である。底部外面はロクロヘラケズリ調整。高台端部は摩滅する。底部内面は研磨され黒痕がみられるため、硯に転用されたと考えられる。620は土師器壺Eである。摩滅のため調整は不明である。胎土は精良で黄褐色を呈する。621は土師器皿である。口縁部に強いヨコナデを施し、外形は「て」の字状を呈する。622・623は製塩土器である。内外面はナデで成形するが、指頭圧痕を残す。胎土は粗く砂粒が多く含まれる。622は口縁部を丸くおさめるが、623は口縁部を尖らせて内傾させる。焼成は良好で外面は還元焰焼成となっている。624は土師器高杯である。脚部を面取りし、内面には縦方向のナデを施す。脚端部は内側に巻き込む。胎土は精良で、灰白色を呈する。625は須恵器壺である。底部外面はヘラ切り後ナデを施す。

(田中秀弥)

(2) 瓦類(第108図626～628)

626は、上下の外区に珠文を、内区にはおそらく唐草文を配する軒平瓦である。小片のため、文様構成や同范関係はわからない。顎形態はおそらく段顎で、中世瓦の可能性もある。焼成は軟質で、色調はいぶし風の黒色を呈する。胎土には雲母や長石、灰色粒子を多量に含み、岡田国遺跡出土の平瓦と同一の胎土のものは認められない。遺物包含層から出土した。

627は、巴文軒丸瓦である。小片で、文様構成はわからない。焼成はやや軟質で、表面がいぶし風に黒色を呈する。胎土には雲母や長石、灰色粒子を多量



第108図 瓦・木製品実測図(1/4・1/6)

に含む。遺物包含層から出土した。

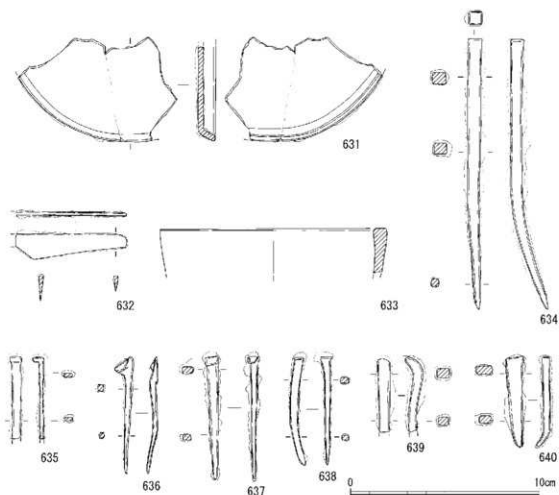
628は平瓦である。凸面は格子状のタタキを施す。凸面にのみ離れ砂が明瞭に認められる。凹面にはナデを施す。明瞭な模骨痕は認められないため、焼成は軟質で、表面がいぶし風に黒色を呈する。遺物包含層より出土した。(新尺雅弘)

(3)木製品・漆製品(第108図629・630)

土坑S K 466から板状の不明木製品と漆器椀が出土した。629は不明木製品である。針葉樹の板目材を用いる。片側を欠損する。板材であるが、両面とも割肌を呈する。端部は斜めと直線状に加工する。欠損しているが、穿孔部分が残る。穿孔内部は木肌が荒れており、使用痕であると考えられる。630は漆器椀である。底部と高台の一部を欠損する。広葉樹材を用いて横木取りで製作する。外面には製作時の刃物痕が残る。内面は赤漆を塗布し、外面は黒漆を塗布し、内外面で色彩が異なる。

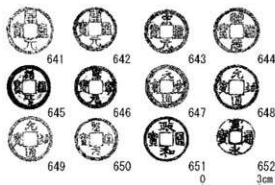
(4)金属製品(第109図631~640)

鉄製品は蓋・椀・鉄釘が出土した。631は土坑S K 319、632~640は遺物包含層から出土した。631は不明鉄製品である。縁部を折り曲げて作り出す。縁端部は隅丸方形を呈する。器壁の厚



第109図 金属製品実測図(1/2)

さは均一である。蓋の可能性がある。632は刀子である。刃部と間から茎の一部のみが残存する。断面形は三角形で刃部を作り出す。刃部先端は丸くおさまり、茎部分が幅広くなっている。使用による研ぎ減りと考えられる。633は鉄製の椀である。底部を欠損する。口縁端部の断面形は隅丸方形を呈する。底部に向かうにつれて器壁が薄くなる。



第110図 銭貨拓本(1/2)

634～640は鉄釘である。634は大形の釘である。断面形は隅丸方形を呈し、釘頭部も同形態を呈する。下端に向かうにつれて幅を減じる。下部は湾曲する。635～639は釘頭部を作り出すが、形態は様々である。635は頭部を折り曲げ、逆「L」形を呈する。断面形は扁平な隅丸長方形を呈する。下端部を欠損する。636は頭部先端を叩き延ばした後に巻き込むように折り曲げて頭部を作り出す。断面形は隅丸方形を呈する。下端部は湾曲する。637は頭部先端を叩き延ばした後に折り曲げる。断面形は扁平な隅丸長方形を呈する。下端に向かうにつれて幅を減じる。638は頭部先端が叩き潰された形状を呈する。使用による変形と考えられる。断面形は隅丸方形を呈する。下端部が湾曲する。639は頭部を湾曲させる。断面形は扁平な隅丸方形を呈する。下端に向かうにつれて幅を減じる。640は頭部に加工は行わない。断面形は扁平な隅丸方形を呈する。下端先端部が湾曲する。

(5) 銭貨(第110図641～652)

641～642は唐銭の開元通寶である。621年初鑄である。643は北宋銭の宗通元寶である。960年初鑄である。644は北宋銭の明道元寶である。1032年初鑄である。645は北宋銭の治平通寶1064年初鑄である。646は北宋銭の熙寧元寶である。1068年初鑄である。647は北宋銭の元豐通寶1078年初鑄である。648～649は北宋銭の元祐通寶1086年初鑄である。650は北宋銭の聖宋元寶である。1101年初鑄である。651は北宋銭の政和通寶である。1111年初鑄である。652は寛永通寶である。1636年初鑄のいわゆる古寛永である。

(福山博章)

6) 遺物包含層

(1) 土器

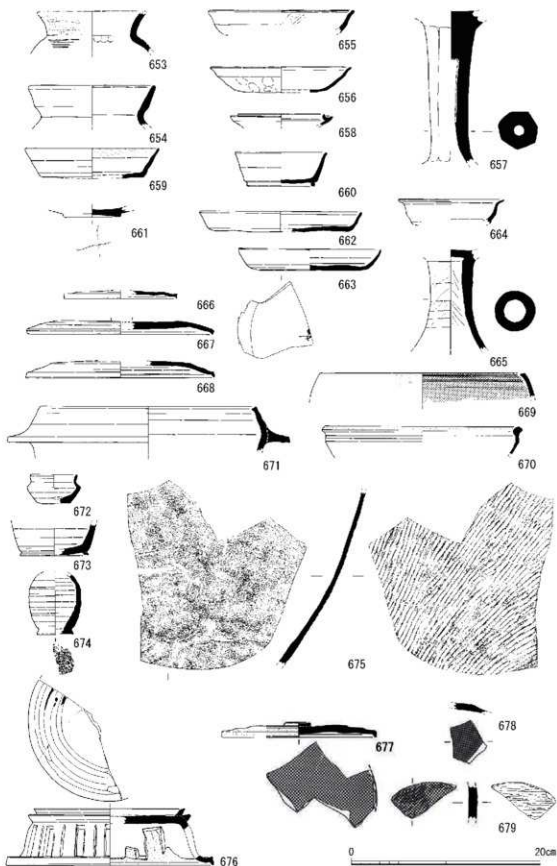
遺物包含層(第111図653～第112図728) 653は弥生土器甕である。口縁部は強くヨコナデし、体部外面にはタタキを施す。654は古式土師器壺である。口縁部はヨコナデで成形する。口縁部内外面に黒斑が見られる。

655は、土師器杯Aである。口縁端部は、内側に折り返し肥厚し、丸くおさまる。a 0手法ないしはb 0手法で調整される。内面に1段放射暗文を施す。656は、土師器皿である。口縁端部は、強くナデ外反させる。底部外面には指頭圧痕がみられる。657は、土師器高杯である。脚部は、心棒を用いられる。面取りは7面である。658は、須恵器杯Hである。口縁端部は、丸くおさまる。

659は、須惠器杯Aである。口縁端部は、丸くおさめる。底部ヘラ切り後未調整。口縁部内面には、重ね焼き痕がみられる。660は、須惠器杯Bである。口縁端部は、丸くおさめる。底部ヘラ切り後ナデ調整。底部外面に爪状圧痕がみられる。661は、須惠器の杯底部である。削り出しの蛇の目高台である。ヘラ切り後ナデ調整。外面には「×」形のヘラ記号を刻む。662は、須惠器皿である。口縁端部は、土師器皿Aを模しており、内側に肥厚させ丸くおさめる。底部ヘラ切り後未調整。663は、須惠器皿Aである。口縁端部は、丸くおさめる。底部は、ロクロヘラケズリ調整を施す。底部に墨書で「□女カ」と記されている。664は、須惠器皿Eである。口縁端部は、外反させ丸くおさめる。灯明痕はみられない。665は、須惠器高杯である。脚部内面にははしほり痕がみられる。666～668は、須惠器杯B蓋である。666・667は、頂部ヘラ切り後未調整。668は、頂部にロクロヘラケズリ調整を施す。667の頂部外面には降灰がみられる。669は、須惠器鉢Aである。口縁端部は、やや内傾し面をもつ。内外面に黒漆を塗布する。670は、須惠器鉢である。口縁端部は、玉縁状を呈する。降灰から重ね焼き痕がみられる。671は、須惠器の罽甕である。口縁端部は、やや内傾する面をもつ。胴部をロクロナデで成形し罽を張り付ける。罽の端部は、面をもつ。672は、須惠器小壺である。口縁端部は、丸くおさめる。直立する短い口縁部をもつ。底部は、静止糸切りである。673は、須惠器壺の底部である。底部はロクロヘラケズリを施す。底部外面に爪状圧痕がみられる。674は、須惠器壺Mである。底部は、回転糸切りである。675は、須惠器甕である。外面は、平行タタキ、内面は無文のあて具痕がみられる。猿投産の可能性がある。676は、園足円面硯である。外提部は外反し端部は面をもつ。突帯の端部は内傾する面をもつ。硯面は浅い海をもつ。脚部は、幅1cmと幅2.5cm、長さ3cmの長方形のスカシをいれる。スカシの間の圏線は、1条と2条の場合がある。硯面は、よく研磨されており墨も外提部と突帯まで付着している。また、内面全面に降灰がみられる。ため、内面を上にして焼成されている。677は、須惠器杯B蓋である。頂部は、ヘラ切り後未調整である。また、重ね焼き時の融着がみられる。内面は研磨されており、墨も付着しているため転用硯として使用されている。678は、須惠器蓋である。内面は研磨されており、墨も付着しているため転用硯にされている。679は、須惠器甕である。外面を平行タタキ、内面にあて具痕がみられる。内面は、青海波紋のあて具痕が薄れるまで研磨されており墨も付着しているため、転用硯として使用されている。

680は、黒色土器碗である。内黒であるが、口縁部外面も黒化する。口縁部内面には細かいミガキを施す。口縁部外面は摩滅しており調整は不明である。681は、黒色土器甕である。内黒である。口縁部から頸部内面に細かいミガキを施す。

682～690は、灰釉陶器である。釉は、若草色である。682は、碗である。口縁端部は、外反させる。底部はロクロヘラケズリ調整。683～687は、碗か皿の高台である。いずれも底部ロクロヘラケズリ調整。688は、段皿である。口縁端部は、丸くおさめる。底部はロクロヘラケズリ調整。内外面に施釉する。689は、壺である。体部に釉垂れがみられる。底部外面には、径約4cmの重ね焼き時の剝離がみられる。690は、水差しである。口縁端部は、外反させ丸くおさめる。外面は、底部から体部中央までロクロヘラケズリ調整を施す。把手は、断面形態が長方形になり、口縁部と体部



第111図 遺物包含層出土遺物実測図1 (1/4)

中央にナデつける。段皿・壺以外は、見込み部と底部外面から立ち上がり部以外にハケ塗り
で施軸し、土器同士を直接重ねて焼成させる。椀皿類の高台はいわゆる「三日月高台」を呈する。

691～702は、緑釉陶器である。691～693は、椀の口縁部である。口縁端部は、いずれも外反さ
せ丸くおさめる。いずれも、東海系である。694は、段皿である。内面に段がつくのに対し、外
面に段はつかない。695・696は、椀ないしは皿の高台である。高台は、他の緑釉陶器と比べ長く、
断面形態は長方形になる。底部内外面にトチンの痕跡がみられる。いずれも、東海系である。
697は、椀ないしは皿の高台である。高台は外端で接地し内側が内傾する面をもつ。近江産の可
能性がある。698・699は、椀ないしは皿の高台である。底部内面に陰刻花文を刻す。高台は台形
になる。猿投産の可能性もある。700は、段皿である。口縁端部は、丸くおさめる。694と比べ段
は浅く、口縁端部の近い位置に段がくる。701は、椀ないし皿の口縁部である。他の個体と比べ
緩く外反させ丸くおさめる。702は、椀ないし皿の底部である。削り出しの平高台である。内面
には、陰刻を施す。京都産の可能性もある。

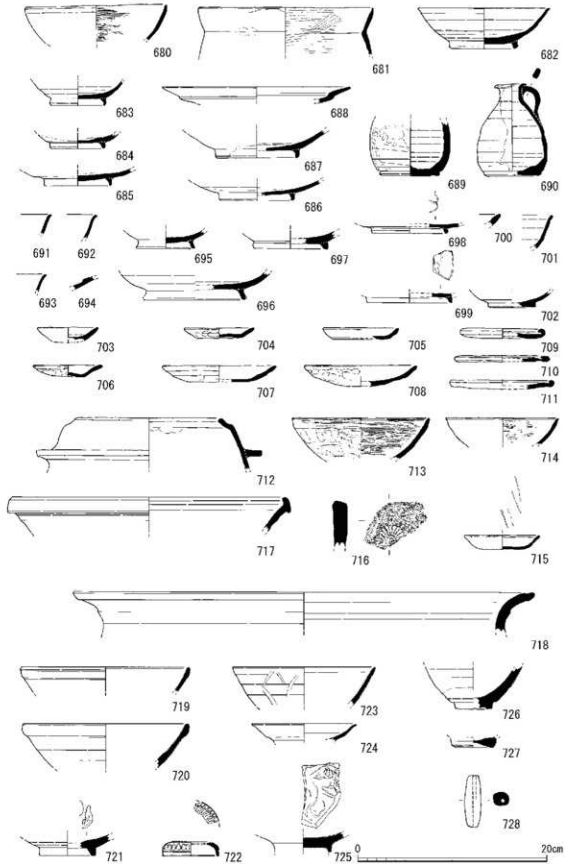
703～708は、土師器皿である。いずれも手捏ね成形で、指頭圧痕を施した後、内面及び口縁部
外面をナデ調整。703～706は胎土が精良で褐色を呈する。709は底部がわずかにへこませる。707
は口縁部内外面を2段ヨコナデ。胎土は淡い褐色を呈する。708は、口縁部内外面を1段ヨコナデ。
胎土は精良で、白色を呈する。709～711は、いわゆるコースター形の土師器皿である。いずれも
胎土は精良で淡い褐色を呈する。710の内面には黒斑を有する。712は、土師器の釜である。外面
はナデ調整、内面は指頭圧痕を残す。罅部から下方は煤が付着する。

713・714は、瓦器椀である。いずれも口縁端部内面に1条の沈線を有する。内外面に細かいミ
ガキを施す。715は、瓦器皿である。口縁端部は、外反させ丸くおさめる。見込み部にはジグザグ
状暗文を施す。716は、瓦質土器の鉢である。内外面は摩滅するが、菊花状大型単体スタンプを押す。

717は、東播系須恵器の鉢である。厚い「T」字口縁を有し、内面は平滑である。718は、国産
陶器の常滑産の甕口縁である。口縁部内面に降灰がみられる。

719～721は白磁の椀である。口縁部を折り重ねて玉縁とする。軸には貫入と気泡が見られる。
721は底部であり、外面と高台部分は露胎である。内面見込み部分には印文を施す。722は白磁の
盒子の蓋である。型押し成形し、外面及び天頂部内面のみ施軸する。723は青磁の椀である。外
面にヘラ描き蓮弁文を施す。724は青磁の皿である。削り出し高台で、底部外面と高台部分は露
胎である。725は青白磁の椀である。内面見込み部分に草花文を施す。軸は厚く、外面の高台内
部は露胎であるが、一部に軸がかかる。726・727は天目の椀である。いずれもケズリ出し高台で
ある。726は輪高台であり、底部外面と高台部分は露胎である。727は蛇の目高台で、高台部分は
露胎である。728は土鍾である。長辺に径3mmの穿孔を施す。

(田中秀弥)



第112図 遺物包含層出土遺物実測図2 (1/4)

7. 遺構・遺物の検討

1) 岡田国遺跡出土土器の検討

(1) はじめに

岡田国遺跡では道路S F 1 東側溝S D160、井戸S E540、井戸S E152から土器が一定量出土している。これらの土器と平城宮・京から紀年銘資料を伴って出土した土器群及び、恭仁宮西面大路東側溝S D9508、上粕北遺跡土坑S X96・溝S D21など周辺の遺跡から出土した土器群との比較を行い、岡田国遺跡出土土器の時期や性格について検討を行う。なお、出土した土器の残存率が低い⁽⁴⁷⁾ため量の検討はできなかったが、帰属時期の推定については、主に土師器の器種構成・外面調整・暗文の有無を中心に検討を行う。平城宮土器大別の平城宮土器Ⅲは、恭仁京遷都前を古段階、恭仁京遷都後を新段階とする。

(2) 比較対象資料

①平城京二条大路濠状土坑S D5100・S D5300(奈良国立文化財研究所1995) 平城宮土器Ⅲ古段階の基準資料であるS D5100とS D5300は二条大路の路面に掘られた濠状土坑である。紀年銘資料としては木簡が靈龜2年(725)～天平11年(739)、墨書土器が天平12年(740)を下限とする年紀をもつものが出土している。このことから、恭仁京遷都前後の土器群とみられている。土器は、土師器杯A・杯B・蓋・杯C・杯E・皿A・皿B・碗C・碗D・甕、須惠器杯A・杯B・蓋・杯C・杯E・皿A・皿B・皿C・皿D・高杯・鉢A・鉢F・盤A・壺・甕などが出土している。土師器供膳具の暗文構成は、1段放射暗文+螺旋暗文を密に施すものが主体である。これらの土器群の様相は、細かい法量分化が認められ、器種も豊富であり、律令の土器様式が最も多様性をみせる時期と考えられている(玉田1995)。

②木津川市上粕北遺跡土坑S X96(筒井ほか2012) S X96は、廃棄土坑と考えられており、大量の土器と木簡、銅碗片などが出土している。土器は土師器杯A・杯B・杯C・皿A・皿B・皿C・碗C・高杯・壺A・壺B・甕A・甕B・鍋・甕、須惠器杯A・杯B・杯E・杯L・皿B・皿C・蓋・高杯・壺E・壺K・壺Q・甕などが出土している。土師器供膳具の暗文構成は、連弧暗文+1段放射暗文+螺旋暗文のものと1段放射暗文+螺旋暗文のものがあり土師器供膳具の大半に比較的丁寧な暗文を施す。このような特徴から、S X96は、土器群の様相からS D5100・S D5300と同時期の平城宮土器Ⅲ古段階に位置づけられる。

③平城宮内裏北外郭土坑S K820(奈良国立文化財研究所1976) 平城宮土器Ⅲ新段階の基準資料であるS K820は、天平17・18年(745・746)を下限とする紀年銘木簡が出土している。このことから、平城宮遷都後の土器群と考えられる。土器は、土師器杯A・杯B・杯C・皿A・皿B・皿C・碗A・碗C・碗D・蓋・高杯・鉢B・壺A・壺B・甕、須惠器杯A・杯B・杯C・杯E・皿A・皿B・皿C・碗A・鉢A・壺E・壺L・壺N・平瓶・水瓶・甕などが出土している。土師器杯皿類の暗文構成は、1段放射暗文+螺旋暗文を施すものと暗文を施さないものが混在している。この時期から、c手法を用いた土師器杯A・皿Aや、新器種として土師器碗Aが出現すると考えられている。

④**恭仁宮西面大路東側溝 S D9508** (京都府教育委員会2000) 恭仁宮西面大路東側溝 S D9508からは、土器や墨書土器、木簡などが出土している。土師器杯A・杯C・皿A・椀C・高杯・甕、須恵器杯A・杯B・蓋・杯C・杯E・杯L・皿B・皿C・高杯・鉢D・壺A・壺K・壺L・壺Q・平瓶・甕などが出土している。土師器杯皿類の暗文構成は1段放射暗文+螺旋暗文を施すものと暗文を施さないものが混在している。また、c手法の土師器皿Aが出土している。時期は、土器群の様相から平城宮土器Ⅲ新段階と考えられる。

⑤**上狛北遺跡溝 S D21** (筒井ほか2012) 溝 S D21は、総延長100m以上の南北溝である。土器は、土師器杯A・皿A・皿B・皿C・蓋・椀C・高杯・鉢B・壺B・甕、須恵器杯A・杯B・杯C・杯E・杯F・皿B・皿C・蓋・鉢A・壺A・壺C・壺D・壺E・壺L・壺M・壺N・甕がある。土師器杯皿類の暗文構成は、1段放射暗文+螺旋暗文を施すものと暗文を施さないものが混在している。溝 S D21の時期は、平城宮土器Ⅲ新段階に位置づけられている。

⑥**平城宮推定大膳職土坑 S K219** (奈良国立文化財研究所1962) 平城宮土器Ⅳの基準資料である平城宮推定大膳職 S K219は、天平宝字6年(762)の年紀をもつ木簡が出土している。土器は、土師器杯A・杯B・椀A・椀C・皿A・盤・蓋・高杯・壺A・鉢A・甕・鍋・甕、須恵器杯A・杯B・皿A・蓋・高杯・壺A・盤A・鉢A・甕などが出土している。この時期以降は、土師器杯皿類にc手法を用いるものが増え、暗文を施すものがほとんどなくなる。土師器椀Aが土師器の21.9%を占め、土師器椀Aは器種構成の中で主要な位置を占めるようになる。

以上、岡田国遺跡の近隣の遺跡から出土する土器群の様相は、平城宮・京出土土器群と内容的にきわめて近似していることが確認できた。このことから、平城宮土器大別を援用した年代比定が一定の有効性を持つと考える。

(3) 岡田国遺跡出土土器の検討

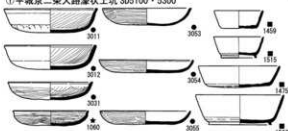
S F 1 S D160・S F 2 S D165 S D160とS D165から出土した土師器杯B(第72図193)は接合関係にあり、内面に1段放射暗文+螺旋暗文がみられる。S D160とS D165からは、土師器供膳具の暗文構成が1段放射暗文+螺旋暗文がみられ(第67図130)、暗文を施さないもの(第67図129)が混在している。特徴的な遺物としては、墨書人面土器(第67図139)やミニチュア甕(第70図187)などの祭祀関連遺物、灯火器の専用器具と考えられる須恵器皿E(第68図168)がある(神野2019)。

S E540 須恵器壺・甕が多く、灯火器の須恵器皿E(第80図314)や土管(第81図344)と考えられる土製品などが出土している。土師器皿Aに螺旋暗文を施した底部片(第81図326)がある。また、年輪年代測定により、井戸枠縦板は725年の結果が得られている。

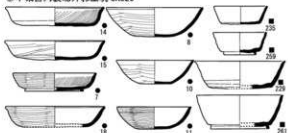
S E152 底部に「越後」と墨書された須恵器杯B(第79図296)、1段放射暗文+螺旋暗文を施した完形に近い土師器杯A(第79図292)などが出土している。

付表2～4は、各器種の破片数を数えたものである。接合した破片は1点と数えた。器種が分かる破片は小片でも1点と数えたため、甕など器種によっては個体数を反映していない可能性がある。法量は、大型品から小型品まで確認できるため法量分化をしている可能性がある。付表2～4から、どの遺構も器種が多様で平城宮や平城京と比べても遜色ない。全体的な傾向として土

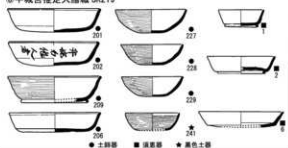
①平城京二条大路濬土坑 S05100・S300



②平城宮内裏北外郭土坑 SK820

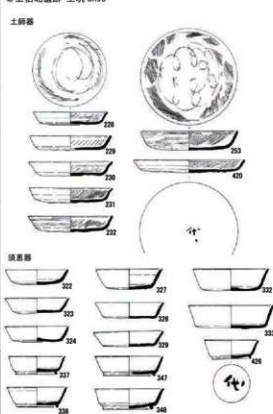


③平城宮推定大膳廳 SK219



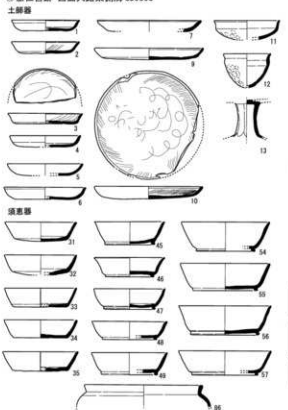
●土師器 ■須惠器 ★高性土器

④上柏北遺跡 土坑 SX96

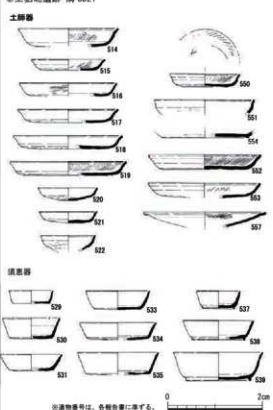


須惠器

⑤恭仁宮跡 西面大路東側溝 S09508



⑥上柏北遺跡 溝 S021



須惠器

※遺物番号は、各報告書に添する。



第113図 平城宮・京、恭仁宮、上柏北遺跡出土土器(1/8)

器の出土量は、土師器が少なく須恵器が多い。また、土師器椀Aが出土していない点は注目される。

これらの遺構の時期は、土師器椀Aが確認できない点、土師器供膳具に1段放射暗文と螺旋暗文を施すものと暗文を施さないものが混在している点、c手法の土師器供膳具が少数ながら存在する点から、近隣の出土資料の中では、④恭仁宮西面大路東側溝S D9508と⑤上粕北遺跡溝S D21の時期にあたり、平城宮土器大別の平城宮土器Ⅲ新段階に位置づけられるであろう。掘立柱建物SB5・7・13からは、暗文を施した土師器供膳具が出土しており、上記の遺構と同じ様相を示している点から同時期と考えられる(第113図)。また、土器様相からは、奈良時代前半にみられる連弧暗文や2段放射暗文を施す土師器杯皿類がみられないこと、奈良時代後半に盛行する土師器椀Aやc手法の土師器供膳具が非常に少ないことを指摘でき、岡田国遺跡では、恭仁宮期の前後の時期は土地利用が活発でなかった可能性が高いといえよう。

(田中秀弥)

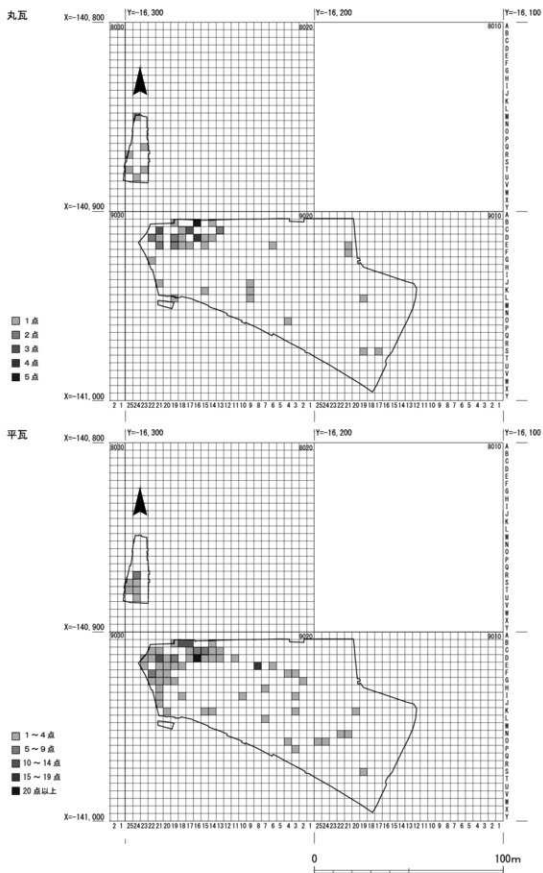
2) 岡田国遺跡出土瓦の検討

前述のように、岡田国遺跡では平瓦が29,230g、丸瓦が6,600g出土した。これらの出土比率を4mグリッドごとに示したものが第114図である。本来であれば重量比によって示すべきところであるが、本遺跡で出土した瓦はほとんどが小片であり重量的偏差が少ないので、整理作業簡略化のために出土点数によってその濃淡を示した。これを見ると、丸瓦、平瓦共に調査区の西部に偏って出土しており、瓦の使用はSF1以西の建物に限られる可能性を指摘できる。

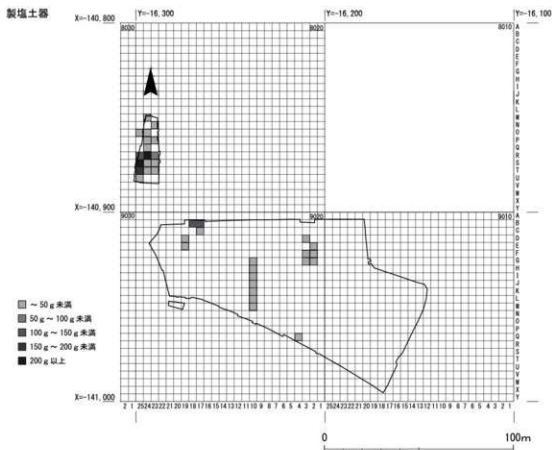
また、6類のほぼ完形資料の重量2,680gを平瓦1枚の重さと仮定し、岡田国遺跡出土平瓦の総枚数を復元してみると、およそ11枚にも満たない数しか出土していないことになり、重量の誤差や今回出土したものの以外の瓦の存在を考慮しても数十枚程度の瓦しか用いられなかったのだろう。そのため、瓦葺き建物を復元することはできず、葦棟などの部分的な瓦の使用しか想定できない。したがって、岡田国遺跡では、調査区西側付近に限られた建物の、限られた場所でしか瓦を用いなかったことになり、遺跡全体としては植物性の屋根が軒を連ねる屋根景観を復元できる。

そして、最も着目したいのは、分類可能だった平瓦19,986gを対象として各類の割合をみると、1類が7.2%、2類が6%、3類が2.9%、4類が5.1%、5類が3.8%、6類が17.8%、7類が11.7%、8類が10.4%、9類が9.6%、10類が20.2%、11類が5.3%となり、多寡はあってもひとつの類の瓦が卓越するという様相を認められないという事実である。これらは製作技法上の特徴に基づいて分類しているため、生産地や工人集団の違いを表していると考えられるので、上で述べたように限定的な瓦の使用であるにもかかわらず、実に多様な生産地から瓦を入手していたことになる。岡田国遺跡では数十枚程度の瓦しか必要としなかったため、10以上に及ぶ生産地と直接交渉して瓦を入手していたとは考え難い。そのため、さまざまな生産地の瓦を一度どこかに集めた場所から、生産地とは関係なく入手していたと考えるのが妥当だろう。こうした特殊な瓦の入手経路は、岡田国遺跡の性格を考えるうえで非常に重要な意味を持つといえよう。

(新尺雅弘)



第114図 丸瓦・平瓦地点別出土分布図



第115図 製塩土器地点別出土分布図

3) 岡田国遺跡出土の製塩土器

今回の調査では、全353点、総量2023.1gの製塩土器が出土した。大半は遺物包含層と素掘り溝からの出土である。井戸SE540や掘立柱建物SB13・14などから出土しており、器形は、筒形のみはみられず、砲弾形になる。時期は、出土遺構と共伴する遺物から平城宮土器Ⅲ新段階と考えられる。遺物包含層と素掘り溝出土の製塩土器は、SE540などと器形・胎土・調整が類似しており同時期であろう。

重量を地点別に集計した結果から、道路SF01を境に東側では計26点、重量190.1gであるのに対し、西側では計327点、重量1833gであり、特にSB13・14周辺に集中している(第115図)。

以上から、SF1から西側のSB13・14は、東側のSB1～6とは異なる性格を持つ可能性が高いといえよう。(田中秀弥)

4) 道路遺構の検討

岡田国遺跡では、南北方向の道路SF1と東西方向の道路SF2を検出した。道路は第4・5次調査区南部で直交して交差点となる。

(1) 道路側溝について

SF1では西側溝SD190の溝幅は狭く、溝底は浅いが、対する東側溝SD160は広く深い。SF1のSD160はSF2のSD165と「T」字形につながるが、SD160は縦長の土坑状の形態で

あり、水が滞留する排水機能に乏しい溝である。このような溝の特徴に関して、周辺の遺跡から検出された同時期の溝と比較を行う。

岡田国遺跡周辺に位置する上津遺跡、上粕北遺跡、恭仁宮跡では、SF1・2と同時期である奈良時代中頃の溝が検出されている。溝はいずれも1条のみ検出されており、道路側溝であるかどうかは不明であるが、土地を区画した溝と考えられる。

上津遺跡溝SD01は総延長166m以上、幅0.65～3.0m、深さ0.34～0.62mを測る。方位はN3°40'Eを測る。東西方向の溝である。中央部の1か所で途切れて陸橋部を形成する。断面形は「U」字形もしくは箱形を呈する。溝底は凹凸を呈し、溝中央部で溝底が高くなっている地点も見られ、高低差は38.0cmを測る。埋土の観察からは不明であるが、出土遺物に完形品に近い土師器・須恵器・瓦などが大量に含まれていることから、人為的に埋められたと考えられ、奈良時代中頃から末頃までには埋没すると考えられている(平良ほか1980)。

上粕北遺跡溝SD21は総延長100m以上、幅0.7～1.1m、深さ0.1～1.0mを測る。方位はN1°Wを測る南北方向の溝である。断面形は「U」字形もしくは箱形を呈する。溝底は凹凸を呈し、中央部が高くなる地点もあり、南部に向かって低くなるが、0.4m程度の高低差をもって急に浅くなり、溝底が大きく変化する。埋土の観察から、水の流れている痕跡はなく、溝底の形状からも水を流すような機能は認めにくい。また、掘り直しや浚渫の痕跡は確認できない。完形品に近い土師器・須恵器が出土しており、周辺から投棄されたと考えられ、奈良時代中頃には埋没すると考えられる(筒井ほか2012)。

恭仁宮跡溝SD5805は恭仁宮跡の南側に位置する溝である。検出長11.8m、幅0.5～1.5m、深さ0.3～0.5mを測る南北方向の溝である。溝底は凹凸を呈し、南側で溝底が急に浅くなる。溝底に近い部分から恭仁宮の時期と推定される丸瓦が数点出土している(京都府教育委員会2000)。

上記の3例の溝は、いずれも溝幅が一定ではなく、溝底は凹凸を呈し、中央部が高くなることや、溝底が急に深くなるなど、共通する特徴を有する。上津遺跡SD01と恭仁宮跡SD5805の埋土の状況は不明であるが、溝の形状から、流水機能は認めがたい。

流水機能を有する溝ならば、掘り直しや浚渫などの維持管理により、溝底は平滑になり、流水方向へ徐々に低くなるはずである。しかし、いずれの溝も溝底の凹凸を残している。さらに、上粕北遺跡SD21では出土遺物の時期が平城宮土器Ⅲ新段階に限られることから、短期間のうちに人為的に埋め戻していると考えられる。以上のような事例は、岡田国遺跡SF1のSD160・SF2のSD165と同様であると考えられる。

このような溝の事例は、区画溝のほかにも古代道路の側溝においても認められる。平城京東京三条二坊十三・十四坪の西二坊大路側溝底部には、長軸3.5m前後のくぼみが連続して存在する(久保ほか1994)。埋土内には掘り直しの痕跡はなく、奈良時代前半に埋没することから、条坊道路の側溝掘削時のものと考えられる。このような事例から、佐藤聖氏は条坊道路の側溝についても、古代道路の側溝と同様に連続土坑状に掘削される作業単位を想定した。そして、条坊道路の側溝では、地形傾斜上、坪内部からの排水や別坪からの排水を集める側溝と、路面などの部分的

な排水のみを担う側溝があり、両者の溝の平坦度には差があり、路面上などの部分的な排水のみを担う側溝では溝底部に起伏が多い傾向があることを指摘した(佐藤2016)。

佐藤氏が述べるような道路側溝の排水原理と掘削方法を想定するならば、岡田国遺跡のSF1・2の側溝、上津遺跡SD01、上粕北遺跡SD21、恭仁宮跡SD5805は部分的な排水のみを担う側溝であり、掘削方法は古代道路の側溝及び平城京の条坊道路の側溝と同様であると考えられる。

このように、労働力を必要とする長大な溝が同時期に点在しており、道路の敷設や区画が行われたと考えられる。また、行基による泉大橋の建設や「賀世山の東の河」に架橋するなど、奈良時代中頃の木津・山城・加茂地域では、多くの造営が行われたと考えられる。

(2)道路の評価について

奈良時代の直交する道路の事例は、平城京などの都城における条坊道路のほか、福岡県大宰府、宮城県壇の越遺跡(賀美郡衙)、山王・市川橋遺跡(多賀城)、三重県伊勢国府などにみられる方格街区のみである。したがって、直交する道路が検出される事例は都城もしくは官衙に限定される。

家原圭太氏は、都城における条坊と地方における方形街区の比較検討を行い、道路の規模や機能、街区内部の使用形態が異なるなど、両者の間に共通点はないとした上で、地方における方形街区は壇の越遺跡(賀美郡衙)で奈良時代中頃に出現し、方形街区の施工は奈良時代後半以降に増加すると指摘する(家原2016)。

地方の方形街区における道路幅は、壇の越遺跡(賀美郡衙)では約3.0m～6.0m、伊勢国府で12.0mを測る。平城京における条坊道路では道路幅の差が明確であり、井上和人氏によると、大路14.2～24.8m、条・坊間路8.9m、小路5.1～7.1mを測る(井上2004)。このように、岡田国遺跡の道路SF1・2は平城京の小路幅に近似し、地方における方形街区の道路幅とは一致しない。SF1・2を条坊道路として考えると、小路と小路の交差点にあたると思われる。

(3)交差点の形状

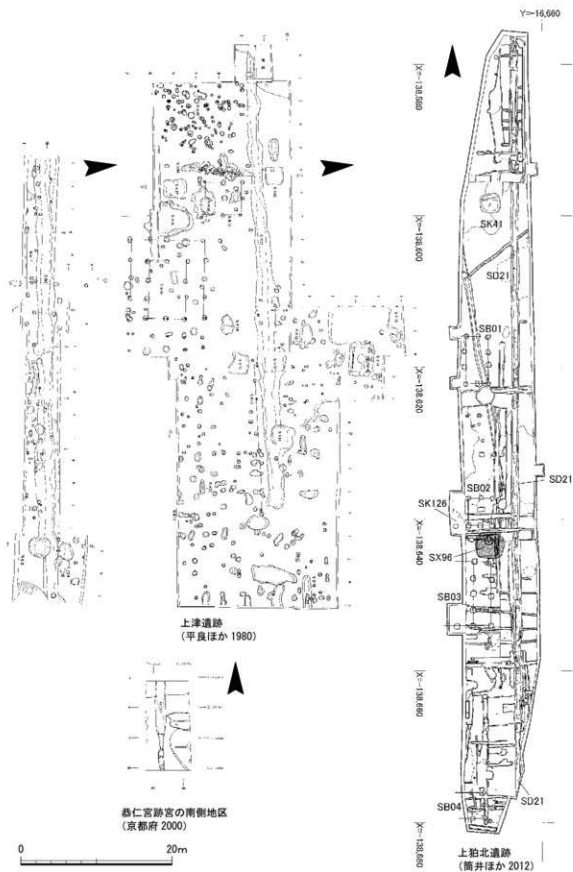
SF1・2の交差点では、SF1のSD160が浅い掘り込みによってSF2の路面を縦断するが、SF1のSD190はSF2の路面を縦断しない。

SF2のSD165はSF1のSD160と接続し、合流点で「T」字状を呈するが、SF2のSD200はSF1のSD160にはつながらない。

都城における条坊交差点の形状については山中章氏と近江俊秀氏の研究がある。山中氏は交差点形状を分類し、分布傾向から、交差点形状には排水機能との関係と道路の優先関係が反映されていることを指摘し、古代都城の交通機能について検討を加えた(山中1992)。

近江氏は平城京を中心に交差点形状を基幹排水路との関係に基づいて分類を行い、検討した結果、道路の優先関係ではなく、排水条件に規定されることを指摘した(近江2008-1)。

岡田国遺跡のSF1・2の交差点形状は北側と東側しか判明していないが、近江氏の分類に当てはめるとEパターンに当てはまる。SF1・2は小路と小路の交差点規模であることや、側溝と路面の関係から、基幹排水路にみられるような交差点形状ではなく、排水機能の乏しい道路側溝による交差点であったと考えられる。



第116図 岡田国遺跡周辺における奈良時代の溝平面図

(4) 道路路面と轍痕跡

S F 1 中央部から北側にかけて轍痕跡と考えられる長細い溝状の遺構を検出した。

轍痕跡の事例としては、平城京左京三条一坊十二・十三坪の三条大道路路面で検出されており、長さ14.5m～5.3m、幅0.08～0.15m、深さ0.03～0.10m、心々間距離は約1.7mを測る。断面形は「U」字形を呈する。近江俊秀氏は轍痕跡埋土の観察から、三条大道路路面には白色砂を敷いていた可能性を提示し、条坊道路における路面構築と路面舗装について言及した(近江2008-1)。

佐藤聖氏は条坊道路における路面整地は部分的なものであり、路面構築のための土木工事痕跡は見られないことから、条坊道路における通行機能の小ささを指摘している(佐藤2016)。

このように、平城京などの条坊道路では路面構築の痕跡や路面整地の痕跡はほとんど見つからない。遺構の残存度合や削平なども考えられるが、条坊道路の検出数を踏まえると佐藤氏の指摘のとおり、都城における道路は側溝のみで構成される未舗装の道路が大半であったと考えられる。

岡田国遺跡のS F 1・2では遺構検出と断ち割り調査においても路面構築及び舗装の痕跡を確認できなかったことから、道路側溝のみで構成される未舗装の道路と考えられる。未舗装のため、路面となるのは遺構基盤層である細粒砂が混じるシルト層であり、路面がぬかるんだ結果、轍痕跡が残ったと考えられる。

長岡京の条坊道路路面では轍痕跡の検出事例が多く、竹井治雄氏によると、轍心々間距離は1.3m～1.6mの間に収まる。また、『延喜式』などに見える寸法から、牛車、腰車、荷車の車輪間隔を復元した。牛車と荷車の車輪間隔の差はわずか0.12mであるが、荷車の方がわずかに大きいと想定し、轍痕跡の検出事例は荷車の轍痕跡が多いと指摘した(竹井1996)。

江浦洋氏は大阪府東大阪市新家遺跡検出の「土俵敷き遺構」における轍痕跡の検討から車を復元し、長原遺跡などの大阪府中南部の古代から中世にかけての轍痕跡の事例から、土地開発と車の利用について言及した。轍痕跡は1.5m前後であり、轍の間に偶蹄目の足跡が確認される事例は牛車と復元した。考古学的な調査成果からは、8世紀には車の本格的な利用が始まり、土地開発にも大きな変革をもたらしたことや、『正倉院文書』などから、古代の車の利用は官営事業を中心としたものであり、車の利用は階層性を示す可能性を指摘した(江浦1996)。

竹井氏と江浦氏両者の検討から、轍痕跡の心々間距離は1.5mを基準としており、車輪間隔に近い値であると考えられる。S F 1で検出した轍痕跡の心々間距離も最大1.5mを測るため、S F 1を行き交った車は、牛車もしくは荷車と考えられる。

5) 奈良時代中頃の掘立柱建物群の検討

調査区中央部で検出した、奈良時代の掘立柱建物S B 1～6は、道路S F 1・2で区画された空間に方位と柱筋を揃えており、井戸S E 152とともに配置されていた。また、S B 5・6の周辺からは圈足円面硯、転用硯、刀子、和同開珎が出土している。

(1) 建物配置について

平城京では継続的な発掘調査によって、小規模宅地の様相が数多く判明している。平城京にお

ける1/16町宅地は左京五条四坊十六坪(中島ほか2012)、左京九条三坊十坪(田辺編1986)などで検出されており、これまでの発掘調査の成果から、小規模宅地に関しては、坪内道路、溝、堀により1坪内を分割し、小規模な建物2～3棟と井戸1基により構成される事例が多い。また、平城宮から離れた六条以南に多く分布する傾向があり、8世紀中頃以降に増加することが判明している(家原2018)。

近江俊秀氏と原田憲二郎氏は平城京内の1/16町宅地には、坪内を東西4等分、南北4等分する正方形の区画と坪内を東西2分、南北8分する長方形の区画が存在することを指摘した(近江2008・3・原田2011)。平城京では坪内を分割し、整然とした区画がなされているが、山中章氏の指摘のように、平城京内の小規模宅地の実面積は一定していないため、規模に関しては不明な点が多い(山中1992)。

また、故橋本義則は「家屋資財請返解案」と「月借錢解」を取り上げ、文献史料から平城京内の宅地には1/32町や1/64町といった小規模な宅地があり、敷地内には板葺きの建物が少なくとも2～3棟建てられていたことを明らかにした(橋本1986)。

平城京における1/16町宅地の出現時期は、奈良時代前半の平城京造営当初(館野2001)もしくは、奈良時代中頃以降(家原2018)、平城京遷都後(原田2011)と考えられている。

岡田国遺跡のSB1～6の敷地規模は東西29.2m、南北31.6m、面積は922.72㎡の正方形に近い区画となる。山中章氏の指摘のように、敷地規模の厳密な比較は難しいが、平城京における1/16町宅地の敷地面積を約875～1056㎡⁽⁸⁹⁾と想定すると、1/16町宅地に相当する敷地面積であると考えられる。

区画内の建物はいずれも小規模な建物であり、南側と北側に分かれるが、南側に位置するSB1と北側に位置するSB2・3は柱筋を南北に揃えており、SF1のSD160の溝心からの距離はSB1では5.6m、SB2では5.5mとなっており、並列して配置されたと考えられる。また、SB4とSB6は建物の棟方向が近接して直交しているため、「L」字形に配置されたと考えられる。

区画の遮蔽施設については検出することができなかった。SF1のSD160及びSF2のSD165においても建築部材や椀皮などの木製品は出土しなかった。このため、遮蔽施設に関しては存在しなかったか、柴垣などの痕跡を留めない簡易な遮蔽施設が想定される。

以上のように、岡田国遺跡で検出したSB1～6は、敷地面積、建物規模において平城京における1/16町宅地に相当すると考えられる。

なお、岡田国遺跡のSF1・2及び掘立柱建物群の出土土器は平城宮土器Ⅲ新段階に当たる。平城京における1/16町宅地の出現が、奈良時代中頃もしくは平城京遷都後とするならば、岡田国遺跡は最古級の1/16町宅地となる可能性がある。しかし、文献史料からは奈良時代前半の年代が考えられており、発掘調査でも平城京左京九条三坊十坪で奈良時代前半の1/16町宅地が検出されている(田辺編1986)。1/16町宅地の出現時期に関しては今後の調査、研究の進展を待ちたい。

(2) 道路と宅地の復元

先述の通り、SF1東側の掘立柱建物群は1/16町宅地の規模に相当した。道路による区画が

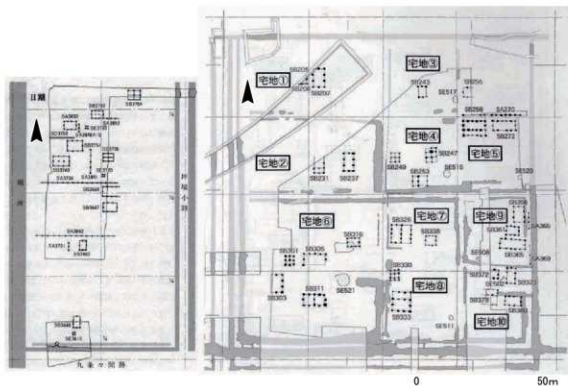
行われているため、周辺にも同様の区画で建物群を形成している可能性がある。

岡田国遺跡の奈良時代の遺構群に対して、SF1・2の交差点を中心として平城京における1/2～1/16町宅地と比較したところ、SF1の西側では宅地の分割線を想定することはできなかった。これは、SB7・13・14は調査区外に延びるため、建物規模と建物群の範囲が確定できなかったことも要因である。また、SF1からSB7までの地点とSB7の南側では奈良時代の遺構は検出されなかったため、柵列や溝などの区画施設は認められなかった。このように、遺構のない地点は空閑地であったと考えられる。

こうした事例は、平城京における小規模宅地においても確認できる。平城京左京五条四坊十六坪の宅地内には道路と建物の間や隣接する建物との間に空閑地が存在し、計画的な建物の配置と坪内における土地利用の違いが認められる。岡田国遺跡においても、瓦と製塩土器の出土状況からSF1を境に土地利用が異なっていたと考えられることから、岡田国遺跡の空閑地についても、区画ごとに利用形態が異なる平城京の坪内と同様の土地利用の可能性が考えられる。

平城京における宅地の分割事例は多様であり、従前の指摘にはない事例も増加しているという近江氏の指摘(近江2008-3)をふまえると、SF1の西側と東側では土地の分割方式が異なる可能性も考えられる。

また、SF2の南側にもSB17、SK360が検出されているため、調査区の南側にも奈良時代の遺構が広がる可能性は高い。



平城京左京九条三坊十坪(II期) (田辺編 1986) 平城京左京五条四坊十六町(1期) (中島ほか 2012)

第117図 小規模宅地検出例平面図

さらに、先に述べたように、SF1・2が小路と小路の交差点であるならば、平城京の一坪である133mの地点で隣接する交差点が検出される可能性があると考えられるが、いずれも調査区外のため不明である。隣接する交差点は、小路と条間路、もしくは、小路と大路との交差点となり、幅の異なる道路が直交する交差点と想定される。

6) 溝群の検討

溝群1・2は道路SF1・2に区画された空間に位置しており、溝SD460で区画され、掘立柱建物群(SB1～6)とは重複しない。溝同士の間隔は、重複関係はなく、全て東西方向にはほぼ等間隔で掘削されており、北に向かうほど、振角が大きくなる。

このような溝群の類例は、平城京、長岡京などでも検出されている。平城京では左京五条四坊十六坪において、幅約0.3m、深さ0.1m前後の溝が検出されている。建物との重複関係によって、奈良時代の溝と分かり、東西、南北方向の溝が一定間隔で配置され、坪内通路などの区画を越えずに配置されていたことから、宅地内の菜園の可能性が指摘されている(中島ほか2012)。

長岡京では、長岡京北辺、長岡京左京一条二坊十二町、長岡京左京三条三坊二町、長岡京左京三条二坊三町、長岡京左京三条三坊四町、長岡京左京五条二坊八町、長岡京左京六条三坊三町・四町・五町などで等間隔に並行する溝群が検出されている。

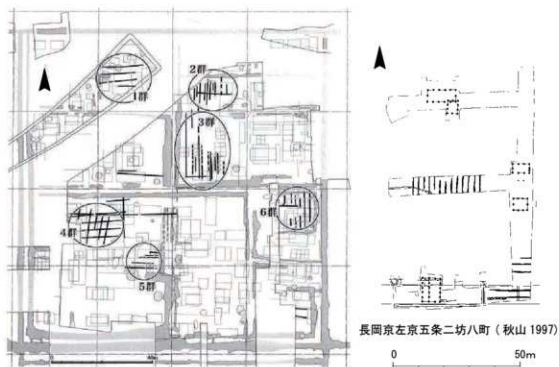
長岡京の事例に関しては秋山浩三氏と國下多美樹氏によって検討されている。秋山氏は長岡京における事例を集成、整理した結果、溝群は宅地内、道路上で確認されており、菜園もしくは排水用溝や暗渠として利用している例があることを指摘し、排水の必要のない空地で設けられている溝群は菜園関連遺構の可能性が高いとしている(秋山1997)。また、國下氏は長岡京における菜園関連遺構のありかたは、京城に一般的に存在することを示し、庭園を管理した宮内省園池司が関与した可能性が高いと指摘した(國下2013)。

上記の事例から、岡田国遺跡の溝群は耕作のための溝もしくは地盤改良のための排水用溝の可能性が考えられる。

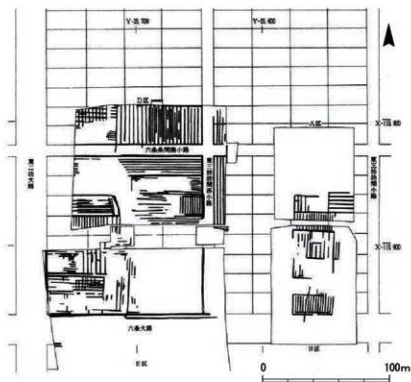
溝群は耕作のための溝であるならば、畝の畝間溝であると想定される。SB1～6の外側に掘削されていることから、1/16町宅地内には取まらない菜園もしくは園地であるとも考えられる。その場合、掘立柱建物群は管理施設と考えることもできる。

地盤改良のための排水用溝であるならば、地下水や降水時に周辺から集まる雨水などの悪水抜きの溝となる。溝群は掘立柱建物群とは重複しないが、周辺を掘り下げることにより、水捌けをよくして、掘立柱建物群周辺を乾燥させることも可能であると考えられる。

このような可能性から、溝群1・2について花粉、種実、寄生虫卵、植物珪酸体、粒度による自然科学分析を実施した(付編1・2)。分析結果の概要を述べると、溝群1・2埋土の花粉、種実、植物珪酸体分析の結果、栽培種と考えられる植物は検出されなかった。また、寄生虫卵も確認されなかったことから、糞便による汚染はなかったと考えられる。しかし、井戸SE540の埋土の花粉分析を行ったところ、畝で栽培されるササゲ属やゴマの花粉が産出しており、周辺では



平城京左京五条四坊十六坪（中島ほか 2012）



長岡京左京六条三坊三・四・五町（長宗ほか 1998）

第118図 溝群検出例平面図

植物栽培を行っていた可能性もある。加えて、花粉化石、珪藻化石、種実遺体の保存状態が不良な試料が多いことから、当該期に地表付近が乾燥傾向にあった可能性が示唆されている。

粒度分析の結果から、溝群1・2の埋土は、極細粒砂～細粒砂混じりのシルト主体であると確認できる。分析結果をふまえると、溝群1・2については、地点によって底部付近において極浅く滞水したり、湿潤な状態が一時的に継続するような状態であった可能性が示唆される。

溝群1・2について、平城京と長岡京の事例から、溝群の具体的な機能としては、耕作のための溝もしくは地盤改良のための排水用溝の可能性を推定したが、自然科学分析の結果からも決定できるような結果は得られなかった。溝群の機能や位置づけについては不明な点が多いが、道路で区画した空間において、1/16町規模の宅地以外にも計画的に空間を利用し、積極的に土地利用を行った痕跡と考えられる。

7) 木津地域周辺の奈良時代の景観

岡田国遺跡の位置する木津地域周辺には奈良時代の遺跡が数多く所在する。

奈良時代に造営された神雄寺と飛鳥時代に造営された高麗寺は、奈良時代を通じて存続している(中島1989・伊野ほか2010・大坪ほか2014)。高麗寺の北側の上粕東遺跡では、奈良時代の溝と正方位を指向する掘立柱建物が発出されており、高麗寺との関連が想定されている(中島2000)。

また、詳細は不明であるが、燈籠寺廃寺も同時期に位置していたと推定される(伊賀1995)。

上津遺跡では先述のS D01の他に、三面廂を有する掘立柱建物S B09が発出されており、泉津の管理施設と考えられる(平良ほか1980)。

また、釜ヶ谷遺跡では奈良時代から平安時代にかけて継続的に川辺で律令祭祀が執り行われていた(有井1996・2001)。

足利健亮による「作り道」推定地(足利1985)に当たる八後遺跡では、調査面積は狭いが、奈良時代から平安時代にかけての道路跡S F07が発出されている(岩松ほか1988・石井1991)。道路路面には波板凹凸痕が発出されており、路面の土木工事もしくは牛馬の通行痕跡であると想定される。道路側溝からは平安時代の鉢が出土していることから、道路は長期間に渡って使用されていたと考えられる。また、道路周辺からは遺構が発出されなかったため、空地であった可能性がある。

上粕北遺跡では先述のS D21やS X94のほかに、S D21と並行する掘立柱建物や井戸が発出されている(筒井ほか2012)。出土遺物から、奈良時代中頃の平城宮土器III古から新段階と考えられる。

片山遺跡では奈良時代中頃から後半の井戸、溝のほか、正方位を指向する掘立柱建物や門と考えられる掘立柱建物が発出されている(伊野ほか2005)。片山遺跡の建物群の広がり是不明であるが、区画を有する宅地であったと想定される。

このように、奈良時代の木津地域には、港である泉津が所在し、周辺には道路が敷設された交通の要衝であり、神雄寺、高麗寺、燈籠寺などの古代寺院が位置していた。

そして、岡田国遺跡をはじめ、上粕北遺跡、片山遺跡などのように、飛鳥時代から奈良時代前半の遺構が希薄な場所で奈良時代中頃に遺構が形成される事例が多いことが指摘できる。このよ

うな遺跡の事例が足利健亮をはじめとする恭仁京の推定域に所在している点は注目される。

また、高麗寺や燈籠寺、上津遺跡からは恭仁宮と同范の瓦が出土していることから、中島正氏は高麗寺などの寺院の補修を指摘している(中島2007)。このように、泉津や寺院などの奈良時代前半から存続する施設においては、先に指摘した、周辺の造営とともに再整備が実施されたと想定される。

8) 恭仁宮と岡田国遺跡

木津川市加茂町に所在する史跡恭仁宮跡は奈良時代中頃の都城である。恭仁宮は天平12(740)年に平城京から遷都され、天平16(744)年まで、3年3か月間の都であった。

京都府教育委員会の継続的な発掘調査によって、恭仁宮の四至が確定し、東西560m、南北750mの規模であることが判明した。宮の中央部には北から、内裏、大極殿院、朝堂院、朝集院、が配置されている。内裏は内裏東地区と内裏東地区からなることが確認されるなど、数多くの成果が得られている(京都府教育委員会2000)。

『続日本紀』には恭仁宮とともに、恭仁京の記事がある。天平13(741)年8月28日条の「遷平城二市於恭仁京」とあり、平城京から東西市を移転する。また、天平13(741)年9月12日条の「班給京都百姓宅地、從賀世山西道以東為左京、以西為右京。」とあって、官人らに宅地が班給され、賀世山西道を境に東を左京、西を右京としていることから、宮だけでなく、京城の造営と整備が行われていたと考えられる。さらに、天平14(742)年2月5日条の「是日始開恭仁京東北道、通近江国甲賀郡」の記事から、恭仁宮の東辺に新たな道が敷設されたと考えられる。

恭仁京については、喜田貞吉氏と瀧川政次郎氏によって、宮が京の北東に位置すること、京城を木津川(泉川)が東から西へ貫流することから、隋唐洛陽城を模倣した都城であると指摘されている(喜田1939・瀧川1967)。

歴史地理学者の足利健亮は現在の地形を詳細に分析し、自身の恭仁宮城の復元案を基にして、恭仁京京城の復元を行った(足利1985)。『続日本紀』の記事にある賀世山西道を現在の鹿背山西麓から木津川南岸を通る道に比定して、右京と左京の境界と考え、左京は恭仁宮の中軸線、右京は「連続した狭長な帯状地条」から作り道を推定し、中軸線に想定した。左京・右京中軸線の東西に二坊幅の京城を復元し、平城京と同一規模の九条八坊の京城に復元した。その後、足利は自説を一部修正した復元案を提示している(足利1998)。

これ以降、恭仁京京城の復元案を初めて提示した足利案の検証を基に、恭仁京京城の復元案が提示される。

奥村清一郎氏は恭仁京右京の条坊の痕跡と考えられる地割を検証し、足利案では傾いて復元された恭仁京右京を正南北方向に復元した(奥村ほか1980)。

千田稔氏は恭仁宮を東北隅に配置されたと考え、右京と左京を区分する道を直線であったと想定し、平城京東四坊大路に当たる作り道を賀世山西道に比定し、平城京の朱雀大路及び大和盆地の下ツ道(延長線)を西京極に設定した(千田1990)。

伊野近富氏は恭仁宮・京は本格的な都城でなかったとし、平城宮・京よりも小さく想定した。足利案と同様に、鹿背山を挟んで左京と右京に分かれているが、左京と右京の南北をずらし、恭仁宮南側の大路の延長線を右京の北京極にあて、南京極は足利案よりも110m南へ想定する。東京極を高麗寺の西辺、作り道は右京の中軸線よりも東へ二坪ずれる位置に比定した(伊野1991・1992・2011-1・2)。

岩井照芳氏は恭仁京の左京と右京を分離する復元案を批判し、矩形で左右対称の復元案を提示した。鹿背山西側の釜ヶ谷を賀世山西道に比定し、これを中軸線として左京、右京ともに八坊九条の小尺設計の条坊を復元した(岩井2012)。

山田邦和氏は、都市の全体が方形でない自由な形である不整形プラン都城として恭仁京京城の復元を行った。恭仁京は上ツ道や泉津などの既存の道路や設備を取り込んでいったと考え、部分的に整備された条坊制が施工されたと想定した(山田2016)。

以上のように、恭仁京京城の復元案は様々な案が提示されているが、京都府教育委員会が進めてきた恭仁宮跡の発掘調査によって、宮域の四至が確定し、足利が復元した宮域よりも小さいことが判明した。そのため、従来の復元案では、宮と京城との間に空間が生じることになり、恭仁京城の見直しを行う必要がある。

また、『続日本紀』の記述にある賀世山西道や足利が推定した作り道をどこに比定するかによって、復元の中軸線が異なる。また、鹿背山が位置するという地理的条件と『続日本紀』の記述から、右京と左京が分断されたかどうかが課題であろう。さらに、和銅6(713)年の高麗尺の廃止から、平城京の条坊と京城の規模が異なるのかなど、恭仁京京城の復元には解明すべき問題点が多岐にわたるのが現状である。

これまでの発掘調査では、恭仁京京城と考えられる明確な遺構は検出されておらず、『続日本紀』の記事と歴史地理学などによる復元以外に京城の存在を知る手掛かりはなかった。

しかし、今回の岡田国遺跡の調査成果と、これまでの木津周辺地域の発掘調査成果を改めて検討すると、木津周辺地域には、奈良時代中頃には道路の敷設や区画を伴う大規模な造営の存在が明らかになってきた。このような造営は、奈良時代中頃の遺構が確認されない遺跡もあることから、木津周辺地域一帯を広く行っただけではなく、局地的に実施した結果と考えられる。

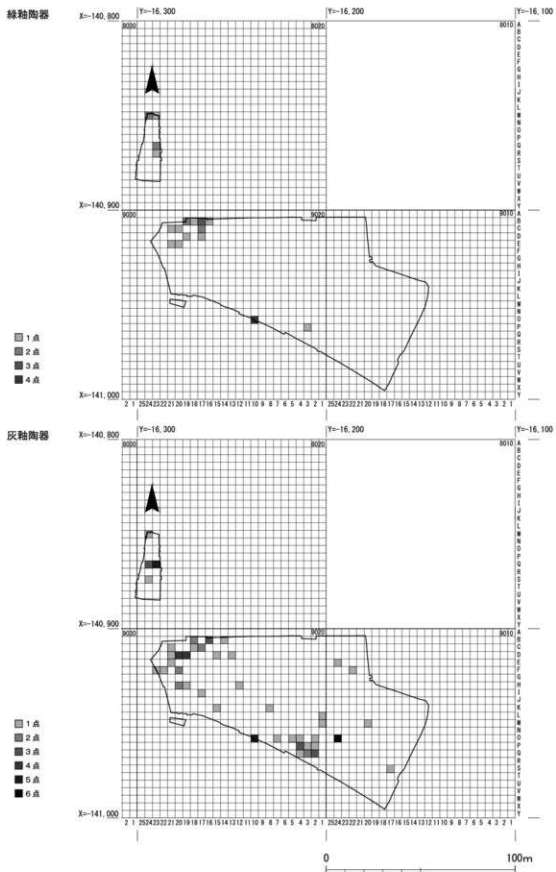
このように、遺構や遺跡の消長から想定される造営の契機は恭仁宮の造営や『続日本紀』の記事にみられる京城の整備に関連する可能性が高い。岡田国遺跡の奈良時代の遺構群はこのような時代背景のもとで形成されたと考えられる。(福山博章)

9) 平安時代の施釉陶器について

岡田国遺跡では、遺物包含層資料が大半だが、緑釉・灰釉陶器が出土している。ここでは、緑釉・灰釉陶器の時期と出土地点別に破片数を集計し、出土傾向について検討を行う(第119図)。

(1) 緑釉陶器

緑釉陶器は合計29点出土している。器種は、椀・皿・段皿がみられ、すべて全面施釉である。



第119図 緑釉陶器・灰釉陶器地点別出土点数分布図

色調・胎土などから5群に分けられる。1群：口縁端部を強く外反させ、厚い釉層を持ち濃い緑色の釉薬。素地は、硬質で暗灰色になる。高台は、貼り付け高台で他の個体と比べ高く、断面形態が長方形のもの(第112図691～696)。2群：底部内面に陰刻花文を施し、釉薬は、薄い釉層を持ち暗い緑色。素地は、軟質でやや赤味になる。高台は、貼り付け高台で台形のもの(第112図698～699)。3群：釉薬は、薄い釉層を持ち暗い緑色。素地は、硬質で須恵質になる。高台は、ケズリ出しの平高台のもの(第112図702)。4群：釉薬は、薄い釉層を持ち淡緑色。素地は、軟質で灰白色になる。高台は、貼り付け高台で内側が内傾する(第112図697)。5群：口縁端部をあまり外反させず、釉薬は薄い釉層を持ち薄緑色。素地は、硬質で明灰色のもの(第112図700・701)がある。1・2群が東海系、3群が京都系、4・5群が近江系の可能性があり、様々な産地のものが出土している。時期は、9世紀～10世紀に位置づけられる。出土傾向としては、調査区の西側に集中している(第119図)。

(2) 灰釉陶器

灰釉陶器は合計112点出土している。器種は、椀・皿・段皿・壺・水差しがある。遺物包含層の灰釉陶器(第112図682～687)は、ハケ塗りで施釉され、高台が「三日月形」であることから、9世紀後半にあたる。掘立柱建物S B 8の柱抜き取り穴から出土している灰釉陶器(第102図572)は、漬け掛けで施釉され、高台が「三日月形」である。S B 8では、10世紀前半の土師器・黒色土器(第102図569・570)と共存していることから、灰釉陶器(第102図572)を硯に転用していることを加味しても、10世紀前半に収まるであろう。出土傾向としては、調査区の西部と南部に集中している。

緑釉・灰釉陶器の時期は、9世紀～10世紀に位置づけられる。調査区の西側には、掘立柱建物や欄列などが検出されていることからこの時期の中心的な建物が置かれていたと考えられる。また、調査区の南側には灰釉陶器が集中しているが、遺構は検出されていないため、調査区外に平安時代の遺構が展開する可能性が指摘できる。

(田中秀弥)

10) 平安時代前期の遺構

平安時代前期の遺構は欄列、掘立柱建物、埋納遺構を検出した。平安時代前期の遺構群は欄列S A 1で区画を行う。掘立柱建物S B 8・11・12・15・16はいずれも柱痕跡及び柱掘形の大きさから小規模な建物と推定されるが、建物主軸の振れは小さいことから、方位を描えて建てられていたと考えられる。掘立柱建物の一部しか検出していないため、建物配置などは不明である。

掘立柱建物群の変遷は、最初にS B 12が建てられ(I期)、その後S A 1とS B 8・15及びS B 12を建て替えて、S B 11が建てられる(II期)。さらに、S A 1はS B 16と重複しており、建て替えが行われたと考えられる。S B 16は総柱建物であり、他の建物と比べて柱穴掘形が大きく、深いことから、倉庫であったと考えられる(III期)。

掘立柱建物が位置する第4・5次調査区の西側と第6次調査区では、掘立柱建物群と重複して、緑釉陶器と灰釉陶器が多く出土する傾向にある。さらに、S B 8柱穴S P 55出土の灰釉陶器は転用硯として使用されていた。また、S B 12の周辺からは延喜通寶が出土した。このように、建物

周辺からは特筆される遺物が出土した。

出土遺物の年代から、掘立柱建物群は平安時代前期の9世紀後半から10世紀前半頃の建物であり、複数回の建て替えが行われたが一連の建物群であると考えられる。建物群は平安時代中期前半には廃絶し、以後は継続しないと考えられる。

掘立柱建物は調査区外に続いているため、周辺には同時期の遺構が広がるとみられる。さらに、灰釉陶器の出土状況から、調査地南東側周辺にも平安時代の遺構が広がる可能性がある。

奈良時代の木津地域には大安寺、薬師寺、西大寺などの寺院が泉津において木材などを調達するための施設である木屋所や、魚などの生産施設である園地が所在していたことが『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』、『西大寺資財流記帳』などの史料からわかる。その後の平安時代にも木屋所や園地が東大寺や興福寺を始めとする南都諸大寺などの初期荘園として所在しており、泉津と木屋所、園地、荘園などを中心とした活発な交易活動が行われていたと考えられる(佐藤1991-2)。このような周辺地域の状況から、岡田国遺跡で検出した掘立柱建物群は木屋所や園地、初期荘園の施設に関連する可能性も考えられる。(福山博章)

8. まとめ

平成27～平成30年度にかけて実施した岡田国遺跡第3～6次調査において、古墳時代、奈良時代、平安時代、平安時代後期以降の各時期の遺構・遺物を検出した。最後に、周辺遺跡の調査成果を踏まえながら、調査成果を時期別にまとめる。

1) 弥生時代

弥生時代の遺構としては、中期後半の溝S D 195を検出した。また、自然流路N R 560の氾濫堆積物である礫層中から同時期の土器が出土した。

調査地周辺の弥生時代中期の遺跡としては、天神山1号墓(大坪ほか2014)、燈籠寺遺跡(黒坪1991)、大畠遺跡、相楽山銅鐸出土地点(平良1984)などがあり、岡田国遺跡の周辺では弥生時代中期の集落や墓が点在している。

その後の弥生時代後期になると、木津地域では木津城山遺跡(筒井ほか2003)や燈籠寺遺跡(石井ほか1993)、内田山遺跡(筒井2004)、片山遺跡(筒井ほか2005)などの集落や墓域が出現する。

このように弥生時代中期から後期にかけては周辺の丘陵上やその縁辺部に集落や墓域が形成されるが、岡田国遺跡では中期に溝1条のみであり、集落などの外縁部であったと考えられる。

2) 古墳時代

古墳時代の遺構としては、掘立柱建物S B 9・10とその周辺で土坑8基を検出した。

土坑S K 30・40・390・400のような深い土坑は、井戸の可能性も考えられ、古墳時代の前期前葉には集落が形成されたと考えられる。

また、自然流路N R 560からは、古墳時代前期前葉から中期前葉の土器がまとめて出土した。土器は、S B 10及び土坑と年代が近似することから、N R 560の流路底が浅くなった最終機能時

の段階に古墳時代の集落が営まれたと考えられる。古墳時代の遺構の大半は調査区の西部に集中しており、同時期の遺構が調査地の西側にさらに広がると考えられる。

古墳時代の木津地域では、前期前葉に椿井大塚山古墳(樋口1998)、その後平尾城山古墳(近藤編1990)が築造され、前期後葉には瓦谷1号墳(石井ほか1997)が築造される。岡田国遺跡周辺には同時期の古墳は確認されていないが、遺物包含層から腕輪形石製品の車輪石が出土している。車輪石は破損し摩滅しており、出土地点付近には土石流の痕跡が確認できたことから、集落内で生産された可能性も考えられるが、山崩れなどの崩落によって消失した古墳が東側の天神山丘陵に存在した可能性も考えられる。

木津川中流域では古墳時代前期前半の集落はこれまで未発見であり、山城南部の盟主墳である椿井大塚山古墳と前後する時期の集落が発見されたことは重要な成果である。

3) 飛鳥時代

飛鳥時代の遺構としては、溝 S D590を検出した。S D590からは完形の土器が多数出土した。これらは出土状況から、意図的に据え置いたと考えられる。須恵器の杯 H が 2 点出土しており、飛鳥時代前半(飛鳥Ⅱ)と考えられる(尾野2019)。

周辺に所在する飛鳥時代の遺跡は、調査地北方に片山古墳群(筒井ほか2003)と片山遺跡(筒井ほか2005)がある。片山古墳群では7世紀の古墳が位置する。片山遺跡では遺物包含層から須恵器の杯 H・杯 H 蓋・高杯が出土している。木津川を越えた北側では、同時期に高麗寺の造営が行われた(中島編1989)。精華町北東部に所在する北稲遺跡(伊賀1996)では集落が営まれていた。このように精華町、旧山城町域には飛鳥時代の遺跡が点在しており、活発な様相がみられるが、岡田国遺跡周辺においては飛鳥時代の遺跡は数少なく、具体的な様相は不明である。また、続く飛鳥時代後半から奈良時代前半にかけての遺構と遺物は確認できなかった。

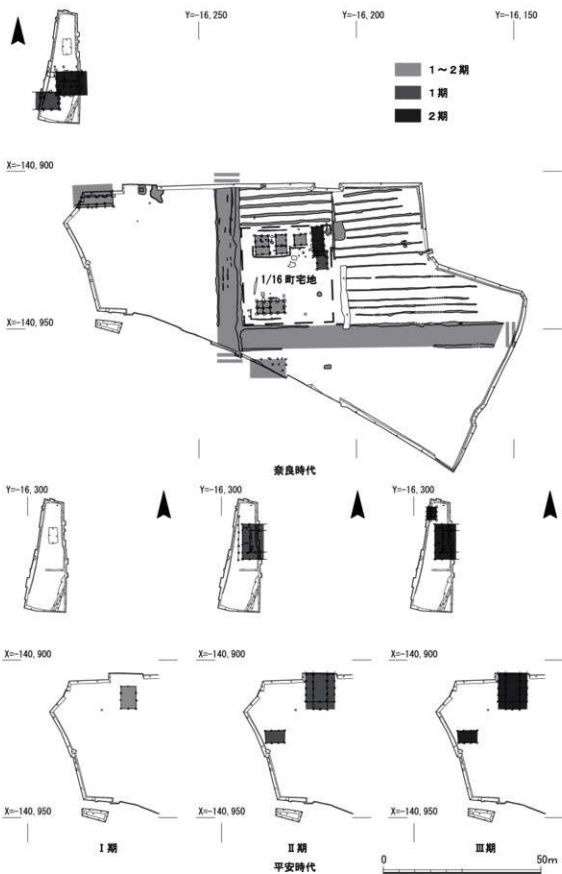
4) 奈良時代

岡田国遺跡の調査で最も大きな成果を上げたのは奈良時代の遺構群の検出である。

道路 S F 1・2 は直交して交差点を形成する。路面幅は平城京における小路と同一であり、小路と小路の交差点に相当する。S F 1 の路面には牛車もしくは荷車と考えられる轍痕跡を検出した。道路側溝の形態は周辺に所在する同時期の上津遺跡溝 S D01、上北北遺跡溝 S D21、慈仁宮跡溝 S D5805 も溝底の形態を始めとする共通点があり、これらの溝の掘削方法は古代道路及び平城京の条坊道路と同様である。S F 1 東側溝 S D160からは土師器、須恵器、瓦のほか、祭祀関連遺物である墨書人面土器やミニチュア甕が出土した。

S F 1・2 によって区画された空間には方位を揃えた小規模な掘立柱建物群(S B 1～6)と井戸 S E 152 が計画的に配置されていたことが判明した。

掘立柱建物群は柱筋を揃え、並列もしくは「L」字形に配置されており、規模は平城京における1/16町宅地に相当する。S B 6 と S B 5 は火災により建て替えが行われたと考えられる。



第120図 岡田国遺跡奈良・平安時代遺構変遷図

宅地内のS E152からは「越後」と書かれた墨書土器が出土した。「越後」については国名もしくは官職名あるいは官銜名を表した可能性がある。

掘立柱建物群の北側と東側には溝群が存在し、南北方向の溝S D460で区画されていた。溝群は掘立柱建物群とは平面的に重複しないことから、計画的に配置されたと考えられる。溝群の性格については耕作溝、もしくは、悪水抜きのための排水溝と想定される。

S F1の西側でもS B7と井戸S E540を確認した。S B7は床束と廂を持つ建物と考えられる。S E540は方形縦板組隅柱横棧留の井戸枠を用いる。井戸枠内の同一層からは、横櫓、刀子のほか、土師器皿C、壺B、須恵器皿E、杯Aが正位置で出土したことから、井戸を埋める際に祭祀を行ったと考えられる。

S E540は井戸枠材の年輪年代測定から、伐採年代725年という結果を得ることができた。この結果と井戸S E540の掘形及び枠内埋土の出土土器の年代ふまえると、S E540の使用期間は短期間であったと考えられる。また、井戸枠材全点の樹種同定を行い、井戸枠材の木材調達について言及した。発掘調査成果と樹種同定、年輪年代学の成果を踏まえた総合的検討による今後のさらなる調査研究が期待される。

S F1西側では、S B7南側とS F1とS E540までの間は空閑地であったと考えられ、建物規模の違いと空閑地の存在、瓦と製塩土器の出土状況から、S F1を境に土地利用が異なっていたと考えられ、区画ごとに利用形態が異なる平城京の坪内と同様の土地利用の可能性が指摘できる。

調査地内の各所より瓦と埴が出土しているが、軒瓦は出土しておらず全て丸瓦と平瓦である。瓦の出土は調査区の西部に集中しており、瓦の使用はS F1以西の建物に限られると考えられる。出土平瓦の総枚数を復元すると、総瓦葺きの建物を復元することはできず、莞棟などの部分的な瓦の使用しか想定できない。瓦と埴は掘立柱建物の規模や構造から今回の調査で検出された掘立柱建物で用いられたものではない可能性も考えられ、調査地近辺には瓦と埴を用いる大規模な建物が存在した可能性も考えられる。

以上のように、岡田国遺跡の調査において判明した奈良時代の遺構の空間利用は、都城における条坊道路と宅地をはじめとする一坪内の利用形態に類似している。

道路側溝をはじめ掘立柱建物や井戸は、出土土器の検討から奈良時代中頃にあたる平城宮土器Ⅲ新段階に限定されることから、奈良時代の遺構群は短期間しか存在しなかったと考えられる。また、掘立柱建物はいずれも柱が抜き取られており、道路側溝、井戸、溝群も埋め戻されていることから、人為的に廃絶したと考えられる。

また、S B7・13・14・17のように、建物が調査区外に延びることから、調査地周辺には計画的に配置された奈良時代の遺構がさらに広がると考えられる。

今回の岡田国遺跡の調査成果と、これまでの木津周辺地域の発掘調査成果から、奈良時代中頃に道路の敷設や区画を伴う大規模な造営が局地的に実施されたと考えられ、恭仁宮の造営や『続日本紀』の記事にみられる京域の整備に関連すると想定される。恭仁京京域に関しては大路・小路による条坊の施工や宅地の整備など、未解明な点が多いため、今後の調査・研究が期待される。

5) 平安時代前期

平安時代前期の遺構は、櫛列1条、掘立柱建物5棟と埋納遺構3基を検出した。

櫛列SA1で区画を行い、掘立柱建物が方位を揃えて配置されていた。建物配置の詳細は不明であるが、複数回の建て替えが行われている。掘立柱建物は小規模であるが、廂付建物と倉庫と考えられる総柱建物が所在した。これらの建物群は平安時代中期前半には廃絶し、その後は継続しない遺構群と考えられる。建物の性格は文献史料から、同時期に所在していたと考えられる木屋所や圃地、初期荘園に関連する施設を想定した。また、掘立柱建物は調査区外に続いているため、周辺には同時期の遺構が広がると考えられる。

木津地域における平安時代の遺跡は、史跡神雄寺跡掘立柱建物SB501(伊野ほか2010・大坪ほか2014)と泉津と考えられる上津遺跡井戸SE23(平良ほか1980)が挙げられるが、その他の様相は不明である。上津遺跡SE23からは土師器の杯・皿、黒色土器の碗・皿・甕のほか、緑釉陶器の皿・鉢、灰釉陶器の碗が出土している。平安時代においても泉津は継続しており、SE23はその一端を現していると考えられる。

また、天皇や皇族が南都などに行幸する際や貴族の南都参詣などの経路になっており、通過地点として泉津及び泉橋寺を中心に賑わいを見せたと考えられている(佐藤1991-1)。

このように、岡田国遺跡の平安時代前期の遺構・遺物は、文献史料にみられる木津地域の繁栄

時代	岡田国遺跡検出遺構	周辺の遺跡
弥生	前 NR560	馬場南 大畠 燈籠寺 木津城山 内田山 片山
	後 SB9・10 SK27・40・48・390・400・500	榑井大塚山古墳 平尾城山古墳 瓦谷1号墳
古墳	前 SD590	高麗寺跡 片山古墳群 北福 片山
	中 後	泉津 上粕北
飛鳥	前	奈良山 高跡群
	後	上粕北
奈良	前 SF1・2 SB13 SB7 SE540 SE152 SB1～4 SB5	神雄寺跡 上津 釜ヶ谷 八後 片山
	中 SB14 SB6	上粕北 山城園分寺
平安	後	
	前 SB12 SB11 SB8 SA1 SB15 SB16	
平安	中 後 素掘り溝 SK466 SD92・281	上粕北

第121図 岡田国遺跡検出遺構及び周辺遺跡変遷図

の一側面を窺える貴重な成果である。現状において木津地域における平安時代の遺跡数は少ないが、今後の発掘調査による成果が期待される。

6) 平安時代後期以降

平安時代後期以降の遺構は素掘り溝群が大多数を占める。素掘り溝群は調査地の西側と南側に顕著に確認できた。素掘り溝群の出土遺物から、遅くとも平安時代後半の10世紀後半～11世紀初頭には耕作地として利用され始めたと考えられる。

その後、区画溝と考えられる溝S D92、溝S D281が掘削され、14世紀には土坑S K466や遺構は希薄である。遺物包含層からは土師器皿や羽釜のほか、国産陶器、輸入陶磁器の白磁の盒子や青白磁の椀などが出土しているがいずれも細片であり数は少ない。その後、近世・近代に至るまで、東西方向、あるいは南北方向に多数の耕作溝が掘削されるが、他の遺構は確認できず、出土遺物も少ない。調査地付近一帯は平安時代後期以降から現代に至るまで耕作地となっていたと考えられる。

岡田国遺跡の発掘調査では以上のような成果を得ることができた。地形的には天神山の丘陵端部と井関川の後背湿地に位置し、天神山の丘陵からの土石流や井関川の氾濫を受ける場所であり、人が住むには必ずしも適当な場所とは言えなかったと考えられる。このような地理的状況を示すように、発掘調査では遺構密度が高い場所と低い場所で明瞭に分かれていた。遺構の時期は限定的であり、重複関係も少ない。また、遺物の時期も限定的であり、遺物包含層資料を含めても遺物の出土量は少ない。

このようなことから、調査地は弥生時代から平安時代前期にかけて継続的に利用された場所ではなく、限定された時期に局所的に利用された場所と考えられる。

今回の調査で特筆されるのは、奈良時代の遺構と周辺で事例の少ない平安時代の遺構を検出したことであり、木津地域の歴史を考える上で貴重な成果を得ることができた。今後の調査の進展により、木津地域の歴史が解明されるとともに、今回の発掘調査成果が今後の調査研究の一助となり、大いに活用されることを願う。

(福山博章)

注1 第1図の地形分類図は、国土地理院1/25,000奈良を基に、産業技術総合研究所の「地質図Navi」(<https://gbank.gsj.jp/geonavi/> 2019年10月4日付)、国土地理院の「地理院地図」(<https://maps.gsi.go.jp/> 2019年10月4日付)治水地形分類図「奈良」の初期整備版及び更新版などを参照して作製した。

注2 岡田国遺跡の発掘調査成果については現地説明会資料、第140回埋蔵文化財セミナーなどで報告しているが、本報告書作成のため整理作業や遺跡検討会など検討を重ねた結果、変更点が生じている。

注3 高野陽子「弥生時代後期～古墳時代の土器様相」『佐山遺跡』(「京都府遺跡調査報告書」第33冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

注4 土器の器形及び年代観については、以下の文献に準ずる。

- 奈良国立文化財研究所編「飛鳥・藤原宮発掘調査報告II」（『奈良国立文化財研究所学報』第31冊 奈良国立文化財研究所）1978
- 奈良国立文化財研究所編「飛鳥・藤原宮発掘調査報告IV」（『奈良国立文化財研究所学報』第55冊 奈良国立文化財研究所）1996
- 奈良文化財研究所編「飛鳥・藤原宮発掘調査報告V」（『奈良文化財研究所学報』第94冊 奈良国立文化財研究所）2017
- 尾野善裕「飛鳥時代宮都土器編年－飛鳥・藤原地域を中心に－」（『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会）2019
- 注5 土器の器形や成形・調整技法及び年代観については、以下の文献に準ずる。
- 小笠原好彦・西弘海・吉田恵二「土器」（奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告VII 奈良国立文化財研究所学報」第26冊 奈良国立文化財研究所）1976
- 安田竜太郎・巽淳一郎・沢田正昭「土器」（奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告XI－第一次大極殿地域の調査－ 奈良国立文化財研究所学報」第40冊 奈良国立文化財研究所）1981
- 神野恵「土器類」（奈良文化財研究所編「平城宮発掘調査報告XVI－兵部省地区の調査－ 奈良文化財研究所学報」第70冊 奈良文化財研究所）2005
- 奈良文化財研究所編「平城宮発掘調査XVII 第一次大極殿院の調査2」（『奈良文化財研究所学報』第84冊 奈良文化財研究所）2011
- 注6 ①調整手法
- a 手法－口縁部外面をヨコナデし、底部は未調整のもの。
- b 手法－口縁部外面をヨコナデし、底部はヘラケズリで調整するもの。
- c 手法－口縁部以下の外面全面にヘラケズリをするもの。
- e 手法－口縁部以下を幅広くヨコナデし、それより以下は未調整のもの。
- ②器表面の調整手法
- 0 手法－ミガキ調整を施さないもの。
- 1 手法－口縁部だけにミガキを加えるもの。
- 2 手法－底部だけにミガキを加えるもの。
- 3 手法－口縁部から底部にかけてミガキを施すもの。
- 注7 今回の検討に使用した資料の実見には、神野恵氏（奈良文化財研究所）、松尾史子氏（京都府立山城郷土資料館・当時）、大坪州一郎氏（木津川市教育委員会）にお世話になった。
- 注8 家原圭太氏に従い1/8町以下の宅地を小規模宅とする（家原2018）。
- 注9 平城京における1/16町宅地の敷地面積は約875㎡（奈良文化財研究所2010）、約1056㎡（町田1986）と想定されている。
- 注10 「大安寺伽藍縁起并流記資材帳」の天平19年2月11条に「一、泉木屋并園地二町 東大路西薬師寺木屋 南自井一段許退於 北大河之限」とある（『大日本古文书』2-657）。また、『西大寺資材流記帳』の宝亀11年には「相楽郡泉木屋」という記載が見られる（『寧楽遺文』中巻「西大寺資材流記帳」413頁）。また、『延喜式』第39、内膳司には山城国に6か所の園が所在し、木津地域には泉園が設置されていたと考えられている。このような畠や園地などの取引に関しては、近年では吉川真司氏の研究に詳しい（吉川 2019）。
- 吉川真司「日本古代のアブラナ科植物」（『菜の花と人間の文化史 アブラナ科植物の栽培・利用と食文化』アジア遊学235 勉誠出版）2019

参考文献

- 足利健亮「第三章 恭仁京プランの復元」(『日本古代地理研究 畿内とその周辺における土地計画の復元と考察』大明堂) 1985
- 足利健亮「景観から歴史を読む」日本放送出版協会 1998
- 秋山浩三「3. 長岡京跡左京第221次(7ANFSK-2地区)～左京三条三坊四町(三条三坊二町)・東二坊大路・鶏冠井清水遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第41集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 1997
- 有井広幸「5. 木津地区所在遺跡平成7年度発掘調査概要(釜ヶ谷遺跡第3次)」(『京都府遺跡調査概報』第73冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 有井広幸「木津町釜ヶ谷遺跡出土祭祀関連遺物について」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 家原圭太「古代都城条坊制と地方官衙の方格街区」(『日本考古学』第41号 日本考古学協会) 2016
- 家原圭太「古代都城における小規模宅地の居住施設と居住形態」(『古代学研究』第216号 古代学研究会) 2018
- 伊賀高弘「6. 燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡」(『京都府遺跡調査概報』第64冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 伊賀高弘「2. 北畑・柿添遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第68冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 石井清司「7. 八後遺跡・恭仁京跡作り道(第2次)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第43冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 石井清司・小池寛「6. 燈籠寺遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第53冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 石井清司・有井広幸・伊賀高弘・筒井崇史・森島康雄「瓦谷遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第23冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 石崎善久「[6] 岡田国遺跡」(『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成26年度)』京都府教育委員会) 2015
- 井上和人「古代都城制条里制の実証的研究」学生社 2004
- 伊野近富「恭仁宮と恭仁京の復元」(『京都考古』第63号 京都考古刊行会) 1991
- 伊野近富「恭仁宮・恭仁京復元案の副案」(『京都考古』第65号 京都考古刊行会) 1992
- 伊野近富・筒井崇史「3. 片山遺跡第2・3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第116冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
- 伊野近富・竹原一彦・筒井崇史・松尾史子「(1)馬場南遺跡第2次」(『京都府遺跡調査報告集』第138冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- 伊野近富「恭仁京造営史(上・下)」(『京都府埋蔵文化財情報』第115・116号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
- 岩井照芳「泉津と古代都城」(『古代文化』第62巻第2号 古代学協会) 2010
- 岩井照芳「恭仁京の復元」(『古代文化』第64号第1号 古代学協会) 2012
- 岩松保・松井忠春「5. 八後遺跡・恭仁京跡(作り道)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 江浦洋「轍と開発-新家遺跡「土俵敷き遺構」の再検討-」(『大阪文化財研究』第10号 財団法人大阪府文化財調査研究センター) 1996
- 大坪州一郎・赤田昌倫・田村朋美・藤井整「神雄寺跡(馬場南遺跡)発掘調査報告書」(木津川市埋蔵文化財調査報告書第16集 木津川市教育委員会) 2014
- 近江俊秀「第2節 東一坊坊間路と三条大路の交差点の形状について」(『平城京左京三条一坊五・十二・十三坪発掘調査報告』奈良県文化財調査報告 第126集 奈良県立橿原考古学研究所) 2008-1

- 近江俊秀「第3節 桑坊道路の路面構築について」(『平城京左京三条一坊五・十二・十三坪発掘調査報告』奈良県文化財調査報告 第126集 奈良県立橿原考古学研究所) 2008-2
- 近江俊秀「考察1 平城京における宅地班給と移住者に関する予察」(『平城京左京三条三坊五・十二坪』奈良県文化財調査報告所 第131集 奈良県立橿原考古学研究所) 2008-3
- 奥村清一郎・伊野近富「Ⅱ岡田国神社遺跡発掘調査概報」(『木津町埋蔵文化財調査報告書』第3集 木津町教育委員会) 1980
- 喜田貞吉「恭仁京遷都考」(『帝都』日本学術普及会(初出1909年)) 1939
- 京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」 2000
- 園下多美樹「長岡京の歴史考古学研究」吉川弘文館 2013
- 久保邦江・久保清子・原田憲二郎「(5)平城京右京二条三坊四坪・菅原東遺跡の調査 第273-1・276次」(『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成5年度 奈良市教育委員会) 1994
- 黒坪一樹「8. 燈籠寺遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第43冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 近藤香一編「京都府平尾城山古墳」(『山口大学人文学部考古学研究室研究報告』第6集 山口大学人文学部考古学研究室) 1990
- 佐藤重聖「三 都城道路」(『日本古代の交通・交流・情報3 遺跡と技術』吉川弘文館) 2016
- 神野恵「聖武朝の土器-平城宮-」(『古代の土器研究 聖武朝の土器様式』古代の土器研究会) 2005
- 神野恵「古代都城の灯火器-灯火観察のスミエ-」(『第23回 古代官衙・集落研究集会 灯明皿と官衙・集落・寺院 研究報告資料』奈良文化財研究所) 2019
- 平良泰久・奥村清一郎ほか「1 上津遺跡第2次調査概報」(『木津町埋蔵文化財調査報告書』第3集 木津町教育委員会) 1980
- 平良泰久「考古編」(木津町史編さん委員会編『木津町史』史料編1 木津町) 1984
- 滝川政次郎「京制並に都城制の研究」角川書店 1967
- 佐藤宗詳「通過地点としての木津」(木津町史編さん委員会編『木津町史』本文編 木津町) 1991-1
- 佐藤宗詳「泉木屋所と内乱前後の木津」(木津町史編さん委員会編『木津町史』本文編 木津町) 1991-2
- 田中稔「日本文明史3『宮都の風光』」角川書店 1990
- 竹井治雄「轍(わだち)雑考」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 京都府埋蔵文化財調査研究センター)1996
- 館野和己「古代都市平城京の世界」日本史リブレット7 山川出版社 2001
- 田辺征夫編「平城京左京九条三坊十坪 発掘調査報告」奈良国立文化財研究所 1986
- 中世土器研究会編「概説中世の土器・陶磁器」真陽社 1995
- 筒井崇史・伊賀高弘・戸原和人・山内基樹「木津城山遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第32冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成14年度発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第110冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004
- 筒井崇史・松尾史子・谷嶋仁美「3. 上粕北遺跡第2次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第150冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2012
- 筒井崇史・松尾史子「木津川市上粕北遺跡出土物の基礎的研究(1)」(『京都府埋蔵文化財情報』公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2014
- 徳満悠「中世都市木津(山城国)の研究-15世紀を中心に-」(『都市文化研究』第15号 大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター) 2013
- 中島和彦・松浦五輪美・池田裕英・原田香織「平城京跡(左京五条四坊十五・十六・四条大路)の調査 第623・631・638次」(『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成22(2010)年度 奈良市教育委員会) 2012
- 中島正編「史跡高麗寺跡」(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第7集 山城町教育委員会) 1989
- 中島正・岡本洋・島軒満・永澤拓志「上粕東遺跡 町道高麗寺幹線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調

- 査報告書」京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第24集 山城町教育委員会 2000
- 中島正「恭仁宮と京の実態」(吉村武彦・山路直光編『都城 古代日本のシンボリズム』青木書店) 2007
- 長宗繁一ほか「水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊」(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第17冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1998
- 奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告Ⅱ」(『奈良国立文化財研究所学報』第15冊 奈良国立文化財研究所) 1962
- 奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告Ⅶ」(『奈良国立文化財研究所学報』第26冊 奈良国立文化財研究所) 1976
- 奈良国立文化財研究所編「平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告-長屋王邸・藤原麻呂邸の調査-」(『奈良国立文化財研究所学報』第54冊 奈良国立文化財研究所) 1995
- 奈良文化財研究所「平城京 奈良の都のまつりごととくらし」奈良文化財研究所 2010
- 橋本義則「小規模宅地の建物構成-月借錢解の再検討を通じて-」(『平城京左京九条三坊十坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所) 1986
- 原田憲二郎「平城京の小規模宅地」(『都城制研究』5-都城における坪・町と小規模宅地の検証- 奈良女子大学古代学術研究センター) 2011
- 樋口隆康「昭和28年 椿井大塚山古墳発掘調査報告」(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第20集 山城町) 1998
- 平尾政幸「土師器再考」(『洛史 研究紀要』第12号 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 2019
- 福山博章「7. 岡田国遺跡第3次」「2. 岡田国遺跡第4・5次」(『京都府埋蔵文化財情報』第129・132号 公益財団法人京都市埋蔵文化財調査研究センター) 2017
- 福山博章「京都府木津川市岡田国遺跡の発掘調査」(『条里制・古代都市研究』第34号 条里制・古代都市研究会) 2019
- 古川匠「[5] 岡田国遺跡隣接地点試掘・確認調査」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』平成30年度 京都府教育委員会) 2019
- 町田章「平城京」考古ライブラリー44 ニューサイエンス社 1986
- 山田邦和「恭仁京復元への試案」(『京都を学ぶ【南山城編】-文化資源を発掘する-』京都学研究会編) 2019
- 山中章「古代都城の交通-交差点からみた条坊の機能-」(『考古学研究』第37巻第1号) 1990
- 山中章「古代条坊制論」(『考古学研究』第38巻第4号 考古学研究会) 1992

付編 1 岡田国遺跡における自然科学分析

一般社団法人文化財科学研究センター

I. はじめに

岡田国遺跡は、京都府木津川市木津馬場南に所在する。遺跡の東側には天神山丘陵と岡田国神社が所在し、南側には木津川の支流である井関川が北流している。遺跡は井関川によって形成された後背湿地と天神山丘陵裾部に立地する。遺跡からは奈良時代の井戸跡、道路跡、溝群などが検出された。これらの遺構で採取された堆積土について分析を行い、植生、環境、食性の復原を行う。

II. 試料

分析試料の詳細は下記の表1に記す。

表1 分析試料一覧

試料	分析遺構	花粉	寄生 虫卵	珪藻	プラト イン ⁻⁴	種実	動物 遺存体	DNA	貝類	粒度	備考
1) 井戸跡	S E 540 第13層	○	○			○	○	○			方形井戸
	S E 152 第5層	○	○			○			○		土掘り井戸
2) 道路跡	S D 160	○		○		○					道路側溝南北方向 最下層
	S D 190	○		○		○					道路側溝南北方向 最下層
3) 溝群	S D 458					○	○				東西方向の溝 (溝1群)
	S D 459					○	○				東西方向の溝 (溝1群)
	S D 461					○	○			○	東西方向の溝 (溝1群)
	S D 468					○	○			○	東西方向の溝 (溝2群)
	S D 469					○	○				東西方向の溝 (溝2群)
	S D 529					○	○				東西方向の溝 (溝2群)
	S D 460	○		○	○	○					南北方向の溝

III. 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、第四紀学で多く扱われ、生層序による分帯区分解析で地層を区分し、ゾーン比較によって植生や環境の変化を復原する方法である。そのため普通は湖沼などの堆積物が対象となり、堆積量単位など比較的広域な植生・環境の復原を行う方法として用いられる。遺跡調査においては遺構内の堆積物など局地的かつ時間軸の短い堆積物も対象となり、より現地性の高い植生・環境・農耕の復原もデータ比較の中で行える場合もある。さらに遺物包含層など、乾燥的な環境下の堆積物も対象となり、その分解性も環境の指標となる。また、風媒花や虫媒花などの散布能力などの差で、狭い範囲の植生に由来する結果が得られるなど、陸域の堆積物が分析に適さないわけではない。

2. 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で糞などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す

6)再び氷酢酸を加えて水洗処理

7)沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

8)検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節及び種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(－)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、鳥倉(1973)、中村(1980)を参照して行った。イネ属については、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。なお、花粉分類では樹木花粉(AP)及び非樹木花粉(NAP)となるが非樹木花粉(NAP)は草本花粉として示した。

3. 結果

(1)分類群

出現した分類群は、樹木花粉26、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉21、シダ植物胞子2形態の計52である。これらの学名と和名及び粒数を表2に示し、花粉数が200個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示す。なお、200個未満であっても100個以上計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。同時に、寄生虫卵についても検鏡した結果、1分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、ウルシ属、モチノキ属、トチノキ、アオイ科、ミズキ属、ハイノキ属、エゴノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

サジオモダカ属、オモダカ属、スプタ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタ節、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ササゲ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、ゴマ、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵

以下にこれの特徴を示す。

①回虫 *Ascaris lumbricoides*

回虫卵は、比較的大きな虫卵で、およそ80×60μmあり楕円形で外側に蛋白質膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。回虫は、世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。

(2)花粉群集の特徴

それぞれの地点において花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

1)井戸跡

・SE540第13層

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、樹木花粉が35%、草本花粉が56%を占める。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)の出現率が高く、ヨモギ属が伴われ、チドメグサ亜科、カヤツリグサ科、サジオモダカ属、ササゲ属、ゴマが出現する。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属が出現し、樹木・草本花粉では、マメ科が多い。回虫卵がわずかに検出される。

表2 岡田国遺跡における花粉分析結果

分類群	学名	和名	発掘層		遺跡跡							遺跡	
			S 5 E 50	S 5 E 152	S D 160 掘削 a - c			掘削 d - e		S D 190 掘削 a - c			S D 160
			第13層	第5層	第1層	第2層	第3層	第7層	第11層	第2層	第1層	第2層	
Arboreal pollen	樹木花粉												
<i>Podocarpus</i>	マツ科		1	1									
<i>Alnus</i>	ハシナ科		2	1		1		1		3			3
<i>Fagus</i>	ブナ科		1	1	6			1	1	3			9
<i>Pinus sulcata</i> <i>Ephedraceae</i>	マツ科/黄蘗科		2	3	4	2	1			1			8
<i>Corymbium japonica</i>	スギ		24	15	11	9	2		3	2	1		29
<i>Stadipitys vermiculata</i>	コウヤマキ		4	2				1					2
<i>Taxaceae-Cephalotaxaceae-Copressaceae</i>	イチイ科・イヌヅサ科・ヒノキ科		2	2						1	1		3
<i>Sals</i>	ヤナギ科		1										
<i>Alnus</i>	ハシナ科			1	1	1			3				1
<i>Betula</i>	カハシナ科		2	2	1	1		3		1			1
<i>Corylus</i>	ハンナシナ科		2	2	1				1				1
<i>Corylus-Corylus japonica</i>	ヤマノ木科-アザミ		2	9	5	6	1	5	1	2	6		19
<i>Castanea cretacea</i>	トナリ		6	1					2			1	2
<i>Castanopsis</i>	シイ科		19	26	5	6	3	6		4			43
<i>Fagus</i>	ブナ科												1
<i>Quercus sulcata</i> <i>Lepidobalanus</i>	コナラ科/コナラ亜科		16	48	40	28	6	22	7	35	18		85
<i>Quercus sulcata</i> <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ科/アカガシ亜科		67	80	17	19	1	25	7	16	9		90
<i>Ulmus-Elmox S.E. zeylan</i>	ユリカエデ科		1	2	1		1						2
<i>Ulmus-Elmoxanthae s/Phen</i>	ユリカエデ科		1	1									2
<i>Rhus</i>	ウルミ科		1										1
<i>Ilex</i>	イチボク科		1	1									1
<i>Ardisia turbinata</i>	トナリ科		1	1									1
<i>Malvaceae</i>	アザミ科		1										1
<i>Cornus</i>	ミズキ科									1			1
<i>Symphoricarpos</i>	ハイノキ科		1			1	1	2		1	1		1
<i>Sorbus</i>	エビノ木科		1										1
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木-草本花粉												
<i>Moraceae-Urticaceae</i>	タケノコ科-イラクサ科		5	1		1		1		1			1
<i>Boraginaceae</i>	ハクサイ科		2	2									
<i>Leguminosae</i>	マメ科		27										
Nonarboreal pollen	草本花粉												
<i>Alisma</i>	アキノクニキ科		1							4			
<i>Sagittaria</i>	サギ科		1	1									1
<i>Rhus</i>	スズナ科		1										
<i>Gramineae</i>	イネ科		125	78	31	21	5	32	3	30	15		133
<i>Cyperus type</i>	イネ科類		15	4	1	1		3					3
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科		9	12	6	3		4	1	2	2		32
<i>Polygonum S.E. et Persicaria</i>	タケノコ/ナクネ/アザミ科		1			2							
<i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>	アザミ科/モロコシ科		5					1					
<i>Caryophyllaceae</i>	カマツクサ科		4										
<i>Ranunculidae</i>	キンギョウキ科					1		2		1			
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科					1					1		
<i>Urtica</i>	サヤギ科		1										
<i>Asteraceae-Achyrocline</i>	アキノトウゴク科/フサギ科				2	1		1					
<i>Hydrocotylidae</i>	ナドメヤギ科		12	1	1	6		13					
<i>Apocynaceae</i>	セウヤギ科		1	2			2	1					2
<i>Solanaceae</i>	ナス科		2										
<i>S.E. asiatica indicum</i>	ゴマ		1										
<i>Lactucoidae</i>	タンポポ科類		1	2	6	2				2	1		1
<i>Asteroidae</i>	キク科類		7	5	5	5	1	4	1	3			8
<i>Xanthoxilum</i>	オナモミ科					1							
<i>Urticaria</i>	ヨモギ科		62	27	2	18	2	10		9	3		23
<i>Fern. Spores</i>	シダ類胞子												
<i>Mandate type Spores</i>	母体胞子		4	21	24	15	22	33	16	6	8	5	11
<i>Tritale type Spores</i>	三葉胞子		1	23	8	13	10	16	15	3	11	2	17
Arboreal pollen	樹木花粉		156	200	95	71	15	72	22	69	35	1	280
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木-草本花粉		34	3	9	1	0	1	0	1	0	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉		208	132	74	65	10	78	5	51	22	0	218
Total pollen	花粉総数		438	335	189	139	25	151	27	121	57	1	499
Pollen frequencies of 1cm ²	試料 1cm ² 中の花粉密度		20	19	13	6.8	1.6	9.8	2.2	6.9	3.3	0.7	7.1
			$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$
Unknown pollen	未同定花粉		5	9	13	6	2	13	1	6	11	0	10
<i>Fern. Spores</i>	シダ類胞子		5	54	32	28	32	49	31	9	19	7	31
Parasite eggs	寄生虫卵												
<i>Acariacanthorhynchus</i>	刺虫卵		1										
Total	計		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Parasite eggs frequencies of 1cm ²	試料 1cm ² 中の寄生虫卵密度		0.8										
			$\times 10^3$										
Stone cell	石細胞		11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
<i>Digestion rimosa</i>	消化環		11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
<i>Charcoal - woods fragments</i>	炭屑(植物- 樹木)		(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)
炭屑(植物- 樹木)			(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)
炭屑(植物)			13										
炭屑(動物)			6	22	22	19	1.6	2.2	0.1	0.1		1.1	2.6
炭屑(植物) (概算)			0.1	0.1			0.3				0.1		0.1

・SE152第5層

樹木花粉が54%、草本花粉が34%を占める。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属を主にコナラ属コナラ亜属、シイ属、スギが出現する。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)の出現率が高く、ヨモギ属、カヤツリグサ科が伴われる。

2) 道路跡

・SD160断面c-c'(第1・2・9・7・11層)、断面d-d'(第2層)、道路側溝

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。下位の試料第11層では、花粉密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されず、シダ植物胞子がわずかに出現する。試料第7層では、樹木花粉が36%、草本花粉が39%、シダ植物胞子が25%を占める。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)を主にチドメグサ亜科、ヨモギ属、タデ属サナエタデ節、カヤツリグサ科が出現する。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属の出現率がやや高く、シイ属、クマシデ属-アサダ、スギ、カバノキ属が低率に出現する。試料4では、花粉密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されず、シダ植物胞子がわずかに出現する。試料第2層、試料第1層では、樹木花粉が44%から47%、草本花粉が39%から37%を占める。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属を主にコナラ属アカガシ亜属が多く、スギ、クマシデ属-アサダ、シイ属が伴われる。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)の出現率が高く、ヨモギ属、タンポポ重科、キク亜科、カヤツリグサ科が伴われる。

断面d(第2層)では、樹木花粉が53%、草本花粉が39%を占め、密度は低い。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属の出現率が高く、シイ属、モミ属、ツガ属が低率に出現する。草本花粉では、イネ科の出現率が高く、ヨモギ属、サジオモダカ属、キク亜科が伴われる。

・SD190断面e-e'(第1・2層)

下部の第2層では、密度が極めて低く花粉はほとんど検出されない。第1層でも密度は低いが、50個以上計数できたものは、参考のため樹木花粉が46%、草本花粉が29%、シダ植物胞子が25%を占め、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、イネ科などがわずかに出現する。

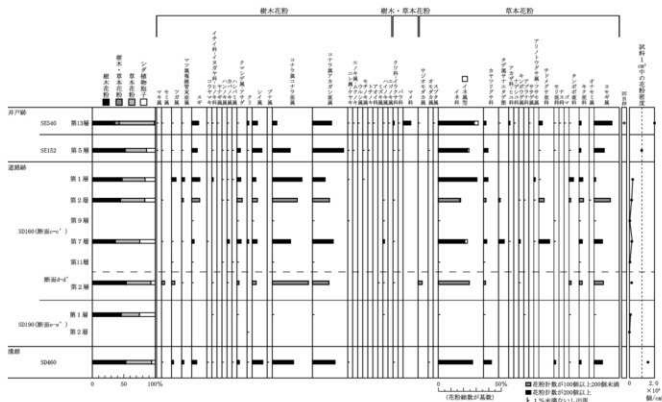


図1 岡田国遺跡における花粉ダイアグラム

3) 溝群 SD460

樹木花粉が53%、草本花粉が41%を占める。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属を主にシイ属、スギが出現する。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)の出現率が高く、ヨモギ属、カヤツリグサ科が伴われる。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

それぞれの地点において花粉群集の特徴から、植生と環境の復原を行う。

(1) 井戸跡

1) SE540第13層

イネ属型を含むイネ科、ヨモギ属を主に草本花粉がやや多く、周囲は主にイネ科雑草及びヨモギ属の草本の分布が示唆される。マメ科が特徴的に多いが、マメ科の雑草が周囲に群生して多く分布していたとみられる。カヤツリグサ科、サジメモダカ属などの水田雑草が検出されるが、イネ属型の出現率はやや低く、井戸の周囲に生育していた可能性が考えられる。栽培植物のササゲ属、ゴマが出現し、周囲での栽培の可能性も示唆されるが、利用されたこれら栽培植物の花粉が反映されたことも考えられる。回虫卵がわずかに検出され、密度は生活汚染程度で、SE540に近接して生活域が分布していたとみなされる。また、周辺にはコナラ属アカガシ亜属を主にシイ属を構成要素とする照葉樹林が分布し、コナラ属コナラ亜属及びスギも伴って生育していた。

2) SE152第5層

SE152第5層でも、SE540と同じく、周囲にはイネ科とヨモギ属の雑草が生育分布するが、栽培植物やマメ科の花粉は検出されず、このことから、SE540では利用された栽培植物が反映されたとみなされる。周辺の樹木はSE540より大きく反映され、コナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹林、コナラ属コナラ亜属、クマシデ属-アサダの二次林要素の落葉広葉樹、及びスギが分布する。

(2) 道路跡

1) SD160断面c-c'(第1・2・9・7・11層)、断面d-d'(第2層)、道路側溝

各層準の花粉構成及び組成は類似し、堆積地周囲にはイネ科、チドメグサ亜科、ヨモギ属などの陽当たりの良い比較的乾燥した環境を好む人里植物(雑草)が生育し、やや乾燥した堆積環境であったとみなされる。下部の第11層及び第2層からはタデ属サナエタテ節(ミソソバ)が生育し、湿地ないし水際の環境が示唆される。コナラ属コナラ亜属を主とする落葉樹とコナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹が分布する。コナラ属コナラ亜属はコナラなど二次林と考えられ、周囲の森林はかなり二次林化している。第1・2層の上位の時期では微量であるがスギが増加する。断面d-d'(第2層)においては、コナラ属コナラ亜属が多く、コナラなどの二次林の分布がより大きく示唆される。周囲はイネ科、ヨモギ属などの草本が分布し比較的乾燥した環境であった。明らかに滞水を示す水生植物は検出されず、断面d-d'の第2層の時期は、乾燥した堆積環境であったと考えられる。SD160は、常時滞水したり流れのある溝ではなく、季節的な流れの流れる溝であったと推定される。

2) SD190断面e-e'(第1・2層)

いずれの試料も密度が極めて低く、シダ植物胞子の出現率が高く、乾燥した堆積環境であったと推定され、常時滞水したり流れのある溝ではなく、雨水が流れる以外は乾燥し分解が著しい溝であったと推定される。

(3) 溝群 SD460

周囲にはイネ科とヨモギ属の雑草が生育分布する比較的乾燥した環境が示唆される。周辺には、コナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹林及びコナラ属コナラ亜属のコナラなどの二次林となる落葉樹の分布が示唆され、井戸SE152第5層と類似した傾向を示す。明らかに滞水を示す水生植物は出現せず、SD460は常時は湿った程度の環境の溝であったと推定され、時期により短期間滞水した可能性がある。

5. 小結

分析の結果、SE540及びSE152では、周囲はイネ科やヨモギ属の雑草の分布と照葉樹林を主とする森林

分布が示唆された。S E 540では特に栽培植物の花粉と寄生虫卵が検出され、近接した生活域の分布とそこからの汚染が示唆された。S D 160断面 e-c'、断面 d-d'では、概ね類似した堆積環境であるが、コナラ属コナラ亜属の落葉樹がやや多く、コナラなどの二次林の分布拡大がみられた。周囲は乾燥した環境で、イネ科、チドメグサ亜科、ヨモギ属などの人里植物が生育する。S D 190断面 e-e'は、S D 160断面 c-c'、断面 d-d'よりもやや乾燥した堆積環境であったとみなされる。S D 460では、イネ科の雑草の分布、照葉樹林とコナラなど二次林となる落葉広葉樹の分布が示唆され、井戸 S E 152と極めて類似した傾向を示した。

IV. 珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

表3 岡田国遺跡における珪藻分析結果

分類群	井戸跡		遺跡跡		溝群
	S E 540	S E 152	S D 160	S D 190	S D 460
	第1層	第5層	断面 c-c' 第7層	断面 e-e' 第2層	
異塩性種 (淡水生種)					
<i>Achnanthes hungarica</i>	3				
<i>Achnanthes minutissima</i>	2				
<i>Cabonella bacillum</i>	1				
<i>Eumotis bilunaris</i>	15				
<i>Eumotis minor</i>	3				
<i>Eumotis paludosa-rhomboides</i>	15				
<i>Eumotis pectinalis</i>	2				
<i>Eumotis praerupta</i>	63				
<i>Frustulia rhomboides v. saxonica</i>	1				
<i>Frustulia vulgaris</i>	25				
<i>Gomphoena minutum</i>	9				
<i>Gomphoena parvulum</i>	66	1			
<i>Hantzschia amphioxys</i>	23	1			
<i>Navicula contenta</i>	4				
<i>Navicula gallica</i>	2				
<i>Navicula goeppertiana</i>	4				
<i>Navicula kotschyj</i>	1				
<i>Navicula mutica</i>	22	1			
<i>Navicula</i> Sfp.	2				
<i>Neidium alpinum</i>	6				
<i>Neidium ampfortum</i>	1				
<i>Nitzschia clausii</i>	3				
<i>Nitzschia nana</i>	1				
<i>Pinnularia appendiculata</i>	1				
<i>Pinnularia borealis</i>	8	1			
<i>Pinnularia gibba</i>	4				
<i>Rhopalodia gibberula</i>		1			
<i>Pinnularia interrupta</i>	6				
<i>Pinnularia lagerstedtii</i>	1				
<i>Pinnularia microrostreae</i>	1				
<i>Pinnularia obscura</i>	2				
<i>Pinnularia schoenfelderii</i>	2				
<i>Pinnularia subcapitata</i>	6				
<i>Pinnularia</i> Sfp.	1				
<i>Stauroneis anceps</i>	1				
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	15				
<i>Surirella ovata</i>	3				
<i>Surirella tenera</i>	1				
合計	326	5	0	0	0
未同定	4	0	0	0	0
破片	188	17	0	0	7
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	6.7	1.0			
	× 10 ³	× 10 ³			
定形殻保存率 (%)	63.7	22.7			

2. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗(5～6回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1,500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

3. 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種(淡水生種)38分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。分析結果を表3に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図2に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe(1974)の記載により、陸生珪藻は小杉(1986)により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉(1988)により、淡水生種は安藤(1990)による。また、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。以下に出現した分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes hungarica, *Achnanthes minutissima*, *Caloneis bacillum*, *Eunotia bilunaris*, *Eunotia minor*, *Eunotia paludosa-rhomboidea*, *Eunotia pectinalis*, *Eunotia praerupta*, *Frustulia rhomboidea* v. *saxonica*, *Frustulia vulgaris*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta*, *Navicula gallica*, *Navicula goeppertiana*, *Navicula kotschyi*, *Navicula mutica*, *Navicula* Sp., *Neidium alpinum*, *Neidium ampliatum*, *Nitzschia clausii*, *Nitzschia nana*, *Pinnularia appendiculata*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia gibba*, *Pinnularia interrupta*, *Pinnularia lagerstedtii*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia obscura*, *Pinnularia schoenfelderi*, *Pinnularia* Sp., *Pinnularia subcapitata*, *Rhopalodia gibberula*, *Stauroneis anceps*, *Stauroneis phoenicenteron*, *Suriella ovata*, *Suriella tenera*

(2) 珪藻群集の特徴

1) 井戸跡

・SE540第13層(参考試料)

流水不定性種が44%、陸生珪藻が24%、真・好流水性種が21%、真・好止水性種が11%を占める。流水不定性種では、沼沢湿地付着生種でもある*Eunotia praerupta*の出現率が高く、他に*Frustulia vulgaris*、*Eunotia paludosa-rhomboidea*、*Gomphonema minutum*が伴われる。真・好流水性種では、好流水性種の*Gomphonema parvulum*が優占する。陸生珪藻では、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、真・好止水性種では、*Eunotia bilunaris*、沼沢湿地付着生種の*Stauroneis phoenicenteron*の出現率がやや高い。

・SE152第5層(参考試料)

密度が極めて低く、珪藻はほとんど検出されない。

2) 道路跡

・SD160断面c-c'(第7層)道路側溝

密度が極めて低く、珪藻は検出されない。

・SD190断面e-e'(第2層)

密度が極めて低く、珪藻は検出されない。

3) 溝群 SD460

密度が極めて低く、珪藻は検出されない。

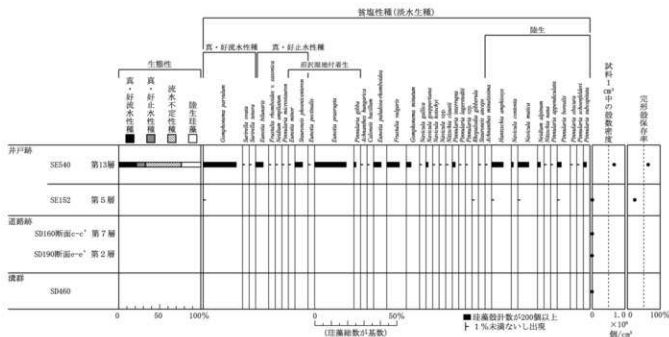


図2 岡田国遺跡における主要珪藻ダイアグラム

4. 珪藻分析から推定される堆積環境

(1) 井戸跡

1) S E 540第13層(参考試料)

珪藻が検出され、S E 540は最下層の時期は滞水していた。流水不定性種で沼沢湿地付着種でもある *Eunotia praerupta*、好流水性種の *Gomphonema parvulum*などの出現率がやや高く、湧水や流れ込みによって水が緩やかに動いている様相が示唆される。比較的多様な環境に生育する珪藻が検出され、陸生珪藻などは湿った壁面に生育していたとみられる。

2) S E 152第5層

珪藻はほとんど検出されず、珪藻の生育できない乾燥した堆積環境であったか乾湿を繰り返す不安定な環境、あるいは堆積速度が速かった等が考えられる。

(2) 道路跡

1) S D 160断面 c-e' (第7層)

珪藻が検出されず、珪藻の生育できない乾燥した堆積環境であったとみなされ、溝は常時乾燥した溝で、雨水が一時的に流れる程度であったと考えられる。

2) S D 190断面 e-e' (第2層)

珪藻が検出されず、珪藻の生育できない乾燥した堆積環境であったとみなされ、溝は常時乾燥した溝で、雨水が一時的に流れる程度であったと考えられる。

(3) 溝群 S D 460

珪藻が検出されず、珪藻の生育できない乾燥した堆積環境であったとみなされ、溝は常時乾燥した溝で、時的でないし雨水が流れる程度であったと考えられる。

5. 小結

分析の結果、S E 540は、流水の影響のある滞水した環境であり、一方、S E 152は常時は滞水していなかったとみなされた。道路側溝 S D 160、S D 190、南北方向の溝 S D 460はいずれも珪藻の生育しにくい乾燥した環境であり、雨水や短期間に流水するような溝であったとみなされる。

V. 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO₂)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定及び古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000, 2009)。また、イネの消長を検討することで埋藏水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

3. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表4及び図3に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科(シイ属)、その他

4. 考察

(1) 稲作跡の検討

稲作跡(水田跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。なお、畑稲作(陸稲栽培)の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑

期間をおく必要があるため、イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなり、1,000~2,000個/g程度である場合が多い(杉山, 2000)。

奈良時代の溝群(S D458, S D459, S D460, S D461, S D468, S D469, S D529)の埋土から採取された計7試料について植物珪酸体分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、S D529では密度が4,600個/gと比較的高い値であるが、その他の試料では500~2,200個/gと比較的低い値である。

これらのことから、当時は周辺で水田が分布していたと考えられ、そこから何らかの形で溝内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。なお、ここで検出されたイネについては、周辺で利用された稲藁に由来する可能性も考えられる。稲藁の利用としては、藁製品(俵、縄、ムシロ、草履など)、建物の屋根材や壁材、敷き藁、堆肥、燃料など多様な用途が想定される。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属型(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属型(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

表4 岡田国遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: × 100 個 / g)

分類群	地名・試料	溝1群			溝2群			溝群
		東西方向			東西方向			
		S D	S D	S D	S D	S D	S D	
		458	459	461	468	469	529	S D 460
イネ科	Gramineae							
イネ	<i>Oryza sativa</i>	5	17	22	17	11	46	11
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	5	6	5	6	6	6	6
キビ属型	Panicaceae type	5	6	5	6	6	6	6
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	11	17	5	6	6	17	11
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	11	17	11	6	28	11	11
タケ亜科	Bambusoideae							
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> S E ct.	37	23	5	28	6	17	17
	Nipponocalamus							
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> S E ct. Nezasa	100	96	87	117	40	63	110
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> S E ct. Sasa etc.	5		5	6			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> S E ct. Crassinodi				6		11	
未分類等	Others	37	45	43	39	40	80	33
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin	11	6	11	6	6	6	6
棒状珪酸体	Rodshaped	16	39	5	17	17	11	11
未分類等	Others	47	17	65	28	28	57	17
樹木起源	Arboreal							
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	16	11	11	6	11	11	11
その他	Others	32	17	5	17	23	11	28
植物珪酸体総数	Total	336	316	287	301	226	355	276

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg / m² · cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.15	0.50	0.64	0.49	0.33	1.35	0.32
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.33	0.36	0.34	0.35	0.36	0.36	0.35
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.13	0.21	0.07	0.07	0.07	0.21	0.14
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> S E ct.	0.43	0.26	0.06	0.32	0.07	0.20	0.19
	Nipponocalamus							
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> S E ct. Nezasa	0.48	0.46	0.42	0.56	0.19	0.30	0.53
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> S E ct. Sasa etc.	0.04		0.04	0.04			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> S E ct. Crassinodi				0.02		0.03	

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> S E ct.	45	36	12	34	26	37	27
	Nipponocalamus							
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> S E ct. Nezasa	51	64	80	60	74	56	73
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> S E ct. Sasa etc.	4		8	4			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> S E ct. Crassinodi				2		6	
メダケ率	Medake ratio	96	100	92	94	100	94	100

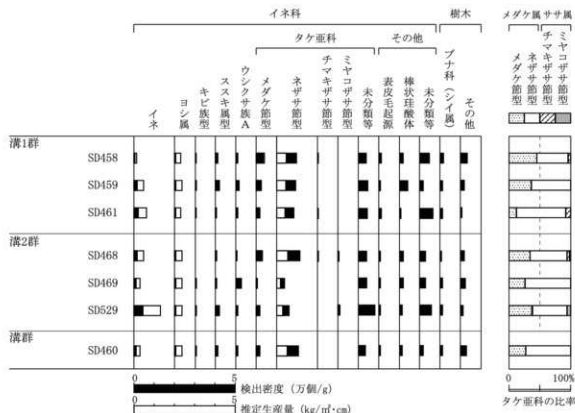


図3 岡田国遺跡における植物珪酸体分析結果

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するもの含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、及び樹木(照葉樹)のブナ科(シイ属)なども認められた。なお、植物珪酸体の組成や密度は、試料間でとくに明瞭な差異は認められなかった。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねネザサ節型が優勢であり、部分的にイネも多くなっている。

以上の結果から、溝群の埋土の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような比較的湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属(おもにネザサ節)などの竹笹類をはじめ、ススキ属、ウシクサ族(チガヤ属など)、キビ族などのイネ科草本類が生育していたと推定される。また、遺跡周辺にはシイ属などの樹木(照葉樹)が分布していたと考えられる。

VI. 種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 試料

堆積物の試料に以下の物理処理を施して、抽出及び同定を行う。なお、SE540第13層では水洗選別済み試料も含まれる。

- 1) 試料500cm³に水を加え放置し、泥化

2)攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別

3)残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴及び現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

3. 結果

(1)分類群

樹木3、草本13の計17分類群が同定される。学名、和名及び粒数を表5に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

[樹木]

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schott. 果皮(完形・破片) バナ科

堅果は広卵形を呈し、先端に花柱が見られる。

ウメ *Prunus mume* S. et Z. 核 バラ科

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縦線が走る。表面には小孔が散在する。

モモ *Prunus persica* Batsch 核(完形・半形・破片) バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縦線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

[草本]

エノコログサ属 *Setaria* 穎 イネ科

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

イネ科 Gramineae 穎

穎は茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

黄褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は三角形である。

タデ属サナエタ節 *Polygonum* S.Ect. *Persicaria* 果実 タデ科

黒褐色で頂端が尖る広卵形を呈す。表面は滑らかで光沢があり、断面は扁平で中央がややくぼむ。

コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms Laub. 種子 ミズアオイ科

淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に7～9本程度の隆起があり、その間を横方向の密な隆線が走る。

ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

キジムシロ属 *Potentilla* 種子 バラ科

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6～8本の隆起が走る。

チドメグサ属 *Hydrocotyle* 果実 セリ科

黄褐色～赤褐色で半円形を呈す。隆起は細い線条状をなし、背面、側面、縁にそれぞれみられる。

アブラナ科 Cruciferae 種子

茶褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面には長方形の網目がある。

シソ属 *Perilla* 果実 シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。

ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子(完形・破片) ウリ科

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。

タカサブロウ *Eclipta prostrata* L. 果実 キク科

淡褐色～茶褐色で長楕円形を呈す。上端は円形に突出し、下端は切形となる。表面中央部にはいぼ状の突

表5 岡田国道跡における種実同定結果

(500cm 3中 0.25mm 篩)

分類群	和名	部位	溝群											
			溝1群		溝2群		溝3群		溝4群		溝5群		溝6群	
			第13層	第5層	断面 e-c'	断面 e-e'	東西方向	東西方向	東西方向	東西方向	東西方向	南北方向(区画)		
学名			SE 540	SE 152	SD160	SD190	SD 458	SD 459	SD 461	SD 468	SD 469	SD 529	SD460	
Arbor	樹木													
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核(半形)	1											
Herb	草本													
<i>S E taris</i> Beauv.	エノコログサ属	穎	35											
Gramineae	イネ科	穎	25											
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	31											
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl var. <i>plumbago</i> Salm-Laub	コナギ	種子	2											
<i>Phytoloma</i> S Ect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ属	果実	6											
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	37											
<i>Arenaria</i>	ナジムシロ属	種子	34											
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	25											
<i>Hydrocotyle</i>	チドメグサ属	果実	17											
Cruciferae	アブラナ科	種子	1											
<i>Pisilla</i>	シソ属	果実	53											
<i>Eclipta prostrata</i> L.	タカサブロウ	果実	7											
Total	合計		614	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
備考	昆虫	細片	(+)										(+)	
	炭化材	細片												
	植物	細片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	
	葉	細片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	

分類群	和名	部位	(水洗選別済み)											
			溝1群		溝2群		溝3群		溝4群		溝5群		溝6群	
			第13層	第5層	断面 e-c'	断面 e-e'	東西方向	東西方向	東西方向	東西方向				
学名														
Arbor	樹木													
<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ	果皮 (破片)	7											
<i>Prunus mume</i> S. et Z.	ウメ	核	1											
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (半形)	2											
		(破片)	13											
<i>Prunus salicina</i> Lindley	スモモ	核	2											
Herb	草本													
<i>Lagomarix siceraria</i> Standl.	ヒヨウタン類	種子 (破片)	59											
			5											
Total	合計		205											

起がある。断面はひし形である。

(2) 種実群集の特徴

1) 井戸跡 SE540第13層、SE152第5層

SE540第13層より樹木種実のツブラジイ7、破片15、ウメ1、モモ2、半形13、破片2、草本種実のエノコログサ属35、イネ科25、カヤツリグサ科31、コナギ2、タデ属サナエタデ属6、ナデシコ科377、キジムシロ属34、カタバミ属25、チドメグサ属17、アブラナ科1、シソ属53、ヒヨウタン類59、破片5、タカサブロウ7が検出され、その他に昆虫、炭化材、植物、葉の細片が確認された。また、SE152第5層からは炭化材、植物、葉の細片が確認されたが、種実は検出されなかった。

2) 道路跡 SD160(断面e-c')、SD190(断面e-e')道路側溝

道路跡からは炭化材、植物の細片が確認されたが、種実は検出されなかった。

3) 溝群

- ・ 東西方向の溝(溝1群)：SD458、SD459、SD461
炭化材、植物の細片が確認されたが、種実は検出されなかった。
- ・ 東西方向の溝(溝2群)：SD468、SD469、SD529
炭化材の細片が確認されたが、種実は検出されなかった。
- ・ 南北方向の溝(SD460)
炭化材の破片が確認されたが、種実は検出されなかった。

4. 種実同定から推定される種生と農耕

(1) 井戸跡 SE540第13層、SE152第5層

SE540第13層より栽培植物では、樹木種実のウメ、モモ、草本種実のヒョウタン類が検出された。ツブラジイは渋抜きなしに食べられる種類で食用として利用される。ナダシコ科、シソ属、エノコログサ属、キジムシロ属、カタバミ属、チドメグサ属、アブラナ科は乾燥した人為地に生育する草本が多く、多様な環境の種類を含むイネ科、カヤツリグサ科、田畑共通雑草のタカサブロウが検出され、周囲にはこれら草本が生育し、比較的乾燥した集落や畑地の環境であった。他に湿地に生育し水田雑草でもあるコナギ、タデ属サナエタデ節なども検出された。その他に昆虫、炭化材、植物、葉の細片が確認されたが細片で同定できなかった。また、SE152第5層からは種実は見出されなかった。試料となった堆積物が、種実などの有機質遺体の分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったと考えられる。また、コナギやタデ属サナエタデ節も多少生育し、井戸利用の排水によって湿潤になっていたか所があったと推定される。

(2) 道路跡 SD160(断面c-c')、SD190(断面e-e')、道路側溝

種実は見出されなかった。なお、試料となった堆積物が、種実などの有機質遺体の分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境で生成または保存されたと考えられる。

(3) 溝群(溝1群:SD458、SD459、SD461、溝2群:SD468、SD469、SD529、溝:SD460)

種実は見出されなかった。なお、試料となった堆積物が、種実などの有機質遺体の分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境で生成または保存されたと考えられる。

VII. 貝類・動物遺存体同定

1. はじめに

一般に日本の国土は、火山灰に由来する酸性土壌に広く覆われ、高温多湿というモンスーン気候ともあいまって動物遺存体の保存状態には恵まれない。そのため、ほとんどの乾燥地遺跡では動物や植物性の遺物は分解されて保存されず、動物遺存体が出土する遺跡は、貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰が代表的である。近年では、湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体が報告されている。本遺跡のように乾燥した遺跡では、ほとんどの動物遺存体が腐食するが、例外的に消失を免れ、発掘で取りあげられるものもある。そうした断片的な資料を蓄積することによって、その遺跡を残した人々の動物利用、食生活などを解明する手がかりとすることができ、ひいては当時の自然環境や人間の適応の歴史を明らかにすることができる。

2. 方法

試料を肉眼及び双顕実体顕微鏡で観察し、形態的特徴及び現生骨格標本との対比によって同定を行った。

3. 結果

(1) 分類群

同定された学名、和名を表6に示し、主要な分類群を写真に示す。

(2) 貝類・動物遺存体の特徴

1) 貝類

・井戸跡 SE152第5層

ヤマトシジミが3個体が同定された。

表6 種名

芥尾綱	Bivalvia
マルスグレガイ目	Veneroidea
マルスグレガイ科	Veneridae
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>
哺乳綱	Mammalia
奇蹄目または偶蹄目	Persodactyla / Artiodactyla
ウマまたはウシ	<i>Equus caballus</i> / <i>Bos taurus</i>

2) 動物遺存体

・井戸跡 SE540第10～13層

ウマまたはウシの寛骨が同定された。

4. 同定から推定される種生と生業

ヤマトシジミは河川の河口など淡水と海水が入り混じる汽水域の砂礫底で多く見られるが、干涸になると水がなくなるような干潟にも生息できる。ヤマトシジミは本遺跡周辺では生育せず、流通などによって本遺跡にもたらされたと考えられる。なお、本試料は食用にもたらされたものの残滓とみられ、井戸に廃棄されたと考えられる。

ウマやウシは家畜であり、生きている間は乗馬、牛車、荷物の牽引などに使役され、最終的には解体され、肉や皮を資源として利用したと考えられる。なお、井戸よりウマ、ウシが出土した例はいくつか見られ、奈良県唐古・鍵遺跡では古墳時代中期の大型の井戸の最上層にウマの全身骨格、岡山県鹿田遺跡では13世紀の井戸底部からウシの頭骨が出土した報告例がある。これらは共伴した遺物や出土状況から井戸を埋めたときに行われた祭祀に関係があると考えられているが、本試料は井戸埋め戻し土の中層から最下層より出土したため、井戸の廃絶時に廃棄を目的に投げ込まれた可能性がある。

VII. DNA分析(動物遺存体)

1. はじめに

井戸からは種類不明であるが、ウマあるいはウシと考えられている動物骨が出土した。本分析調査では、井戸から出土した種類不明の動物骨について、DNA分析を行いその種類に係る資料を得る。

2. 分析方法

1) 骨サンプルからのDNA抽出

2) DNA抽出物から特異的PCRプライマーを用いて増幅の有無を確認

削り取ったサンプルについてQIAamp DNA Investigator (QIAGEN社製)を用いてDNAを抽出した。方法は添付プロトコルに従った。

PCRとはPolymerase Chain Reaction (ポリメラーゼ連鎖反応)のことであり、DNAを増幅させるための方法である。TOYOBO社製のPCR用試薬キット [KOD Plus Neo] を用いて表7の反応組成と、表8のプライマーの組み合わせ、表9のPCRプログラムによってPCRを行った。本試料はウマかウシの可能性があるとされていることから、特異的配列が確認できたウマのプライマー組み合わせをターゲットとする。プライマーの配列は文献1 (Carles Vilàほか2001) 及び文献2 (Zölal Kesmenほか2010) を参照した。PCRサイクルは35、40、45サイクルの3種で行った。その後、2%アガロースゲルを用いて100V、55分間電気泳動を行い、増幅したPCR産物の確認を行った。

主な試薬及び使用器具は、以下のとおりである。

- ・TEバッファー (pH 8.0) : 10mM Tris-HCl 1 mM EDTA
- ・DNA AWAY (Molecular BioProducts製)
- ・QIAamp DNA Investigator (QIAGEN社製)
- ・QIAquick PCR Purification Kit (QIAGEN社製)
- ・QIAquick Gel Extraction Kit (QIAGEN社製)

3. 結果及び考察

図4に文献(1)プライマーによるPCR増幅、図5に文献(2)プライマーによるPCR増幅の電気泳動結果を示した。両文献プライマーともに35サイクル、40サイクルでは目的位置に増幅バンドが確認できなかった。45サイクルでは目的位置付近に弱い増幅バンドが確認できるが、増幅目的以外のバンドも多数確認されているため、特異的なバンドが増幅されているとは判定できなかった。

以上のように、本分析調査で対象とした動物骨についてDNA分析を実施したが、状態が不良であり、プライマーのPCR増幅が良い状態で出来なかったが、文献に示されるウマ特異的配列をターゲットとした、PCR増幅を実施した。その結果、45サイクルでターゲット位置付近に弱い増幅バンドが認められたものの、明瞭ではなく、ターゲット以外のバンドも確認されていることから、DNA分析からは今回出土した動物骨の種類を確認することはできなかったが、ウマではない可能性がある。

X. 粒度分析

1. はじめに

粒子が水の中で沈降する速度は、主に粒子の大きさによって支配される。粒径の小さな粒子はストークスの法則に従って沈降し、大きな粒子はインバクトの法則に従って沈降する。流水の中では淘汰を受けて堆積し、正規分布に類似する分布を示す。風成の堆積や土壌堆積の中には特有の粒度組成を示すものもある。堆積物の粒度組成を調べることによって堆積物の成因を探ることができる。

2. 方法

粒度分析を行うには、有機質を除去し、砂粒までを篩によって分析し、シルト以下を沈降速度等で分析を行う。有機物の除去は通常、電気炉で有機物を燃焼させて行うが、熱による粒子の破壊が行われ、風化が強い試料等では、データが歪むことが多い。これらを防ぎ、より正常なデータを出すため、ここでは、方法の検討と比較を行い、以下の方法で行った。

表7 反応組成

試薬	組成量
10 × PCR Buffer	5 μ l (1 ×)
2mM dNTPs	5 μ l (0.2mM)
25mM MgSO ₄	3 μ l (1.5mM)
フォワードプライマー (25 μ M each)	6 μ l (0.3 μ M each)
リバースプライマー (25 μ M each)	6 μ l (0.3 μ M each)
テンプレート DNA	2 μ l
Taq Polymerase (1U/ μ l)	1 μ l
滅菌超純水	22 μ l
Total	50 μ l

カッコ内は最終反応濃度

表8 プライマー組み合わせ

文献	プライマー名	プライマー配列 (5'→3')	PCR産物 (bp)
文献 (1)	フォワード	TCGTGCATACCCCATCCAA	195
	リバース	CCTGAAGTAGGAACCCAGATG	
文献 (2)	フォワード	CTATCCGACACACCCAGAAGTAAAG	153
	リバース	GATGCTGGAAATATGATGATCAGA	

※文献 (1) のプライマー：ミトコンドリア DNA の D-loop 領域部分。文献中に記載が無いが、フォワードプライマーがウマ特異的配列であることを DDBJ 相同性検索 [blast\(ddbj.nigac.jp/blast?lang=ja\)](http://blast.ddbj.nigac.jp/blast?lang=ja) で確認。よってウマ特異的と考えられる。文献では数千年前～数千年前のウマの骨から増幅できたと記載がある。

※文献 (2) のプライマー：ミトコンドリア DNA を標的としたウマに特異的プライマー。

表9 PCRプログラム

反応名	反応温度、反応時間
Pre Denature	94℃, 2min.
Denature	98℃, 10 S E c
Annealing	55℃, 30 S E c
Extension	68℃, 30 S E c
Denature, Annealing, Extension の Cycle 数	35, 40, 45

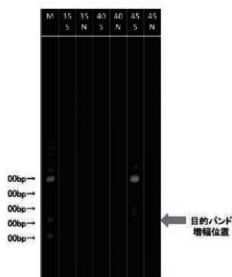


図4 文献(1)プライマー組み合わせによるPCR増幅結果
 引：100bp ラダーマーカー (T01000 社製)
 130S：35 サイクルサンプル、40S：40 サイクルサンプル、45S：45 サイクルサンプル
 130N：35 サイクル陰性型、40N：40 サイクル陰性型、45N：45 サイクル陰性型

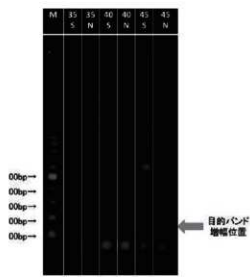


図5 文献(2)プライマー組み合わせによるPCR増幅結果
 引：100bp ラダーマーカー (T01000 社製)
 131S：35 サイクルサンプル、40S：40 サイクルサンプル、45S：45 サイクルサンプル
 131N：35 サイクル陰性型、40N：40 サイクル陰性型、45N：45 サイクル陰性型

図4 文献(1)プライマー組み合わせによるPCR増幅結果 図5 文献(2)プライマー組み合わせによるPCR増幅結果

- 1) 試料となる堆積物を乾燥させ、秤量する。
- 2) 過酸化水素水を加え、有機質の分解を行う。
- 3) 乾燥後、秤量を行う。(1との差が有機物含有量)
- 4) 罫(～2mm)、極粗粒砂(1～2mm)、粗粒砂(1～1/2mm)、中粒砂(1/2～1/4mm) 5：細粒(1/4～1/8mm)、極細粒砂(1/8～1/16mm)を水洗して篩による分別を行い、それぞれ乾燥後、秤量する。
- 5) 沈降速度を計り、粗粒シルト(1/16～1/32mm)、中粒シルト(1/32～1/64mm)、細粒シルト(1/64～1/128mm)、微粒シルト(1/128～1/256mm)を分別し、乾燥重量を量る。
- 6) 残存した粘土を濾過し、乾燥重量を量る。
- 7) 統計を行う。

3. 結果

結果は、粒度組成表(表10)と粒度組成図(図6)に示した。

(1) 溝群

1) 溝1群 S D461

粒度分布は中粒砂から中粒シルトを中心に分布し、中粒砂から極細粒砂にほぼ均等でなだらかな分布と、粗粒シルトにやや弱いピークがある。細粒シルト以下の粒子は極めて少ない。平均粒径(D_φ)は3.61φ、分級度(標準偏差σ)は1.72σ、歪度(Sk)は-0.03 Sk、尖度(K)は0.91 Kである。有機物含有量はやや多い。

2) 溝2群 S D468

粒度分布は粗粒砂から中粒シルトに分布し弱い双峰性を示す。中粒砂を中心とするなだらかな分布を示し、粗粒シルトから中粒シルトに弱いピークがある。細粒シルト以下の粒子は極めて少ない。平均粒径(D_φ)は3.08φ、分級度(標準偏差σ)は2.10σ、歪度(Sk)は-0.10 Sk、尖度(K)は-1.00 Kである。有機物含有量は少ない。

4. 考察

粒度分析の結果、S D461は、細粒シルト以下の粒子は極めて少なく、流水による淘汰を受けている。粗粒シルトに顕著なピークを示し、弱い水流による淘汰が認められるが、尖度がやや低く流速が常に一定するわけではなかったとみなされ、また水の流れない期間があったとみなされる。S D468では細粒シルト以下の粒子は極めて少なく、流水による淘汰を受けたとみなされるが、尖度がやや低く、水の流れない期間が多かったとみられる。

表10 岡田国遺跡の粒度組成分析結果

試料名	(φ) mm	-1	0	1	2	3	4	5	6	7	8
		礫 1~2	粗粒砂 1~2	粗粒砂 1~1/2	中粒砂 1/2~1/4	細粒砂 1/4~1/8	極細粒砂 1/8~1/16	粗粒シルト 1/16~1/32	中粒シルト 1/32~1/64	粗粒シルト 1/64~1/128	微粒シルト 1/128~1/256
溝1群 S D 461	0.24	1.96	3.61	13.04	17.39	16.53	30.33	11.18			
溝2群 S D 468	2.76	4.36	10.90	16.58	14.19	9.11	22.90	15.61	1.18	1.59	0.92

試料名	平均 粒径 (φ)	分級度 (σ)	歪度 (Sk)	尖度 (K)	有機物 含有量
					(%)
溝1群 S D 461	3.61	1.72	-0.03	0.91	1.55
溝2群 S D 468	3.08	2.10	-0.10	-1.00	0.81

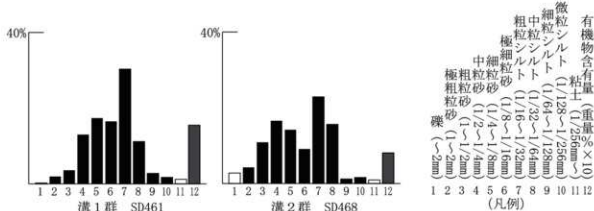


図6 岡田国遺跡の粒度組成図

X. まとめ

岡田国遺跡における分析の結果、各遺構の堆積物の花粉群集は類似し、周辺はイネ科やヨモギ属の雑草が主となる乾燥した人為改変地の分布が示唆される。やや近隣には、コナラ属アカガシ亜属(カシ類)、シイ属(シイ類)の照葉樹林、コナラなどの二次林と考えられるコナラ属コナラ亜属の落葉樹林が分布していた。井戸跡(S E 540第13層、S E 152第5層)の植実群集からは、周囲にナデシコ科やキジムシロ科、カタバミ属などの草高の低い草本が分布し、集落や路傍のやや乾燥した環境であった。また、コナギヤタテ属サナエタデ節(ミゾソバなど)は井戸の排水による湿ったか所に生育していた。その他に昆虫、炭化材、植物、葉の細片が検出されたが細片で同定には至らなかった。なお方形井戸であるS E 540は滞水が示唆されるが緩やかな流水の動きがあり、湧水や流れ込みがあった。南北方向の道路跡の備溝S D 160とS D 190、南北方向の溝S D 460では珪藻がほとんど検出されず、珪藻の生育しにくい乾湿を繰り返す環境であった。植物珪藻体(プラント・オパール)から、奈良時代の溝跡の埋土では、S D 529で比較的高い値であったが、それ以外は比較的低いため水田の分布ではなく利用された稲菰に由来する可能性が考えられた。

S E 152の第5層からはヤマトシジミが出土しており、ヤマトシジミは汽水域に生育するため、本遺跡へ食用に持ち込まれたものが廃棄されたと考えられた。S E 540第10~13層より出土した動物遺存体はウマまたはウシの骨片と同定された。一方で、DNA分析ではウマ特異的配列を用いて比較を行ったが、試料の状態がやや不良のため結果があまり明瞭ではなくまたウマに認められる配列が一部認められなかった。そのため本試料はウシである可能性が考えられた。なお、動物遺存体は井戸埋め戻し土の第10~13層より出土しているため、井戸の廃絶時に投げ込まれた可能性がある。

粒度分析の結果からは、S D 461ではやや弱い水流、S D 468では弱い水流による淘汰が認められたが、尖度が低く正規分布に近いこと、水の流れのない期間及び滞水しない期間があることが示唆された。この状況は花粉分析と珪藻分析の結果から示された乾燥か乾湿を繰り返す有機質の分解が行われる環境とも一

致する。また、微細有機遺体が検出されなかった道路跡、溝跡も同様の環境であり一致する。本道路の溝の堆積物は有機質の分解が著しく、複数の溝は常時滞水し流れているのではなく、季節や農耕によって短期間のみ水が流れる溝であったとみなされる。

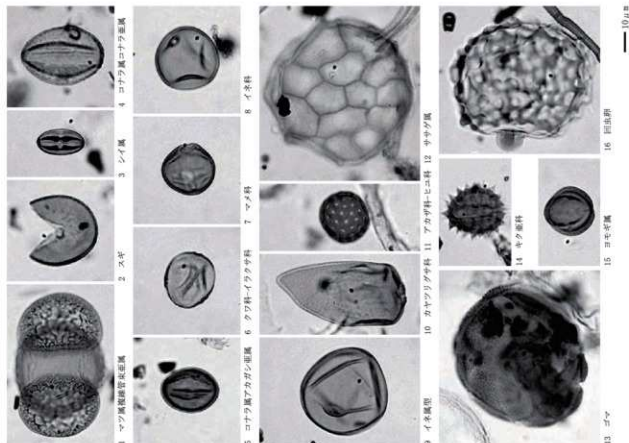
文責者

花粉分析・珪藻分析・総合考察：金原正子、プラント・オパール分析：杉山真二、種実同定・DNA分析：金原美奈子、貝類・動物遺存体同定・粒度分析：金原裕美子

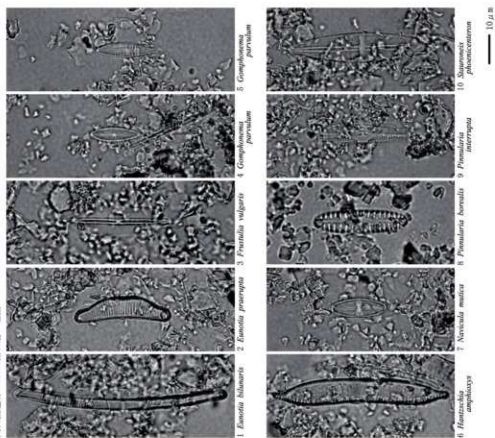
参考文献

- 中村純(1967)花粉分析。古今書院。p.82-102。
 高倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。60p。
 中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究,13,p.187-193。
 中村純(1977)稲作とイネ花粉。考古学と自然科学。第10号。p.21-30。
 中村純(1980)日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集。91p。
 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店。p.248-262。
 Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science*. 19. p.231-245。
 金子清俊・谷口博一(1987)線形動物・扇形動物。医動物学。新版臨床検査講座。8。医歯薬出版。p.9-55。
 Hustedt,F(1937 - 1938)Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. *Arch.Hydrobiol.Supp*15,p.131 - 506。
 Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh - water diatoms. 333p. National Environmental Re S E rch.Center。
 K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986-1991) *Bacillariophyceae*.vol.2.No.1-no.4
 Asai,K.&Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom SPecies into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophyilous and saproxenous taxa. *Diatom*,10,p.35-47。
 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用。東北地理。42。p.73-88。
 伊藤貞永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌。6。p.23-45。
 小杉正人(1986)陸生珪藻による古環境解析とその意義-我が国への導入とその展望-。植生史研究。第1号。植生史研究会。p.29-44。
 小杉正人(1988)珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究。27。p.1-20。
 渡辺仁治(2005)淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAI_{po}、pH耐性。内田老鶴園。666p。
 杉山真二・藤原宏志(1986)機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-。考古学と自然科学。19。p.69-84。
 杉山真二(1999)植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究。38(2)。p.109-123。
 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社。p.189-213。
 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学。9。p.15-29。
 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-。考古学と自然科学。17。p.73-85。
 金原正明・金原正子(1992)花粉分析及び寄生虫。藤原京跡の復原遺構-藤原京7条1坊-。奈良国立文化財研究所。p.14-15。
 金原正明(1999)寄生虫。考古学と動物学。考古学と自然科学。2。同成社。p.151-158。
 笠原安夫(1985)日本雑草図説。養賢堂。494p。
 南本隆彦(1993)葉・果実・種子。日本第四紀学会編。第四紀試料分析法。東京大学出版会。p.276-283。
 田原本町教育委員会(1996)唐古・鍵遺跡第59次発掘調査。田原本町埋蔵文化財調査年報5。p.18-20。
 東海大学出版会(1994)日本の哺乳類。
 松井章(1993)鹿田遺跡第5次調査(医学部付属病院管理棟新宮に伴う発掘調査)出土ウシ。岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第6巻 鹿田遺跡3。岡山大学埋蔵文化財調査研究センター。p.115-118。
 松井章(2008)動物考古学。京都大学学術出版会。
 Caries Villáizか2001,WideSPread Origins of Domestic Hor S E Lineages. *Science*.Vol. 291. No. 5503. pp. 474-477。
 Zúal Kesmenliか2010,Identification of different meat SPecies u S E d in sucuk production by PCR assay. *GIDA* 35 (2): 81-87

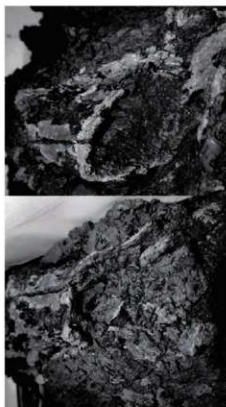
岡田国造跡・SES-60第13層の花粉・寄生虫類



岡田国造跡・SES-60第13層の注葉



動物遺存体・DNA分析試料



岡田国遺跡・SEJ152の貝類



付編2 溝群1・2の花粉・寄生虫卵分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、東西方向に伸びる奈良時代の溝埋土と地山の花粉分析と寄生虫卵分析結果について述べる。

1. 試料

分析試料は、奈良時代の東西方向の溝群を構成するSD462とSD469の溝埋土、及びこれらの遺構の基盤層をなす堆積層(以下、このサンプル名を地山とする)である。

東西方向の溝群の溝埋土では、上半部に基盤層の泥質砂や砂質泥をなす偽礫が多く充填される傾向が認識できる。この偽礫には、古土壌由来の暗褐色を呈するものも含まれる。溝埋土の底部付近には、塊状無層理をなす泥もしくは砂混じりの泥が堆積している。この泥には、未分解の植物遺体の扶在が認められないが、場所によって炭化材片が含まれる。溝埋土の底部付近では、中心部付近に相対的に泥質な堆積物が分布する。SD462とSD469の分析サンプルは、この部分から採取している。一方で、溝肩部付近には、周囲から流れ込んだような堆積状況を示す偽礫や砂を多く含む層準が観察される地点が多い。

上記のような溝埋土の層相から、東西方向の溝群の底部付近の埋土は、降雨などで発生した地表流などによって、周囲から溝内に流入した地表物質に由来する泥質堆積物を主要な構成物質としていると解釈される。上半部の埋土については、客土などの溝内へ人為的に充填された堆積物の可能性が高い。

2. 分析方法

(1)花粉分析

花粉分析は、約10gを秤量し、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸 γ :濃硫酸1の混合物)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンゼリーで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdtman(1952,1957)、Faegri & Iver S E n(1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。



写真1 SD462 試料採取地点



写真2 SD462 試料採取堆積状況



写真3 SD469 試料採取地点



写真4 SD469 試料採取堆積状況

(3)寄生虫卵分析

寄生虫卵は、花粉化石とは化学組成が異なる(寄生虫卵はキチン質)が、化学的に安定なため、堆積物中に含まれている場合、花粉分析残渣中に多くみられる。ところが今回の試料では花粉分析残渣に寄生虫卵が認めら

れなかった。このことは、堆積物中の寄生虫卵の割合が少ないことを意味する。そこで、以下の方法を用いて、寄生虫卵の濃集を試みる。試料10ccを秤量し、水酸化カリウムによる試料の泥化を行ったあと、0.25mmの篩による篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去を行う。残渣をグリセリンゼリーで封入してプレパラートを作成し、寄生虫卵の同定、計数を試みる。

3. 結果

(1) 花粉分析

花粉分析結果を表1、図1に示す。

分析残渣はS D462、S D469は、50μl程度とやや少ないが、地山は分析残渣がほとんどなく、すべての分析残渣使って検鏡を行った。いずれの試料も化石の保存状態は悪く、花粉化石やシダ類胞子に風化の痕跡が認められるものが多い。

S D462、S D469は、シダ類胞子や針葉樹花粉が多い傾向にある。針葉樹花粉では、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属が多く、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科を含む。広葉樹花粉では、コナラ亜属とアカガシ亜属が多くみられ、クリ属、シイ属等を含む。草本花粉は、イネ科がやや多くみられるが、全体的に低率である。しかし、これはシダ類胞子が多いため、相対的に少ないように見えるのが原因である。イネ科の中にはイネ属と思われる花粉化石をわずかに含むが、保存が悪く表面模様が明瞭にみえないため、イネ科として一括している。

一方、地山は大部分がシダ類胞子である。花粉化石は少ないが、溝埋土で多産する種類が散見される。花粉化石、胞子化石の保存状態は、溝埋土よりもさらに悪い。

表1 花粉分析結果

種 類	S D462	S D469	地山
木本花粉			
マキ属	4	-	-
モミ属	28	14	1
ツガ属	67	32	4
トウヒ属	-	1	-
マツ属(緑線管胞亜属)	10	9	-
マツ属(不明)	32	16	3
スギ属	24	23	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	5	11	-
クマシラ属-アサダ属	4	2	-
カバノキ属	-	2	-
ツバ属	2	1	-
コナラ属コナラ亜属	35	37	1
コナラ属アカガシ亜属	17	61	6
クリ属	3	1	-
シイ属	1	2	-
ニレ属-ケヤキ属	1	-	-
カラズミシショウ属	1	-	-
カエデ属	-	-	1
ハノキ属	1	3	-
草本花粉			
ゴマ属	1	-	-
サジョウゴダク属	1	-	-
イネ科	33	24	1
ヒヤドリギ科	2	2	-
クワ科	-	-	1
サナエダ科節-ウナギツウミ節	-	1	-
アザミ科	1	2	-
ナデシコ科	1	1	-
アリトウグサ属	-	-	-
ヨモギ属	3	5	-
キク亜科	17	8	-
ランゴボウ科	3	3	-
不明花粉			
不明花粉	5	3	1
シダ類胞子			
他のシダ類胞子	122	300	274
合 計			
木本花粉	236	215	16
草本花粉	62	46	2
不明花粉	5	3	1
シダ類胞子	122	300	274
合計(不明を除く)	410	561	292

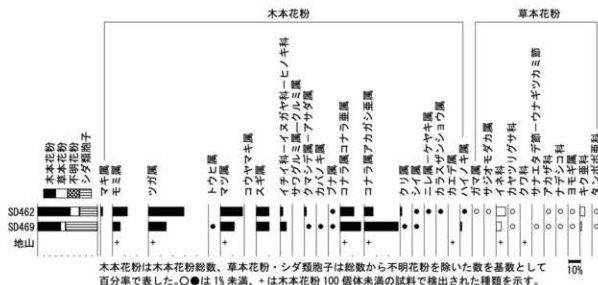


図1. 花粉化石群集

(2) 寄生虫卵分析

分析残渣の量は花粉化石に類似する。残渣中には、保存の悪い花粉化石、胞子化石が多く認められるが、寄生虫卵は、すべての試料で全く認められない。

4. 考察

S D 462、S D 469を含む東西方向の溝群は、建物跡の周囲に密度高く、さら調査区内の広い範囲に分布している。このような遺構の検出状況から推察される土地利用状況から、今回の調査区とその近傍では、奈良時代に樹木がほとんど分布しておらず、明るく開けた草地や裸地が広がる景観であったと考えられる。溝埋土から産出した花粉化石のうち、草本花粉についてまず着目すると、S D 462、S D 469では、いずれもイネ科をはじめとして、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科を主体とする群集である。これらの草本花粉には、開けた場所を好む人里植物の分類群が多く含まれる。このような草本花粉群集は、上記した発掘調査結果とも調和的とみなされる。

なお、検出された溝群については、その形態や分布状況などから、畠などの耕作地に伴う遺構の可能性も想定されている。今回の花粉分析結果では、イネ科に栽培種のイネ属が含まれる可能性が示唆されるものの、それ以外の栽培種の花粉が検出されない。ただし、栽培種については、種類によって花粉化石、植物硅酸体などで同定できない種類も多く、この点を留意する必要がある。よって、今回の花粉分析結果のみからでは、分析を行った溝群が耕作に関係して構築されたかどうかの判断が難しいと認識される。

上記以外で着目される草本花粉の産状としては、S D 462での水湿地生のガマ属やサジオモダカ属の産出があげられる。水湿地生本が確認されることから、S D 462の底部では、湿性の地表環境下で形成されていた可能性が示唆される。一方で、S D 469では、ガマ属、サジオモダカ属などの水湿地生草本が産出しなない。このようなS D 462とS D 469での水湿地生草本の産状の差違は、下記で述べているように今回の分析結果にもとづくと、花粉化石の保存状態に関係していると考えられる。

以上のような花粉分析結果及び現地での埋土の層相観察結果にもとづくと、奈良時代の東西方向の溝群の底部付近の層準では、周辺に開けた草地を主体とする植生景観が広がっていたと考えられる。また、地点によっては、溝の底部付近で湿性の状態が一定期間継続するような状況が存在していたと推定される。溝群の分析結果については、溝群形成以前の状況との対比を目的に、地山のサンプルの分析も行っている。ただし、地山サンプルの化石の保存が極めて悪く、今回の分析では、溝群成立以前と溝群形成後の古植生の变化について、検討を行うことができなかった。

なお、併せて実施した寄生虫卵分析では、S D 462、S D 469の埋土に寄生虫卵が含まれていなかった。この結果から、これらの溝では、糞便等の汚染の程度がかなり低かったと推測される。

次に、木本花粉の産出状況についてみていきたい。S D 462、S D 469では、マツ属が多産傾向となる。ただし、マツ属は保存状態が悪いために出現率が相対的に高くなっていると思われる点や、元々風媒花で花粉生産量が多い点を考慮すると、周辺植生の中でそれほど多くないと思われる。今回の溝埋土の花粉化石は全体的に保存が悪く、シダ類胞子と針葉樹花粉が多い。花粉化石は好気的環境下では風化が進み、分解が進行する(中村、1967など)。また、針葉樹花粉やシダ類胞子は、広葉樹花粉に比べ、スポロポレニンの量が多く(Stanley & Linskens, 1974)、風化に対する耐性がある(徳永・山内, 1971)。このような特徴をふまえると、分析層準である溝底部では、上記で湿性状態となる地点もあったことを述べたものの、それらが常時維持されるものではなく、全体的には乾燥を繰り返すような状態もしくは堆積後に好気的環境下にあったとみるのが妥当と考えられる。

上述の花粉化石の保存状態に関する先行研究結果から、S D 462、S D 469の花粉化石群集については、風化の影響を受け、針葉樹花粉とシダ類胞子の割合が相対的に上昇し、広葉樹花粉や草本花粉が相対的に減少していることを考慮して、古植生を検討する必要がある。

京都府南部(岡田, 1997; 佐々木ほか, 2011)や奈良盆地(金原, 1993)で行われた花粉分析結果をみると、奈良時代の花粉化石群集は過渡期的で、遷都のための造営や周辺の耕地化に伴う栽培植物の検出と草本花粉の増加、山野の樹木伐採による自然林の減少と二次林要素(マツ属等)の増加が進行していった時期とみなされる。こ

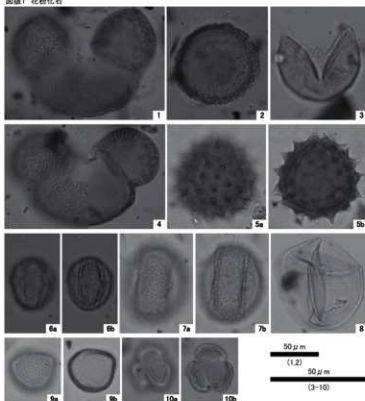
これらの事象は、奈良時代以前は限定的であったが、それ以降規模が広がり、中世には普遍的となり、かつ出現率も高くなる(金原1993佐々木ほか2011など)。これら周辺地域で行われた花粉分析結果にもとづくと、今回の奈良時代の溝埋土の花粉分析結果については、周辺地域と同調的な産状を示すと認識される。

そのようななか、今回の分析結果では、モミ属やツガ属、スギ属、ヒノキ類といった針葉樹が相対的に目立つ傾向がある。これらの針葉樹は、谷斜面や谷頭、河川の影響を受けやすい氾濫原など、土壌流出が起きやすい場所で生育可能である。同様な場所に生育する広葉樹花粉としては、今回産出している種類として、クマシア属-アサダ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属があげられる。遺跡をとりまく地形と、産出した樹木花粉の生態性をふまえると、上述の種類の主要な生育地としては、調査区後背の丘陵地内が想定される。

このうち、モミ属やツガ属、スギ属は、風媒花で花粉生産量が多い点や、保存状態の影響で出現率が相対的に高くなっていると解釈される。このため、これらは周辺植生の中でそれほど多くはなかったと考えられる。

また、今回の奈良時代の分析結果では、アカガシ亜属やシイ属といった、安定した場所に生育する除樹であり、極相林を構成する常緑広葉樹も比較的多く産出している点にも着目される。このことから、奈良時代には、調査区後背の丘陵などで、自然度の高い常緑広葉樹が多く生育する森林も残っていたと考えられる。

図版1 花粉化石



- | | |
|---------------|------------------|
| 1. モミ属(1地点) | 2. ツガ属(1地点) |
| 3. スギ属(1地点) | 4. マツ属榎類管束属(1地点) |
| 5. ケヤキ科(1地点) | 6. アカガシ亜属(1地点) |
| 7. コナラ亜属(1地点) | 8. イノキ科(1地点) |
| 9. ガマ属(1地点) | 10. シラoki属(1地点) |

引用文献

Erdtman G.,1952.Pollen morphology and plant taxonomy: AngioSperms (An introduction to palynology. I) Almqvist&Wik S E lls,539p.
 Erdtman G.,1957.Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: GymnoSpermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II).Almqvist&Wik S E lls,147p.
 Faegri K. & Iver S E n J.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.
 藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑,アケアコロール企画,155p.
 金原正明・金原正子,1992,花粉分析及び寄生虫,藤原京跡の便所遺構 - 右京七条一坊西北坪- ,奈良国立文化財研究所,12-15.
 金原正明,1993,花粉分析法による古環境復元,新版古代の日本10巻 古代資料研究の方法,角川書店,248-261.
 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑,北海道大学出版会,824p.
 中村 純,1967,花粉分析,古今書院,232p.
 中村 純,1980,日本産花粉の標識 I II (図版),大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
 佐々木高子・高原 光・湯本 貴和,2011,京都盆地における「里山」林の成立過程,地球環境,16,115-127.
 高倉巴三郎,1973,日本植物の花粉形態,大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
 徳永重元・山内理子,1971,花粉・胞子,化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.
 Stanley R. & Linskens H.,1974,Pollen: biology biochemistry management,SPringer-Verlag,307p.

付編3 岡田国遺跡出土井戸枠部材及び柱根の樹種同定・年輪年代調査

第1節 井戸枠部材及び柱根の樹種同定

前田仁暉(京都大学大学院)・星野安治(奈良文化財研究所)

1. はじめに

岡田国遺跡(京都府木津川市)で検出された井戸枠部材・掘立柱材等の樹種を報告する。井戸枠部材は井戸S E540で検出された縦板組隅柱横棧留の井戸枠で、枠内埋土の出土遺物から奈良時代中頃のものと考えられている。隅柱はその加工痕跡から建築部材を転用したものと判断される。縦板については年輪年代学的検討が行われ、伐採年代は725年に集約される。掘立柱材は、掘立柱建物S B11で検出された南北6間以上、東西3間以上の掘立柱建物に遺存していた柱根である。遺構関係から平安時代前期の年代が考えられている。

2. 試料と方法

対象試料は井戸S E540で検出した井戸枠部材73点と井戸枠内の木材1点、掘立柱建物S B11で検出した掘立柱材4点、掘立柱建物S B12の柱穴から出土した木片1点の全79点であった。井戸枠部材の内訳は、隅柱4点、縦板55点、横棧14点であり、いずれも水浸状態であった。

片刃剃刀もしくは両刃剃刀を用いて徒手切片法により横断面、放射断面、接線断面の切片を出土木材から直接採取した。次に、ガムクロラル封入によりプレパラートを作製し、光学顕微鏡下で樹種同定を行った。木材組織の用語や識別拠点については島地・伊東(1982)や林(1991)、IAWAのリスト(伊東ほか訳1998、伊東ほか訳2006)を参考にした。学名及び植物学的分類は大橋ほか編(2015、2017)に従ったが、亜属レベルまでの同定が可能であった分類群の表記については北村・村田(1971、1979)も参照した。

3. 結果

試料79点中には、マツ属複雑管束亜属1点、コウヤマキ1点、スギ4点、ヒノキ71点、サカキ2点の針葉樹4分類群、広葉樹1分類群が認められた。遺物との対応は付表12にまとめた。以下に各分類群の解剖学的な識別根拠を記載し、代表試料の光学顕微鏡写真を掲載する(写真1)。

1. マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyloides* マツ科

早材から晩材への移行は急で、晩材の幅は広い。晩材に垂直樹脂道認め、エビセリウム細胞は薄壁。放射組織は柔細胞と放射仮道管で構成され単列、2-11細胞高。水平樹脂道も認める。分野壁孔は窓状で放射仮道管内壁が鋸歯状である。

2. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科

早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞や垂直樹脂道は存在しない。放射組織は柔細胞のみで単列、1-10細胞高。分野壁孔は窓状である。

3. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don ヒノキ科

早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は広い。樹脂細胞が接線方向に並ぶ。放射組織は柔細胞のみで単列、1-14細胞高。分野壁孔は比較的大きく、1分野あたり2-4個(通常2個)。孔口の長軸方向が水平に近いものが多く、スギ型である。

4. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科

早材から晩材への移行は緩やか〜やや急で、晩材の幅は狭い。樹脂細胞が接線方向に並ぶ。放射組織は柔細胞のみで単列、1-11細胞高。分野壁孔がスギより小さく、1分野あたり1-3個(通常2個)。孔口が斜めのものが多く、トウヒ型〜ヒノキ型である。

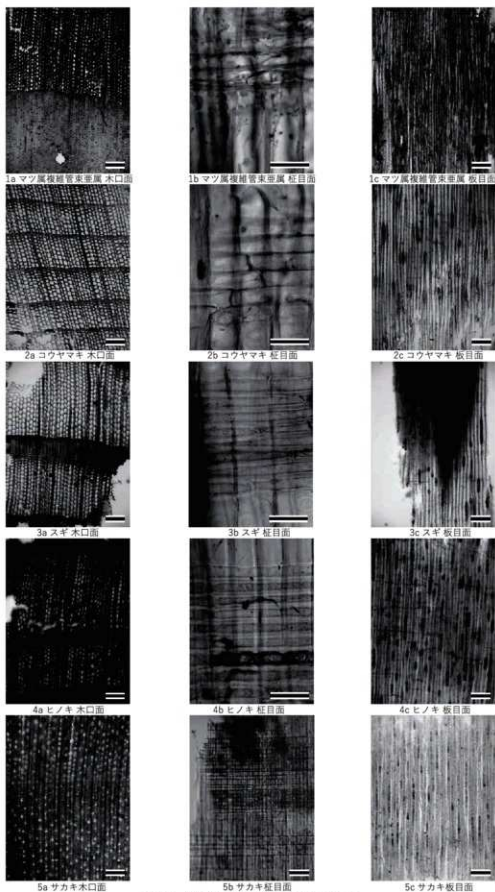


写真1 岡田国遣跡出土材の樹種顕微鏡写真

(スケール1a,1c,2a,2c,3a,3c,4a,4c,5a,5c=0.2mm、1b,2b,3b,4b=0.05mm、5b=0.1mm)

5. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. サカキ科

ごく小型で角ばった孤立道管が密に均一に分布する散孔材。放射組織は単列異性。道管の穿孔は30-40段ほどの階段状である。

4. まとめ

隅柱と縦板はすべてヒノキ材であるが、横柱にはヒノキのほかにはスギとサカキを用いることが明らかになった。特に横柱14点中2点のサカキ材のみが志持丸木材で、木取りから見ても例外的である。また、1点のコウヤマキ材は井戸枠内に落ち込んでいた材であり、井戸枠を構成する部材とは樹種的にも区別されることが明らかになった。SB11で出土した掘立柱はすべてヒノキを用いている。なお、SB12の柱穴で出土した木片1点のみマツ属複維管束亜属を用いている。

謝辞

樹種同定について高橋敦氏(株式会社古生態研究所)に有益な助言を賜った。

参考文献

- 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩1998『広葉樹材の識別：IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』海青社 (IAWA Committee. 1989. IAWA list of microscopic features for hardwood identification. IAWA Bulletin n.s. 10: 219-332)
- 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘2006『針葉樹材の識別：IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』海青社 (IAWA Committee. 2004. IAWA list of microscopic features for softwood identification. IAWA Journal 25: 1-70)
- 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩二編2015『改訂新版 日本の野生植物1』平凡社
- 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩二編2017『改訂新版 日本の野生植物4』平凡社
- 北村四郎・村田源1971『原色日本植物図鑑—木本編 [I]—』保育社
- 北村四郎・村田源1979『原色日本植物図鑑—木本編 [II]—』保育社
- 島地謙・伊東隆夫1982『図説木材組織』地球社
- 林昭三1991『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

第2節 井戸枠部材の年輪年代調査

星野安治(奈良文化財研究所)

1. 緒言

京都府岡田国遺跡第5次調査において検出された奈良時代中頃と考えられている井戸の井戸枠部材について、年輪年代調査を実施した成果を報告する。岡田国遺跡は、恭仁京の範囲内に位置すると考えられているが、恭仁京内における年代測定事例は少なく、本年輪年代調査成果は貴重な情報になり得ると期待される。

2. 調査対象と方法

京都府埋蔵文化財調査研究センターにおいて水浸状態で保管されていた岡田国遺跡第5次調査で検出された井戸SE540の井戸枠部材について、肉眼で年輪数の多寡を確認し、年輪数が多いと判断された20点を調査対象として選別した。年輪幅の計測は、調査対象とした部材の横断面もしくは放射断面を接写撮影し、撮影した画像についてCybis社製年輪計測ソフトウェアCooRecorderを用いておこなった。部材表面で年輪界が識別できないものについては、鋸で切断し、切断した横断面を剃刀で切削して、年輪界を明瞭に識別できるようにした。年輪曲線の照合(クロスデーティング)は、SIEM社製年輪分析ソフトウェアPASTを用い、年輪曲線をプロットしたグラフの目視評価と統計評価(Baillie and Pilcher 1973)をあわせておこなった。また、クロスデーティングは、調査対象間相互、クロスデーティングが成立した調査対象について平均した年輪曲線(以下、平均年輪曲線)及び標準年輪曲線群について繰り返し検討をおこなった。

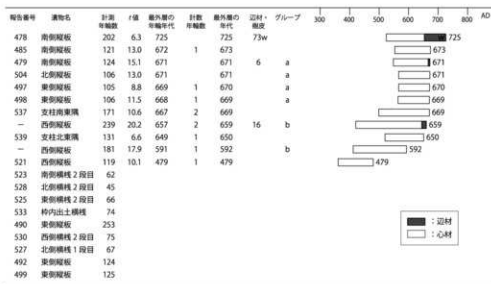


図1 岡田国遺跡井戸S E540の年輪年代調査成果

3. 所見

図1に、調査対象と年輪年代調査成果の一覧を示す。調査対象の番号は、付表12と対応し、樹種はヒノキ及びスギである。t値は平均年輪幅線に対する値を示し、計数年輪数は年輪幅を計測できないものの外側に何層あるか計数できた年輪数を示している。辺材・樹皮では数字で辺材に含まれる年輪数を示し、wと付したものは樹皮直下の部分が残っていることを示した。なお、辺材の判断は、肉眼で心材に対する色調や劣化の差が認められるものを辺材と判断した。グループでは、年輪変動の前年に対する増減や年輪幅の絶対値などが酷似し、同一材と判断されるグループを示している。

本調査により、11点の井戸枠部材について年輪年代を特定した。標準年輪幅線とのクロスデーティングでは、平城宮跡出土品で構築された標準年輪幅線(奈良国立文化財研究所1990)と平均年輪幅線との値が12.7であった。年輪年代が特定された各部材の伐採年は、残存する最外層の年代を遡り得ないということになるが、調査対象とした部材を一連のものにとらえ、辺材の残存状況を勘案すると、478の725年という年代に集約される。478は、年輪年代が明らかになった部材の中で最も新しい最外層の年代を示す。また、唯一、樹皮直下の部分が残存し、最外層の725年が伐採年である。この他の辺材が残存する2点は、辺材がわずかに残る程度であり、また、辺材が残存しない部材についても辺材もしくはより内側の部分を取り去られているものであると考えられる。井戸S E540は、枿内埋土の出土遺物から奈良時代中頃のものと考えられており(96~102・136~139頁)、本年輪年代調査成果と整合的であるといえる。

図2、3には、同一材と判断した2つのグループの年輪幅線を示した。これらは(114~121頁)で実施された井戸枠部材の観察で、考古学的には接合を見出せなかったものであるが、年輪変動の前年に対する増減や年輪幅の絶対値などが、a、bそれぞれのグループ内で酷似していると判断でき、同一材由来の可能性が高いと考えられる。バーチャート(図1)をみると、各部材に刻まれる年輪が、それぞれほぼ重複する関係となっており、部材の位置関係としては軸方向につながる、もしくは放射方向に重なり合う位置関係が考えられる。

引用文献

- Baillie MGL, Fitcher JR 1973 A simple cross-dating program for tree-ring re S E arch. Tree-Ring Bulletin 33
 奈良国立文化財研究所 1990 「年輪に歴史を読むー日本における古年輪学の成立ー」『奈良国立文化財研究所学報』48

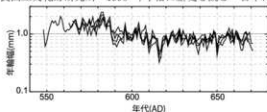


図2 aグループの年輪幅線(4点を重ねて表示)

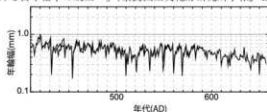


図3 bグループの年輪幅線(2点を重ねて表示)

第3節 井戸枠部材の製作段階の様相 —形態分析と樹種同定、年輪年代学における成果の総合—

前田仁暉(京都大学大学院)

1. はじめに

京都府木津川市岡田国遺跡で検出した井戸枠部材について形態分析を行うとともに、樹種同定や年輪年代調査の成果を合わせて考察することで、井戸枠部材の製作段階の様相を考える。分析の結果、縦板はある程度まとまった点数のヒノキの原材を割り裂いて製作するという割合に計画的な工程が明らかになった。一方で、横棧は縦板ほど画一性なく原材を調達する製作の状況が示唆された。また、隅柱はそれぞれ別の来歴を持つ建築部材からの転用である。つまり、岡田国遺跡で出土した井戸枠部材は、井戸という同一遺構内において、少なくとも縦板・横棧・隅柱という部材レベルで異なった来歴を持ち、それらが同居する形で製作がなされたことを明らかにした。

2. 資料と方法

岡田国遺跡で検出した井戸(S E 540)の井戸枠部材、縦板55点、横棧14点、隅柱4点の計73点を対象とした。形態属性を分析し、すでに提示されている樹種、年輪年代学の結果を合わせて井戸枠製作段階の様相を考察した。用語や法量は(46~50頁)と付表12に従う。

縦板と横棧、隅柱から構成される縦板組隅柱横棧留の古代井戸枠の検出事例は多いものの、部材全点について樹種が調査され、その来歴が詳しく考察された例はない。本遺跡の井戸枠部材は筆者らによって悉皆的な樹種同定がされている(付編3第1節)。また、そのうち20点について年輪年代学的な検討がなされている(付編3第2節)。さらに縦板の考古学的接合検討もなされており(114~121頁)、井戸枠を総合的に考察する上で最適な資料である。

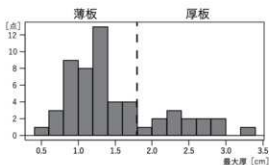


図1 縦板最大厚による分類



図2 出土方位ごとの厚板と薄板

3. 縦板の検討

本節では縦板の形態属性の分析を行う。またこれとあわせて、樹種同定・年輪年代学の結果を整理する。

縦板は全点が、正面・背面ともに割裂面のまま残されており、凹凸や厚みの差を切削調整した痕跡は認められない。すなわち表面の加工という点では資料ごとに大きな差はない。ここでは、形態属性として板の厚みに注目して分析する。板の厚みは井戸の構造や強度に関わる重要な属性のひとつである。一方で法量分析という点では、ほかに長さや幅といった属性がある。しかし、縦板の長さは井戸廃棄後の地下水位や腐食の程度を反映するため製作段階の解明には適さない。また、特に厚みが薄いものは縦板側面の井戸構築時ないし製材時の本来の幅を保っているかどうか不明瞭な場合があり、幅についても有効な分析はできなかった。

割裂面の厚みは計測所によってわずかに値が異なる。このため、本節ではその最大厚を分析対象と

する。最大厚のヒストグラムから、0.4cm以上1.8cm未満において1つ目の大きなピークを認め、1.8cm以上3.4cm未満になだらかな2つめのピークを見いだした(図1)。そこで、前者42点と後者13点との2グループに大別し、それぞれ薄板、厚板と呼ぶ。鐘方正樹によれば、縦板組隅柱横残留の縦板材に厚みの差がある場合、「厚い縦板を内側に配し、薄い縦板はその継目の裏側にあてがわれることが多い。」(鐘方2003)とされており、本井戸枠においてもそのような設置されていた。ただ、各方位から検出された最大厚の分布を考えると(図2)、特に西側では厚板が2点しかなく、この意味での分類境界はもう少し低い値であることが予想される。

また、製作段階に関わる他の属性としては端部の切断痕があるが、縦板の個別の検討からは、割裂面との前後関係を論じることは難しい。

さらに、全点がヒノキであり、年輪年代学的にはうち12点が分析され、11点において年輪年代が確定し、伐採年は725年に集約されるという。

4. 縦板の接合状況の整理

製作段階の来歴を考えるために接合検討や原材の推定は重要な意味をもつ。考古学において「接合」とは「破壊によって分離した複数の個体を接着してそれ以前の状態を復元する行為」であり、「接合は遺物の種類や遺物のライフ・ヒストリーのどの段階に生じた破壊に対応するかにより、その意味合いに若干の違いがある。」とされる(沢田2004)。

井戸枠部材の場合、その接合は製作時の意図的な破壊に対応することになるから、この関係を整理することは製作段階の様相を探る上で重要となる。実際にこれまでも、縦板の接合に関してはいくつか報告や考察があり、主として流通材である樽の復元や刻印の分析に関心が集まっている。ただ、本事例では、接合により原材を完全に復元することができず、刻印等も存在しないため、樽の復元や流通を論じるためには不向きな資料である。一方で、加工順序や原材のグループ関係を把握するという点で接合検討は依然として重要な分析となる。本事例の縦板では考古学的接合以外にも多数の方法で井戸枠のグループ関係が把握されている。それを図3にまとめる。

本節では井戸枠部材のグループ関係についてその意味合いの違いから、以下の3つに整理する。

- ①考古学的接合関係(単に「接合」とも呼ぶ)とは、割裂面が直接に合致するものとする。当然、端部の切断痕や節の位置等も合致することになる。これは岡田文男の論考に方法の詳しい解説がある(岡田2002)。
- ②考古学的同一材関係とは、端部の切断痕の直接的なつながりや割裂面の合致は見られないが、節の位置や加工の方向は似通っており、おそらく同じ材から製作されたと考えられるものとする。主として「中間の1枚分が不連続で、隙間が埋まらない」(岡田2002)とされるものを含むグループである。ただ、方法上、やや恣意的になる危険があると考えられるため、節の位置、端部の切断痕のつながり等、なるべく多角的な検討を行いグループの設定には極力慎重を期している。
- ③年輪年代学的同一材関係とは①、②の分析とはまったく独立に行われ、部材から抽出された年輪曲線を用いる方法である。年輪曲線において、前年に対する増減や年輪幅の絶対値などが類似するものについて、「同一個体を由来とする可能性を示すことができる」ことを利用したものである(浦・星野2019)。この方

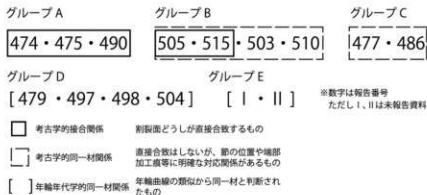


図3 縦板のグループ関係

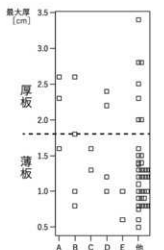


図4 グループごとの厚板と薄板

こともあるが、図4を見る限り、薄板も厚板も同様の材から割り出されていることがわかる。このことは、形態的な差異から一見、来歴が異なるかのように見える材が、実際は同材から割り出されていることを示している。薄板と厚板の差異は製作段階の来歴差によるものではなく、やはり、井戸のどこに配置するかという機能差を反映していると思われる。

さらに縦板の樹種は全点ヒノキであり、その伐採年代も集約されると考えられている。このことから、同時期に伐採された、いくつかのヒノキの材を持ち込み、場合によっては先端を調整し直した上で、井戸枠用に薄板と厚板を割り裂いた後に、井戸に設置するという、割合に計画的な製作工程が予想される。ただ、岡田(2002)で検討された井戸枠に比べ、考古学的接合関係が把握できた縦板の数が極めて少ないことは憂慮される。

なお、井戸枠部材は建築部材等からの転用も多数報告されるが、本事例の縦板では、樹種や伐採年代が集約されると考えられており転用を示す加工痕跡も見られないことから、転用の可能性は積極的に考えられない。

6. 横棧の検討と製作段階の様相

次に横棧の検討を行う。形態を分析し、縦板同様に年輪年代学と樹種同定の成果を整理した後、横棧製作段階の様相を考える。

縦板は全点が割り材であったが、横棧は製作状況を示す最も基本的な属性のひとつである表面の加工状態で、切削調整型(11点)、丸木型(2点)、割り材型(1点)の3つに分けられる。なお切削調整型は断面の形から正方形型(6点)と長方形型(5点)とに分けられ、これらの計4類型は縦板に最大厚、横軸に最大幅をとってグラフに示すと図5のようになる。また、樹種は14点中、ヒノキ8点、スギ4点、サカキ2点と縦板に比べ多様である。以下類型ごとに検討する。

切削調整型は断面形が方形となるように全面に切削加工を行っている類型で縦板組隣横棧留の井戸枠では典型的な横棧といえる。断面の法量から正方形型(6点)と長方形型(5点)に分けられる。正方形型のうち2点は、端部を1方向から削り落とすという特異な加工があるが、長方形型はすべて、端部を断面形の4方から丁寧に削りすばめる。またサンプルサイズが小さく統計的有意は考慮できないが、類型別の最大長を考慮しても110cm以上のものは正方形型に偏る(図6)など、この分類レベルである程度の形態的規格性が想定できる。しかし、樹種は正方形型でヒノキ4点+スギ2点、長方形型でヒノキ3点+スギ2点と分かれる。さらに、切削調整型横棧のうち6点について年輪年代学的検討が行われ、筆者も樹種や法量の類似する横棧を対象に考古学的接合や同一材推定を試みたが、縦板で多数発見できたグループ関係は、横棧では一見見つ

法については浦蓉子・星野安治が詳しく解説している⁽¹⁸²⁾。

これにより、考古学的接合関係及び考古学的同一材関係が3グループ、年輪年代学的同一材関係が2グループと、計5グループを把握し、縦板55点中15点が含まれる。

考古学的接合関係にある縦板端部の切断痕の観察により、原材を水平方向に切断した上で、割り裂く加工の順序が理解できる。なお、木口面を先に切断するのは、考古学的接合により榫が復元された長岡京期の同構造のスギの井戸枠材(岡田2002)と共通する。ただ、本事例の場合は、端部が斜めに切断されているものもあるため、原材が榫などの角材であったとしても、井戸枠製作時に端部調整を行っている可能性がある。

5. 縦板製作段階の様相

以上に整理した属性を元に縦板製作段階の様相を考える。

グループごとに縦板の厚みをプロットしたグラフを作成した(図4)。薄板は「転用材の混用である場合もある」(鐘方2003)とされる

ることができなかった⁽⁹⁴⁾。つまり、切削調整型の横棧は、切削加工段階での規格性という点で共通する来歴を持つかもしれないが、原材は異なっている可能性が高い。

丸木型は、両端部以外は表面加工をほとんど施さない2点で、どちらも芯持丸木材のサカキである。さらにこの2点のサカキ以外の井戸枠部材はすべて針葉樹材であることから、明らかに例外的な来歴を持つ類型であることがわかる。横棧の機能としては、隅柱に空けられた桁穴と組み、側面ですっかりと縦板を支えることが求められるから、加工をほとんど施さずに芯持丸木材を用いるこの類型に機能的な意味は見いだせない。しかし、これらの丸木型横棧は井戸枠最下段に設置されるという共通点を持ち、特別な目的をもって設置された可能性がある。いずれにしても、形態・表面加工・樹種・木取りどれを見ても来歴が他とは異なる類型である。

割り材型は、両端部以外が割裂面のまま残されている1点で、丸木型と同様、機能的な意味は見いだせない。樹種はヒノキであるため、縦板や切削調整型横棧の端材を利用して製作された可能性もあるが、いまのところ他の部材との接合関係・同一材関係は不明である。枠内から出土した部材であり、井戸枠上段に設置されていたものが落ち込んだと思われる。枠内出土の材は4点あるが、この材のみが表面未調整であり補完的に用いられた材かもしれない。この類型も例外的な来歴を持つ横棧といえる。

このように横棧は、樹種が多様で、加工状態も多様なものが存在する。切削調整型横棧はある程度の形態的規格性を持つが、接合や同一材などのグループ関係は確認できていない。このことから、それ以前の来歴が異なった材を寄せ集めて、横棧用に切削調整する製作のあり方が想定される。

なお、横棧は、転用を明瞭に示す加工痕跡がなく、年輪年代も確定していないため転用部材かどうかの判断は難しい。

7. 同一の井戸枠を構成する部材における来歴の差

以上に縦板、横棧それぞれの製作段階の様相を考察した。本節ではそれを整理しつつ、井戸枠部材の来歴の多様性を論じる。

縦板は、それ以前の来歴が類似するある程度まとまった点数の材を打ち削ってゆく計画的な製作が想定される。その一方で横棧は、それ以前の来歴が異なった材を寄せ集めて、横棧用に切削調整する製作段階の様相が想定された。

また、隅柱については機能的に不必要な桁穴の存在から建築部材からの転用であることが明らかである。ほかに隅柱は断面形も多角形のものや正方形のものがあり、木取りや法量にも規格性が見られない。

このように、井戸SE540という同遺構から検出された井戸枠部材において、少なくとも縦板・横棧・隅柱という部材レベルで異なった来歴を持つ木材をいわば同居させる様相が明らかになった。岡田国遺跡⁽⁹⁵⁾においては、単一の来歴をもつ木材を利用して全井戸枠部材を一括で入手したと考えるよりは、さまざまな

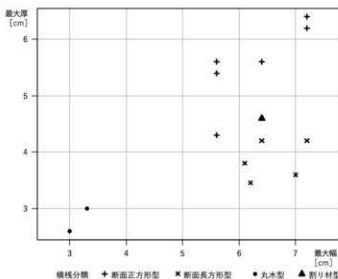


図5 横棧の分類

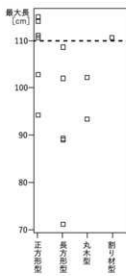


図6 横棧分類ごとの最大長

表1 縦板・横棧・隅柱の多角的検討

部材 (出土数)	表面加工・形態	樹種	年輪年代学
縦板 (95点)	割り材 (全点) ・厚板と薄板がある ・が原材は同じ ・少なくとも3グループの考古学的適合・同一材発見	ヒノキ (全点)	(うち12点分析) ・少なくとも2グループの同一材 ・9点の伐採年代は集約
横棧 (14点)	切削調整型 (11点)	ヒノキ (7点) スギ (4点)	(うち5点分析) 同一材発見できず
	丸木型 (2点)	サカキ (2点)	(未分析)
隅柱 (4点)	割り材型 (1点)	ヒノキ (1点)	(未分析)
	切削加工 (全点) ・断面方形 (3点) ・断面多角形 (1点) ・隅柱として不必要な欠片	ヒノキ (全点)	(うち2点分析) 同一材発見できず



図7 縦板・横棧・隅柱にみられる来歴の差異

この点について比較参照することはできないが、もし部材によって転用傾向に差異があるならば、それは材料入手の難易を背景としている可能性がある。少なくとも岡田国遺跡では、縦板に用いる板材については一括的な供給や製作ができる状況にあったが、横棧にみられる棒材や隅柱にみられる柱状の材についてはそれぞれ来歴の異なる木材や転用材のほうが入手しやすかったことを示している。

一見、来歴が似通って見える井戸杵部材でも、部材ごとの形態や樹種組成の多様性から来歴の差異を指摘した。

謝辞

今回、井戸杵部材を観察するとともに切片を採取し、悉皆的な樹種同定を行うという機会に恵まれ、本考察を行うきっかけとなった。福山博章氏、星野安治氏には貴重な機会を与えていただくとともに、大変有益なご教示をいただいた。また、村上由美子先生には本論をまとめるにあたり多大なご教示をいただいた。

注1 縦板組隅柱横棧留井戸杵における縦板の接合については京都府長岡京左京四条坊三町や長岡京左京三条四坊十五町の井戸杵における先駆的な研究がある(岡田2002、2005)。ほかに岡山県鹿田遺跡や滋賀県岡津遺跡などに接合事例がある(光本2006、藤崎編2010)。また、石川県三宮福浦B遺跡では横板井籠組井戸において無板の接合が行われている(林編2000)。なお、本稿では、岡田(2002)になら「板を割り出す前の材」を原材と呼ぶ。

注2 年輪年代学的同一材判定は「木口面や柀目面で年輪が明瞭に確認できる、一括性の高い資料群である、等の条件に合えば他の出土木器の検討にも適用可能」な手法である(浦・星野2019)。付録3第2節の星野の分析によれば、今回、同一材由来の可能性が高いとされる部材は「軸方向につながる、もしくは放射方向に重なり合う位置関係が考えられる」。今回、年輪年代学により同一材判定がなされた資料群について考古学的接合を再検討する機会がとれず、考古学的接合がされた他の部材と同様に割裂面どうしで接合するかはわからない。したがって縦板を軸方向に直行して切断している可能性も否定しきれない。また、原材を製材する前の「原木」段階での同一性を示している可能性もある。今回の同一材判定が具体的にどの段階での同一性を示すのかは今後の検討の課題であるが、少なくとも木材としての来歴が極めて似通った材の一群と考慮して間違いない。

なお、他グループとの関係については、A、B、Cグループのうちでは、Aグループの報告番号490の縦板の5年輪年代学的検討が行われそれとグループDやEとの同一材性はない。また、グループBは板目面での接合のため、概

来歴を持った原材を調達することで井戸杵を製作していたのである(表1、図7)。

これまでの井戸杵部材の検討は縦板や隅柱など一部の部材を代表させて行うものが多かったが、分析を部材ごとに分解して行い、来歴を考えていくことは、井戸杵に見られる古代の木材のライフサイクルの詳細と実態を検討する上でも有効な視点になる。

8. おわりに

岡田国遺跡で検出した井戸(S E540)というひとつの遺構を構成する井戸杵部材でも、縦板・横棧・隅柱という部材レベルに分解して考察すると、来歴が似通ったものをまとめて調達して作られたもの、来歴が異なる材を寄せ集めて作られたもの、建築部材から転用されたものと、多様な来歴を持つ木材を、井戸という1つの遺構内で同居させる、言わば「ハイブリッド」な井戸杵の様相が考察できた。研究史はある特定部材についてのみ来歴を考察するものが多く、

目面で接合するほかのグループとは区別できる可能性が高い。したがって全点において詳細な年輪年代学的検討が行われたとしても、グループがこれ以上に集約される可能性は低い。

- 注3 逆の事例として、光本順が検討した岡山県鹿田遺跡の12世紀代～13世紀初頭の縦板横棧留の井戸枠では、縦板の接合から榑が復元されているが、「榑り方と縦板との隙間に挿入される」ことの多い薄くて小型の縦板はすべて、厚い縦板との接合関係は認識できない。また、その薄い縦板の中には井戸の構造とは直接関わりのない穿孔を有する材が数点あり、「榑と認識した縦板とは異なる経緯で製作されたものが、井戸構築にあたって転用された」とされる。つまり、鹿田遺跡の事例では厚い縦板と薄い縦板の少なくとも一部が「異なる経緯で製作されている」と考えられている(光本2006)。
- 注4 海野聡と小田裕樹は藤原京と平城京の井戸における建築部材の転用事例を多数紹介している(海野・小田2013)。また、平城京の井戸を分析した篠原豊一(1991)は「縦板組井戸の木組は転用材がほとんどである。」(篠原1991)と述べている。
- 注5 横棧の長さは井戸枠各辺の長さに限定され、また、幅や厚さは隅柱の接合部に組み入れたり、機能上縦板を支えるために法量が一統されることを望ましいことを考えると、切削調整横棧の法量にバラつきが少ないことは納得できる。
- 注6 ただし、横棧は表面が切削調整されているため、縦板よりも考古学的接合検討が難しい。
- 注7 逆に同様の来歴をもつ原材から製作された井戸の例として、石川県三宮福浦B遺跡の例がある。8世紀初頭～前室町頃の横板井籠組井戸では、底板・側板は軸方向に接合されている。また、枠固定用の枕も同材と考えられており、掘立柱建物の壁材の転用と推定される一枚の長い板材からすべて製作されたものと考えられている(林福2000)。井戸の構造も地域も異なる例であるが、井戸枠部材の来歴を考える上で興味深い事例である。
- 注8 鎌方は「木組の井戸枠部材は基本的に建築部材などの転用品であることが多く、とくに8世紀以降の都城においては木材資源サイクルの一環としてそれらが利用されていた」と述べる(鎌方2003)。また、海野と小田は藤原京と平城京から検出された井戸を検討し、鎌方の指摘を踏まえて「木材のライフサイクルとして、転用後に最終的に井戸の部材として用いられたことは、当時の木材の貴重さを物語る」と述べ、建築部材と井戸枠部材の関連性を指摘する(海野・小田2013)。

一方で、長岡京路で検出された井戸枠縦板の詳細な接合検討を行った岡田は流通部材の榑が、井戸を製作した現地に搬入され、その場において板材に割り出された可能性を指摘する。(岡田2002)。

なお、奈良時代中頃の岡田国遺跡の空間利用は都城における条坊道路と宅地の形態に類似しており、恭仁京との関連も予想されることから、都城における木材のライフサイクルを考える上でも本事例は参考になる資料である。

引用・参考文献

- 五十嵐彰1998「考古資料の接合—石器研究における母岩・個体問題—」『史学』(第67巻第3・4号) 三田史学会
- 浦蓉子・星野安治2019「年輪年代学的手法を用いた古代木製祭祀具の研究」『考古学雑誌』(第101巻第2号) 日本考古学会
- 海野聡・小田裕樹2013「都城の形成と井戸」『第62回 埋蔵文化財研究集会 続・井戸再考—古墳・飛鳥時代の井戸—発表要旨集・資料集』第62回埋蔵文化財研究集会事務局
- 岡田文男2002「長岡京路の井戸の側板に用いられた古代の榑について」『田辺昭三先生古稀記念論文集』真陽社
- 岡田文男2005「林業—榑の生産と流通」『列島の古代史ひと・もの・こと2 暮らしと生業』岩波書店
- 鎌方正樹2003「ものが語る歴史シリーズ⑧ 井戸の考古学」同成社
- 沢田敦2004「接合」安藤正人編『現代考古学事典』同成社
- 篠原豊一1991「平城京の井戸とその祭祀」『奈良市埋蔵文化財センター紀要1990』奈良市教育委員会
- 林大智編2000「三宮福浦B遺跡 三宮まどかけ遺跡」石川県埋蔵文化財センター
- 藤崎高志編2010「は場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書37-4 関津遺跡Ⅲ 大津市関津一丁目」滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県埋蔵文化財保護協会
- 光本順2006「第3節 鹿田遺跡の研究 1. 鹿田遺跡第5次調査出土の井戸枠部材に関する再検討—焼印と木材の規格—」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

付編4 岡田国遺跡井戸S E 540出土木製品の樹種

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

本業務では、木質遺物の保存処理対象とされた岡田国遺跡(京都府木津川市木津馬場南地内)の発掘調査で出土した木製品3点について、樹種同定を実施した。以下に、その結果を報告する。

2. 試料

資料は、木製品3点(No1～3)である。なお、資料の詳細(出土地点、器種)及び試料(切片)採取時の観察所見(木取りなど)は、同定結果とともに表1に記したので参照されたい。

3. 分析方法

資料(木製品)の木取りを観察した後、剃刀を用いて木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレバラートを作製する。プレバラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995-1999)を参考にする。

4. 結果

同定結果を表1に示す。木製品は、針葉樹1分類群(ヒノキ)と広葉樹2分類群(モクレン属、ツゲ)に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・モクレン属(*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、道管は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～40細胞高。

・ツゲ(*Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. var. *japonica* (Muell. Arg.) Rehd. et Wils) ツゲ科ツゲ属

散孔材で、道管径は極めて小径、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～30細胞高。

5. 考察

今回の分析に供された木製品は、伊東・山田(2012)の木器分類を参考にすると、工具(刀子)、服飾具(横櫛)及び容器(蓋板)に分けられる。樹種同定の結果、これらの木製品には計3種類(分類群)が認められた。各種類の材質についてみると、針葉樹のヒノキは木理が通直で割裂性と耐水性が高い。広葉樹のモクレン属は軽軟で強度と保存性は低く、ツゲは、重硬・緻密で、強度が高いとされる。

表1 樹種同定結果

No	遺構	層位	器種	部位	木取り	種類(分類群)
1	S E 540	第7層	横櫛	-	側出	ツゲ
2	S E 540	第8層	蓋板		板目	ヒノキ
3	S E 540	第8層	刀子	柄	ミカン割	モクレン属

器種別にみると、工具の刀子(N03)は、鉄製の刃部が残る柄である。柄は断面が三角形となるミカン割材が使用され、表面には漆塗りが確認される。柄はモクレン属であったことから、比較的軽い木材の利用が窺える。なお、明治時代に編纂された「木材ノ工藝的利用」(農商務省山林局,1912)によれば、刀剣の鞘としてホオノキ(モクレン属)が上等とされ、その理由として樹液が少なく、刀身が錆びにくいことが挙げられている。この点を踏まえると、今回の刀子の柄にモクレン属が認められた背景には、このような材質的特徴も配慮されている可能性がある。

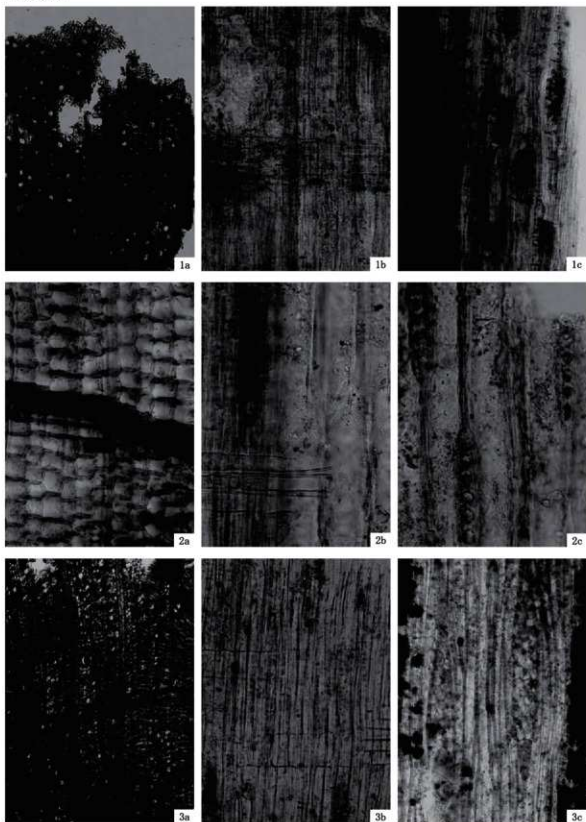
服飾具の横櫛(N01)は、背が木口、広い面が板目になる木取りで、歯が狭い間隔で磨き出される資料である。樹種はツゲであったことから、細かな加工を施すために緻密な木材が利用されたと考えられる。岡田国遺跡の発掘調査所見などを踏まえ、古代の櫛の木材利用傾向についてみると、イスノキの利用が多く、ツゲの利用は少ない。京都府内における事例は、伊東・山田(2012)のデータベースに掲載されている4点は、不明1点を除く3点がイスノキである。一方、纏向遺跡(奈良県桜井市)の平安時代とされる資料、飛鳥京跡(奈良県明日香村)、藤原宮跡(奈良県橿原市)、平城宮跡(奈良県奈良市)の古墳時代末期～平安初期とされる資料には、イスノキとともにツゲやカナメモチなども数は少ないが確認されている。これらの事例から、古代頃には櫛の用材としてツゲも利用されていたことが窺え、今回の資料は古代のツゲの利用を検討する上で貴重な資料と言える。

容器の蓋板(N02)は円形板状を呈する資料であり、中心の破損部には穿孔と思われる痕跡が認められる。本資料はヒノキの板目板が利用されることから、加工性や耐水性の高い木材が選択利用されたと推定される。なお、恭仁京との関連が推定される岡田国遺跡の性格を踏まえ、古代の都城関係の曲物の調査事例(伊東・山田2012)についてみると、平安京や長岡京などで出土した曲物の多くにヒノキの利用が認められている。曲物は、側板、底板、蓋板の部位別に見ても、いずれもヒノキが中心の用材傾向であり、部位による用材の違いは認められない。今回の資料もヒノキが利用されており、当該期の曲物の木材利用と整合的と言える。

<引用文献>

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181。
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176。
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201。
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166。
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216。
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,449p。
- 農商務省山林局(編),1912,木材ノ工藝的利用,大日本山林會,1308p。
- Richter H.G.,Gros S E r D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p。[Richter H.G.,Gros S E r D.,Heinz I. and Gasson P.E., 2004, IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification]。
- 局地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p。
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野 浩(日本語版監修),海青社,122p。[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E., 1989, IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]。

図版1 木材



1. ツグ (No.1; 横櫓)

2. ヒノキ (No.2; 曲物底板)

3. モクレン属 (No.3; 刀子柄)

a: 木口, b: 年目, c: 板目

100 μ m: 1a, 3a

100 μ m: 2a, 1b-c, 3b-c

100 μ m: 2b-c

写真1 岡田国遺跡井戸S E540出土木製品の樹種顕微鏡写真

付表5 出土土器観察表(弥生・古墳時代)

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
1	土器	甕	9020 H4	SD195	20.4	230	-	1/12 以下	にぶい黄緑 (10YR6/3)	径1mm以下の石英・長石を少量含む	良好	内外面：ナデ、外面：ハケカ(燻滅)	外面にスス付着
2	土器	高杯	9020 L19	SD10 SP420	14.4	50	-	1.5/12	淡赤褐色 (2.5YR7/4)	径0.5～3mmの石英・長石・チャートと多く含む	軟	内外面：燻滅	割変換山隠基
3	土器	甕	9020 L19	SD10 SP420	10.0 (頸部)	225	-	1/12 以下	橙 (5YR6/6)	径0.5～1mmの石英・長石・黒色の砂粒を多く含む	軟	内面：ケズリ・ナデ、外面：燻滅	
4	土器	甕	9020 C21	SK27 第1層	15.6	28.0	-	2/12	浅黄 (2.5Y8/3)	径1mm以下の石英・長石・チャート、黒色砂粒多く含む	良好	内外面：ナデ	
5	土器	甕	9020 C21	SK27 第1層	22.0	96	-	2.5/12	にぶい黄緑 (10YR7/3)	径3mm以下の石英・長石を多く含む	軟	内外面：スピサオエ(燻滅)	
6	土器	甕	9020 C19・20	SK40	15.2	94	-	1/12 以下	灰白 (2.5Y8/1)	径2mm以下のチャート・石英・長石・赤色砂粒を多く含む	軟	内面：ナデ・ケズリ、外面：ナデ・ハケ	
7	土器	甕	9020 C19・20	SK40 第9層	15.8	33	-	2/12	浅黄 (2.5Y7/3)	径1.5mm以下の石英・長石・赤褐色の砂粒を含む	良好	内外面：ナデ	
8	土器	甕	9020 C19・20	SK40 第9層	13.2	47	-	1/12	灰白 (10YR8/2)	径1.5mm以下の石英・長石・赤褐色の砂粒を含む	良好	内外面：ハケ・ナデ	
9	土器	甕	9020 C19・20	SK40 第9層	13.8	47	-	1/12	灰白 (2.5Y8/2)	径1mm以下の赤褐色の砂粒、4mm以下の石英・長石を含む	良好	内外面：ナデ	
10	土器	甕	9020 C19・20	SK40 第5層	14.8	41	-	4/12	灰白 (7.5YR6/2)	径1.5mm以下の赤色砂粒・石英・赤褐色多く含む	軟	内面：ナデ・ケズリ、外面：ナデ	
11	土器	甕	9020 C19・20	SK40	15.3	21.5	-	6/12	にぶい黄緑 (10YR6/4)	径2～3mmの長石・石英・赤色砂粒を多く含む	軟	内面：ナデ、ケズリ(燻滅)、外面：ナデ・ハケ(燻滅)	内外面にスス付着
12	土器	甕	9020 C19・20	SK40 第5層	14.7	73	-	4/12	にぶい黄緑 (10YR7/2)	径2～4mmの石英・長石を多く含む、1mm以下の石英・長石・黒色砂粒・赤褐色を多く含む	軟	内面：ケズリ・ナデ、外面：ナデ・ハケ	
13	土器	甕	9020 C19・20	SK40 第5層	14.9	11.2	24.1 (体部)	4/12	灰白 (2.5Y8/2)	径4mm以下の石英・長石を少量多く含む	軟	内面：ナデ・スピサオエ・ケズリ、外面：ナデ・ハケ	外面にスス付着
14	土器	高杯	9020 C19・20	SK40 第5層	-	2.8 (杯部)	7.2 (脚部)	5/12	橙 (7.5YR6/6)	径1mm以下の石英・長石を少し含む	軟	脚部内面：不調整(しぼり痕)、脚部外面：スピサオ・ケズリ、杯部内面：ナデ・ミガシ、杯部外面：ナデ・ミガシ	
15	土器	高杯	9020 C19・20	SK40 第5層	-	5.1	4.2	脚部 7/12	灰白 (2.5Y8/2)	径0.5～1mm程度の石英・長石を多く含む	良好	内面：不調整(しぼり痕)、脚部内面：スピサオ・ケズリ、脚部外面：不調整(しぼり痕)、ナデ、脚部外面：ナデ・ハケ、杯部内面：ナデ	
16	土器	高杯	9020 C19・20	SK40 第5層	-	3.9	-	-	灰白 (2.5Y8/1)	径3mm以下の石英・長石・チャート、黒色砂粒を多く含む	軟	内面：ナデ、脚部外面：ナデ・ハケ、杯部内面：ナデ	
17	土器	高杯	9020 C19・20	SK40 第5層	-	3.8	7.8	脚部 12/12	橙 (5YR7/6)	径0.5mm程度の石英・長石を含む	良好	内面：燻滅、外面：ナデ(燻滅)	
18	土器	甕	9020 C19・20	SK40 第5層	-	4.3	4.7	脚部 10/12	内：にぶい黄緑 (10YR6/3)、外：黒褐色 (7.5YR3/1)	径1mm以下の石英・長石を含む	良好	内外面：ナデ	手づくぬ土器
19	土器	甕/甕	9020 C19・20	SK40 第2層	-	1.7	5.5	脚部 2/12	浅黄 (2.5Y7/4)	径3.5mm以下の石英・長石を多く含む	良好	内外面：ナデ	
20	土器	甕	9020 E19	SK48	18.9	16.1	-	1/12 以下	灰白 (10YR6/1)	径2mm以下の石英・長石・チャート、赤色砂粒を少量多く含む	軟	内面：ナデ・ケズリ(燻滅)、外面：ナデ	
21	土器	甕	9020 E19	SK48	15.0	3.4	-	1/12 以下	にぶい黄緑 (5YR6/3)	径0.5mm程度の石英・長石を含む	良好	内外面：ナデ	
22	土器	甕	9020 E19	SK48	17.0	4.8	-	1/12 以下	浅黄 (2.5Y8/3)	径0.5～1mm程度の石英・長石を含む	良好	内外面：ナデ(燻滅)	
23	土器	甕	9020 E19	SK48 第5層	13.6	29	-	1/12 以下	にぶい黄緑 (10YR7/2)	径1mm以下の石英・長石・赤褐色を多く含む	軟	内外面：ナデ・燻滅	
24	土器	甕	9020 E19	SK48	13.2	22.5	-	1/12 以下	にぶい黄緑 (7.5Y7/3)	径2mm以下の灰白色・赤色砂粒を多く含む	軟	内面：ナデ、外面：ナデ、燻滅	
25	土器	高杯	9020 E19	SK48 第5層	25 (杯部)	7.0	-	-	灰白 (7.5YR8/2)	径2.5mm以下の石英・長石・チャート、赤色砂粒・赤褐色を多く含む	軟	内面：工具によるナデ、外面：ハケ(燻滅)、杯部内面：ナデ(燻滅)	
26	土器	高杯	9020 E19	SK48 第2層	2.2 (杯部)	6.5	-	-	灰白 (2.5Y8/1)	径1mm以下の黒い砂・石英・長石を含む	軟	内面：不調整(しぼり痕)、外面：ミガシ(燻滅)	
27	土器	鉢	9020 M12	SK196	-	6.2	13.5 (体部)	-	黒褐色 (10YR3/1)	径0.5mm以下の石英・長石を少し含む	軟	内面：スピサオエ・ナデ・ミガシ、外面：ミガシ	
28	土器	甕	9020 H19	SK290 第5層	18.2	4.4	-	1/12 以下	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	径1.5～2mmの赤色砂粒・石英・長石を含む	軟	内外面：ナデ(燻滅)	山隠基
29	土器	小形丸底甕	9020 H19	SK290 第2層	-	3.9	-	体部 2/12	にぶい黄緑 (10YR7/4)	径1mm以下の石英・長石を含む	軟	内面：ナデ、外面：燻滅	
30	土器	高杯	9020 H20	SK400 第3層	17.5	66.0	-	1/12 以下	灰白 (7.5Y7/1)	径3mm以下の石英・長石・チャートと多く含む	軟	内外面：燻滅	
31	土器	甕	9020 H20	SK400 第3層	12.4	23	-	1/12 以下	浅黄褐色 (10YR8/3)	径1.5mm以下の石英・長石・赤色砂粒を含む	良好	内外面：ナデ(燻滅)	
32	土器	甕	9020 D17	SK500 第6層	17.0	12.2	-	3/12	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	径1mm以下の石英・長石を含む	良好	内面：ナデ・ケズリ、外面：ナデ・ハケ	スス付着
33	土器	甕	9010 L17	SX385	-	2.8	3.4	脚部 12/12	灰黄 (2.5Y7/2)	径3mm以下の石英・黒・黒色砂粒を多く含む	軟	内外面：燻滅	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	胎土	焼成	調整	備考
34	土師 器	壺	8020 S19	SX427	(177)	(74)	-	3/12	浅黄(25YR3/3)	径1~2mm大の石英・ 長石を含む	良好	内外面:ナデカ(磨滅)	
35	土師 器	甕	8020 S21	SX434	-	(47)	-	-	褐色(10YR5/1)	径1mm以下の石英・長 石を含む	良好	内面:ナデカ、外面:ナデ カタキ	外面にスス付 着
36	土師 器	壺	8020 S24・25	NI560 SX370	(182)	(91)	-	3/12	にぶい黄緑 (10YR7/3)	径1~3mm大の石英・ 長石を多く含む	良好	内外面:ナデ(磨滅)	山崩系
37	土師 器	壺	8020 S24・25	NI560 SX370	162	(140)	-	2/12	浅黄(25Y7/3)	径4mm以下の石英・長 石・チャート、黒・茶 色砂粒を含む	良好	内面:磨滅、ユビナデ、ハ ラケズリ、外面:磨滅	
38	土師 器	壺	8020 S24・25	NI560 SX370	(130)	(60)	-	1/12 以下	にぶい黄 (10YR7/2)	径1~3mmの石英・長 石・黒色砂粒、雲母を含 む	良好	内面:ナデ・ケズリ(磨滅)、 外面:ナデ(磨滅)	
39	土師 器	甕	8020 S24・25	NI560 SX370	(161)	(60)	-	1/12	にぶい黄緑 (10YR7/3)	径0.5~1mm位の石英・ 長石を多く含む	良好	内面:ナデ・ケズリ、外面: ナデ	
40	土師 器	甕	8020 S24・25	NI560 SX370	(156)	(75)	-	2.5/12	にぶい黄緑 (10YR7/3)~薄 灰(10Y8/6/1)	径25mm以下の長石・黒 雲母・石英を含む	良好	内外面:磨滅、内面:ユビ オサエ	
41	土師 器	甕	8020 S24・25	NI560 SX370	(150)	(37)	-	1/12	にぶい黄緑 以下	径0.5~1mm位の石英・ 長石を含む	良好	内外面:ナデ	
42	土師 器	壺	8020 T25	NI560 SX375	190	(60)	-	7/12	浅黄(25Y7/4)	径1~3mm位の石英・ 長石を含む	良好	内外面:ナデ、外面:ハケ	
43	土師 器	高杯	8020 T25	NI560 SX375	-	(85)	(120)	無	灰白(7.5YR8/2)	径0.5~1mmの石英・長 石・チャート、黒色砂粒 を多く含む	軟	内面:不調整	
44	土師 器	壺	8020 S24	NI560 SX738	(158)	34.3	-	3/12	灰白(10YR8/2) ~浅黄緑 (10YR7/3)	径3mm以下の石英・長 石・チャート、黒色砂粒 を多く含む	良好	内面:ケズリ、ユビオサエ、 外面:ハケ(磨滅)	体部に穿孔
45	土師 器	壺	8020 S24	NI560 SX738	(190)	(63)	-	3/12	にぶい黄緑 (10YR7/2)	径4mm以下の長石・茶 黒砂粒・石英を含む	良好	内外面:磨滅	河原系小
46	土師 器	壺	8020 S24	NI560 SX738	94	(91)	-	6/12	内:褐色 (10YR4/1)、外: 灰褐色(7.5YR7/1)	径1~2mmの半透明の 石英・長石・黒色砂粒 を多く含む	良好	内面:ナデ・キザミメ、ナ デ・ケズリ、外面:ミガキ ハナ	山崩系
47	土師 器	壺	8020 S24	NI560 SX738	-	(222)	(50)	無	灰白(10YR8/2)	径3mm以下の石英・長 石・黒色砂粒、雲母を含 む	良好	内面:不調整(ユビオサエ・ ユビナデ)、外面:ケズリ 後ナデカ(磨滅)	
48	土師 器	甕	8020 S24	NI560 SX738	(140)	(135)	-	3/12	無	径0.5~1mm位の石英・ 長石を多く含む	良好	内外面:ハケカ(磨滅)、 内面:粗面調整	
49	土師 器	甕	8020 S24	NI560 SX738	(147)	(113)	-	3/12	灰黄(10Y8/6)	径1~3mm大の石英・ 長石・チャートを含む	良好	内面:ナデ・ケズリ、外面: ナデ・ハケ(磨滅)	外面にスス付 着
50	土師 器	甕	8020 S24	NI560 SX738	123	(63)	-	12/12	浅黄(25Y7/3) 薄灰(25Y5/1)	径2~3mm大の石英・ 長石・黒色砂粒を含む	良好	内面:ナデ・ケズリ、外面: ナデ・ハケ(磨滅)	
51	土師 器	甕	8020 S24	NI560 SX738	(140)	181	-	3/12	にぶい黄 (5YR6/4)、浅 黄(25YR3/2)、 黒褐色(25Y3/1)	径1~3mm大の石英・ 長石を多く含む	良好	内面:ナデ・ケズリ後ナ デカ(磨滅)、外面:ナ デ・ケズリ後ナデ・粗面調整 (磨滅)	
52	土師 器	甕	8020 S24	NI560 SX738	(140)	(60)	-	1.5/12	無	径0.5~1mm位の石英・ 長石を含む	良好	内外面:磨滅	
53	土師 器	甕	8020 S24	NI560 SX738	(150)	(36)	-	1/12	にぶい黄 (7.5YR7/4)	径0.5~1mm位の石英・ 長石を含む	良好	内外面:磨滅	
54	土師 器	壺	8020 S24	NI560 SX738	(112)	(38)	-	2/12	無	径0.5mm位の石英・長 石を含む	良好	内外面:磨滅	
55	土師 器	甕	8020 S24	NI560 SX738	(120)	(35)	-	1.5/12	浅黄(25Y7/3)	径0.5mm位の石英・長 石・黒色砂粒を含む	良好	内面:ナデ・ケズリ、外面: ナデ・ハケ	
56	土師 器	新瓦口 鉢鉢	8020 S24	NI560 SX738	135	(35)	-	1.5/12	浅褐色 (10YR8/4)	径1mm以下の長石を わずかに含む	良好	内面:ミガキ、外面:ミガ キ・ハラケズリ	
57	土師 器	小形丸 底鉢	8020 S24	NI560 SX738	112	(49)	-	12/12	無	径1mm以下の石英・長 石・半色砂粒を含む	良好	内外面:ハラミガキカ(磨 滅)	
58	土師 器	高杯	8020 S24	NI560 SX738	22	(56)	-	-	無	径2mm以下の長石・チ ャート・石英を含む	良好	内面:不調整(しぼり痕)、 外面:ミガキ後ミガキカ(磨 滅)	
59	土師 器	壺	8020 T24・25	NI560 SX764	(227)	(34)	-	2.5/12	無	径0.5~1mm位の石英・ 長石を多く含む	良好	内外面:ミガキ(磨滅)	
60	土師 器	壺	8020 T24・25	NI560 SX764	175	(82)	-	6/12	灰白(10YR8/1)	径0.5~3mmの石英・長 石・黒色砂粒、チャート を含む	軟	内面:ナデ・ケズリ、外面: ナデ(全体磨滅)	
61	土師 器	壺	8020 T24・25	NI560 SX764	130	22.7	-	10/12	灰褐色 (7.5YR5/2)、 にぶい黄緑 (10YR7/4)、茶 褐色(10YR3/2)	径4mmの石英・長石・ 黒色砂粒を含む	良好	内面:ナデ・ケズリ、外面: ミガキ、外面:ナデ・ハケ 後ナデカ	外面にスス・ 口縁部打ち欠 け
62	土師 器	甕	8020 T24・25	NI560 SX764	25.5	(178)	-	7/12	にぶい黄 (7.5YR6/3)	径1mm以下の石英・長 石・黒色砂粒、雲母を含 む	軟	内面:ナデ・ケズリ(磨滅)、 外面:ナデ・ハケ・粗面調 整	山崩系
63	土師 器	甕	8020 T24・25	NI560 SX764	148	(189)	-	5/12	内:浅褐色 (2.5YR7/4)、 外:にぶい黄 (5YR7/4)	径0.5~1.5mm位の石英・長 石・チャート、黒色砂粒 を多く含む	軟	内面:ナデ・ケズリ・ユビ オサエ、外面:ナデ・ハケ 後ナデカ	外面体部中央 スス付着
64	土師 器	甕	8020 T24・25	NI560 SX764	(152)	(170)	-	1.5/12	にぶい黄緑 (10YR7/4)	径0.5mm位の石英・長 石を含む	良好	内面:ナデ・粗面調整、 外面:ナデ・ハケ後ナ デ	外面にスス付 着
65	土師 器	甕	8020 T24・25	NI560 SX764	(140)	(67)	-	1.5/12	にぶい黄緑 (10YR7/3)	径0.5~1mm位の石英・ 長石を多く含む	良好	内面:ナデ・ケズリ、外面: ナデ・ハケ	
66	土師 器	甕	8020 T24・25	NI560 SX764	(162)	(43)	-	1/12	にぶい黄緑 (10YR7/3)	径0.5~1mm位の石英・ 長石を多く含む	良好	内外面:ナデ、内面:ケズ リ	

岡田国道跡第3～6次発掘調査報告

報告番号	種類	素材	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
67	土器	夾	8020 T24-25	NR560 SK764	(136)	(34)	-	3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	径1～3mmの石英・長石・黒色砂粒を含む	良好	内外面：ナデ (摩滅)	
68	土器	夾	8020 T24-25	NR560 SK764	140	(14.7)	-	12/12	にぶい橙 (7.5YR7/3)	径3mm以下の石英・長石を多く含む	良好	内面：ナデ・ケズリ、外面：ナデ・ハケ (摩滅)	外面にスス。
69	土器	夾	8020 T24-25	NR560 SK764	(156)	(9.5)	-	1.5/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	径0.5mm位の石英・長石を含む	良好	内面：ナデ・ケズリ、外面：ナデ・ハケ	
70	土器	夾	8020 T24-25	NR560 SK764	15.5	(4.5)	-	3/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	径1～3mmの石英・長石・チャート多く含む	良好	内面：ナデ・ケズリか、外面：ナデ・ハケ	
71	土器	高杯	8020 T24-25	NR560 SK764	(178)	(6.3)	-	1/12以下	灰白(10YR8/2)	径1mm以下の石英・長石・チャートを少し含む	軟	内面：板ナデ (細かいついハケ)、外面：ミガキか・ハケ (全体摩滅)	新変底山脈系
72	土器	高杯	8020 T24-25	NR560 SK764	(180)	(5.2)	-	1/12以下	にぶい黄 (7.5YR7/3)	径0.5mm位の石英・長石・黒色砂粒を多く含む	良好	内外面：ハケ後ミガキ	新変底山脈系
73	土器	高杯	8020 T24-25	NR560 SK764	-	(8.4)	-	脚11/12	赤橙 (5YR8/4)	無顔粒の石英・長石を少し含む	軟	腹部内面：不調整 (しぼり痕)、腹部外面：ハケ後ミガキ、杯部内外面：ミガキ	新変底山脈系
74	土器	有段口高杯	8020 R23-24	NR560 SK764	(15.2)	5.3	-	3/12	橙 (5YR7/6)	径0.5～1mm位の石英・長石を少し含む	良好	内外面：ミガキ (摩滅)	
75	土器	壺	8020 R23-24	NR560 SK765	(21.0)	(6.2)	-	1/12	橙 (5YR7/6)	径0.5～2mm位の石英・長石を多く含む	良好	内外面：摩滅	
76	土器	壺/美	8020 R23-24	NR560 SK765	-	(2.8)	4.2	底1/12	内：にぶい赤 (5YR5/3)、外：明赤黄 (2.5YR5-6)	径0.5～2mm位の石英・長石・黒色砂粒を多く含む、7mm位の砂粒をわずかに含む	良好	内外面：摩滅	
77	土器	夾	8020 R23-24	NR560 SK765	12.8	(9.8)	-	6/12	にぶい橙 (5YR7/4)	径1～3mmの石英・長石を多く含む	良好	内面：ナデ・ケズリか (摩滅)、外面：ナデ・ナタナ (摩滅)	製法上型か
78	土器	夾	8020 R23-24	NR560 SK765	15.3	(4.2)	-	8/12	にぶい橙 (10YR7/3)	径1～3mmの石英・長石・チャート、顔色砂粒・黒色砂を含む	良好	内面：ナデ・ケズリ (摩滅)、外面：ナデ	
79	土器	夾	8020 T25	NR560 SK766	21.2	(18.8)	-	8/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	径1～2mmの石英・長石・チャート・黒色砂粒を多く含む	軟	内面：ナデ・ケズリ、外面：ナデ・ハケ	スス付着
80	土器	夾	8020 T25	NR560 SK766	(13.6)	12.0	-	2/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	径2mm以下の石英・長石を含む	良好	内面：ナデ・ハケ後ナデ・ケズリ、外面：ナデ・ユビオサキ・ユハク	スス付着か
81	土器	夾	8020 T25	NR560 SK766	10.6	(8.4)	-	12/12	浅黄橙 (10YR8/3)	径2mm以下の石英・長石・チャート・黒色砂粒を多く含む	軟	内面：ハケ後ナデ・ケズリ、外面：ハケ後ナデ・ナデ・新変底・ハケ	外面にスス付着、底部分
82	土器	高杯	8020 T25	NR560 SK766	-	(8.7)	11.2	3/12	浅橙 (5YR8/4)	径0.5～3mmの石英・長石・チャートを多く含む	軟	内面：不調整 (しぼり痕)か、外面：ミガキ (摩滅)	
83	土器	壺	8020 S24	NR560	(23.1)	(3.7)	-	1.5/12	灰黄 (2.5Y7-2)	径0.5～1mm位の石英・長石を多く含む	良好	内外面：摩滅 (外面にミガキか)	
84	土器	壺	8020 R24	NR560	(20.7)	(3.3)	-	1/12以下	橙 (7.5YR7/6)	径0.5～1mmの石英・長石を含む	良好	内外面：摩滅	
85	土器	壺	8020 T24	NR560	(12.8)	(4.2)	-	2/12	灰黄橙 (10YR8/2)	径0.5～3mmの石英・長石・黒色砂粒を含む	良好	内面：ハケ後ナデ・ケズリか、外面：ナデ・ハケ	口縁部外面にスス付
86	土器	壺	8020 S24	NR560	18.4	(15.1)	-	8/12	灰白(10YR8/2)	径1～3mmの石英・長石・チャート・黒色砂粒を多く含む	良好	内面：ナデ・ケズリか (摩滅)、外面：ナデ・ハケ (摩滅)	
87	土器	夾	8020 R23	NR560 SK767	17.8	22.6	5.2	1) 8/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	径4mm以下の石英・長石・チャート・雲母を含む	良好	内面：ハケ・ケズリ、外面：ハケ・ユビオサキ	底部外面に隆起痕、外面にスス付着
88	土器	夾	8020 R23	NR560	-	(5.5)	-	-	にぶい橙 (7.5Y6/4)	径1～2mmの石英・長石を含む	良好	内面：ケズリ (摩滅)、外面：タタキ	大和型
89	土器	夾	8020 T24-25	NR560	(12.3)	(3.8)	-	2/12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	径1～2mmの石英・長石・チャートを含む	良好	内面：ナデ・ケズリか、外面：ナデ (全体摩滅)	
90	土器	夾	8020 R23	NR560	(28.7)	(7.2)	-	2/12	灰白(10YR8/2)	径1mmの石英・長石・黒色砂粒を多く含む	良好	内外面：ナデ	山脈系
91	土器	高杯	8020 T25	NR560	(180)	(4.6)	-	1.5/12	赤(10R5-6)	径0.5～1mm位の石英・長石を多く含む	良好	内外面：摩滅	
92	土器	高杯	8020 R23	NR560	-	(7.7)	(12.0)	底1/12	内外：灰白 (7.5YR8/2)、脚：黄赤・暗赤 (7.5YR5-1・7.5YR3-3)	径1mm以下の石英・長石を少し含む	良好	内面：ケズリ・ナデ・ハケ、外面：ケズリ・ハケ	
93	土器	付付鉢	8020 S24	NR560	-	(6.0)	9.9	底1/12	にぶい黄 (2.5Y6-3)	径4mm以下の長石・チャート・石英多量、黒色顔料を含む	良好	腹部内面：ケズリ、外面：ナデ・炭状文 (5条)、内面：ナデ	
94	土器	器台	8020 T25	NR560	-	(5.6)	-	-	灰白(2.5Y4/1)	径1～2mmの石英・長石・雲母・黄閃石砂を含む	軟	内面：ケズリか、外面：凹線か (摩滅)	
95	土器	小形丸瓶鉢	8020 R22	NR560	(11.6)	(5.4)	-	1/12以下	橙 (5YR7/6)	径0.5mm位の石英・長石・黒色砂粒を少し含む	良好	内外面：摩滅	
96	土器	壺	8020 R24	NR560	-	(8.4)	-	-	脚(10YR5/1)	径0.5～2mm位の石英・長石を多く含む	良好	内面：ハケ、外面：摩滅	調製痕
97	土器	壺	8020 S23	NR560	-	(3.0)	-	-	内：灰白 (7.5YR4/1)、外：灰黄橙 (10YR6/2)	径1mm以下の石英・長石・黒色砂粒を多く含む	軟	内面：ハケ、外面：磨滅痕・黄文・管文	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
98	弥生土器	壺	8020 T24	NR560	(158)	(21)	-	1/12以下	内：黒(N2:0)・外：にぶい黄褐色(10YR6:3)	径0.5~1.5mmの石英・長石・黒色砂粒を含む	良好	内面：ナデ・ミガキナ、外面：縦四縁・ハケ	
99	弥生土器	壺	8020 S24	NR560 SK738	(141)	(7.3)	-	3/12	にぶい黄褐色(10YR6:3)	径3mm以下の石英・長石・半粒炭粒を含む	良好	内面：ナデ・エビオサエ、外面：ナデ・ハケ	
100	弥生土器	甕	8020 I25	NR560	(18.2)	(1.8)	-	1.5/12	にぶい黄褐色(10YR6:3)	径1~2mmの石英・長石・チャートを含む	良好	内外面：ナデ、外面：キヤミメ	近江系
101	弥生土器	甕	8020 T24	NR560	(180)	(1.7)	-	1/12以下	灰黒(7.5YR5:2)	径0.5~1mm位の石英・長石・黒灰色砂粒を多く含む	良好	内面：ナデ、外面：キヤミメ	
102	弥生土器	甕	8020 I25	NR560	(140)	(2.3)	-	2/12	にぶい黄褐色(10YR7:2)	径0.5~1mm位の石英・長石・チャート・黒色砂粒を多く含む	良好	内面：ナデ、外面：キヤミメ	
103	弥生土器	甕	8020 I25	NR560	(24.4)	(8.8)	-	2/12	灰白(10YR8:2)	径1mm以下の石英・長石・チャート・黒色砂粒を多く含む	良好	内面：ナデ・ケズリ、外面：ナデ・割離	
104	弥生土器	甕/壺	8020 R24	NR560	-	(3.4)	9.0	4/12	灰黄(2.5Y7:2)	径0.5~1mm位の石英・長石・チャートを含む	良好	内面：ナデ・ハケ、外面：ナデ・不調整	
105	弥生土器	甕/壺	8020 T24	NR560	-	(2.3)	(7.2)	観) 3.5/12	暗灰(N3:0)	径0.5~1mm位の石英・長石を多く含む	良好	内面：ナデ、外面：ナデ・不調整	
106	弥生土器	甕/壺	8020 T24	NR560	-	(2.5)	(7.8)	観) 3/12	にぶい黄褐色(10YR7:2)	径0.5~1mm位の石英・長石を含む	良好	内面：平縁、外面：ナデ・不調整	
107	弥生土器	部台	8020 T24	NR560	-	(15.0)	-	-	内外：洪赤褐色(2.5YR7:4)、黄緑(N4:0)	径2mm以下の石英・長石・チャート・黒色砂粒を多く含む	良好	内面：ケズリ、外面：四縁	
108	弥生土器	高杯	8020 S23	NR560	(300)	(27)	-	1.5/12	にぶい黄褐色(10YR6:3)	径0.5~3mm位の石英・長石・雲母を含む	良好	内外面：ミガキ	

付表6 出土土器観察表(飛鳥・奈良時代)

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
116	弥生器	杯H	8020 M24	SD690	(89)	(2.2)	-	2/12	灰(N6:0)	審(径1.5mm前後の粒子まれを含む)	煎焼	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切り	立ち上がり部外面に障灰
117	弥生器	杯H	8020 M24	SD690	(9.2)	(2.8)	-	5/12	灰(N7:0)	審(径1.5mm以下の石・黒粒を多く、径3mm以下の黒粒をまれを含む)	煎焼	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切り	底部外面に障灰
118	弥生器	甕C	8020 M24	SD690	7.8	9.1	-	□10/12	灰(N6:0)	審(径0.5~2mm位の白・灰白色の粒をやや多く含む)	煎焼	内外面：ロクロナデ、底部外面：ロクロヘラナズリ	
119	土師器	甕	8020 M24	SD690	20.4	(14.0)	-	8/12	にぶい黄褐色(10YR7:3)	審(径5mm以下の石英・長石・チャート・赤鉄粒を多く含む)	良好	内外面：ナデ・ハケ・能瀬比良、頂部外面：ヘラナズリ・ハケ	
120	弥生器	甕	8020 M24	SD690	(9.2)	(11.5)	-	1/12以下	灰(N5:0)	審(径2mmの白い粒少し、1mm以下の白い粒を含む)	煎焼	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラナズリ・ヘラ切り後ナズリ	頂部に沈着した1部、体部に沈着した2部
121	弥生器	甕C	8020 M24	SD690	7.4	7.8	-	11/12	灰(N5:0)~灰白(10Y1G:1)	審(径3mmの白い粒少し、1mm以下の白い粒を含む)	煎焼	内外面：ロクロナデ、底部外面：手持ちヘラナズリ	底部に沈着した部分あり
122	弥生器	平瓶	8020 M24	SD690	6.9	14.0	-	□16/12 体)11/12 完存	内外：灰白(N6:0)・赤褐色(10R5:4)	審(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	煎焼	内外面：ロクロナデ、底部外面：ロクロヘラナズリ	口縁部削法
123	弥生器	甕	8020 O24	SD690	22.1	42.5	-	6/12	灰白(10YR8:1)	審(径1~7mmの白い粒、青灰色の粒を含む)	軟	内面：ナデ・あて具痕、外面：ナデ、タタキ後ナズリ	
124	土師器	鉢	8020 O24	SD690	19.9	9.0	-	□10/12 体)11/12	灰白(5YR8:2)	やや軟(径1mm以下の白粒を多く、径1~2mmの半透明・黒・茶粒を含む)	良好	内面：ヨコハケ・ヨコナデ、外面：ヨコナデ、能瀬比良、ナデ、ハケ後ヘラナズリ	黒縁あり
125	土師器	甕	8020 O24	SD690	20.6	28.1	-	全体) 11/12	外：黄褐色(10YR8:3)、内：暗灰(N3:0)	審(1~3mmの白・半透明・透明・黒粒を多く含む)	良好	内面：ヨコナデ・ハケ、外面：ハケ・ヨコナデ・ヘラナズリ	内面スチ付着
126	弥生器	平瓶	8020 O24	SD690	-	(11.9)	-	体) 完存	青灰(SD6:1)	審(径3mm以下の白色砂粒を含む)	煎焼	外面：ロクロナデ・ロクロヘラナズリ	ボタン状つまみ2つ、口縁部削法、口縁部・頂部に障灰
127	弥生器	横瓶	8020 O24	SD690	(9.5)	25.8	-	□11/12 体)11/12 完存	灰白(N7:0)	審(径0.5~1mm位の白・黒灰色粒を含む)	煎焼	内面：ナデ・あて具痕、外面：ナデ、タタキ後ナズリ	内面削法
128	土師器	甕A	9020 I10	SD160	(7.9)	(1.2)	-	1/12	にぶい黄褐色(10YR7:2)	審(輪縁部の白・灰色粒を少し含む)	良好	内外面：ナデ、底部外面：口縁部削法	口縁部削法
129	土師器	甕A	9020 H10	SD160	(13.8)	(1.8)	-	4/12	にぶい黄褐色(5YR7:4)~暗灰(5YR7:6)	審(径0.1mm前後の白色砂粒を含む)	良好	内外面：ナデ	口縁部削法に油痕付着
130	土師器	甕A	9020 H10	SD160	(18.7)	2.5	-	3/12	暗(7.5YR6:6)	審(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	良好	内面：1段段削法・縦溝・ナデ・ナデ、外面：ナデ・不調整	黒痕あり

岡田国道跡第3～6次発掘調査報告

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
131	土師器	皿C	9020 H10	SD160	(90)	(14)	-	15/12	にぶい黄褐色(10YR7/2)	裏(径0.5mm位の白色砂粒を少し含む)	良好	内外面：ナデ	口縁部にスス付着
132	土師器	皿C	9020 H10	SD160	109～112	27	-	6/12	浅黄(2.5Y7/3)	裏(雲母含む)	良好	内外面：ナデ、底部外面：節間直	
133	土師器	皿B	9020 H10	SD160	-	11	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/2)	裏(径1mm以下の赤茶色・黒色・白色の粒を少し含む)	良好	内外面：摩滅	
134	土師器	高杯	9020 F10	SD160	-	(89)	105	5/12	浅黄(2.5Y7/4)	裏(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	良好	内面：ナデ、外面：ヘラケズリ・ナデ	面取り11面
135	土師器	壺B	9020 E10	SD160	(130)	(39)	-	15/12	にぶい黄褐色(10YR5/2)	裏(径0.5～1mm位の白色砂粒を多く含む)	良好	内外面：摩滅	
136	土師器	壺B	9020 E10	SD160	(130)	(34)	-	1/12	灰黄(2.5Y7/2)	裏(径0.5mm位の砂粒を含む)	良好	内外面：ナデ	
137	土師器	壺B	9020 D10	SD160	(130)	(54)	-	15/12	灰黄(2.5Y7/2)	裏(径0.5mm位の白・黒灰・灰色の砂粒を含む)	良好	内外面：ナデ、外面：摩滅著しい	
138	土師器	壺B	9020 K10	SD160	76	47	-	11/12	内側：灰白(10YR8/2)、断面：明赤褐色(5YR5/8)	裏(径0.5mm以下の白・黒色砂粒を少し含む)	良好	内面：ナデ・板ナデ、外面：節間直・ナデ	
139	土師器	壺B	9020 H10-11	SD160	125	54	-	7/12	明黄褐色(10YR7/6)、灰白(10YR8/1)	やや磨(径1mm以下の白・半透明・透明・赤黄・黒粒を含む)	良好	内外面：ナデ、外面：節間直	墨書人面
140	土師器	壺	9020 H10	SD160	(101)	(25)	-	1/12	灰白(10YR8/2)、灰黄褐色(10YR5/2)	やや磨(径2mm以下の白黄・白砂粒を含む)	良好	内外面：摩滅	外面に黒灰付
141	土師器	壺	9020 M10	SD160	(140)	(21)	-	15/12	浅黄(2.5Y7/3)	磨(径0.5～1mm位の白・白灰・赤色砂粒を多く含む)	良好	内外面：摩滅	
142	土師器	不明	9020 G10	SD160	長(29)	幅(3)	厚(0.4)	-	浅黄(2.5Y7/4)	磨(径0.5mm位の白・茶色の砂粒を含む)	良好	内面：ハテ	外面に墨書
143	須恵器	杯A	9020 E10	SD160	182	44	-	3/12	灰白(N8/0)	磨(白色砂粒・雲母多く含む)	軟	内面：ロクロナデ・ナデ、外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切り後未調整	粗用破、重ね焼き痕
144	須恵器	杯A	9020 H・H10	SD160	116	51	81	7/12	灰(N6/1)～灰白(N7/0)	磨(径2mmの長石含む)	軟	内面：ナデ(ヘラケズリ)後ヘラミダシ	内面に墨書、粗用破
145	須恵器	杯A	9020 G10	SD160	135	38	97	11/6/12	灰白(7.5Y7/0)	磨(径0.5mm位の白・黒灰色の砂粒を含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ・ナデ、底部：ヘラ切り後未調整	内面に黒漆付着、重ね焼き痕
146	須恵器	杯A	9020 H10	SD160	(152)	32	(109)	11/12以下	灰白(7.5Y8/1)	磨(径1mmの白・黄・灰色の粒、石灰を多く含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り後未調整	口縁部にスス付着
147	須恵器	杯A	9020 E10	SD160	(160)	(30)	(116)	1/12	灰白(7.5Y7/0)	磨(径0.5mm位の砂粒を含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り後未調整	内面に黒漆・障灰
148	須恵器	杯A	9020 F10	SD160	172	42	123	5/12	灰白(5Y8/1)	磨(径1mm以下の灰色粒・2mmの白色粒を含む)	軟	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り後未調整	
149	須恵器	杯A	9020 H10	SD160	-	(23)	(84)	底2/12	灰(N6/0)～灰オリーブ(7.5Y6/2)	磨(径1mm以下の白・黒灰色砂粒を含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り後未調整	
150	須恵器	杯A	9020 M10	SD160	-	(14)	132	底15/12	灰白(7.5Y7/1)	磨(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ、外部：ヘラ切り後未調整	
151	須恵器	杯B	9020 G10	SD160	(138)	47	(103)	11/12以下	灰白(7.5Y7/1)	磨(径0.5～1mm位の白色砂粒を少し含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り後未調整	
152	須恵器	杯B	9020 H10	SD160	(143)	(45)	(106)	2/12	灰(N6/0～N4/0)	磨(径1mm以下の白・黒灰色砂粒を含む)	硬弱	内面：ロクロナデ・ナデ、外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り後未調整	底部に爪状仕肌、重ね焼き痕
153	須恵器	杯B	9020 H・G10	SD160	(156)	44	(110)	11/12	灰(N6/1)	磨(径5mm以下の白色砂粒を少し含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り後未調整	重ね焼き痕
154	須恵器	杯B	9020 H10	SD160	(184)	46	139	1/12	灰白(5Y7/1)	磨(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り後ロクロヘラケズリ	
155	須恵器	杯B	9020 H10	SD160	-	(11)	(130)	底(N5/0～N6/0)	磨(径2mm以下の白・金色・白灰の砂粒を含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ、外部：ロクロヘラケズリ		
156	須恵器	杯B	9020 M・G10	SD160	(159)	(39)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	磨(径1mm以下の白・黒色粒を少し含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り後ロクロナデ	
157	須恵器	杯B	9020 H10	SD160	(159)	(37)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	磨(微細な黒色粒を含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ	
158	須恵器	杯A・杯B	9020 M10	SD160	(120)	(35)	-	15/12	灰(N8/0)	磨(径1mm以下の白・黒色粒を少し含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ	
159	須恵器	杯A・杯B	9020 H10	SD160	(139)	(30)	-	1/12	青灰(5P16/1)	磨(径1.5mm以下の白色粒を少し含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ	スス付着(灯火跡付)
160	須恵器	杯A・杯B	9020 H10	SD160	(138)	(25)	-	1/12以下	灰白(5Y7/1)	磨(径1mm以下の白色砂粒を少し含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ	
161	須恵器	杯A・杯B	9020 H10	SD160	(159)	(39)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	磨(径1mm以下の白色粒・0.5mm以下の黒色粒を含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ	スス付着(灯火跡付)
162	須恵器	杯A・杯B	9020 H10	SD160	(158)	(28)	-	1/12以下	青灰(5P16/1)	磨(径1mm以下の黒色砂粒を少し含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ	
163	須恵器	杯A・杯B	9020 H10	SD160	(162)	(27)	-	1/12以下	灰(N5/0)	磨(径1mm以下の黒灰・白色砂粒を含む)	硬弱	内外面：ロクロナデ	
164	須恵器	皿C	9020 H10	SD160	118	27	-	変形	灰白(7.5Y8/1)	磨(雲母を含む)	軟	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切り後未調整	重ね焼き痕
165	須恵器	皿C	9020 H10	SD160	(134)	(16)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	磨(径1mm以下の灰色の粒・白い粒を含む)	軟	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切り後未調整	重ね焼き痕

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
166	灰器器	皿C	9020 H10	SD160	(18.1)	(21)	-	1/12	灰白(N7/0)~灰(N6/0)	漆(径1mm以下の黒・白色砂粒を少し含む)	縦線	内外面：ロクロナデ、底部外面：へら切り後ナデ	重ね焼き痕
167	灰器器	皿C	9020 H10	SD160	(20.0)	(22)	-	2/12	灰白(7.5Y7/1)	漆(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	縦線	内外面：ロクロナデ、底部外面：へら切り後ナデ	
168	灰器器	皿E	9020 G10	SD160	(12.0)	(21)	-	2.5/12	灰~灰白(N5.0~N6.0~N8.0)	漆(径1mm以下の白・黒色砂粒を含む)	縦線	内外面：ロクロナデ	重ね焼き痕・降灰
169	灰器器	皿B	9020 M10	SD160	(24.6)	4.5	(18.6)	1/12以下	灰白(N7/0)	漆(径1mm以下の白・黒色砂粒を含む)	縦線	内外面：ロクロナデ、底部外面：ロクロヘラナデ、へら切り	
170	灰器器	皿C	9020 J10	SD160	-	(21)	-	1/12以下	灰白(5Y7/1)	漆(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	縦線	内外面：ロクロナデ	
171	灰器器	皿C	9020 H10	SD160	-	(18)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	漆(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	縦線	内外面：ロクロナデ	大雑丸
172	灰器器	杯B	9020 H10	最大径(14.9)	(11)	-	1/12以下	青灰(SD6/1)	漆(径0.5mm以下の黒色砂粒を少し含む)	縦線	内外面：ロクロナデ、底部外面：へら切り		
173	灰器器	杯B	9020 M10	SD160	16.1	3.2	-	7/12	灰白(N8/0)	漆(径2mm位の長石を多く含む)	軟	内外面：ロクロナデ、底部外面：へら切り後ロクロナデ	内面黒色化、灯芯痕、重ね焼き痕
174	灰器器	杯B	9020 H10	SD160	(15.8)	(9.9)	-	1/12以下	灰(N6/0)	漆(径1mm以下の白色砂粒を含む)	縦線	内外面：ロクロナデ	重ね焼き痕
175	灰器器	杯B	9020 H10	SD160	(16.4)	(8.8)	-	1/12以下	灰(N6/0)	漆(径0.5mm以下の白・黒灰色砂粒を少量含む)	縦線	内外面：ロクロナデ	
176	灰器器	皿B	9020 H10	SD160	(21.9)	(2.7)	-	1.5/12	灰(N6/1)	漆(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	縦線	内外面：ロクロナデ、底部外面：へら切り後ロクロヘラナデ、へらミダキ	
177	灰器器	皿B	9020 H10	SD160	(22.9)	(1.8)	-	2/12	灰白(2.5Y7/1)	漆(径0.5~2mm位の白色砂粒を含む)	軟	内外面：ロクロナデ、底部外面：へら切り後ロクロナデ	
178	灰器器	皿B	9020 H10	SD160	(25.5)	(1.2)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	漆(径1mm以下の白・黒色砂粒を少量含む)	縦線	内外面：ロクロナデ、外面へらナデ	
179	灰器器	皿B	9020 M10	SD160	(26.0)	(2.6)	-	2/12	灰白(N7/0)	漆(径0.5mm以下の白色砂粒を少し含む)	縦線	内外面：ロクロナデ後へらミダキ、底部外面：へら切り後ロクロナデ	
180	灰器器	皿	9020 H10	SD160	-	(7.2)	-	-	灰白(N7/0)	漆(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	縦線	内面：黒色化(しぼり痕)、外面：ロクロナデ(しぼり痕)	
181	灰器器	薬C / 鉢D	9020 B10	SD160	-	(5.8)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	漆(径0.5mm位の白色砂粒を少し含む)	縦線	内外面：ロクロナデ	
182	灰器器	皿	9020 J10	SD160	-	(11.4)	(11.7)	1/12	灰白(N7/0)	漆(径0.5mm以下の白・黒色砂粒を含む)	縦線	内外面：ロクロナデ	
183	灰器器	鉢D	9020 H10	SD160	(31.0)	(6.9)	-	1.5/12	灰白(N8/0)	漆(径1mm以下の白・半透明・黒色砂粒を少量含む)	軟	内外面：ロクロナデ(摩滅痕)、内面：ロクロナデ、底部外面：へら切り後ロクロヘラナデ	把手あり
184	灰器器	鉢D	9020 H10・G10	SD160	(30.8)	19.4	(15.8)	1.5/12	灰(N6/0)~灰白(N8/0)	やや粗(径1~3mmの白・半透明・黒色砂粒を含む)	軟	内外面：ロクロナデ(摩滅痕)、内面：ロクロヘラナデ、外部ミダキ	把手あり
185	灰器器	鉢D	9020 M10	SD160	(28.0)	18.5	(14.9)	2/12	灰白(N8/0)	やや粗(径1~3mmの白・半透明・黒色砂粒を含む)	軟	内外面：ロクロナデ、外部ミダキ	把手あり
186	灰器器	薬	9020 H10	SD160	径) 26.4	(14.8)	-	1.5/12	灰(N6/0)	漆(径0.5~2mm位の白色砂粒を含む)	縦線	内面：あて具痕をナデ消す、外面：ロクロナデ、ミダキ	
187	土製品	ミニチュア	9020 F10	SD160	-	(8.0)	(6.1)	15/12	にぶい黄褐色(10YR7/3)	漆(径0.5~1mm位の白・灰色砂粒を含む)	良好	内面：ハケ、外面：ナデ	
188	土製品	ミニチュア	9020 F10	SD160	径) 5.7	幅) 5.8	厚) 0.6	-	にぶい黄褐色(10YR7/2)	漆(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	良好	内外面：ナデ	
189	土製品	ミニチュア	9020 H10	SD160	径) 4.7	幅) 4.6	厚) 0.4	-	明赤褐色(5YR5/6)	漆(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	良好	内面：ハケ、外面：ナデ	
190	灰器器	杯B	9020 E12	SD190	-	(29.5)	(9.8)	底) 2/12	灰白(N7/0)	漆(径1.5mm以下の黒・白色砂粒を含む)	縦線	内外面：ロクロナデ、内面ナデ、底部外面：へら切り後ロクロナデ	
191	灰器器	薬	9020 K12	SD190	径) 8.3	幅) 8.3	厚) 0.7~1.0	-	灰白(N7/0)	やや粗(径1.5mm以下の黒・白色砂粒を多く含む)	縦線	内外面：あて具痕	
192	灰器器	薬	9020 H12	SD190	径) 7.5	幅) 6.0	厚) 0.9	-	外・灰(N6/0)、内：明青灰(SD7/1)	漆(径1mm以下の黒色砂粒を少量含む)	縦線	内外面：あて具痕をナデ消す	
193	土師器	杯B	9010 M9~10	SD165	15.0	3.1	12.0	10/12	にぶい黄(7.5YR7/3)	やや粗(径1.5mm以下の白・赤褐色・黒色砂粒及び3mm位の黒色を含む)	良好	内面：ナデ、ナデ、1段状折縁文、縦線暗文、外面：ナデ、ナデ	灯火着(スズ付)
194	土師器	杯A / 杯B	9010 M14	SD165	(13.6)	(2.1)	-	1/12以下	灰白(2.5Y8/2)	漆(径1mm以下の赤褐色・黒色の粒を含む)	不良	内外面：ナデ	
195	土師器	皿A	9010 M23	SD165	(18.4)	(1.9)	-	1/12	黄赤(2.5Y8/3)	漆(径1mm以下の赤色炭粒を含む)	不良	不明(摩滅)	
196	土師器	皿A	9010 M18	SD165	(21.8)	(1.0)	-	1/12以下	灰白(2.5Y8/2)	漆(径1mm以下の赤褐色を少し含む)	良好	内面：ナデ、1段状折縁文、外面：ナデ	
197	土師器	鉢A	9020 M8	SD165	-	(11.8)	-	1/12	にぶい黄褐色(10YR7/2)	やや粗(径1mm以下の白・赤色砂粒・雲母を含む)	良好	内面：ナデ、エボコヤエ、外面：ミダキ(摩滅)	
198	灰器器	杯B	9010 M16・17	SD165	21.9	6.0	(16.3)	4/12	青灰(SD6/1)	漆(径1~2mmの白色砂粒を少し含む)	縦線	内外面：ロクロナデ、へら切り後ナデ	

岡田国道跡第3～6次発掘調査報告

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
199	灰土器	皿B	9020	SD165	25.2	4.8	(19.4)	4/12	灰白(5YR/1)	赤・石灰・黒色砂粒・雲母を含む	軟	内外面：ロクロナデ、外面：コロヘラケズリ	
200	灰土器	羹C	9010	SD165	-	(3.0)	-	1/12	灰(N6/0)	赤(径3mm以下の白・黒色砂粒・石灰を含む)	硬軟	内外面：ロクロナデ	
201	灰土器	羹	9030	SD165	-	(5.0)	-	-	内：灰白(N7/0)	赤(径2mm以下の白・黒・灰色砂粒を含む)	硬軟	内外面：ロクロナデ、あて具痕をナデ留す	外面に自然植
202	灰土器	羹	9010	SD165	-	(6.0)	-	-	灰(N6/0)	精良	硬軟	内面：あて具痕、外面：タタキ	
203	灰土器	羹	9010	SD165	-	(3.7)	-	-	灰(N5/0)	赤(径15mm以下の黒灰・白色砂粒を含む)	硬軟	内面：あて具痕、外面：タタキ	
204	灰土器	羹	9010	SD165	-	(12.7)	-	-	灰白(N7/0)	やや粗(径4mm以下の白・黒色砂粒を多く含む)	硬軟	内面：あて具痕、外面：タタキ後カキメ	
205	灰土器	羹	9020	SD290	長) 7.0	幅) 5.7	厚) 5.5 ～ 8.0	-	内：灰白(N8/0)、外：青灰(5P18.1)	赤(径0.5mm以下の白・黒色砂粒を含む)	硬軟	内外面：あて具痕をナデ留す、外面：タタキ後カキメ	
206	土師器	羹A	9020	SB 1 SP172・178 抜取	(21.2)	(16.8)	-	3/12	浅黄(25Y7/4)	やや粗(径2mm以下の白・黒・赤色砂粒を少し含む)	不貞	内面：ハケ・ナデ、外面：ナデ・指掘し痕、ココハケ	外面にスス付着
207	灰土器	杯B	9020	SB 1 SP177	(14.0)	4.1	(10.6)	2/12	灰(N6/0)	赤(径1mm以下の白・黒色砂粒を少量含む)	硬軟	内外面：ロクロナデ・ナデ、底部：へう切り後ロクロヘラケズリ	内外面に穴、口縁部内外面にスス付着
208	灰土器	杯B	9020	SP180	(16.5)	(2.5)	-	-	灰白(N7/0)	やや粗(径1.5mm以下の白・黒色砂粒を多く含む)	硬軟	内面：ロクロナデ・ナデ、内面：ロクロナデ・ロクロヘラケズリ	重ね焼き痕
209	灰土器	皿蓋B	9020	SP204	(27.4)	(2.4)	-	3/12	灰白(7.5Y7/1)	赤(径2mm以下の半透明・黒・灰・白色粒・雲母を含む)	硬軟	内面：ナデ・ロクロナデ、外面：ロクロナデケズリ・ロクロナデ	重ね焼き痕
210	灰土器	盤A	9020	SB 1 SP171 抜取	(42.0)	(9.2)	-	2/12	灰(5Y7/1)	やや粗(径4mm以下の白・黒色砂粒・灰色炭粒を含む)	軟	内外面：不明(磨滅)	重ね焼き痕
211	土師器	皿A	9020	SD233	(16.2)	(2.3)	-	15/12	灰白(10Y18/2)	やや粗(径1mm以下の白・半透明・黒・赤色砂粒を少し含む)	不貞	内面：磨滅、外面：指掘し痕・ナデ	
212	灰土器	杯A / 杯B	9020	SB 3 SP216 抜取	(11.0)	(3.8)	-	15/12	灰(N5/0)	赤(径1mm以下の白・黒・灰白色砂粒を含む)	硬軟	内外面：ロクロナデ	
213	灰土器	皿A	9020	SB 3 SP216	(34.8)	(2.3)	-	1/12 以下	灰(N6/0)	赤(径0.5mm以下の白・黒色砂粒を多量に、2mm以下の透明白色粒をまじり含む)	硬軟	内外面：ロクロナデ・ナデ	
214	灰土器	皿A	9020	SD233	(9.5)	(7.3)	-	3/12	灰(N6/0)	赤(径2mm以下の白色砂粒を含む)	硬軟	内外面：ロクロナデ、内面：ナデ	
215	土師器	皿A	9020	SB 4 SP243	(15.0)	(1.7)	-	15/12	にぶい黄褐色(10Y18/2)	赤(径0.5mm以下の白色砂粒を少し含む)	無痕	不明	
216	灰土器	杯A	9020	SB 4 SP220	(13.9)	(4.0)	-	1/12 以下	灰白(7.5Y7/1)	赤(径0.5mm以下の黒・灰・白色砂粒を含む)	軟	内面：磨滅、底部：へう切り後指掘し	
217	灰土器	杯B	9020	SB 4 SP220	(13.0)	4.1	(9.4)	1/12 以下	灰白(N7/0)	赤(径1mm以下の白・黒色砂粒を少量含む)	硬軟	内外面：ロクロナデ	内外面に磨滅痕
218	灰土器	杯B	9020	SD251	(14.7)	(1.7)	-	2/12	灰白(5Y7/1)	赤(径1mm以下の白・黒色砂粒を含む)	硬軟	内面：ロクロナデ・ナデ、外面：ロクロナデ・へう切り後ロクロナデ	
219	土師器	杯C	9020	SB 5 SP289 抜取	-	(2.0)	-	1/12 以下	浅黄褐色(10Y18/4)	赤・微細な黒色砂粒・赤色炭粒を含む	良好	内外面：ナデか	
220	土師器	皿A	9020	SB 5 SP455 抜取	(18.0)	(1.7)	-	1/12 以下	浅黄褐色(10Y18/2)	赤(径1mm以下の白色砂粒・石灰を含む)	良好	内面：ナデ、外面：ケズリ	
221	土師器	皿A	9020	SB 5 SP465 抜取	(17.0)	(1.9)	-	1/12 以下	内：明褐色(7.5YR7/2)、外：淡赤褐色(2.5YR7/4)	赤(径1mm以下の赤褐色砂粒を含む)	良好	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ	
222	土師器	皿A	9020	SB 5 SP267	-	(2.4)	-	-	にぶい黄褐色(10Y18/3)	赤(径1mm以下の白・灰色砂粒を含む)	良好	内外面：ナデ、外面：ケズリ	口縁端部に沈着
223	土師器	皿A	9020	SB 5 SP288 抜取	-	(1.6)	-	-	内：暗灰(N3/0)、外：にぶい黄褐色(2.5Y6/4)	赤(径0.1mm以下の白色砂粒を少量含む)	良好	内面：1段放射線文、外面：不明(刻線書込み)	内面磨化
224	土師器	鉢B / 鉢C	9020	SB 3 SP296	(24.0)	(5.3)	-	1/12 以下	明黄褐色(10Y18/6)	赤(径1mm以下の白・灰色砂粒を含む)	良好	内外面：ヨコナデ、外面：へうケズリ	外面にスス付着、内面黒垢
225	土師器	羹B	9020	SB 5 SP296 抜取	(11.2)	(3.3)	-	1/12	浅黄褐色(10Y18/4)	赤(径1mm以下の赤・黒色砂粒・雲母を含む)	良好	内外面：ナデ	外面一部に磨滅か
226	土師器	羹	9020	SB 5 SP265 抜取	-	(3.5)	-	-	浅黄褐色(10Y18/2)	赤(径2mm以下の灰白・赤・褐色砂粒を多く含む)	良好	内外面：ナデ・ハケ	外面にスス付着
227	灰土器	杯C	9020	SB 5 SP455	(13.0)	(3.5)	-	1/12	灰白(N7/0)	赤(径2mm以下の白・黒色砂粒を含む)	硬軟	内面：ロクロナデ、外面：ロクロナデ、底部：へう切り後ロクロヘラケズリ	外面に磨滅痕
228	灰土器	杯C	9020	SB 5 SP298	-	(4.0)	-	1/12 以下	灰白(5Y7/1)	赤(径1mm以下の灰・白色砂粒を含む)	軟	内外面：ヨコナデ	
229	灰土器	杯A / 杯B	9020	SB 5 SP263 抜取	(14.0)	(3.0)	-	1/12	灰白(7.5Y7/1)	赤(径1mm以下の白・黒色砂粒を含む)	硬軟	内外面：ロクロナデ	重ね焼き痕
230	灰土器	杯A / 杯B	9020	SB 5 SP270	(12.4)	(2.8)	-	1/12 以下	黄灰(2.5Y4/1)、灰白(5Y7/1)	赤(径1mm以下の白・黒色砂粒を含む)	硬軟	内外面：ロクロナデ	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
231	須恵器	杯A	9020	SB 5 SP263	(199)	(4.2)	-	1/12	灰(N5/0)	薬(径3mm以下の白・半透明・黒色粒を含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ	外面に一部緑灰が付着
232	須恵器	杯A / 杯B	9020	SB 5 SP266	(193)	(3.7)	-	15/12	灰(N6/0)	薬(径1mm以下の白・黒色粒を含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ	外面に一部緑灰が付着
233	須恵器	杯B / 黒B	9020	SB 5 SP265	-	(1.9)	(18.2)	1/12以下	灰白(N5/8-1)	内: 径1mm以下の黒・白色粒を多く含む	軟	内外面: ロクロナデ, 外面ナデ	
234	須恵器	黒C	9020	SB 5 SP457	(220)	(2.1)	-	1/12以下	灰(N6/0)	薬(径3mmの白色粒, 1mm以下の白・黒色砂粒を含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ, ヘラミガキか, 外面: ロクロナデ	
235	須恵器	杯B	9020	SB 5 SP269	(14.7)	(1.4)	-	1/12以下	灰(N6/0)~灰白(N7/0)	薬(径1mm以下の白色粒を多く含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ, ロクロナズリ後ナデ, ヘラ切り後ナデ	重ね焼き痕・緑灰
236	須恵器	美C	9020	SB 5 SP264	(33.6)	(8.3)	-	1/12以下	浅黄(25Y7/3)	やや粗(径3mmのチャート・1mm以下の灰・褐色砂粒を含む)	軟	内外面: ロクロナデ, 外面ナデ	
237	須恵器	美	9020	SB 5 SP309 採取	-	(11.1)	-	-	内: 灰白(N8/0), 外: 灰白(N5/0)	薬(径1mm以下の黒・白色粒を多く, 6mm大白色粒をまれに含む)	窯焼	内面: 煮て具焼をナデ附す, 外面: ナタキ	
238	須恵器	杯A	9020	SB 6 SP259	-	(2.8)	-	1/12	灰(N6/0)	薬(径1mm以下の白・黒色砂粒を含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ	重ね焼き痕・緑灰
239	須恵器	黒A	9020	SB 6 SP263	(20.0)	(3.0)	-	2/12	内: 灰(N6/0), 外: 灰(N6/0~N5/0)	薬(径1mm以下の白・黒色砂粒を含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ, ヘラ切り後ロクロナズリ	重ね焼き痕
240	土師器	黒A	9020	SB 7 SP25 採取	(15.6)	(2.1)	-	1/12	浅黄(25Y7/4)~明黄(10YR7/6)	薬(径1mm以下の黒色粒, 0.5mm以下の白色粒を少し含む)	良好	内面: ナデ・ヨコナデ・1段後削文, 外面: ヨコナデ・ケズリ, エビヤサエ, ミガキか	
241	土師器	黒A	9020	SB 7 SP25 採取	(17.9)	(2.2)	-	1/12	いぶ・黄(10YR7/3)	薬(径0.5mm以下の白色粒を少し含む)	良好	不明(摩滅)	
242	土師器	黒A	9020	SB 7 SP25 採取	(18.0)	(2.6)	-	1/12以下	いぶ・黄(7.5YR7/4)	薬(径0.5mm以下の半透明・茶色粒・雲母を含む)	良好	不明(摩滅)	
243	須恵器	杯A	9020	SB 7 SP26	(15.0)	(4.5)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	薬(径1mm以下の白色粒, 0.5mm以下の灰色粒を含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ	
244	須恵器	杯B	9020	SB 7 SP22 採取	(14.0)	(3.5)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	薬(径1mm以下の白色粒, 0.5mm以下の灰色粒を含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ	
245	須恵器	杯A	9020	SB 7 SP25	(13.0)	(1.9)	-	2/12	灰白(N7/0)	薬(径1mm以下の白色砂粒を少量含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ, 外面ヘラ切り後未調整	
246	須恵器	杯A	9020	SB 7 SP29	-	(1.8)	(34.1)	縦3/12	灰白(25Y8/1)	薬(径0.5mm以下の灰・黒色粒を含む)	軟	内面: ロクロナデ・ナデ, 外面: ロクロナデ・ヘラ切り後未調整	
247	須恵器	杯B	9020	SB 7 SP29 採取	-	(1.2)	(30.0)	縦1/12	灰白(N7/0)	薬(径0.5mm以下の灰色粒を少し含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ, 外面ヘラ切り	
248	須恵器	杯B	9020	SB 7 SP27	-	(2.1)	-	1/12以下	灰白(25Y7/1)	薬(径0.5mm以下の灰色粒を少し含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ	口縁部に内注溝
249	須恵器	杯B	9020	SB 7 SP19 採取	(14.4)	(1.4)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	薬(径0.5mm以下の白・黒色粒を含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ, 外面ヘラ切り	
250	須恵器	美	9020	SB 7 SP29	径 48	幅 67	厚 0.9	-	内: 灰白(25Y7/1), 外: 灰(N4/0)	薬(径1mm以下の長石を少量含む)	窯焼	内面: 煮て具焼, 外面: ナタキ	
251	須恵器	美	9020	SB 7 SP29	径 55	幅 55	厚 0.7	-	内: 灰白(25Y7/1), 外: 灰(N6/0)	薬(径2mm以下の長石を少量含む)	窯焼	内面: 煮て具焼, 外面: ナタキ	
252	須恵器	平鉢	9020	SB17 SP252	径大 232	(15.8)	-	3/12	灰白(N8/0)	薬(径2mm以下の長石少量を含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ	体部外面に注溝・内面 削文
253	須恵器	美	9020	SB17 SP221	径 18.5	幅 140	厚 1.3~1.7	-	灰(N6/0)	薬(径3mm以下の白・黒色砂粒を多く含む)	内面: 煮て具焼, 外面: ナタキ後未調整		
254	土師器	杯C	8020	SB13 SP773	(13.2)	(2.1)	-	1/12以下	いぶ・黄(7.5YR7/4)	薬(径0.5~1mm位の白・白灰・灰色砂粒を多く含む, 雲母・紅塵あり)	良好	内外面: ナデ・ヨコナデ, 内面: 1段後削文	
255	土師器	黒A	8020	SB13 SP705 採取	(1.40)	(2.7)	-	15/12	いぶ・黄(10YR7/4)	薬(径0.5mm位の黒色砂粒を含む)	良好	内外面: ヨコナデ	
256	土師器	黒A	8020	SB13 SP773	(15.0)	(2.1)	-	1/12以下	灰(7.5YR8/6)	薬(径1mm以下の白・茶色粒粒を含む)	良好	内外面: ヨコナデ・削文, 外面: ナデ	内面にスス(灯火部)
257	土師器	黒A	8020	SB13 SP703 採取	(16.0)	(1.8)	-	1/12	灰(7.5YR5/2)	薬(径2mm以下の白・黒色砂粒・石炭を多く含む)	良好	内面: 摩滅, 外面: ナデ・ミガキ・ケズリ	
258	土師器	黒C	8020	SB13 SP773	(9.0)	(2.2)	-	2/12	灰(7.5YR7/6)	薬(径1mm以下の赤色粒粒を含む)	良好	内外面: ナデ	口縁部に溝(灯火部)
259	土師器	黒C	8020	SB13 SP773	(12.0)	3.8	-	2/12	浅黄(25Y8/3)	薬(径1mm以下の長石・チャート・赤色粒を含む)	良好	内面: ナデ, 外面: ナデ・削文・紅塵	
260	須恵器	杯A	8020	SB13 SP773	(11.2)	3.9	7.7	(11)/12以下, 縦 6/12	灰(N6/0)	薬(径1mm以下の黒色粒粒を多く含む)	窯焼	内面: ロクロナデ・ナデ, 外面: ロクロナデ・ヘラ切り後ナデ	
261	須恵器	杯A	8020	SB13 SP773	(16.2)	2.8	-	2/12	灰白(25Y7/1)	薬(微細な長石・石英, まれに径3mm大の砂粒を含む)	窯焼	内外面: 摩滅, 外面: ヘラ切り後未調整	内面にスス(灯火部)
262	須恵器	杯B	8020	SB13 SP704 採取	13.0	4.0	(4.0)	縦1/12	灰(N6/0)	薬(径1mm以下の白・灰色砂粒・石英を含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
263	黒土器	杯B	8030	SB13 SP705 裏面	-	(1.0)	(12.2)	底:2/12	灰(N6-0)	壁厚2mm以下の黒・白・石灰砂粒を含む。	縦線	内外面:ロクロナデ。外面へつ切り後半調整	
264	黒土器	杯C	8030	SB13 SP773	(18.2)	3.7	-	2/12	白灰(25YR8/1)	壁厚1mm以下の長石・ナデ・土を少量含む。	横線	内外面:ロクロナデ。外面へつ切り後半調整	重ね焼き痕
265	黒土器	杯A / 杯B	8030 S25	SB13 SP773	(16.0)	(3.2)	-	1/12	灰白(5Y7/7)	壁厚(0.5mm位の白・黒灰色砂粒を含む)	縦線	内外面:ロクロナデ	
266	黒土器	杯A / 杯B	8030 S25	SB13 SP773	-	(1.8)	-	1/12 以下	灰白(5Y8/7)	壁厚1mm以下の黒灰色砂粒。0.5mm以下の白色砂粒を含む。	横線	内外面:ロクロナデ	
267	黒土器	杯A / 杯B	8030 T24	SB13 SP705 裏面	-	(2.7)	-	1/12 以下	灰(N5-0)	壁厚1mm以下の白・灰色砂粒を含む。	縦線	内外面:ロクロナデ	重ね焼き痕・ 陥凹
268	黒土器	杯B	8030	SB13 SP773	(14.8)	(1.0)	-	3/12	灰白(7.5Y7/1)	壁厚1mm以下の白・黒色砂粒を含む。	縦線	内外面:ロクロナデ。外面へつ切り後半調整	
269	黒土器	杯B	8030	SB13 SP773	(15.8)	(2.0)	-	1/12 以下	90白(N7/0)	壁厚(0.5mm位の白・黒灰色砂粒を含む)	縦線	内外面:ロクロナデ。外面へつ切り後半調整	
270	黒土器	杯B	8030	SB13 SP773	(17.2)	(1.1)	-	1.5/12	灰白(7.5Y7/1)	壁厚(0.5mm位の白色砂粒を含む)	横線	内外面:ロクロナデ。外面へつ切り後半調整	
271	黒土器	杯B	8030	SB13 SP773	(25.8)	(2.6)	-	1/12	灰白(5Y8/7)	壁厚(0.5mm位の白・黒灰色砂粒・雲母を含む)	横線	内外面:ロクロナデ。外面へつ切り(全体厚減)	
272	黒土器	盤A	8030	SB13 SP706	-	(5.9)	(22.2)	1/12	灰(N8-0)	壁厚(3mm以下の白・黒色砂粒・石灰を多く含む)	縦線	内外面:ロクロナデ。外面へつ切り。クロコヘラズリ	
273	黒土器	杯	8030	SB13 SP773	(21.6)	(3.1)	-	2/12	内:にぶい黄緑(10YR7/3)・外:陥凹(N3-0)	壁厚1mm以下の長石・赤色炭粒・白雲母を含む。	良好	内面:ナデ後へつ切り。外面:へつ切り後へつ切り	内照
274	製土器	製土器	8030	SB13 SP773	(13.0)	(4.7)	-	1.5/12	内外:橙(7.5YR7/6)・断面(5Y4/1)	やや粗(厚0.5～1mm位の白・黒灰色砂粒を多く含む)・赤雲母あり	良好	内面:ナデ。外面:ナデ・削面直	
275	製土器	製土器	8030	SB13 SP773	(7.0)	(3.5)	-	2/12	内:赤紫(2.5YR4-8)・外照:明赤黒(5YR5-6)	やや粗(厚3mm以下の白・黒色砂粒・石灰を多く含む)	良好	内外面:不調整	
276	製土器	製土器	8030	SB13 SP773	(19.8)	(4.0)	-	1/12	橙(5YR6-6)	壁厚5mm以下の長石を多く含む。	良好	内外面:ヨコナデ	
277	土師器	杯C	8030	T25	SP774	-	(2.9)	-	橙(7.5YR6-6)	壁厚(0.5mm位の黒灰色砂粒・雲母・紅雲母を含む)	良好	内外面:ナデ	
278	土師器	杯 / 皿	8030	T25	SP774	-	(3.0)	-	1/12 以下	にぶい黄緑(10YR7/3)・陥凹(10YR4/1)	良好	内外面:ヨコナデ	
279	土師器	杯 / 皿	8030	T25	SP774	-	(2.0)	-	1/12 以下	にぶい黄緑(10YR7/4)	良好	内外面:ヨコナデ。内面:厚減	
280	土師器	鉢A	8030	T25	SP774	-	(2.4)	-	1/12 以下	にぶい黄緑(7.5YR7/4)	良好	内外面:ヨコナデ。外面:へつ切り・ユビオサエ	
281	黒土器	杯A / 杯B	8030	T25	SP774	-	(3.3)	-	1/12 以下	灰(7.5Y6/1)	縦線	内外面:ロクロナデ	
282	黒土器	杯B	8030	T25	SP774	(14.0)	(2.1)	-	2/12	灰(N5-0)	縦線	内面:ロクロナデ・ナデ。外面:へつ切り後ロクロナデ	
283	黒土器	皿	8030	T25	SP774	-	(2.7)	(8.8)	2.5/12	灰(N6/7)	縦線	内面:ロクロナデ。外面:ロクロヘラズリ・へつ切り後未調整	
284	黒土器	鉢A	8030	T25	SP774	-	(2.3)	-	1/12 以下	灰(N6-0)	縦線	内外面:ロクロナデ	
285	製土器	製土器	8030	T25	SP774	-	(2.2)	-	-	明赤黒(5YR5-6)	良好	内外面:不調整・ナデ	
286	製土器	製土器	8030	T25	SP774	(8.0)	(5.9)	-	1/12	内:にぶい黄(10YR7/4)・外:明赤黒(2.5YR5-6)・にぶい黄(7.5YR7/3)	良好	内外面:不調整(削面直)	
287	黒土器	杯A / 杯B	8030	SB14 SP611	(10.0)	(2.3)	-	1/12	灰(N6-0)	壁厚(0.5mm以下の白・黒灰色砂粒を含む)	縦線	内外面:ロクロナデ	
288	黒土器	皿B	8030	SB14 SP619 表取	-	(2.7)	(22.1)	底:2/12	内:灰(N6-0)・外:灰白(7.5Y7/1)	壁厚1～3mmの白色砂粒を含む。	横線	内外面:ロクロナデ。外面へつ切り後半調整	
289	黒土器	杯B	8030	SB14 SP611	(11.0)	(9.5)	-	1/12 以下	灰(N4-0)	壁厚1～2.5mm以下の黒灰・白色砂粒を含む。	縦線	内外面:ロクロナデ	
290	黒土器	羹C	8030	SB14 SP611 表取	-	(4.8)	-	1/12 以下	灰(N6-0)	壁厚1mm以下の白・黒灰色砂粒を含む。	縦線	内外面:ロクロナデ	
291	製土器	製土器	8030	SB14 SP723	-	(2.6)	-	-	-	にぶい黄(7.5Y5/4)	縦線	内面:春日皿。外面:ナデ	器造り
292	土師器	杯A	9030	SE152 第5壺	14.8	2.8	-	2/12	黄(2.5Y8-8)	壁厚(6mm程度の砂粒を含む)	良好	内面:ナデ後1段削切・ + 縦線削切。外面:ナデ・ ユビオサエ	灯台型に転用
293	土師器	杯C	9030	SE152 第5壺	-	(1.7)	-	1/12 以下	浅黄橙(10YR8-8)	壁厚(0.5mm以下の薄茶色の砂粒を少し含む)	良好	内外面:ヨコナデ・ナデ(外 面は厚減)	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
294	土師器	高杯	9030 J3	SE152 第5層	-	(21)	-	-	浅黄青 (10YR8/2) に赤・黒 (7.5YR6/3)	密(径0.5mm以下の黒色粒を少し含む)	良好	内面: 1段放射縞文・横線縞文。外面: ナデ後ヘラケズリ	外面に黒灰
295	土師器	甕	9030 J3	SE152 第5層	(16.0)	(29)	-	1.5/12	こげ・黄 (2.5Y6/4)	密(径3mm以下の半透明・白色砂粒・雲母を含む)	良好	内面: ココナデ・ナデ。外面: ココナデ・ハケか	外面にスス
296	須恵器	杯-B	9020 J3	SE152 第5層	14.2	4.8	10.2	10.5/12	灰(N6/0)	密(径1mm以下の白・黒灰色砂粒を含む)	磨製	内面: ココナデ・ナデ。外面: ヘラ切り後ロコナデ	磨製(縁上)。口縁部を打ち欠く
297	須恵器	杯-B	9020 J3	SE152 第5層	14.4	5.2	9.7	10.4/定存	灰(N5/0)	密(径1.5~2mmの白色砂粒をわずかに含む)	磨製	内面: ロコナデ・ナデ。外面: ヘラ切り後ロコナデ	口縁部を打ち欠く
298	須恵器	杯-B	9030 J3	SE152 第1層	(16.8)	(1.3)	-	1/12 以下	灰(N6/0)	密(径0.5mm以下の白・黒色の粒を少し含む)	磨製	内面: ロコナデ・ナデ。外面: ロコナデ・ヘラ切。口縁部ナデ	内面に降灰・重ね焼き痕
299	須恵器	皿A	9030 J3	SE152 第2・5層	12.8	2.8	-	5/12	灰(N7/0)	密(径0.5mm位の白・灰色の粒を含む)	磨製	内外面: ロコナデ。外面: ヘラ切り	打火跡か
300	須恵器	高杯	9030 J3	SE152 第5層	-	(12.8)	-	脚) 12/12	灰白 (10YR7/1)	密(径1.5mm前後の白・半透明砂粒をわずかに含む)	靴	磨製内外面: ロコナデ(しぼり肌)。外面: 透明色砂粒を多く含む	
301	土師器	杯-C	9030 B17・18	SE540 第14層	-	(1.5)	-	1/12	浅黄緑 (10YR8/2)	密(径1mm以下の白・黒色砂粒。石英・雲母を含む)	良好	内面: 1段放射縞文	
302	須恵器	杯-A	9020 B17・18	SE540 第14層	(17.4)	(3.5)	-	11/12 以下	灰白(N7/0)	密(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	磨製	内外面: ロコナデ。外面: ヘラ切り後ロコナデ	
303	須恵器	高杯	9020 B17・18	SE540 第14層	脚) 5.25	(27)	-	脚部定存	灰(N5/0)	やや粗(径6mm以下の白色砂粒をわずかに、3mm以下の白色砂粒を多く含む)	磨製	磨製内外面: ロコナデ。外面: ナデ	
304	須恵器	杯/皿	9030 B17・18	SE540 第14層	長) 2.8 幅) 4.7	厚) 4.7	-	-	灰(N6/0)	密(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	磨製	内面: ロコナデ後ナデ。外面: ロコナデ	転印模
305	須恵器	杯-A	9030 B17・18	SE540 第15層	(13.6)	(3.7)	9.7	1/12 以下	灰(N6/0)	やや密(径2mm以下の白色砂粒を含む)	磨製	内外面: ロコナデ。底部: ヘラ切り	内面に重ね焼き痕
306	須恵器	甕	9030 B17・18	SE540 第15層	-	(4.0)	-	-	灰白(5Y7/2)	密(径1.5mm以下の白色砂粒を含む)	磨製	内面: あて具肌。外面: ナデ	
307	須恵器	甕	9030 B17・18	SE540 第13層	最大径) 29.0	(14.5)	-	-	内: 灰黄 (2.5Y7/2)	密(径4mm以下の白・黒色の砂粒・石英を含む)	磨製	内外面: ロコナデ。外面: ロコナデ後ナデ。口縁部: 粗	外面に沈灰・口縁部ナデ・自然焼成
308	土師器	甕A	9030 B17・18	SE540 第2層	13.8	(6.9)	-	2/12	灰白 (10YR8/2)	やや粗(径2mm以下の長石を多く含む)	靴	内面: 指掘肌。外面: ナデ・ハケ	外面に焼灰あり
309	須恵器	杯/皿	9030 B17・18	SE540 第2層	(15.9)	(2.9)	-	1/12	灰白(5Y8/1)	やや密(径4mm以下の白色砂粒を少し含む)	磨製	内外面: ロコナデ	
310	須恵器	杯-A	9030 B17・18	SE540 第2層	-	(21)	9.7	脚) 4/12	灰(10Y6/1)	やや密(径1mm以下の白・黒色細粒を少量含む)	磨製	内外面: ロコナデ。外面: ロコナデ後ナデ。口縁部: 粗	外面に沈灰・口縁部ナデ
311	須恵器	杯-B	9030 B17・18	SE540 第2層	-	(11)	-	1/12 以下	灰白(7.5Y7/1)	密(径0.5mm位の白色砂粒を含む)	靴	内外面: ロコナデ	
312	須恵器	甕	9030B17・18	SE540 第2層	-	(6.3)	-	-	灰(N7/0)	密(径2mm以下の灰色粒。0.5mm以下の白色粒を含む)	磨製	内面: あて具肌。外面: ナデ	
313	土師器	鉢-B	9030 B17・18	SE540 第6層	(17.8)	3.3	-	2.5/12	こげ・黄緑 (10YR7/4)	密(径0.5mm位の白・黒灰色砂粒を含む)	良好	内外面: ナデ	
314	土師器	杯-E	9030 B17・18	SE540 第6層	(19.4)	(2.9)	-	3/12	灰黄(2.5Y7/2)	密(径2mm以下の長石・雲母を含む)	不貞	内外面: ヘラケズリ後ナデ	
315	須恵器	杯-B	9030 B17・18	SE540 第6層	(11.0)	(4.1)	7.7	11/12 以下、底) 4/12	灰(N6/0)	密(径1.5mm位の白色砂粒を含む)	磨製	内外面: ロコナデ。底部: 外面: ヘラ切り(爪状痕あり)	
316	須恵器	杯-B	9030 B17・18	SE540 第6層	-	(2.0)	(6.7)	底) 1.5/12	灰(N6/0)	密(径0.5mm位の白色粒を少し含む)	磨製	内外面: ロコナデ	重ね焼き痕
317	須恵器	杯-B	9030 B17・18	SE540 第6層	(20.8)	(6.6)	-	4.5/12	灰白(2.5Y7/1)	密(径1mm以下の灰色粒。0.5mm位の白色粒を含む)	磨製	内外面: ロコナデ。外面: ロコナデ後ナデ	口縁部外面に沈灰
318	須恵器	皿A	9030 B17・18	SE540 第6層	(15.2)	(2.4)	-	2/12	内: 灰白(N7/0)。外: 灰(N5/0)	密(径1mm以下の長石含む・鉄分溶解有)	磨製	内外面: ロコナデ	
319	須恵器	杯/皿	9030 B17・18	SE540 第6層	-	(3.0)	-	1/12	灰白(5Y8/1)	密(径1mm位の白濁色砂粒を含む)	磨製	内外面: ロコナデ	
320	須恵器	杯/皿	9030 B17・18	SE540 第6層	-	(3.8)	-	1/12	灰白(5Y7/1)	密(径1mm位の白・黒灰色砂粒を含む)	磨製	内外面: ロコナデ	
321	須恵器	甕A	9020 B17・18	SE540 第6層	-	(10.4)	11.5	体) 5/12	内外: 灰(N6/1~N4/0)。脚: 灰(N6/1)	密(径2mm以下の白・黒色砂粒を多く含む)	磨製	内外面: ロコナデ。底部: ロコナデ	外面自然焼
322	須恵器	甕	9030 B17・18	SE540 第6層	(24.8)	(11.5)	-	11/12 以下、脚) 6/12	灰白(N7/0)	密(径2.5~3mm以下の長石多く。黒色粒を含む)	内面: 内面: ロコナデ。あて具肌。外面: ロコナデ・ナデ	全面に降灰。口縁部外面に爪状痕。内外面に鉄分付着	
323	須恵器	甕	9030 B17・18	SE540 第6層	(38.0)	(5.3)	-	1/12以下	灰(N6/0)	密(径1mm以下の白・黒色砂粒・石英を含む)	磨製	内外面: ロコナデ	
324	須恵器	甕	9030 B17・18	SE540 第6層	-	(9.3)	-	-	内: 青灰(5Y9/1)。外: 降灰(10YR5/1)	やや粗(径5mm以下の白・黒色砂粒を多量に含む)	磨製	内面: あて具肌をナデ滑す。外面: ロコナデ・ナデ	外面に降灰
325	須恵器	甕C	9030 B17・18	SE540 第6層	36.0	(18.6)	-	8/12	灰白(5Y7/1)	密(径2mm以下の白・黒灰色の砂粒を含む)	磨製	内面: あて具肌。工具痕。外面: ナデ	

岡田国遺跡第3～6次発掘調査報告

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
326	土師器	皿A	900	SE540 B17・18 第7層	長 10.0	幅 128	厚 0.6	-	明黄褐色 (10YR6-6)	素(径2mm以下の長石・雲母を含む)	良好	内面: 輪軸施文, 外面: ナデ	底部にハリ(打)跡あり。内面にスス(打火跡に利用か)
327	土師器	皿C	900	SE540 B17・18 第8層	11.5	2.2	-	9/12	にぶい黄褐色 (2.5YR6-3)	素(雲母を含む)	良好	内外面: ココナデ, 外面: 指摺施文	
328	土師器	皿C	900	SE540 B17・18 第9層	11.6	2.2	-	完形	黄褐色(2.5Y5-3)	素(雲母多く含む)	不良	内外面: ナデ, 指摺施文	
329	土師器	盃B	900	SE540 B17・18 第9層	9.0	5.8	-	完形	にぶい黄褐色 (10YR7-3)	素(径1mm以下の白・黒色砂粒を少量、雲母を多く含む)	良好	内面: ナデ, 外面: ナデ・指摺施文	
330	土師器	盃B	900	SE540 B17・18 第7層	11.8	6.1	-	□4/12, 5/16/12	黄褐色(2.5Y8-3)	素(径2mm以下の長石・雲母を含む)	硬	内面: ナデ, 外面: ナデ・指摺施文	黒染あり、黒染りか
331	土師器	杯A	900	SE540 B17・18 第7層	14.3	4.0	-	ほぼ完形	灰白(2.5Y 8-1)	素(径1.5mm以下の白・黒・灰色砂粒を含む)	軟	内外面: ロクロナデ,	重ね焼き
332	土師器	杯A	900	SE540 B17・18 第7層	17.2	3.6	-	6/12	灰(5Y6-1)	素(径2mm以下の黒色砂粒・長石を含む)	硬軟	内外面: ロクロナデ, 内面: ナデ, 底部: ハウ切り後未調整	重ね焼き
333	土師器	杯A	900	SE540 B17・18 第7層	16.6	3.7	-	ほぼ完形	灰白(N8-0)	素(径3mmの砂粒・雲母多く含む)	軟	内外面: ロクロナデ, 内面: ナデ, 底部: ハウ切り後未調整	重ね焼き
334	土師器	杯B	900	SE540 B17・18 第7層	-	(1.8)	-	-	灰(N6-0)	素(径2.5mm以下の白濁・白色砂粒を含む)	硬軟	内外面: ナデ	
335	土師器	皿E	900	SE540 B17・18 第7層	10.6	3.9	-	完形	灰白(5Y7-1)	素(径0.5mm以下の灰・白色粒を少し含む)	軟	内面: ロクロナデ後ナデ, 外面: ロクロナデ・底部: ハウ切り	灯火器(底部に油種・白磁粒にスス付着)
336	土師器	高杯	900	SE540 B17・18 第7層	-	(12.2)	33.5	底/6/12	灰白(2.5Y 8-1)	素(径3mm以下の白・黒色砂粒を多く含む)	硬軟	脚部内面: ロクロナデ(仕上げ肌), 外面: ロクロナデ・外口スリ・ロクロナデ, 杯底内面: ナデ	
337	土師器	高杯	900	SE540 B17・18 第7層	-	(11.2)	-	-	灰(N6-0)	素(径0.5mm以下の黒色粒を含む, 径0.5mm以下の白色粒を多く含む)	硬軟	脚部内面: 不調整(仕上げ肌), 外面: ロクロナデ, 杯底内面: ナデ	
338	土師器	盃	900	SE540 B17・18 第7層	器 5.2	(7.3)	-	-	灰白(2.5Y7-1)	素(径0.5mm以下の白・黒灰色の砂粒を含む)	硬軟	内面: 不調整(仕上げ肌), 外面: ロクロナデ	
339	土師器	盃K	900	SE540 B17・18 第7層	6.0	(11.2)	-	12/12	内面: 灰(N 6-1)N5-0, 脚: 灰赤(10R5-2)	素(径1mm以下の白色砂粒を含む)	硬軟	内外面: ロクロナデ	内外面に黒染
340	土師器	盃	900	SE540 B17・18 第7層	器 16.0	(3.3)	-	器 1.5/12	灰(N6-0)	素(径0.5～1mm程度の白色砂粒を含む)	内面: 良好, 外面: ロクロナデ・タタキ後カキ		
341	土師器	盃	900	SE540 B17・18 第7層	-	(5.9)	-	-	内外: 灰白(N 8-0), 脚底 (7.5YR6-1), 脚: 灰白(7.5YR6-3)	素(径1mm以下の白・黒色の粒を含む)	硬軟	内面: あて具肌, 外面: タタキ	外面に自然釉
342	土師器	盃	900	SE540 B17・18 第7層	-	(5.1)	-	-	灰(N6-0)	素(径1mm以下の黒・白色砂粒を少し含む)	硬軟	内面: あて具肌をナデ消す, 外面: タタキ	
343	土師器	盃	900	SE540 B17・18 第12層	-	(4.1)	-	-	灰白(N7-0)	素(径1mm以下の白色砂粒を少し含む)	硬軟	内面: あて具肌, 外面: タタキ	
344	土製品	土管	900	SE540 B17・18 第12層	(24.5)	(10.0)	-	1/12 以下	外: 黄 (2.5YR6-6), 内: にぶい黄褐色 (10YR6-3)	素(径2mm以下の砂粒を含む)	良好	内面: 敷ナデ・ナデ, 外面: タタキ後ロクロナデ	スス付着
345	土師器	盃B	900	SE540 B17・18 第9層	27.5	26.7	-	6/12	黄褐色(2.5Y7-2)	素(径1.5mm程度の白・灰・赤茶色の砂粒を含む)	良好	内面: 敷ナデ・ハタ, 外面: ハタ後ナデ	把手あり、内外面にスス付着
346	土師器	盃	900	SE540 B17・18 第10層	(36.0)	(9.2)	-	1.5/12	灰(N6-0)	素(径0.5mm程度の白色砂粒を含む)	硬軟	内外面: ロクロナデ	内面に黒色物質付着
347	土師器	盃	900	SE540 B17・18 第10層	-	(11.4)	-	-	明青灰 (5Y9Z-1)	素(径1.5mm以下の白色砂粒を少し含む)	硬軟	内面: あて具肌, 外面: タタキ後カキ	
348	土師器	盃	900	SE540 B17・18 第10層	-	(13.5)	-	-	灰白(2.5Y7-1)	素(径2mm以下の長石・黒色砂粒を含む)	硬軟	内面: 指摺施文, 外面: タタキ後カキ	
349	土師器	盃	900	SE540 B17・18 第10層	長 7.8	幅 13.0	厚 0.65	-	灰(N6-0)	素(径0.5mm程度の白色砂粒を含む)	硬軟	内面: あて具肌, 外面: タタキ	転用説
350	土師器	杯/土師	900	SE540 B17・18 第13層(歳下層)	-	(2.9)	-	-	にぶい赤褐色 (5YR5-3)～灰黄褐色 (10YR6-2)	素(径1mm以下の白・黒・赤茶色の砂粒・石英を多く含む)	良好	内面: ココナデ・1段放射線文, 外面: ココナデ・ナデ	
351	土師器	皿目	900	SE540 B17・18 第13層(歳下層)	-	(2.1)	-	1/12 以下	黄灰(2.5Y 8-1)	素(径1mm以下の白色砂粒を含む)	硬軟	内外面: ロクロナデ	
352	新編土師器	新編土師	900	SE540 B17・18 第15層	-	(2.9)	-	1/12 以下	灰白 (10YR8-2)	やや粗(径2mm以下の白・灰色砂粒・石英を多く含む)	不良	内外面: ナデ・指摺施文	
353	新編土師器	新編土師	900	SE540 B17・18 第7層	-	(2.6)	-	1/12 以下	灰黄(2.5Y7-2)	やや粗(径2mm以下の白濁・灰色砂粒を多く含む)	良好	内外面: ナデ	
354	新編土師器	新編土師	900	SE540 B17・18 第7層	-	(2.9)	-	1/12 以下	にぶい黄 (5YR6-4)	粗(径0.5mm程度の白・灰色の砂粒を多く含む)	良好	内面: ナデ, 外面: 粘土継ぎ合	
355	新編土師器	新編土師	900	SE540 B17・18 第10層	-	(2.7)	-	1/12 以下	にぶい黄 (7.5YR6-4)	やや粗(径0.5mm程度の白・灰色の砂粒を含む)	良好	内面: ナデ, 外面: 粘土継ぎ合	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
356	瀬白土器	瀬白土器	9020 B17-18	SE540	-	(21)	-	1/12 以下	灰黄(25Y 7/2)	やや粗(径3mm以下の白・灰色砂粒を含む)	良好	内外面:ナデ	
357	瀬白土器	瀬白土器	9020 B17-18	SE540	-	(27)	-	1/12 以下	にぶい黄(25 Y6/3)	やや粗(径3mm以下の白・黄・白色砂粒を含む)	良好	内外面:ナデ・指掘り肌	
358	瀬白土器	瀬白土器	9020 B17-18	SE540	-	(15)	-	1/12 以下	灰黄(25Y7/2)	やや粗(径1mm以下の白・灰色砂粒を多く含む)	良好	内面:指掘り肌	
359	瀬白土器	瀬白土器	9020 B17-18	SE540	-	(18)	-	1/12 以下	灰黄(25Y7/2)	やや粗(径2mm以下の白・白色砂粒を含む)	良好	内面:ナデ・指掘り肌、外面:粘土継ぎ合肌	
360	土師器	黒A	9020 D18	SX475	146	2.3	-	11/12	にぶい黄(5Y7/4)	やや粗(径1mmの白)・黒け茶・赤褐色の砂粒を含む	良好	内面:ナデ、外面:指掘り肌・ナデ	
361	土師器	黒A	9020 D18	SX475	143	137	-	ほぼ完全	浅黄緑(7.5Y8/3)	漆(径2mm以下の半透明・白・赤褐色砂粒少量を含む)	良好	内面:ナデ・指掘り肌・黒ナデ、外面:ヨコナデ・エビオサエ・ハケ	工具痕
362	須恵器	杯口蓋	9020 G7	SP282	189	2.9	-	9/12	内:灰白(2.5Y8/1)~浅黄(2.5Y7/2)、外:浅黄(2.5Y7/4)	漆(径3mm以下の白・黒色砂粒を多く含む)	良好	内面:ロクロナデ・ナデ、外面:ロクロナデ・ロクロヘラケズリ、指掘り	口縁歪み
363	須恵器	壺	9020 C17	SP507	-	(50)	(150)	25/12	灰白(N7/0)~灰(N6/0)	漆(径6mm以下の白・黒色砂粒を含む)	脆弱	内面:ロクロナデ・タタキ後ナデ、外面:ロクロヘラケズリ	
364	須恵器	黒A	8020 Q24	SP617 煎形	230	(2.1)	-	4/12	灰白(5Y7/1)	漆(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	脆弱	内外面:ロクロナデ、外面ヘラ切り後ナデ	火障
365	土師器	杯A	9020 F7	SK225	-	(2.8)	14.7	縦)12/12	明褐色(7.5Y8/2)~浅黄緑(10Y8/3)	漆(径1mm以下の白・赤褐色砂粒を含む)	良好	内面:1段状短文・短髪短文・彫文、外面:ケズリ	底面に黒痕
366	土師器	壺	9020 E3	SK271	(236)	(2.8)	-	1/12 以下	内:にぶい黄(10Y8/3)、外:にぶい黄(10Y7/3)	漆(径1mm以下の赤茶・白色砂粒・石灰を含む)	良好	内面:ハケ・ナデ、外面:ナデ・指掘り肌(磨滅)	
367	須恵器	杯A / 杯B	9020 E3	SK271	(180)	(3.8)	-	1/12 以下	灰白(N7/0)	漆(径1mm以下の白・黒色砂粒・径3mm以下の白色砂粒を含む)	脆弱	内外面:ロクロナデ	
368	須恵器	黒C	9020 E3	SK271	(180)	(1.8)	-	1/12	灰白(N7/0)	漆(径2mm以下の白・黒色砂粒を多く含む)	脆弱	内外面:ロクロナデ	重ね焼き痕
369	土師器	黒C	9020 F3	SK360	(149)	(2.6)	-	1/12	灰白(10Y8/1)	漆(極細の白・灰色砂粒を含む)	良好	内面:ナデ、外面:ケズリか	
370	土師器	壺	9020 F3	SK360	(190)	(6.1)	-	2/12	内外:灰白(10Y8/2)、煎:黒灰(N3/0)	漆(径2mm以下の砂粒やや多く含む)	良好	内外面:ナデ	
371	須恵器	杯A / 杯B	9020 F3	SK360	-	(3.1)	-	1/12 以下	紫灰(5B/6)	漆(径0.5~3mm以下の白色砂粒を含む)	脆弱	内外面:ロクロナデ	
372	須恵器	鉢D	9020 F3	SK360	-	(3.8)	-	-	灰白(10Y8/2)	漆(径1mm以下の白・黒・灰・赤褐色砂粒・石灰・雲母を含む)	脆弱	内外面:ロクロナデ	
373	土師器	杯A	8020 R25	SK550	(170)	(4.1)	-	1/12 以下	藍(5Y8/6)	漆(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	良好	内面:ナデ、外面:ケズリ	
374	土師器	黒A	8020 R25	SK550	(130)	(1.8)	-	1/12 以下	浅黄緑(10Y8/2)	漆(径0.5mm以下の白・灰色砂粒を含む)	良好	内外面:ナデ	
375	土師器	杯/黒	8020 R25	SK550	-	(2.0)	-	1/12 以下	藍(5Y8/6)	漆(径0.5mm以下の白色砂粒を少し含む)	良好	内外面:ナデか(磨滅)	
376	土師器	壺	8020 R25	SK550	-	(3.7)	-	1/12 以下	灰黄緑(10Y8/2)	漆(径0.5mmの白・灰白色砂粒・雲母を多く含む)	良好	内外面:ナデか(磨滅)	
377	須恵器	杯A	8020 R25	SK550	(139)	2.8	(10.5)	3/12	灰白(7.5Y8/1)	漆(径0.5mm以下の白・灰色砂粒を含む)	軟	内外面:ロクロナデ、外面ヘラ切り後未調整	
378	須恵器	杯B 差	8020 R25	SK550	(133)	(1.3)	-	1/12 以下	灰白(2.5Y7/1)	漆(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	軟	内外面:ロクロナデか(磨滅)	重ね焼き痕
379	須恵器	杯B 差	8020 R25	SK550	(192)	(1.1)	-	2/12	灰白(7.5Y8/1)	漆(径0.5mm以下の白・灰色砂粒を含む)	軟	内外面:ロクロナデ、外面ヘラ切り後ロクロヘラケズリ	
380	須恵器	杯B 差	8020 R25	SK550	(198)	(2.0)	-	1/12	灰白(10Y8/1)	漆(径0.5mm以下の白・灰色・赤褐色砂粒を含む)	軟	内外面:ロクロナデ、外面ロクロヘラケズリ	
381	須恵器	黒B	8020 R25	SK550	(222)	4.7	(230)	15/12	灰白(7.5Y7/1)	漆(径0.5mm以下の白色砂粒を少し含む)	脆弱	内外面:ロクロナデ、外面ヘラ切り後ロクロヘラケズリ	重ね焼き痕
382	須恵器	壺A	8020 R25	SK550	(116)	(5.9)	-	1.5/12	灰白(N7/0)	漆(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	脆弱	内面:ロクロナデ	重ね焼き痕・隣灰
383	瀬白土器	瀬白土器	8020 R25	SK550	-	(35)	-	1/12 以下	藍(5Y8/6)	漆(径0.5~3mm以下の白・灰色砂粒を多く含む)	良好	内面:ナデ・指掘り肌、外面:ナデ	
384	瀬白土器	瀬白土器	8020 R25	SK550	-	(4.8)	-	1/12	にぶい黄(7.5Y7/2)	漆(径0.5~2mm以下の白・灰・灰色砂粒を多く含む)	良好	内面:ナデ・指掘り肌、外面:ナデ	
385	土師器	壺	9020 E2	SD460	-	(2.8)	-	1/12	にぶい黄(10Y7/4)	漆(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	良好	内外面:ナデ	
386	須恵器	差	9020 E2	SD460	-	(1.0)	-	1/12 以下	灰白(7.5Y7/1)	漆(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	脆弱	内外面:ロクロナデ	
387	瀬白土器	瀬白土器	9020 E2	SD460	-	(5.1)	-	1/12 以下	にぶい黄(5Y8/6)・灰(7.5Y5/1)	漆(径0.5~1mm以下の白・白灰・灰色砂粒を多く含む)	良好	内外面:ナデ、外面:エビオサエ	
388	須恵器	杯B	9010 C23-24	遺跡1 SD459	-	3.0	(7.0)	縦)4/12	灰(6/0)・灰黄(10Y8/2)	漆(径2mm以下の白・赤茶・黒・灰色砂粒を多く含む)	脆弱	内面:ロクロナデ、外面:ロクロナデ・ヘラ切り後未調整	高台部に隣灰

岡田国遺跡第3～6次発掘調査報告

報告番号	種類	種別	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
389	須恵器	杯B	9030 D2	溝群1 SD461	(15.1)	(4.3)	(30.0)	2/12	灰(N6-0)	器(径2mm以下の白・黒色砂粒・石莖を多く含む)	灰焼	内面:ロクロナデ、外面:ヘラ切り後ロクロナデ	
390	須恵器	皿B	9030 D2	溝群1 SD462	(22.2)	(5.7)	(36.0)	1/12以下	灰(7.5Y4.1-N7.0)	器(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	灰焼	内外面:ロクロナデ、内面ナデ、底面:ヘラ切り後ロクロナデ	重ね焼き痕
391	須恵器	杯B蓋	9030 D21	溝群1 SD462	-	(1.9)	-	-	灰白(N8-0-N7.0)	器(径1mm以下の白・黒色砂粒を含む)	灰焼	内外面:ロクロナデ	
392	土師器	甕	9030 E21	溝群1 SD463	(30.0)	(2.0)	-	1/12以下	浅黄緑(7.5YR8-3)	器(径3mm以下の白・赤系砂粒・石莖を多く含む)	良好	内面:ナデ、外面:ナデ・ユジシヤナ	SD01
393	須恵器	甕	9030 E22	溝群1 SD463	-	-	-	-	灰白(N7.0-N8.0)	器(径2mm以下の黒・白砂粒を含む)	灰焼	内面:真青、外面:タテナベキナ	SD01
394	須恵器	皿A/皿B	9030 E22	溝群1 SD464	(25.4)	(4.2)	-	1/12以下	灰黄(2.5Y7.1)	器(径1mm以下の灰色砂粒・石莖を多く含む)	不貞	内外面:ロクロナデ	
395	土師器	甕	9030 G1	溝群1 SD467	(12.8)	(2.9)	-	1.5/12	にぶ・黄緑(10YR5.4)	器(径3mm以下の白色砂粒・石莖を多く含む)	不貞	内外面:ナデか	
396	土師器	高杯	9030 H21	溝群1 SD491	脚 4.0	(8.2)	-	脚12/12	にぶ・黄緑(10YR7.2)	器(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	良好	内外面:ナデか	
397	須恵器	杯B/皿B	9030 H21	溝群1 SD491	-	(1.8)	(13.8)	底13/12	灰白(2.5Y7.1)	器(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	灰焼	内面:ロクロナデ、外面:ヘラ切り後ロクロナデ	重ね焼き痕(隣?)
398	土師器	甕	9030 C4	溝群2 SD529	(15.8)	(5.8)	-	1/12	灰白(7.5YR8.2)	器(径2mm以下の白・黒・赤系砂粒・石莖を多く含む)	不貞	内外面:ナデか(摩滅)	
399	須恵器	皿B	9030 C9	溝群2 SD529	(15.0)	(1.8)	-	1/12以下	灰(9.6.0)-灰白(2.5Y7.1)	器(径0.5mm以下の黒・白色砂粒・石莖を含む)	灰焼	内外面:ロクロナデ	内面:油煙付着、内外面に重ね焼き痕
400	土師器	甕	9030 C5	溝群2 SD468	(27.6)	(3.0)	-	1/12以下	浅黄緑(10YR8.3)	器(径3mm以下の半透明・白・明褐色砂粒を含む)	良好	内外面:ナデか(全体的に摩滅)	
401	土師器	杯B/皿B	9030 D7	溝群2 SD468	-	(1.2)	-	1/12以下	赤橙(10R6.6)	器(径0.5mm以下の赤・白色の粒を含む)	良好	内外面:摩滅	
402	須恵器	蓋	9030 C3	溝群2 SD468	-	1.2	-	1/12以下	灰白(2.5Y8.2)	器(径0.5mm以下の白・灰色の粒を含む)	軟	内外面:ロクロナデ	
403	須恵器	皿B蓋	9030 C3	溝群2 SD468	(25.8)	(1.9)	-	1/12	灰白(5Y8.1)	器(径2mm以下の半透明・黒・白砂粒を少量含む)	軟	内外面:ロクロナデ、底部:ヘラ切り後ロクロナデ	
404	土師器	杯B/皿B	9030 D2	溝群2 SD469	-	(1.8)	(13.0)	底15/12	内:にぶ・黄緑(10YR7.4)、外:橙(5YR6.6)	器(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	良好	内外面:不明、底部:ヘラケズリ	
405	須恵器	杯A/杯B	9030 D7	溝群2 SD469	(15.0)	(3.5)	-	1/12	灰白(7.5Y7.1)	器(径0.5mm以下の白・灰色の粒を含む)	灰焼	内外面:ロクロナデ	
406	須恵器	杯A/杯B	9030 D5	溝群2 SD469	(15.0)	(2.6)	-	1/12	灰白(N7.0)	器(径0.5mm以下の白・黒色の粒を含む)	灰焼		灯火器
407	須恵器	杯B	9030 D6	溝群2 SD469	(16.0)	(4.0)	-	1/12以下	灰(N6-0)	器(径0.3mm以下の砂粒をわずかに含む)	灰焼	内外面:ロクロナデ	
408	須恵器	杯L/杯F	9030 D7	溝群2 SD469	-	(2.4)	-	1/12	灰(N6-0)	器(径0.3mm以下の白色の粒を少し含む)	灰焼	内外面:ロクロナデ	
409	須恵器	蓋	9030 D5	溝群2 SD469	-	(1.4)	-	1/12	灰白(N7.0)	器(径0.5mm以下の黒色の粒・0.3mm以下の白色粒を少し含む)	灰焼	内外面:ロクロナデ	外面に磨痕
410	須恵器	鉢D/棠C	9030 D5	溝群2 SD469	-	(2.0)	-	1/12	内:灰白(2.5Y8.1)、外:灰白(N8.1)	器(径0.5mm以下の黒色の粒・0.3mm以下の灰・白色粒を含む)	軟	内面:摩滅、外面:ロクロナデ	
411	須恵器	盃	9030 D6	溝群2 SD469	-	(3.9)	-	-	灰白(2.5Y7.1)	器(径2mm以下の白色砂粒を含む)	軟	内外面:摩滅	
412	須恵器	杯A	9030 E5	溝群2 SD471	(32.0)	(3.8)	-	1.5/12	灰白(N8.0)	器(径5mm以下の白・黒色砂粒を多く含む)	灰焼	内面:ロクロナデ・ナデ、外面:ロクロナデ・ヘラ切り	
413	須恵器	杯A/杯B	9030 D4	溝群2 SD471	(15.8)	(3.2)	-	1/12	灰(N6-0)	器(径1.5mm以下の黒・白色砂粒を含む)	灰焼	内外面:ロクロナデ	隣穴か、重ね焼き痕
414	須恵器	杯A/杯B	9030 E3	溝群2 SD471	(15.8)	(2.4)	-	1/12以下	灰白(5Y7.1)	器(径1mm以下の黒・白色砂粒・石莖を含む)	軟	内外面:ロクロナデ	重ね焼き痕
415	須恵器	杯A/杯B	9030 E5	溝群2 SD471	-	(2.0)	-	1/12以下	灰(N6-0)	器(径0.3mm以下の黒・白色粒を含む)	灰焼	内外面:ロクロナデ	重ね焼き痕
416	須恵器	杯B	9030 E3	溝群2 SD471	-	(1.3)	(30.0)	底2/12	灰(N6-0)	器(径1mm以下の白・黒・赤系砂粒を含む)	灰焼	内外面:ロクロナデ、外面:ヘラ切り後未調整	
417	須恵器	杯B	9030 E3	溝群2 SD471	-	(1.7)	(11.0)	底12/12	灰白(N7.0)	器(径1.5mm以下の白・黒砂粒・石莖を多く含む)	灰焼	内面:ロクロナデ、外面:ヘラ切り後未調整	
418	須恵器	杯B	9030 E3	溝群2 SD471	-	(1.3)	(35.0)	底1/12	内:灰白(2.5Y8.1)、外:灰黄(2.5Y7.2)	器(径1mm以下の白・黒色砂粒を少し含む)	軟	内外面:摩滅、底部:ヘラ切り後未調整	
419	須恵器	皿C	9030 D4	溝群2 SD471	(21.8)	(2.0)	-	1/12以下	灰(N6-0)	器(径3mm以下の白・黒色砂粒・石莖を多く含む)	灰焼	内外面:ロクロナデ、底部:ロクロナデヘラ切り後ロクロナデ	
420	須恵器	皿A	9030 D4	溝群2 SD471	-	(5.1)	-	-	内外:灰白(N7.0-N8.0)、断:明赤灰(10YR7.1)	器(径2mm以下の白・黒色砂粒を含む)	灰焼	内外面:ロクロナデ	外面に隣穴
421	土師器	杯/皿	9030 B・C16	SX94	(13.6)	(2.3)	-	1/12以下	にぶ・橙(2.5YR6.4)	器(径0.3mm以下の黒・赤色粒を少し含む)	不貞	不明(摩滅)	
422	土師器	甕	9030 B・C16	SX94	(23.0)	(3.3)	-	1/12以下	にぶ・黄緑(10YR7.4)	器(径0.3mm以下の白色砂粒を多く含む)	良好	内面:ナデ、外面:ナデ	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
423	煎茶器	杯A	9020 B・C16	SX94	-	(1.4)	(8.8)	底3/32	灰白(75Y7/1)	薬(約5mm位の白色砂粒を含む)	原態	内外面: ロクロナデ、外面へう切り後調整	
424	煎茶器	杯A	9020 B・C16	SX94	(17.4)	4.9	13.8	口15/12、底15/12	青灰(SP96/1)	薬(径1mm以下の白・黒色の砂粒を少し含む)	原態	内面: ロクロナデ・ナデ、外面: へうミガキ・へう切り後ロクロナデ	
425	煎茶器	杯B	9020 B・C16	SX94	14.2	4.5	9.9	4/12	灰(N6/0)	薬(約5mm以下の白・黒色の粒を少し含む)	原態	内外面: ロクロナデ、外面へう切り後調整	障灰
426	煎茶器	杯C	9020 B・C16	SX94	(15.8)	(3.3)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	薬(約5mm以下の白・黒色の粒を含む)	原態	内面: ロクロナデ	
427	煎茶器	杯B	9020 B・C16	SX94	-	(2.0)	つまみ2.0	-	灰(N6/0)	薬(径1mm以下の黒色砂粒、0.5mm以下の白色砂粒を含む)	原態	内面: ナデ・ロクロナデ、外面: へう切り後ロクロナデ	
428	煎茶器	杯B	9020 B・C16	SX94	15.8	1.8	つまみ2.1	6/12	灰(N6/1)	薬(約5mm以下の白・黒色の砂粒を含む)	原態	内面: ナデ・ロクロナデ、外面: へう切り後ロクロナデ	重ね焼き痕
429	煎茶器	蓋A	9020 B・C16	SX94	(9.9)	(3.1)	-	1/12以下	明青灰(SP67/1)	薬(径3mm以下の白色砂粒を含む)	原態	内外面: ロクロナデ	重ね焼き痕
430	煎茶器	鉢E	9020 B・C16	SX94	(19.6)	(6.3)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	中々粒(径3mm以下の白色砂粒を多く含む)	原態	内外面: ロクロナデ、外面調整	
431	煎茶器	蓋	9020 B・C16	SX94	-	(6.5)	-	-	灰白(N7/0)	中々粒(径1mm以下の長石・灰・黒色砂粒を少し含む)	原態	内面: 共に具足、外面: タタキ	

付表7 出土土器観察表(平安時代)

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
549	土師器	皿	8020 O24	SA1 SP905 杉原跡	-	(1.9)	-	1/12	明褐色(75YR7/2)～にぶい黄褐色(75YR8/3)	薬(約0.2mmの茶色・平遠明の砂粒少し含む)	良好	内外面: ナデ	
550	土師器	皿	8020 P24	SA1 SP906 杉原跡	-	(1.8)	-	-	内: オリーブ黒(5Y2/1)、外: にぶい黄褐色(10YR6/3)	薬(径2.5mm大の赤茶色の砂粒をまじら含む)	良好	内外面: ナデ、外面: エビオサ	内面にスス(灯火跡か)
551	煎茶器	杯B	8020 O24	SA1 SP905 杉原跡	-	(0.7)	-	1/12	灰(N6/0)	薬(約0.2mm大の白・灰色の砂粒少し含む)	原態	内外面: ロクロナデ	
552	煎茶器	杯B	9020 C18	SB12 SP498	(36.0)	(1.4)	-	1/12	灰(N6/0)	薬(径2mm以下の白灰・黒色砂粒を多く含む)	原態	内外面: ロクロナデ	
553	煎茶器	鉢A	9020 G17	SB12 SP501	(19.6)	(9.0)	-	1/12	灰(N6/0)	薬(径2mm以下の白色砂粒を含む)	原態	内面: ロクロナデ、外面: ロクロナデ後へうミガキ・タタキ(障灰)	
554	土師器	皿	9020 C18	SB11 SP492	12.6	2.2	-	6/12	にぶい黄褐色(10YR6/3)	薬(約0.5mm位の白・黒灰色の砂粒を含む)	良好	内外面: ナデ、微細調整	
555	土師器	皿	9020 B17	SB11 SP541	(10.0)	(2.0)	-	1/12以下	灰白(2.5Y8/2)	薬(径1mm以下の砂粒を多く含む)	良好	内面: ナデ、外面: ナデ、微細調整	
556	土師器	皿	9020 B18	SB11 SP542 杉原跡	(10.0)	(1.0)	-	1/12以下	浅黄褐色(10YR8/3～7.5YR8/4)	薬(径2mm以下の白・赤茶色砂粒・石英・雲母を含む)	良好	内面: ナデ、外面: ナデ	
557	土師器	鉢	9020 D18	SB11 SP494	(36.0)	(1.4)	-	1/12以下	灰白(10YR8/2)	薬(径2mm以下の茶・灰色砂粒・石英を含む)	良好	内外面: ナデ	
558	土師器	鉢	9020 D18	SB11 SP495 榎前	-	(1.8)	-	-	灰白(75YR8/2)～にぶい黄褐色(5YR7/4)	薬(径2mm以下の白・黒色砂粒・石英を多く含む)	良好	内外面: ナデ	
559	土師器	鉢	9020 B17	SB11 SP541 杉原跡	-	(1.8)	-	-	内: 黒(2.5Y2/1)、外: にぶい黄褐色(5YR5/4)	薬(径2mm以下の白・赤灰色砂粒・石英を多く含む)	良好	内外面: ナデ	
560	煎茶器	碗	9020 B17	SB11 SP541	-	(3.1)	(8.0)	底: 2/12	灰(N6/0)	薬(径1mm以下の白・黒色砂粒を含む)	原態	内外面: ロクロナデ、底面: 回転未処理	
561	煎茶器	杯B	9020 D17	SB11 SP490	-	(1.3)	(10.0)	底: 1/12	灰白(N7/0)	薬(径1mm以下の白・黒・灰色砂粒を含む)	原態	内外面: ロクロナデ	
562	煎茶器	杯B	9020 B19	SB11 SP482 榎前	-	(1.0)	-	-	灰(N6/0)	薬(約0.3mm大の白色の砂粒少し含む)	原態	内外面: ロクロナデ	重ね焼き痕
563	煎茶器	鉢	9020 B17	SB11 SP535 杉原跡	-	(6.4)	-	-	灰(7.5Y6/1～N6/0)	薬(径1mm以下の白・黒・灰色砂粒を含む)	原態	内面: 無文の赤褐色、外面: タタキ	
564	煎茶器	碗	9020 C16-17	SB11 SP508	-	(3.0)	-	1/12以下	内: 黒(N3/0)、外: 浅黄褐色(10YR8/3)	薬(径1mm以下の白・灰色砂粒・石英・雲母を多く含む)	良好	内面: 縦文暗文、外面: へうへうミガキ・ナデ	
565	煎茶器	碗	9020 B17	SB11 SP541	-	(2.7)	-	-	内: 黒褐色(2.5Y3/1)、外: にぶい黄褐色(10YR6/3)	薬(径1mm以下の白・茶色砂粒・石英を含む)	良好	内面: へうミガキ、外面: ナデ	
566	煎茶器	碗	9020 B18	SB11 SP542 杉原跡	-	(2.9)	-	-	内: 黒(7.5YR2/1)、外: にぶい黄褐色(7.5YR7/3)	薬(約0.5mm以下の白・赤茶色砂粒・石英を含む)	良好	内面: へうミガキ、外面: ナデ	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
567	黒色土器	碗	9020 B17	SB11 SP485 細形	-	(23)	-	1/12 以下	内：縮灰(N3-0)、外：にぶい糖(7.5YR6/3)	密(径1mm以下の白色砂粒・石英を含む)	良好	内面：ヘラミガキ、外面：ヘラミガキ・ナデ	
568	黒色土器	碗	9020 B17	SB11 SP541 粗形	-	(1.0)	(6.0)	底	内：縮灰(N 3.0)、外：にぶい糖(7.5YR6/3)	密(径1mm以下の赤茶・白色砂粒・雲母を含む)	良好	内面：ジグザグ縮文、外面：ナデ	
569	土師器	皿	9020 P21	SD8 SP54	-	(20)	-	1/12 以下	にぶい糖(7.5YR6/4)、にぶい糖(10YR7/3)	密(径0.5mm以下の灰色粒・茶色粒、0.3mm以下の白色粒を含む)	良好	内外面：磨滅	
570	黒色土器	碗	9020 G22	SD8 SP14	(13.8)	(3.4)	-	2.5/12	内：縮灰(N3-0)、外：にぶい糖(7.5YR7/4)	密(径1mm以下の透明・白・茶色粒を含む)	良好	内面：ヘラミガキのうち縦線縮文、外面：ナデ・磨滅	
571	黒色土器	碗	9020 P21	SD8 SP54	22.0	7.9	-	3/12	内：黒(N15/0)、外：にぶい糖(7.5YR7/3)、灰(N15/0)	密(径3mm以下の半透明白色砂粒を含む)	良好	内面：ヘラミガキ、縦線縮文、外面：ヘラミガキ後ヘラミガキ	口縁部内面に沈着
572	灰釉陶器	皿	9020 P20	SD8 SP55 長取	-	(1.8)	8.6	底・変存	内：縮灰(N3-0)、外：にぶい糖(7.5YR7/4)	密(径0.5mm以下の茶・白・黒色の粒を含む)	磨滅	外面：ロクロヘラミガキ、内外面：施釉、露胎部：ロクロヘラミガキ	重焼き直し、転用疑
573	土師器	皿	8020 O23	SD15 SP591	-	(1.3)	-	1/12	糖(7.5YR7/6)	密(径1mm以下の白色粒、0.3～2mmの赤茶色粒を含む)	良好	内面：ナデ、外面：ナデ・ユビオキエ	
574	土師器	甕	8020 P24	SD15 SP598	-	(1.9)	-	-	灰白(10YR8/2)	密(径1.5mm以下の赤茶色・半透明の砂粒を含む)	不良	不明(磨滅)	
575	土師器	甕	8020 P23	SD15 SP593 細形	-	(2.8)	-	-	内：厚釉(2.5Y7/1)、外：にぶい糖(7.5YR6/4～7.5YR7/3)	密(径1.5mm以下の白色・半透明の砂粒を含む)	良好	不明(磨滅)	
576	須恵器	杯皿	8020 O24	SD15 SP596	-	(2.0)	(10.4)	底	灰白(2.5Y7/1)	密(径1.5mm以下の白色・半透明の砂粒を含む)	磨滅	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラミガキ後ナデ	
577	灰釉陶器	皿	8020 G24	SD15 SP491	-	(2.0)	-	-	灰黄(2.5Y7/2)	密(径0.5mm以下の茶・白色の砂粒を含む)	磨滅	内外面：ロクロナデ	
578	黒色土器	碗	8020 M24	SD16 SP584	-	(1.9)	-	1/12	黒(7.5YR2/1)・灰黒(7.5YR4/2)	密(径0.3mm以下の雲母・白色粒を含む)	良好	内面：ヘラミガキ、外面：ヘラミガキ	口縁部内面に沈着
579	土師器	皿	8020 O24	SX630	-	(1.9)	-	1/12	糖(2.5Y7/6)	密(径1mm以下の茶色砂粒・長石・雲母を含む)	良好	内外面：ナデ	
580	須恵器	盃	9020 D20	SX520	(5.0)	(11.6)	5.0	口・1/12 以下、底・変存	灰白(5Y7/1)	密(径0.5mm以下の白色砂粒を少量含む)	軟	内外面：ロクロナデ、底面：回転未切り	
581	須恵器	盃	8020 M23	SX580	8.6	25.7	12.4～12.8	口・3/12、底・変存	灰(N6-0)	密(径1mm以下の長石・黒色砂粒を少量含む)	磨滅	内面：ロクロナデ、外面：ロクロナデ・ロクロヘラミガキ、底面：回転未切り	障灰
582	土師器	皿	9020 B5-8	SD531	-	(1.4)	-	-	灰黄(2.5Y7/2)	密(径0.5mm以下の白色砂粒・雲母を含む)	軟	内外面：ナデ	
583	須恵器	杯A / 杯B	9020 D5-8	SD472	(17.0)	(21)	-	1/12 以下	灰白(2.5Y8-1)	密(径0.5mm以下の白・黒色砂粒・雲母を含む)	軟	内外面：ロクロナデ	
584	須恵器	甕	9020 D5-8	SD472	-	(3.2)	-	1/12 以下	灰(N6-0～5-0)	密(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	磨滅	内外面：ロクロナデ	
585	須恵器	鉢A	9020 D6-7	SD530～532	(18.0)	(5.5)	-	2.5/12	灰(N6-0)	密(径0.5mm以下の砂粒を少量含む)	磨滅	内外面：ロクロナデ、外面：ロクロナデ後ヘラミガキ・ヘラミガキ	

付表8 出土土器観察表(中世)

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
392	土師器	羽釜	9010 H23	SK466	-	(2.1)	-	-	灰白(2.5Y8/2)	糖(径1.5mm以下の白・赤茶・灰色砂粒・石英を含む)	良好	内外面：ナデ	
393	青磁	碗	9010 H23	SK466	-	(2.5)	6.4	底	糖・明緑灰(10GY7/1)	糖(径0.3mm以下の白・灰色砂粒を少し含む)	磨滅	内外面：施釉、外面：華散かき落し	華散文
394	土師器	皿	9020 H1-12	SD92	-	(2.3)	-	-	にぶい糖(7.5YR7/4)	密(径1mm以下の白・赤茶・灰色砂粒・石英・雲母を含む)	良好	内面：ナデ、外面：磨滅	
395	瓦器	碗	9020 L1	SD92	-	(2.0)	-	-	縮灰(N3-0)	密(径1mm以下の黒色砂粒・石英を含む)	良好	内外面：ミガキ、外面：ナデ	
396	瓦器	碗	9020 L1	SD92	-	(2.5)	-	-	灰白(N8-0)	密(径1mm以下の黒色砂粒を多く含む)	良好	内外面：ナデ、外面：磨滅	口縁部内面に沈着
397	瓦器	碗	9020 P6	SD281	-	(3.6)	6.2	底	縮灰(N3-0)	密(径1mm以下の白色砂粒をわずかに含む)	良好	内面：ミガキ、外面：ナデ	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
598	黒土器	杯皿	9020 B-F22	SD04	(13.0)	(3.0)	-	1/12	灰(N6-9)	裏(厚0.5mm以下の白色砂粒を含む)	築造	内外面:ロクロナデ, 外面:ロクロヘラナデ	
599	黒土器	不明	9020 D21	SD04	-	-	-	-	灰(N6-0)	裏(厚0.5mm以下の白・黒灰色砂粒を含む)	築造	内外面:ナデ	転用痕
600	黒土器	盃	9020 B-F22	SD04	-	(3.6)	(10.7)	底:2/12	内:灰白(5Y7.1), 外:灰白(5Y8-1)	裏(厚1.5mm以下の白・黒灰色砂粒を含む)	築造	内面:ロクロナデ, 外面:ヘラ切り後ロクロヘラナデ	
601	黒土器	杯	9020 D19	SD12	(21.2)	(3.9)	-	1/12	灰(N7-0)	裏(厚3mm以下の白・灰色砂粒・石英を含む)	築造	内外面:ロクロナデ	油層(スス)
602	黒土器	杯C	9020 D19	SD12	(20.0)	(3.5)	-	1.5/12	灰白(2.5Y8-1)	裏(厚1mm以下の白・灰色砂粒・雲母を少し含む)	築造	内外面:ロクロナデ, 底部:ヘラ切り後未調整	スス付着(灯火器か)
603	土師器	皿	9020 B-C16	SD64	(13.8)	(2.1)	-	1/12	浅黄(2.5Y7/4)	裏(厚1mm以下の白色砂粒を少し含む)	良好	内外面:ナデ・指捺土痕	
604	黒色土器	碗	9020 B-C16	SD64	(16.0)	(2.0)	-	1/12	内:黒(10YR2-1), 外:にぶい黄緑(10YR6-3)	裏(厚1mm以下の白・黒色砂粒・石英を含む)	良好	内外面:ミガキ, 外面:ナデ	口縁部内面に沈着
605	黒色土器	盃	9020 B-C16	SD64	(17.2)	(2.9)	-	1/12	内:灰白(5Y4-1), 外:黒灰黄(2.5Y4-2)	裏(厚1mm以下の白色砂粒・石英を多く含む)	良好	内外面:ミガキ, 外面:ナデ・指捺土痕	外面にスス付着
606	土師器	皿	9010 M24	SD110	8.0	(1.2)	-	3/12	浅黄緑(10YR8-4)	裏(厚4mm以下の黒・赤茶砂粒・石英・雲母を含む)	良好	内外面:ナデ, 外面:指捺土痕	
607	黒色土器	碗	9020 F-G18	SD289	-	(1.0)	7.6	3/12	内:黒(5Y2-1), 外:灰黄(2.5Y6-2)	裏(厚4mm以下の白色砂粒・石英を含む)	良好	内面:ミガキ, 外面:ナデ	
608	土師器	高杯	9020 F-G18	SD292	-	(2.5)	(10.0)	底:1.5/12	にぶい黄緑(10YR7-4)	裏(厚1mm以下の赤茶・白・黒色砂粒・石英を含む)	良好	内面:ケズリ, 外面:ケズリ・ナデ	
609	土師器	皿	9020 F-H19	SD323	13.8	2.2	-	7/12	にぶい黄緑(10YR7-3)	裏(厚0.5mm以下の白・白色砂粒を含む)	良好	内外面:ナデ, 外面:指捺土痕	
610	黒土器	杯	9020 E17	SD336	長:5.4 幅:7.6 厚:0.5	-	-	-	灰白(N7-0)	裏(厚1mm以下の白・黒色砂粒・石英を含む)	築造	内面:ロクロナデ, 外面:ヘラ切り後未調整	内面に漆痕, 転用痕か
611	土師器	高杯	9020 H21	SD386	-	8.2	9.0	底:3/12	浅黄緑(7.5YR8-3)	やや粗(厚2mm以下の白・黒・灰・赤茶色砂粒・石英・雲母を多く含む)	不良	内外面:ナデ, 外面:筆触	面取りあり
612	黒色土器	盃	9020 Q-R-S1	SD440	(16.0)	(5.2)	-	1/12	内:黒黒(2.5J-1), 外:黄灰(2.5Y4-1)・黒灰(2.5Y5-2)	裏(厚1.5mm以下の白・黒色砂粒・石英を多く含む)	良好	内外面:ミガキ・ナデ	
613	土師器	皿	9020 E18	SD476	(17.8)	(1.7)	-	1/12 以下	にぶい黄緑(10YR7-3)	裏(厚1mm以下の白・赤茶・黒色砂粒・石英を多く含む)	良好	内面:筆触, 外面:指捺土痕	
614	土師器	皿	9020 E18	SD476	(13.0)	2.2	-	1.5/12	にぶい黄緑(7.5YR7-3)・黄(2.5YR7-6)	裏(厚2mm以下の赤茶・茶・白・灰色砂粒・石英・雲母を多く含む)	不良	内外面:ナデ, 外面:指捺土痕	
615	土師器	皿	9020 E18	SD476	(12.0)	(1.4)	-	1/12	にぶい黄緑(10YR7-3)	裏(厚1mm以下の赤茶・白・黒色砂粒を含む)	良好	内面:ナデ, 外面:ナデ	
616	黒土器	盃A	9020 E17	SD477	(14.4)	(2.0)	-	3/12	灰白(N7-0)・灰(N6-0)	裏(厚1mm以下の白・灰・灰色砂粒を含む)	築造	内外面:ロクロナデ, 外面:ロクロヘラナデ	筆触
617	土師器	皿	9020 D17	SD478	12.2	2.2	-	11/12	浅黄緑(10YR8-4)	裏(厚1mm以下の赤褐色砂粒を含む)	不良	内外面:ナデ	
618	黒色土器	碗	9020 B18	SD480	(12.0)	2.2	-	1/12	内:黒黒(2.5Y3-1), 外:灰白(2.5Y8-2)	裏(厚1mm以下の黒色砂粒・石英を含む)	良好	内面:ミガキ, 外面:ナデ・指捺土痕	
619	灰釉陶器	碗/皿	9010 B18	SD543	-	(1.9)	(7.0)	底:2/12	灰白(2.5Y8/1-8/2)	裏(厚0.5mm以下の砂粒を含む)	築造	内外面:ロクロナデ(施釉)	転用痕
620	土師器	盃E	9010 T23	SD571	(10.0)	(2.1)	-	1/12	にぶい黄緑(10YR7-2)	裏(厚1mm以下の白・赤茶・黒色砂粒・石英・雲母を含む)	良好	内外面:ナデ	
621	土師器	皿	9010 R23	SD573	(13.8)	(1.7)	-	1.5/12	黄(5YR7/6)	裏(厚1mm以下の白・赤茶・黒色砂粒を多く含む)	良好	内外面:ナデ	
622	釉土器	鉢皿	8020 Q-T24	SD559	(10.8)	(4.4)	-	1.5/12	黄(2.5YR7-6)・6・0, 灰白(10YR7-1)	裏(厚3mm以下の白・灰・褐色砂粒を含む)	良好	内外面:ナデ・指捺土痕	
623	釉土器	鉢皿土器	8020 R24	SD559	(10.2)	(5.1)	-	2/12	内:赤褐色(5YR4/6), 外:黒灰(5YR5-1)	やや粗(厚1~3mm以下の白・赤褐色・黒・半透明色の砂粒を含む)	良好	内外面:ナデ・指捺土痕	筆触痕
624	土師器	高杯	9010 M-N23	SD657	-	(9.5)	13.6	底:4/12	灰黄(2.5Y7-2)	裏(厚0.5mm以下の白・灰・灰色砂粒を少し含む)	良好	内面:ナデ・しぼり痕, 外面:ナデ・面取り	面取り10面か
625	黒土器	盃	9010 T25	SD695	-	(4.3)	4.3	底:8/12	灰白(N7-0)	裏(厚1mm以下の白・黒色砂粒を少し含む)	築造	内外面:ロクロナデ, 底部外面:ヘラ切り後ナデ	

付表9 遺物包含層出土土器観察表

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
663	灰土器	甕	9020 L21	灰白色土層	(132)	(43)	-	3/12	にこい青緑 (10YR7/2)	やや粗(径6mm以下の白)・半透明・黒灰色砂粒を多く含む	良好	内面・ナデ・調整に粗。外面:ヨコナデ・タタキ	
664	土器	甕	9020 D17	青灰色土層	-	(19)	-	-	灰黒(7.5YR6/2)	密(径2mm以下の白・赤・黒・白色砂粒・石英を多く含む)	良好	内外面:ナデ	
665	土器	杯A	-	遺物包含層	(152)	(25)	-	1/12以下	灰黄緑(10YR5/2)	密(径1mm以下の白色砂粒を含む)	良好	内面:1段放射筋文・ナデ、ナデ	
666	土器	皿	9020 Q2	灰白色土層	(148)	(27)	-	1.5/12	浅黄(2.5Y7/3)	密(径1mm以下の白色砂粒を含む)	良好	内外面:ナデ、外面:ナデ、筋目直	
667	土器	高杯	-	遺物包含層	-	16.8	-	-	灰白(2.5Y8/2)	粗(径2mm以下の白・赤茶色・石英を多く含む)	良好	内面:ナデ、外面:タズリ	面取り7面
668	灰土器	杯H	-	遺物包含層	(90)	(13)	-	1.5/12	灰(N6/0)	密(径2mm大の白色砂粒を含む)	悪	内外面:ロクロナデ	
669	灰土器	杯A	9020 I2	青灰色土層	140	3.2	-	5/12	灰白(N8/0)	密(径0.5mm以下の白・黒・白色砂粒を少し含む)	悪	内外面:ロクロナデ、外面:へつ切り後未調整	重ね焼き痕、筋目直
660	灰土器	杯B	-	灰色粘質砂	9.6	3.7	7.0	4.5/12	灰(N6/1)	密(径1mmの白色砂粒を含む)	悪	内外面:ロクロナデ、外面:へつ切り後ナデ	
661	灰土器	杯	9010 O24-25	青灰色土層	-	(16)	6.0	底:8/12	灰(N6/0)	密(径2mm以下の白・灰白色砂粒を多く含む)	悪	内外面:ロクロナデ	磨り出し高台、底部に磨痕あり
662	灰土器	皿	-	灰白色土層	(170)	(22)	-	1/12	灰(N5/0)～灰白(N8/0)	密(径1.5mm以下の灰色粒・半透明・0.3mm以下の白色砂粒を少し含む)	悪	内面:ロクロナデ、外面:へつ切り後未調整	
663	灰土器	皿A	9010 E24	灰白色土層	(149)	(23)	-	1/12以下	灰(N6/0～7/0)	密(径0.5mm以下の白色砂粒・灰色粒を少し含む)	悪	内面:ロクロナデ、外面:ロクロナデ	磨痕あり「口文ナ」
664	灰土器	皿E	-	遺物包含層	(110)	(26)	-	2/12	灰白(N7/0)	密(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	悪	内外面:ナデ	
665	灰土器	高杯	-	灰白色土層	-	(10.5)	-	脚:12/12	灰(N6/1)	密(径1mm以下の白・半透明色砂粒を含む)	悪	内面:ロクロナデ、上縁直。外面:ロクロナデ	
666	灰土器	杯B底	9020 F4	灰白色土層	(118)	(09)	-	2/12	明青灰(5P67/1)	密(径0.5mm以下の白・灰色を少し含む)	悪	内外面:ロクロナデ、外面:ロクロナデ、へつ切り後未調整	重ね焼き痕
667	灰土器	杯B底	-	遺物包含層	198	(14)	-	5/12	内:灰白(N8/0)、外:青灰(5P67)	密(径4mm以下の白・赤茶・黒色砂粒を多く含む)	悪	内外面:ロクロナデ・ナデ、外面:へつ切り後未調整	
668	灰土器	杯B底	9020 H-13	青灰色土層	(200)	(18)	-	2/12	灰(N6/0)	密(径2mm以下の白・黒・赤茶色砂粒を多く含む)	悪	内面:ロクロナデ、外面:ロクロナデ	
669	灰土器	鉢A	9020 C16	灰白色土層	(216)	(27)	-	1/12	灰白(10YR7/1)	密(径1mm以下の白色砂粒を含む)	悪	内外面:ロクロナデ	内外面に黒染痕
670	灰土器	鉢	-	遺物包含層	(204)	(31)	-	1/12	青灰(5P67/1)	密(径0.5mm以下の白・黒色砂粒を少し含む)	悪	内外面:ロクロナデ	障灰
671	灰土器	調理	9020 K3	青灰色土層	(228)	(48)	-	1/12以下	灰白(N7/0)	密(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	悪	内外面:ロクロナデ	
672	灰土器	小皿	9020 G20	青灰色土層	4.8	3.1	-	3/12	灰白(N7/0)	密(径2mm以下の白・黒・赤茶色砂粒を含む)	悪	内面:ロクロナデ、外面:ロクロナデ	
673	灰土器	甕	-	遺物包含層	-	(34)	7.2	底:6/12	灰白(N7/0)	密(径0.5～1mm以下の白色砂粒を含む)	悪	内外面:ロクロナデ、外面:へつ切り後ロクロナデ	
674	灰土器	甕M	9020 B18	青灰色土層	-	(6.5)	3.9	底:4/12	灰(N5/0)	密(径0.5mm以下の白色砂粒を含む)	悪	内外面:ロクロナデ、外面:筋目直	
675	灰土器	甕	9020 B18	青灰色土層	-	-	-	-	灰(N5/0)	密(径1mm以下の白・灰色砂粒を少し含む)	悪	内面:無くて具。外面:ナデ・タタキ	磨痕か
676	灰土器	罎足内面	9020 E3	SD002・青灰色土層	外縁:17.2、内面:160	6.0	21.8	外縁:4/12、内面:1.5/12	灰(N5/0)	密(径1mm以下の白色砂粒を含む)	悪	内外面:ロクロナデ	細方彫スカー、脚中央に縦溝
677	灰土器	杯B底	-	灰白色土層	(162)	(16)	-	1/12以下	灰(N6/0)	密(径2mm以下の白色粒・1mm以下の赤茶色少量を含む)	悪	内外面:ロクロナデ、外面:へつ切り	転用疑
678	灰土器	蓋	-	遺物包含層	長:40	幅:41	厚:0.8	-	内:灰白(N7/0)、外:灰ナリア(7.5YR6/2)	密(径4mm大・1mm以下の白色粒を少し含む)	悪	内外面:ロクロナデ	転用疑
679	灰土器	甕	9020 C19	青灰色土層	長:39	幅:48	厚:0.9	-	灰白(N7/0)	密(径1mm以下の白色砂粒を含む)	悪	内面:あて具。外面:タタキ後ナデ	転用疑
680	黒色土器	甕	9020 C15	青灰色土層	(148)	(39)	-	1/12	内:黒(N2/0)、外:明赤陶(5YR5/6)	密(径1～2mm大の白・灰・半透明色砂粒を含む)	良好	内外面:ナデ、内面:筋文	
681	黒色土器	甕	-	遺物包含層	(184)	(51)	-	1/12強	内:黒灰(N3/0)、外:にこい青緑(7.5YR6/3)	密(径2mm以下の赤・白色砂粒・石英を多く含む)	良好	内面:ミガキ、外面:ナデ	
682	灰輪陶器	甕	-	遺物包含層	(138)	4.3	6.6	底:1.5/12、内:9/12	灰白(5Y8/1)	密(径0.5mm以下の白・黒色の粒を含む)	悪	内外面:施釉、外面:ロクロナデ	
683	灰輪陶器	甕/皿	-	遺物包含層	-	(24)	(5.5)	底:3/12	灰白(N8/0)	密(径2mm以下の白色砂粒を少し含む)	悪	内外面:施釉、外面:ロクロナデ	
684	灰輪陶器	甕/皿	-	遺物包含層	-	(18)	5.5	底:4/12	施:ナリア(5Y6/3)、赤黒灰白(2.5Y7/1)	密(径1mm以下の白色砂粒を少し含む)	悪	内外面:ロクロナデ、外面:ロクロナデ	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
665	瓦胎陶器	瓶/皿	-	青灰色土層	-	(19)	6.8	底) 4/12	灰白(N8-0)	やや密(径1mm以下の白色砂粒を少し含む)	窯焼	内外面: 施釉、外面: ロクロヘラケズリ	
666	瓦胎陶器	瓶/皿	-	遺物包含層	-	(21)	8.0	底) 4.5/12	釉: 灰白(SY7/1)、素地: 灰白(N7/0)	密(径2mm以下の白・黒色砂粒を含む)	窯焼	内外面: 施釉、外面: ロクロヘラケズリ	
667	瓦胎陶器	瓶/皿	-	遺物包含層	-	(30)	(90)	底) 2.5/12	釉: 灰白(SY7/2)、素地: 灰白(N7/0)	密(径1mm以下の白・黒色砂粒を含む)	窯焼	内外面: 施釉、外面: ロクロヘラケズリ	
668	瓦胎陶器	段皿	9020 O04- 25	青灰色土層	30.0	(1.8)	-	1/12以下	灰白(SY7/2)~ にふい黄 (2.5Y6/3)	密(径1mm以下の白・黒色砂粒を含む)	窯焼	内外面: 施釉、外面: ロクロヘラケズリ	
669	瓦胎陶器	壺	9030 H12	灰白色土層	-	(5.9)	6.0	底) 6/12	釉: オリーブ灰 (10Y6/2)、素地: 灰白(2.5Y8/1)	密(径0.5mm以下の白・黒色砂粒を多く含む)	窯焼	内面: ロクロナデ、外面: ロクロヘラケズリ	
690	瓦胎陶器	水差し	9030 Q2	青灰色土層	(3.3)	9.9	5.5	(口) 2/12、 底) 3/12	釉: 灰オリーブ (7.5Y6/2)、素地: 灰白(N8-0)	密(径1mm以下の白・黒色砂粒を多く含む)	窯焼	内面: ロクロナデ、外面: ロクロヘラケズリ	
691	緑胎陶器	瓶	9030 C17	青灰色下層	-	(23)	-	1/12以下	釉: オリーブ灰 (2.5Y5/1)、素地: 灰白(N7/0)	釉負(径0.3mm以下の白色砂粒を僅かに含む)	窯焼	内外面: 施釉	硬質
692	緑胎陶器	瓶	9030 B17	灰白色土層	-	(26)	-	1/12以下	釉: 渋緑、素地: 灰(N5-0)	釉負(径0.3mm以下の白色砂粒を僅かに含む)	窯焼	内外面: 施釉	硬質
693	緑胎陶器	瓶	9030 B16	青灰色土層	-	(20)	-	-	釉: オリーブ灰 (10Y6/2)、素地: 灰(10Y6/1)	釉負	窯焼	内外面: 施釉	硬質
694	緑胎陶器	段皿	9010 J23	灰白色土層	-	-	-	-	灰(7.5Y6/1)	密(径1mm以下の白色砂粒を含む)	窯焼	内外面: 施釉	硬質
695	緑胎陶器	瓶/皿	8030 M24	灰白色土層	-	(20)	6.0	3/12	釉: 緑、素地: 灰白(SY7/1)	密(径1mm以下の白色砂粒を含む)	窯焼	内外面: 施釉	硬質、貼り付け高台
696	緑胎陶器	瓶/皿	9030 B17	青灰色土層	-	(29)	(10)	底) 1/12 以下	オリーブ灰 (10Y5/2)、素地: 灰(SY6/1)	密(径0.3mm以下の白・黒色砂粒を少し含む)	窯焼	内外面: 施釉	硬質、貼り付け高台
697	緑胎陶器	瓶/皿	9030 B19	青灰色土層	-	(20)	(8)	底) 1/12 以下	釉: 緑灰 (10GY3/1)、素地: 灰白(SY8/1)	密(径1mm以下の白色砂粒を少し含む)	窯焼	内外面: 施釉	硬質、貼り付け高台
698	緑胎陶器	瓶/皿	-	遺物包含層	-	(11)	(8)	底) 2/12	釉: オリーブ灰 (5GY6/1)、素地: 灰白(10Y8/2)	釉負	窯焼	内外面: 施釉	硬質、貼り付け高台、内面磨部
699	緑胎陶器	瓶/皿	-	遺物包含層	-	(10)	(9)	底) 1/12	釉: 緑灰 (7.5GY5/1)、素地: 灰白(10Y8/2)	釉負	窯焼	内外面: 施釉	硬質、貼り付け高台、内面磨部
700	緑胎陶器	段皿	8030 M23	遺物包含層	-	-	-	1/12	灰白(SY8/1)	密	窯焼	内外面: 施釉	硬質、口縁磨部内面に沈着
701	緑胎陶器	瓶/皿	9030 B18	遺物包含層	-	(31)	-	1/12	成興糖 (10Y8/3)~灰 白(2.5GY7/1)	釉負	窯焼	内外面: 施釉	硬質
702	緑胎陶器	瓶/皿	9030 O10	南壁	-	(1.6)	(5.0)	底) 2/12	内外: 青灰 (5GY6/1)、素地: 赤灰(S8/1)	密(径1mm以下の白色砂粒・石英を少し含む)	窯焼	内外面: 施釉	硬質、張り出し高台
703	土師器	皿	-	遺物包含層	6.4	(1.5)	-	3/12	にふい黄糖 (10Y7/3)	密(径1mm以下の赤茶・黒色砂粒・石英を含む)	良好	内外面: ナデ	へそ皿
704	土師器	皿	-	遺物包含層	7.4	1.1	-	3/12	にふい黄 (7.5Y8/4)	密(径0.5~1mm以下の白・白灰色砂粒を含む)	良好	内外面: ナデ、外面: 磨部比	
705	土師器	皿	-	遺物包含層	7.8	1.3	-	3/12	灰黄(2.5Y7/2)	密(径0.3mm以下の茶色の粒を僅かに含む)	良好	内外面: ナデ	
706	土師器	皿	-	北壁遺物包含層	6.90	(1.3)	-	1/12	明面焼 (10Y7/6)	密(径2.5mm以下の長石・石英・褐色砂粒を少し含む)	不良	内外面: 割摩、外面: 磨部比	
707	土師器	皿	-	青灰色土層	12.0	(1.8)	-	1/12以下	にふい黄糖 (10Y7/3)	釉負	良好	内外面: ナデ	内面にスス
708	土師器	皿	-	遺物包含層	(11.7)	(2.2)	-	2/12強	灰白(10YK8/2)	密(径2mm以下の石英少量を含む)	良好	内外面: ナデ、外面: 磨部比	
709	土師器	皿	9030 D19	青灰色土層	8.0	(1.8)	-	2/12	にふい黄糖 (10Y7/4)	密(径2mm以下の白・赤茶・黒色砂粒・石英を含む)	良好	内外面: ナデ、磨部比	コースター形
710	土師器	皿	-	遺物包含層	8.9	(0.7)	-	3/12	にふい黄糖 (10Y7/2)	密(径1mm以下の赤茶・白・白色砂粒・石英を含む)	良好	内外面: ナデ、外面: ナデ	一部縁あり
711	土師器	皿	-	遺物包含層	(10.8)	(0.9)	-	1/12以下	赤明(10R6/6)・ 灰白(10YK8/2)	密(径1mm以下の白・赤茶・黒色砂粒・石英を含む)	良好	内外面: ナデ、磨部比	コースター形
712	土師器	羽釜	9030 O4	青灰色土層	(15.0)	(5.4)	-	1/12以下	にふい黄糖 (10Y7/3)	密(径1.5mm以下の白・赤茶・灰色砂粒・石英・砂粒を多く含む)	良好	内面: ナデ、磨部比、外面: ナデ	外面にスス付着
713	瓦器	瓶	-	遺物包含層	(14.4)	(4.4)	-	2/12	黒(SY2/1)	釉負(径0.5~2mmの赤茶色の粒を多く含む)	良好	内面: 磨文、外面: ナデ、磨部比、ミゾギ	大和型
714	瓦器	瓶	-	青灰色土層	(12.0)	(2.8)	-	1/12	腐灰(N3-0)	釉負(径0.3mm以下の白色砂粒を僅かに含む)	良好	内面: 磨文、外面: 磨文	口縁磨部内面に沈着
715	瓦器	皿	9030 E6	遺物包含層	7.8	1.5	-	3/12	腐灰(N3-0)	密(径1mm以下の白・黒色砂粒・石英を含む)	良好	内面: ナデ、磨文、外面: ナデ	
716	瓦器	鉢	-	遺物包含層	-	(5.5)	-	1/12	灰白(N8-0)~ 灰(N3-0)	密(径1mm以下の白・黒・灰色砂粒・石英を含む)	良好	内外面: ナデ、外面: 花文ステーション	
717	瓦器	鉢	-	遺物包含層	(28.7)	(3.7)	-	1/12	青灰(SY9/1)~ 明青灰(SY7/1)	密(径0.5mm以下の白・灰色砂粒を含む)	窯焼	内外面: ロクロナデ	

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
718	陶器	壺	-	遺物包含層	(48.6)	(4.3)	-	1/12以下	内：灰 (7.5Y7.5/1)、赤灰 (N4.0)	赤 (径3mm以下の白・黒色砂粒・石英を多く含む)	窯焼	内外面：ロクロナデ	滑溜
719	白磁	瓶	9000 J8	青灰色土層	(17.6)	(2.7)	-	1/12	灰白 (2.5Y8/1)	精良	窯焼	内外面：施釉	玉縁
720	白磁	瓶	-	遺物包含層	(17.2)	(4.7)	-	1/12	灰白 (7.5Y7/1)	精良 (径2mm以下の黒色粒を含む)	窯焼	内外面：施釉	玉縁
721	白磁	瓶	-	遺物包含層	-	(2.3)	(6.0)	4/12	胎：灰白 (7.5Y8/1)、赤地：白 (N9.0)	精良 (径0.5mm以下の黒・灰色砂粒を少し含む)	窯焼	内面：施釉 外面：ロクロヘラタズリ	
722	白磁	盒子蓋	9000 G22	青灰色土層	(6.0)	(1.4)	-	2/12	浅黄 (2.5Y7/4)	精良	窯焼	外面：施釉	
723	青磁	瓶	-	遺物包含層	(15.0)	(4.2)	-	15/12	胎：オリーブ灰 (2.5Y6/1)、赤地：灰白 (2.5Y7/1)	精良	窯焼	内外面：ロクロナデ 外面：面取り	継ぎ文
724	青磁	皿	9000 D19	青灰色土層	(11.0)	(1.9)	-	1/12以下	胎：灰白 (5Y7/1)	精良 (径1mm以下の砂粒を少し含む)	窯焼	内外面：施釉	
725	青白磁	瓶	9000 E4	北層 (青灰色土層)	-	(2.1)	(6.0)	6/12	胎：明緑灰 (10Y8/1)、赤地：灰白 (N8.0)	精良	窯焼	内外面：施釉	見込みに草花文
726	陶器	瓶	-	遺物包含層	-	(4.6)	(3.9)	3.5/12	胎：黒 (5Y2/1)、赤地：灰白 (2.5Y8/1)	赤 (径0.5mm以下の白・茶色砂粒を含む)	窯焼	内外面：施釉 外面：ナズリ	天目茶碗
727	陶器	瓶	-	遺物包含層	-	(3.2)	(4.6)	底) 完存	胎：黒 (7.5Y8/1)、赤地：灰白 (2.5Y8/2)	赤 (径2mm以下の白・赤色砂粒を含む)	窯焼	内面：施釉	天目茶碗
728	土製品	土師	9000 B16	青灰色土層	長：5.5	幅：1.7	厚：1.5	完形	にぶい黄橙 (10Y8/2)	赤 (径0.5mm以下の紅粒と黒色砂粒を含む)	良好	内外面：ナデ	

付表10 出土石製品観察表

報告番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
109	石鏃	8030725	N9560 11層	4.0	1.6	0.6	36	オメガイテ
110	磨製石筴丁	9000010	南壁	8.3	(5.7)	1.0	51.6	粘板岩 (起伏不規則物含む)、未成品小
111	有孔石製品	9000022	灰白色土層	(3.4)	(3.7)	0.7	13.4	粘板岩、磨跡僅か
112	削片	9000022	灰白色土層	4.2	3.9	1.3	24.6	オメガイテ
113	削片/磨跡	9000012	灰白色土層	3.0	4.6	0.5	5.5	オメガイテ
114	砥石	-	遺物包含層	(10.0)	2.5	2.0	55.9	
115-1	非磁石	9000E20	灰白色土層	(2.8)	3.2	1.4	13.7	緑色凝灰岩
115-2	非磁石	9000E21	灰白色土層	4.0	(4.2)	1.5	35.2	緑色凝灰岩

付表11 出土瓦埴類観察表

報告番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅・径 (cm)	厚さ (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
432	埴	9010 L18	SD165	(16.2)	(7.4)	6.0	-	にぶい黄橙 (10Y8/2)	赤 (径0.5～1mm程度の白色砂粒を含む)	良好	ナデ	黒粒あり
433	埴	9010 M21	SD165	(11.9)	10.7	7.2	-	灰赤地 (2.5Y8/4)、赤灰 (7.5Y8/1)	赤 (径8mm以下の白・灰・黒・茶色砂粒を非常に多く含む)	良好	ナデ	黒粒あり
434	埴	9020 B-C16	SX94	(21.0)	(9.9)	8.0	-	にぶい黄 (7.5Y8/4)、灰白 (10Y8/1)	赤 (径5mm以下の白・灰・黒・茶色砂粒、雲母を非常に多く含む)	良好	ナデ	黒粒あり
435	埴	9000 C22	SH7 SP20	(14.3)	(10.8)	7.1	-	灰赤地 (2.5Y8/4)、灰白 (10Y8/1)	赤 (径6mm以下の白・灰・茶色砂粒を多く含む)	良好	ナデ	黒粒あり
436	埴	9000 I13	灰白色土層	(10.6)	(9.5)	6.6	-	灰 (7.5Y6/1)	赤 (径0.5～1mm程度の白色砂粒を多く含む)	良好	ナデ	黒粒あり
437	丸	9000 B17-18	SE540	(9.0)	(9.4)	1.5～1.8	-	灰白 (2.5Y8/1)	赤 (径1.5mm以下の白・灰色砂粒を少し含む)	良好	西面：布目、凸面：ナデ	
438	丸	9000 B17-18	SE540 2層	(5.0)	(10.0)	2.1	-	90G (5Y8/1)	赤 (径3mm以下の白・黒砂粒・石英を多く含む)	良好	西面：布目、凸面：ナデ	
439	丸	9000 B17-18	SE540 6層	(12.4)	(7.0)	1.7	-	灰 (N4.0)	赤 (径0.5mm以下の白・暗灰色の砂粒を含む)	良好	西面：布目、凸面：ナデ (L具痕残り)	
440	丸	9000 B17-18	SE540 6層	15.9	(11.5)	1.7	-	暗灰 (N3-0)～灰白 (N8.0)	赤 (径2mm以下の白色砂粒を含む)	良好	西面：布目、凸面：ナデ	
441	丸	9000 B17-18	SE540 7層	(13.5)	(9.9)	1.7	-	暗灰 (N3-0)	赤 (径5mm以下の半透明・白色砂粒を含む)	良好	西面：布目、凸面：ナデ	
442	丸	9000 I10	SD160	(10.5)	(12.6)	1.7～3.0	-	灰 (10Y8/1)	赤 (径1～4.5mm以下の半透明・白・赤茶色の砂粒を多く含む)	軟	西面：布目、凸面：ナデ	玉縁凸面に沈線2条

報告番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅・径 (cm)	厚さ (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整	備考
443	丸	8020 S25	SB13 P654	9.4	7.2	1.9	-	灰白(N7Y7/1)	やや歪(径2mm以下の白・半透明・灰色砂粒を多く含む)	良好	凹面：縄目、凸面：摩滅	
444	丸	8020 K25	SK350	(13.4)	(10.8)	2.0	-	灰白(N7/0)	歪(径0.5～2mm程度の白・灰・黒灰色砂粒をやや多く含む)	軟	凹面：布目、凸面：ナデ	
445	平	9020 B17-18	SE540 13号	(20.7)	(18.0)	1.9	-	灰GY4/1	やや歪(径4mm以下の白・黒・灰色砂粒を多く含む)	良好	凹面：布目、凸面：格子タタキ・凹面：肌	1期
446	平	9020 B17-18	SE540 13号	9.7	(11.3)	2.2	-	暗灰(N3/0)	やや歪(径4mm以下の灰・白・褐色砂粒を含む)	良好	凹面：布目、凸面：格子タタキか(摩滅)	2期
447	平	8020 K24	SB14 SP611	(13.0)	(12.2)	2.5	-	灰(NS-0)・にぶい層(7GYR7/3)	歪(径5～8mm以下の白・黒・灰・赤茶色砂粒・石英・雲母を多く含む)	良好	凹面：布目、凸面：格子タタキ	3期
448	平	9020 B17-18	SE540 6号	(16.0)	(12.5)	1.5～1.9	-	灰(N4/0)～灰白(7GYR/1)	歪(径1mm以下の白・黒・灰色砂粒・石英を含む)	良好	凹面：布目、凸面：縄タタキ	4期
449	平	9020 B17-18	SE540 6号	(13.3)	8.2	2.1	-	暗灰(N3/0)	歪(径3mm以下の白色砂粒を含む)	良好	凹面：布目、凸面：縄タタキ	5期
450	平	9020 J3	SE152 2・3・5号	33.1	広底 25.0 狭底 22.0	1.7	ほぼ完全	灰白(N7/0)～灰白(NS/0)	歪(径2mm以下の白・黒・灰色砂粒を多く含む)	良好	凹面：布目、凸面：縄タタキ・ユビオヤシ	6期
451	平	8020 S・T23	SB14 SP723 5号	8.5	(14.8)	1.5～1.7	-	灰(N4/0)	歪(径2mm以下と6mm大の白・灰・褐色砂粒・石英を多く含む)	良好	凹面：布目、凸面：縄タタキ	7期
452	平	9020 B17-18	SE540 6号	(20.1)	(14.0)	1.7～2.0	-	灰(N4/0)	歪(径1～8mmの白・半透明・灰色砂粒を含む)	良好	凹面：布目・特徴的、凸面：縄タタキ後ナデ	8期
453	平	8020 R 24	SB14 SP611	(17.0)	(15.0)	0.8～1.6	-	灰白(N7/0)	歪(径7mm以下の白・灰色砂粒・石英を多く含む)	軟	凹面：布目か(摩滅)、凸面：縄タタキ	9期
454	平	9020 H10	SD160	(15.5)	(13.3)	2.9	-	灰白(10YR8/1)	歪(径1～3mmの赤茶色の砂粒をわずかに含む)	軟	凹面：布目、凸面：縄タタキ	10期
455	平	9020 D11	SD160	6.9	7.4	1.9	-	灰(NS-0)	歪(径0.5～2mm程度の白色砂粒を含む)	軟	凹面：摩滅、凸面：縄タタキ	11期
456	平	-	遺物仏舎	9.2	7.5	2.0	-	灰白(N6/0)	歪(径0.5mm程度の白色砂粒を含む)	良好	凹面：布目、凸面：タタキ	
457	平	9020 B17-18	SE540 5号	8.2	8.0	1.7	-	灰(N4/0)～N6/0	歪(径1mm以下の白・黒色砂粒・石英を多く含む)	良好	凹面：布目、凸面：縄タタキ	4期
458	平	9020 B17-18	SE540 7号	(10.5)	8.0	2.9	-	灰(NS/0)	歪(径4mm以下の白・赤・灰・黒色砂粒・石英を多く含む)	良好	凹面：布目、凸面：縄タタキ	6期
459	平	9020 B17-18	SE540 10号	(15.0)	(13.5)	2.2	-	暗灰(N3/0)	歪(径1mm大の白色砂粒を含む)	良好	凹面：布目・特徴的、凸面：格子タタキか(肌)	3期
460	平	9020 B17-18	SE540 10号	(14.0)	(13.3)	1.8	-	灰黄褐色(10YR4/2～5/2)	歪(径1.5mm以下の黒・褐色砂粒・石英を少し含む)	良好	凹面：布目、凸面：格子タタキ	1期
461	平	9020 B17-18	SE540 5号	6.6	7.0	2.6	-	灰黄褐色(10YR5/2)～にぶい黄褐色(10YR7/2)	歪(径1～3mm以下の白・黒色砂粒・石英を多く含む)	良好	凹面：布目、凸面：縄タタキ	6期
462	平	9020 J10	SD160	6.6	6.3	1.6～1.7	-	灰白(N8/0)	歪(径4mm以下の赤・灰・白色砂粒・雲母を多く含む)	軟	凹面：摩滅、凸面：縄タタキ	10期
463	平	9020 M10	SD160	5.8	6.3	2.1～2.3	-	灰白(N7/0)	歪(径4mm以下の黒・黒・白色砂粒を少し含む)	良好	凹面：布目、凸面：縄タタキ	7期
464	平	9020 E 4	S85 SP369	7.3	8.3	2.1～2.4	-	灰白(5Y7/2)～鉄黄(2.5Y8/3)	歪(径4mm以下の白・黒・褐色砂粒を多く含む)	軟	凹面：布目、凸面：縄タタキ	7期
465	平	9020 U 24	SB13 SP706 14号	8.1	(13.5)	2.0	-	灰(NS-0～7/0)	歪(径5mm大の白色砂粒をわずかに含む)	軟	凹面：布目か(摩滅)、凸面：縄タタキか(摩滅)	10期
466	平	8020 R 24	SB14 SP611	(10.2)	(11.0)	2.3～2.6	-	灰白(N6/0)	歪(径3mm以下の灰・白・黒色砂粒・石英を多く含む)	軟	凹面：布目、凸面：格子タタキか(摩滅)	2期
467	平	9020 J3	SE152 3号	8.3	6.6	1.8	-	暗灰(N3/0)	歪(径1.5mm以下の半透明・白・黒色砂粒を含む)	良好	凹面：布目、凸面：縄タタキ	5期
468	平	8020 F25	SK550	6.1	(4.3)	1.3	-	灰白(2.5Y7/1)～灰(NS-0)	歪(径0.5～1mm程度の白色砂粒を含む)	良好	凹面：布目、凸面：縄タタキ	5期
469	平	9020 E 8	SD323	(12.9)	(12.4)	2.2	-	灰白(2.5Y8/1)	歪(径3mm以下の白・黒・灰色砂粒・石英を多く含む)	軟	凹面：布目、凸面：縄タタキ	10期
470	平	9020 G2	SD460	9.4	7.0	1.9	-	灰(N4/0)	歪(径2mm以下の白・黒色砂粒・石英を含む)	良好	凹面：布目、凸面：縄タタキ	10期
471	平	9020 B-C16	SK394	7.3	(13.1)	1.8	-	暗灰(N3/0)	歪(径1mm以下の白・黒色砂粒・石英を多く含む)	軟	凹面：布目、凸面：縄タタキ	7期
486	丸	8020 G24	SB15 SP801	(13.8)	7.0	3.5	-	灰白(10YR6/1～8/2)	歪(径1～3mm以下の白・黒色砂粒・石英を含む)	軟	凹面：布目、凸面：縄タタキ・ナデ後ナデ	
626	軒平	9010 119	青灰色土層	(4.5)	3.7	3.2	-	灰(N4/0)	歪(径1mm以下の白色砂粒を少量含む)	軟		
627	軒丸	-	青灰色土層	(3.8)	(4.8)	1.8	-	暗灰(N3/2)	やや歪(径2mm以下の白・褐色砂粒を多く含む)	軟	不明	
628	平	-	青灰色土層	(10.8)	(13.8)	1.9	-	灰白(N6/0)	歪(径2mm以下の白・黒色砂粒・石英を多く含む)	軟	凹面：横骨状、凸面：タタキ・格子タタキ・沈澱	

*小紋点第2位を四捨五入、第1位で表示

- - :該当部位なし、計測不能

付表 12 出土木製品観察表

報告番号	種別	通称名	寸法 (cm)			木取り	樹種	備考
			長さ	幅	高さ/厚さ			
472	板板	SE540	(116.0)	10.5～13.3	0.6～0.8	桐材	ヒノキ	南
473	板板	SE540	(114.8)	21.6	0.4～1.3	桐材	ヒノキ	南
474	板板	SE540	(125.4)	17.0	0.4～2.3	桐材	ヒノキ	南、475・490と接合
475	板板	SE540	(121.4)	13.5	0.8～1.5	桐材	ヒノキ	南、490・474と接合
476	板板	SE540	(105.8)	20.4～20.8	0.6～1.6	桐材	ヒノキ	南
477	板板	SE540	(136.0)	36.6	0.6～1.6	桐材	ヒノキ	南
478	板板	SE540	(110.4)	15.4	2.0～3.4	桐材	ヒノキ	南、年輪年代
479	板板	SE540	(116.8)	11.8～12.0	0.8～2.2	桐材	ヒノキ	南、年輪年代
480	板板	SE540	(116.2)	16.8	0.6～1.0	桐材	ヒノキ	南
481	板板	SE540	(116.4)	13.5～14.5	0.4～1.1	桐材	ヒノキ	南
482	板板	SE540	(121.8)	16.3	0.4～1.3	桐材	ヒノキ	南
483	板板	SE540	(124.0)	13.6～15.8	0.6～1.5	桐材	ヒノキ	南
484	板板	SE540	(110.0)	17.3	0.6～1.2	桐材	ヒノキ	南
485	板板	SE540	(74.0)	16.0	0.6～1.0	桐材	ヒノキ	南、年輪年代
486	板板	SE540	(129.2)	15.9～18.7	1.0～1.3	桐材	ヒノキ	南
487	板板	SE540	(111.4)	16.0～16.8	0.8～2.3	桐材	ヒノキ	南
488	板板	SE540	(118.7)	12.4	1.2～2.8	桐材	ヒノキ	南
489	板板	SE540	(84.3)	8.3	0.6～0.8	桐材	ヒノキ	南
490	板板	SE540	(114.5)	17.4	1.4～2.6	桐材	ヒノキ	東、475・474と接合、年輪年代
491	板板	SE540	(88.8)	18.4	0.6～0.8	桐材	ヒノキ	東
492	板板	SE540	(152.0)	12.8～14.0	0.6～1.38	桐材	ヒノキ	東、年輪年代
493	板板	SE540	(111.2)	15.0	0.8～1.2	桐材	ヒノキ	東
494	板板	SE540	(130.4)	19.8	1.6～2.0	桐材	ヒノキ	東
495	板板	SE540	(118.0)	14.0～16.0	0.8	桐材	ヒノキ	東
496	板板	SE540	(125.5)	11.8	0.4～1.3	桐材	ヒノキ	東
497	板板	SE540	(91.8)	11.0	0.8～1.0	桐材	ヒノキ	東、年輪年代
498	板板	SE540	(116.0)	12.1	2.0～2.4	桐材	ヒノキ	東、年輪年代
499	板板	SE540	(90.4)	15.8	1.2	桐材	ヒノキ	東、年輪年代
500	板板	SE540	(124.0)	12.8～14.5	1.0～1.4	桐材	ヒノキ	北
501	板板	SE540	(141.0)	14.4	0.4～0.9	桐材	ヒノキ	北
502	板板	SE540	(110.0)	12.4～14.3	0.4～1.0	桐材	ヒノキ	北
503	板板	SE540	(110.2)	14.8～15.6	0.5～1.0	桐材	ヒノキ	北
504	板板	SE540	(130.2)	11.6	0.4～1.65	桐材	ヒノキ	北、年輪年代
505	板板	SE540	(114.4)	14.4～16.8	1.6～2.6	桐材	ヒノキ	北、515と接合
506	板板	SE540	(96.0)	12.2	0.8～2.8	桐材	ヒノキ	北
507	板板	SE540	(94.1)	5.6～13.4	0.75	桐材	ヒノキ	北
508	板板	SE540	(100.9)	13.2～14.5	0.6～1.2	桐材	ヒノキ	西
509	板板	SE540	(97.8)	12.8	0.6～1.2	桐材	ヒノキ	西
510	板板	SE540	(113.8)	14.0～16.4	0.6～0.8	桐材	ヒノキ	西
511	板板	SE540	(114.2)	14.4～15.6	1.28～1.3	桐材	ヒノキ	西
512	板板	SE540	(109.5)	21.5	0.4～0.8	桐材	ヒノキ	西
513	板板	SE540	(108.8)	18.2	0.8～1.2	桐材	ヒノキ	西
514	板板	SE540	(101.6)	13.2	0.2～1.4	桐材	ヒノキ	西
515	板板	SE540	(120.4)	13.8～16.6	1.2～1.8	桐材	ヒノキ	西、505と接合
516	板板	SE540	(88.8)	14.8	1.0	桐材	ヒノキ	西
517	板板	SE540	(126.2)	14.0～15.8	0.8～1.6	桐材	ヒノキ	西
518	板板	SE540	(82.0)	11.2	0.4～0.6	桐材	ヒノキ	西
519	板板	SE540	(121.5)	14.8	1.6～2.5	桐材	ヒノキ	西
520	板板	SE540	(112.2)	18.3	1.0～1.3	桐材	ヒノキ	西
521	板板	SE540	(96.7)	8.4	0.3～0.5	桐材	ヒノキ	西、年輪年代
522	横棧	SE540	(80.3)	3.8～6.1	2.3～3.8	芯木材	ヒノキ	南側1段目
523	横棧	SE540	89.8	3.6～6.2	2.1～3.65	芯木材	ヒノキ	南側2段目、年輪年代
524	横棧	SE540	101.4	3.9～5.6	2.8～4.3	芯木材	スギ	東側1段目
525	横棧	SE540	102.8	4.2～7.2	3.6～6.4	芯木材	ヒノキ	東側2段目、年輪年代
526	横棧	SE540	(93.4)	11.30	11.26	芯材丸木材	サカキ	東側3段目
527	横棧	SE540	108.6	5.2～6.4	2.8～4.2	芯木材	スギ	北側1段目、年輪年代
528	横棧	SE540	115.0	4.8～5.6	3.6～5.6	芯木材	ヒノキ	北側2段目、年輪年代

報告番号	種類	遺構名	測量 (cm)			木取り	相様	備考
			長さ	幅	高さ/厚さ			
529	横穴	SE540	(111.1)	4.0 ~ 5.6	4.2 ~ 5.4	芯去材	ヒノキ	西側1段目
530	横穴	SE540	110.6	4.8 ~ 7.2	3.6 ~ 6.2	芯去材	ヒノキ	西側2段目
531	横穴	SE540	(102.2)	径 3.3	径 3.0	芯持丸木材	サカキ	西側3段目、年輪年代
532	横穴	SE540	(94.2)	5.2 ~ 6.4	3.8 ~ 5.6	芯去材	スギ	枠内出土9-10層
533	横穴	SE540	(102.0)	6.0 ~ 7.2	2.8 ~ 4.2	芯去材	スギ	枠内出土9-10層
534	横穴	SE540	(71.2)	6.2 ~ 7.0	3.0 ~ 3.6	芯去材	ヒノキ	枠内出土9-10層
535	横穴	SE540	110.6	3.2 ~ 6.4	2.0 ~ 4.6	芯去材	ヒノキ	枠内出土9-10層
536	隅柱	SE540	(164.8)	13.2 ~ 17.2	12.0 ~ 13.2	芯去材	ヒノキ	南西
537	隅柱	SE540	(164.5)	16.4	15.6	芯去材	ヒノキ	南東、年輪年代
538	隅柱	SE540	(162.8)	8.4 ~ 10.8	7.2 ~ 8.0	芯去材	ヒノキ	北西
539	隅柱	SE540	(169.4)	13.0	9.4	芯去材	ヒノキ	北東、年輪年代
540	横板	SE540 7層	(8.9)	5.0	1.0	削目	ツゲ	礎本残存
541	横板	SE540 8層	(7.0)	11.5	7.5	板目	ヒノキ	墨書あり
542	礎えきし	SE540 13層	(2.1)	0.6	2.1	削材	-	-
543	加工木	SE540 4層	(86.0)	(18.0)	3.1	削材	コウヤマキ	-
544	加工木	SE540 13層	(13.4)	(14.4)	3.1 ~ 2.2	板目	-	礎本取り
545	礎えきし	SD471	33.8	1.3	0.7	削材	-	礎本取り
387	柱痕	SB11 SP483	(26.0)	(12.3)	(9.6)	芯持丸木材	ヒノキ	-
388	柱痕	SB11 SP492	(29.1)	(13.2)	(16.1)	芯持丸木材	ヒノキ	-
389	柱痕	SB11 SP486	(31.7)	(8.0)	(5.4)	芯持丸木材	ヒノキ	-
390	柱痕	SB11 SP488	(23.8)	(16.6)	(5.7)	芯持丸木材	ヒノキ	-
629	不明	SK496	長: 16.1	幅: (2.2)	厚: 0.4	板目	-	-
630	漆器残	SK496	(11.8)	(4.2)	-	礎本取り	-	内田: 漆、外田: 黒漆、11/3/12部残存

付表13 出土鉄製品観察表

報告番号	種類	器形	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
546	鉄製品	刀子	9020B17-18	SE540 8層	全長: 20.2 刀身: 14.3	刀身: 0.2 ~ 0.8 柄: 0.9 ~ 1.1	刀身: 0.1 ~ 0.3 柄: 0.7 ~ 0.9	刀身に黒漆。木取りはミカン質。磨様: モクレン属
547	鉄製品	刀子	9020P4	灰白色土層	22.7	1.9	0.3	-
631	鉄製品	不明(蓋か)	9020H18	SK319	径: (13.0)	高: 1.1	0.3	-
632	鉄製品	刀子	9020Z1	青灰色土層	(5.9)	0.75 ~ 1.35	0.2 ~ 0.25	-
633	鉄製品	柄	9020E23	青灰色土層	径: (11.8)	高: (2.35)	0.4 ~ 0.7	-
634	鉄製品	釘	9020E20	青灰色土層	14.3	0.8	0.7	-
635	鉄製品	釘	-	青灰色土層	(4.5)	0.55 ~ 0.8	0.3 ~ 0.85	-
636	鉄製品	釘	9020G4	青灰色土層	6.2	1.1	0.4	-
637	鉄製品	釘	9020F21	青灰色土層	6.8	0.9	0.8	-
638	鉄製品	釘	9020E20	青灰色土層	6.0	0.4 ~ 0.7	0.3 ~ 1.0	-
639	鉄製品	釘	9020H17	青灰色土層	(4.1)	0.55 ~ 1.05	0.5 ~ 0.95	-
640	鉄製品	釘	9020C22	青灰色土層	4.9	1.2	0.4	-

付表14 出土銭貨観察表

報告番号	銭貨名	国	初鋳年	地区名	出土地点	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
548	和同開珎	日本	708年	9020G5	灰白色土層	(1.6)	0.1	0.3	-
591	風摩通寶	日本	907年	9020B18	SK289	1.4	0.2	1.8	-
641	開元通寶	南唐	621年	9020C21	青灰色土層	2.6	0.1	2.6	-
642	開元通寶	南唐	621年	-	遺物包含層	2.4	0.1	2.6	-
643	宋通元寶	北宋	960年	-	遺物包含層	2.5	0.1	2.7	-
644	明通元寶	北宋	1032年	9020G20	青灰色土層	2.5	0.1	2.1	-
645	太平通寶	北宋	1064年	-	遺物包含層	2.4	0.1	2.5	-
646	熙寧元寶	北宋	1068年	9020E8	青灰色土層	2.4	0.1	2.9	-
647	元豊通寶	北宋	1078年	9020C19	青灰色土層	2.4	0.1	3.4	-
648	元祐通寶	北宋	1086年	9020G22	青灰色土層	2.5	0.1	3.5	-
649	元祐通寶	北宋	1086年	9020H14	北東	2.5	0.1	3.0	-
650	聖宋元寶	北宋	1101年	9020H14	青灰色土層	2.4	0.1	3.1	-
651	政和通寶	北宋	1111年	-	遺物包含層	2.4	0.1	2.5	-
652	寛永通寶	日本	1636年	9020P1	青灰色土層	2.0	0.1	2.0	1期古寛永

圖 版

図版第1 岡田国遺跡第3～6次



(1) 第3次調査地全景(西から)



(2) 第3次調査地全景(西から)

図版第2 岡田国遺跡第3～6次



(1) 第4・5次調査区全景(南から)



(2) 第4・5次調査区全景(東から)



(1) 第4・5次調査区全景(南から)



(2) 第4・5次調査区全景(北から)

図版第4 岡田国遺跡第3～6次



(1) 第4・5次調査区全景(北東から)



(2) 第4・5次調査区全景(南から)

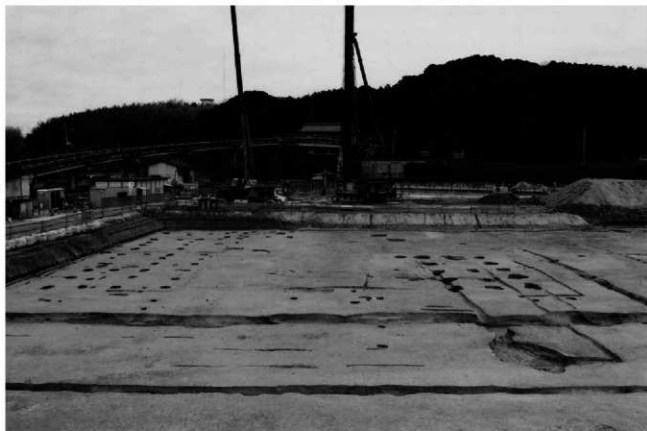
図版第5 岡田国遺跡第3～6次



(1) 第4・5次調査区全景(南から)



(2) 第4・5次調査区全景(北から)



(1) 第4・5次調査区全景(西から)



(2) 第4・5次調査区全景(南東から)



(1) 第4・5次調査区全景(東から)



(2) 第4・5次調査区全景(西から)



(1) 第4・5次調査区全景(南から)



(2) 第4・5次調査区全景(北から)



(1) 第4・5次調査区全景(西から)



(2) 第4・5次調査区全景(北から)



(1) 第4・5次調査区全景(北から)



(2) 第4・5次調査区全景(東から)



(1) 第 6 次調査区全景(南から)



(2) 第 6 次調査区全景(南東から)



(1) 第 6 次調査区全景(南から)



(2) 第 6 次調査区全景(北から)



(1) 掘立柱建物 S B 9 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B 9 (東から)



(1) 掘立柱建物 S B 10(北から)



(2) 掘立柱建物 S B 10(北東から)

(1) 土坑 S K 27 遺物出土状況
(南から)



(2) 土坑 S K 30 土層断面(南から)



(3) 土坑 S K 40 土層断面(南から)





(1) 土坑 S K48 遺物検出状況
(南から)



(2) 土坑 S K390 土層断面 (南から)



(3) 土坑 S K400 土層断面 (南から)

(1) 土坑 S K 500 遺物出土状況
(南から)



(2) 土器溜まり S X 427 (東から)



(3) 車輪石出土状況 (南から)





(1) 溝 S D195(北から)



(2) 溝 S D195(北から)



(3) 溝 S D195土層断面(南から)



(1) 自然流路 N R 560 遺物出土状況 (南西から)



(2) 自然流路 N R 560 遺物出土状況 (東から)



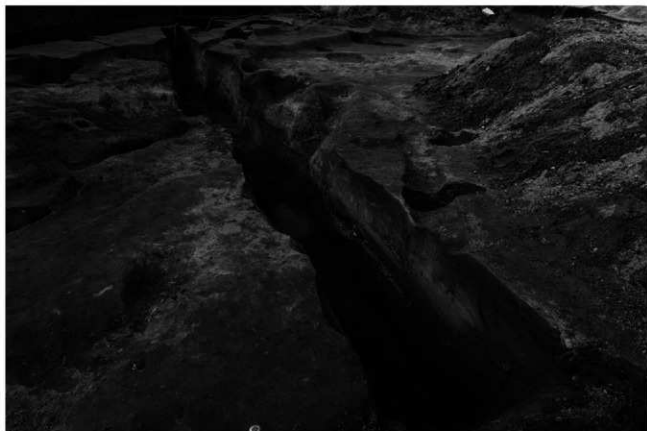
(1) 自然流路NR560土器溜まり
S X764遺物出土状況(南から)



(2) 自然流路NR560土器溜まり
S X764遺物出土状況(東から)



(3) 自然流路NR560遺物出土状況
(西から)



(1) 自然流路 N R 560 土層断面 (南東から)



(2) 自然流路 N R 560 土層断面 (南から)



(1) 溝 S D 590 遺物出土状況
(北東から)



(2) 溝 S D 590 遺物出土状況
(東から)



(3) 溝 S D 590 遺物出土状況
(東から)

(1) 溝 S D590 遺物出土状況
(南から)



(2) 溝 S D590 遺物出土状況
(東から)



(3) 溝 S D590 遺物出土状況
(東から)





(1) 道路 S F 1 (南東から)



(2) 道路 S F 1 (北から)



(1) 道路 S F 1 (南から)



(2) 道路 S F 1 (南から)



(1) 道路 S F 1 轍痕検出状況
(南から)



(2) 道路 S F 1 轍痕検出状況
(南から)



(3) 道路 S F 1 轍痕検出状況
(南から)



(1) 道路 S F 1 東側溝 S D160(北から)



(2) 道路 S F 1 東側溝 S D160(南から)



(1) 道路 S F 1 東側溝 S D 160
遺物出土状況(南から)



(2) 道路 S F 1 東側溝 S D 160
遺物出土状況(西から)



(3) 道路 S F 1 東側溝 S D 160
遺物出土状況(南から)

(1) 道路 S F 1 東側溝 S D 160
遺物出土状況(北から)



(2) 道路 S F 1 東側溝 S D 160
遺物出土状況(南から)



(3) 道路 S F 1 東側溝 S D 160
土層断面(南から)





(1) 道路 S F 1 西側溝 S D 190 (南から)



(2) 道路 S F 1 西側溝 S D 190 (南から)

(1) 道路 S F 1 西側溝 S D 190
遺物出土状況(南から)



(2) 道路 S F 1 西側溝 S D 190
土層断面(南から)



(3) 道路 S F 1 西側溝 S D 190
土層断面(南から)





(1) 道路 S F 2 (北西から)



(2) 道路 S F 2 (西から)



(1) 道路 S F 2 (東から)



(2) 道路 S F 2 (西から)



(1) 道路 S F 2 北側溝 S D165(西から)



(2) 道路 S F 2 南側溝 S D200(西から)

(1) 道路 S F 2 北側溝 S D 165
土層断面(東から)



(2) 道路 S F 2 北側溝 S D 165
土層断面(西から)



(3) 道路 S F 2 南側溝 S D 200
土層断面(東から)





(1) 掘立柱建物 S B 1 検出状況(南西から)



(2) 掘立柱建物 S B 1 (東から)

(1) 掘立柱建物 S B 1 柱穴 S P 171
遺物出土状況(南から)



(2) 掘立柱建物 S B 1 柱穴 S P 169
土層断面(南から)



(3) 掘立柱建物 S B 1 柱穴 S P 170
検出状況(南から)





(1) 掘立柱建物 S B 2・3 検出状況(北東から)



(2) 掘立柱建物 S B 2・3 (南東から)



(1) 掘立柱建物 S B 4 検出状況(東から)



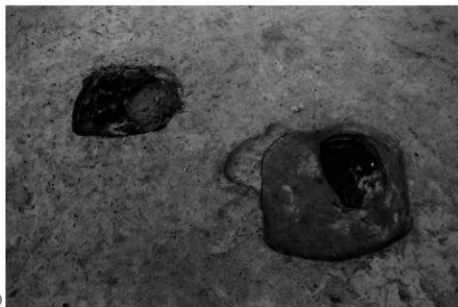
(2) 掘立柱建物 S B 4 (北から)



(1) 掘立柱建物 S B 5・6 検出状況(北から)



(2) 掘立柱建物 S B 5・6 (北から)



(1) 掘立柱建物 S B 5・6 柱穴
S P 259・264 検出状況 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B 5 柱穴 S P 264
土層断面 (東から)



(3) 掘立柱建物 S B 6 柱穴 S P 259
土層断面 (北西から)



(1) 掘立柱建物 S B 7 (東から)



(2) 掘立柱建物 S B 7 (西から)



(1) 掘立柱建物 S B 13・14(東から)



(2) 掘立柱建物 S B 13・14(北西から)



(1) 掘立柱建物 S B13(東から)



(2) 掘立柱建物 S B14(西から)

(1) 掘立柱建物 S B13 柱穴 S P 773
遺物出土状況(南東から)



(2) 掘立柱建物 S B13 柱穴 S P 707
土層断面(南から)



(3) 掘立柱建物 S B14 柱穴 S P 614
土層断面(西から)

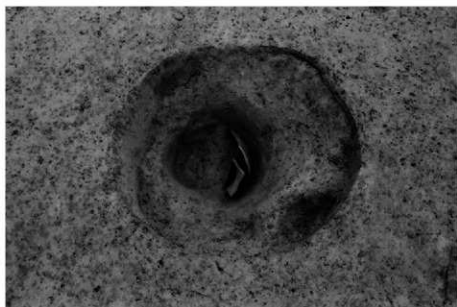




(1) 掘立柱建物 S B17 検出状況
(東から)



(2) 掘立柱建物 S B17 柱穴 S P321
遺物出土状況(南から)



(3) 掘立柱建物 S B17 柱穴 S P352
遺物出土状況(北から)



(1) 井戸 S E 152 土層断面 (南から)



(2) 井戸 S E 152 (南から)



(1) 井戸 S E 152 遺物出土状況
(南から)



(2) 井戸 S E 152 遺物出土状況
(南から)



(3) 井戸 S E 152 遺物出土状況
(南から)



(1) 井戸 S E 540 井戸枠検出状況 (南から)



(2) 井戸 S E 540 土層断面 (南から)



(1) 井戸 S E 540 (南から)



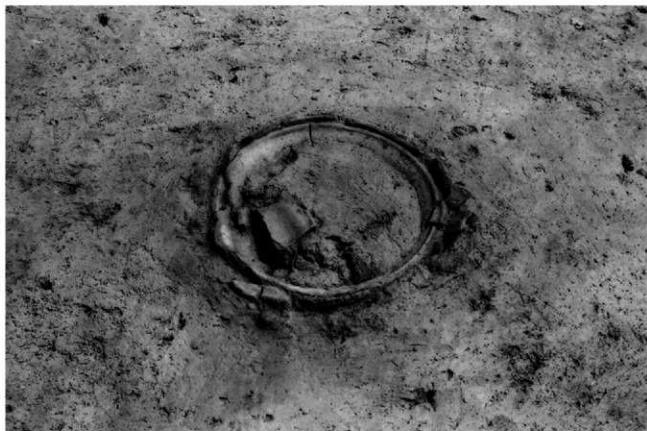
(2) 井戸 S E 540 (南西から)



(1) 井戸 S E 540 土層断面 (南から)



(2) 井戸 S E 540 遺物出土状況 (南から)



(1)埋納遺構 S X 475検出状況(南から)



(2)埋納遺構 S X 475(南から)



(1) 土坑 S K 360 土層断面 (東から)



(2) 土坑 S K 360 (東から)



(1) 土坑 S K225 遺物出土状況
(南から)



(2) 土坑 S K550 遺物出土状況
(南から)



(3) 落ち込み S X94 遺物出土状況
(南から)



(1) 溝群 1 (東から)



(2) 溝群 1 (南から)



(1) 溝群 1 (南西から)



(2) 溝群 1 (東から)

(1) 溝 S D460(南から)



(2) 溝 S D460(北から)



(3) 溝 S D460土層断面(南から)





(1) 溝 S D 458・459・461 (西から)



(2) 溝 S D 462・463・464 (西から)



(3) 溝 S D 464・465・467 (西から)

(1) 溝 S D91 (東から)



(2) 溝 S D90 (東から)



(3) 溝 S D106・141 (東から)





(1) 溝 S D 459 遺物出土状況
(東から)



(2) 溝 S D 462 遺物出土状況
(東から)



(3) 溝 S D 461 土層断面 (東から)

(1) 溝 S D91 土層断面(東から)

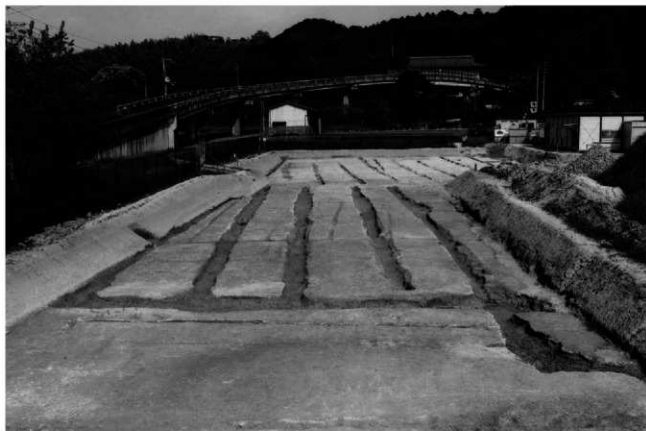


(2) 溝 S D90 土層断面(東から)



(3) 溝 S D141 土層断面(東から)





(1) 溝群 2 (西から)



(2) 溝群 2 (東から)

(1) 溝 S D471(東から)



(2) 溝 S D469(東から)



(3) 溝 S D468(東から)





(1) 溝 S D 529 (東から)



(2) 溝 S D 468 遺物出土状況
(南から)



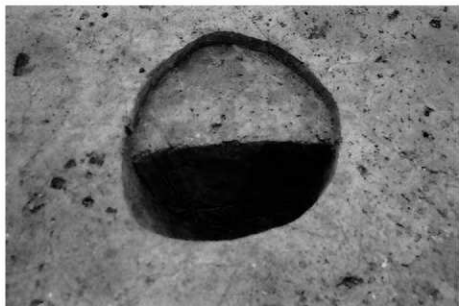
(3) 溝 S D 469 土層断面 (東から)



(1) 掘立柱建物 S B 8 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B 8 (西から)



(1) 掘立柱建物 SB 8 柱穴 S P 14
土層断面(南から)



(2) 掘立柱建物 SB 8 柱穴 S P 55
土層断面(北から)



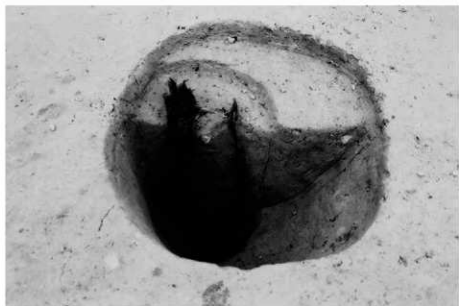
(3) 掘立柱建物 SB 8 柱穴 S P 54
遺物出土状況(北から)



(1) 掘立柱建物 S B11・12(南から)



(2) 掘立柱建物 S B11西側柱列(南から)



(1) 掘立柱建物 S B11 柱穴 S P 492
土層断面(西から)



(2) 掘立柱建物 S B11 柱穴 S P 488
土層断面(東から)



(3) 掘立柱建物 S B11 柱穴 S P 486
土層断面(東から)



(1) 掘立柱建物 SB15・横列 SA1 (南東から)



(2) 掘立柱建物 SB15・横列 SA1 (南から)



(1) 掘立柱建物 S B 15 (西から)



(2) 欄列 S A 1 (南から)



(1) 掘立柱建物 S B 16(南から)



(2) 掘立柱建物 S B 16(西から)



(1) 掘立柱建物 S B15 柱穴 S P601
土層断面(東から)



(2) 掘立柱建物 S B16 柱穴 S P586
土層断面(東から)



(3) 横列 S A 1 柱穴 S P605
土層断面(東から)



(1) 埋納遺構 S X 580 検出状況 (南から)



(2) 埋納遺構 S X 580 断面 (南から)



(1) 埋納遺構 S X 520 検出状況 (南から)



(2) 埋納遺構 S X 630 検出状況 (南から)

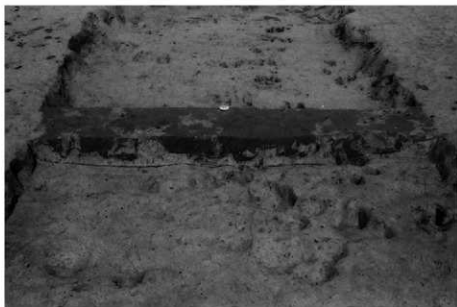
(1) S K 466土層断面(北から)



(2) 溝 S D92(北から)



(3) 溝 S D92土層断面(南から)





(1)素掘り溝群(北から)



(2)素掘り溝群土層断面(南から)



(1) 調査区南壁土層断面(北東から)



(2) 道路SF 1 断ち割り(南東から)



(1)調査区西壁土層断面(北から)



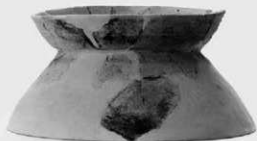
(2)調査区西壁土層断面(南東から)



(1) 第 6 次調査区北壁土層断面(南から)



(2) 第 6 次調査区南壁土層断面(北から)



6



32



11



37



12



44



13



46



47



63



51



68



61



74



79





117



118



121



119



120



122



123



125



127



124



127



126



127



129



130



132



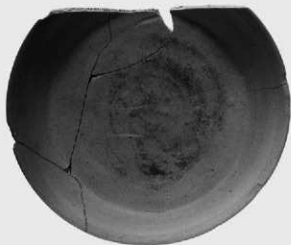
134



138



139



143



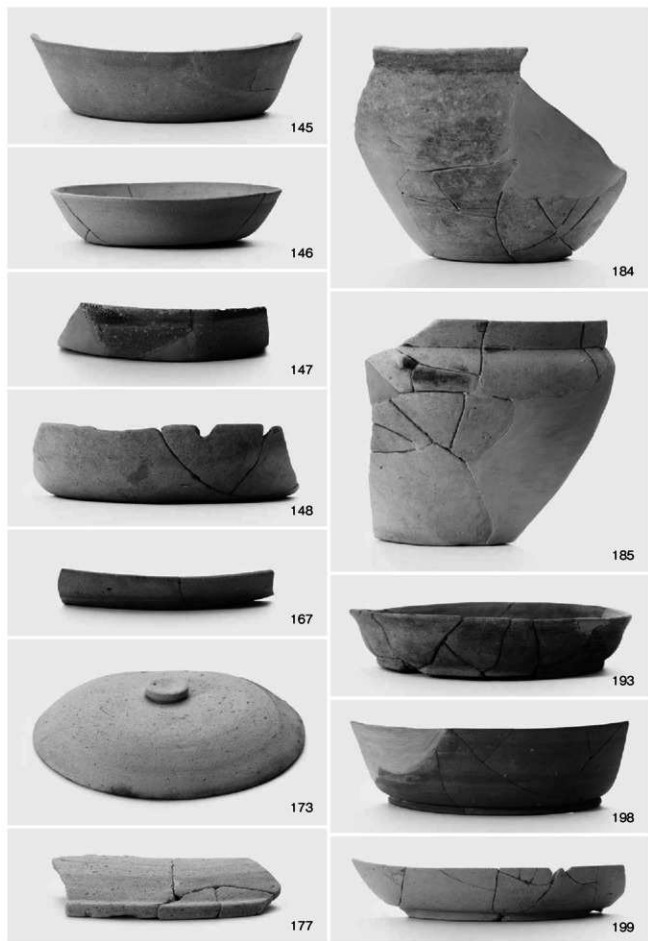
143



143



144







292



296



296



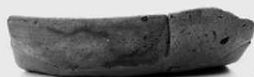
297



299



300



313



314



317



321



325



329



322



331



327



332



328



333



335



330



336



337



360



345



361



362



364



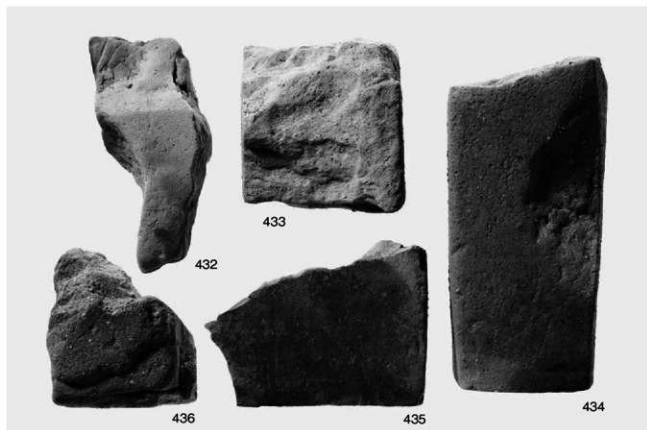
360
361



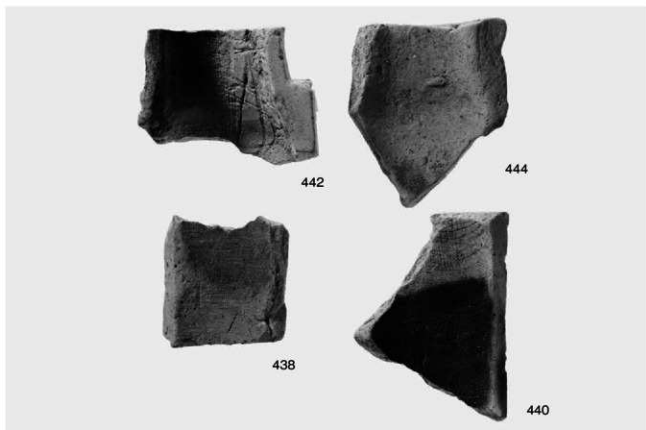


676

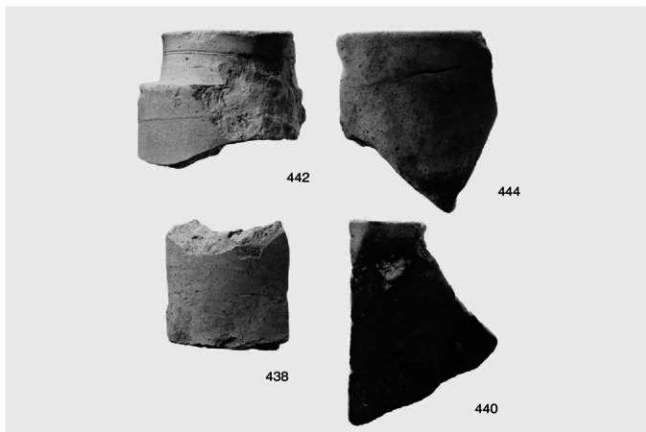
(1) 出土遺物13



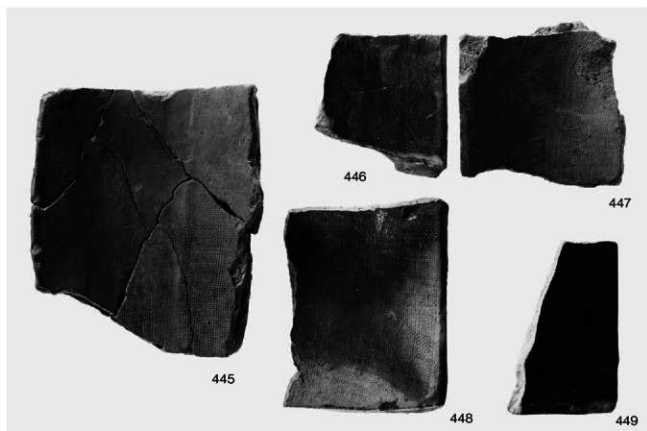
(2) 出土遺物14



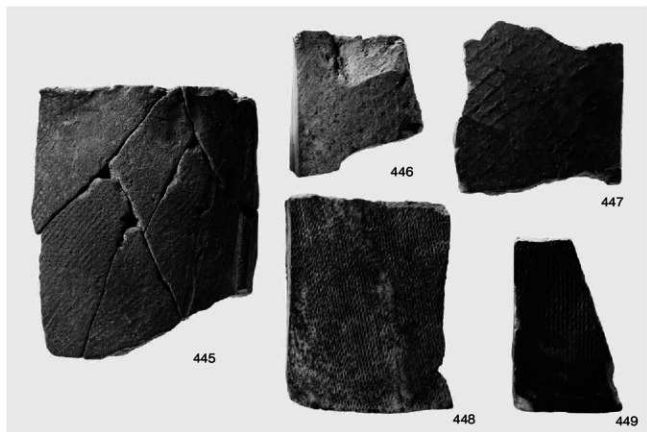
(1) 出土遺物 15



(2) 出土遺物 16



(1) 出土遺物17



(2) 出土遺物18



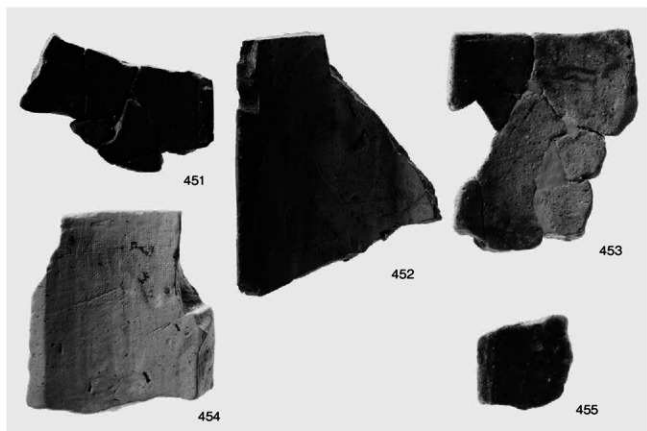
450

(1) 出土遺物19

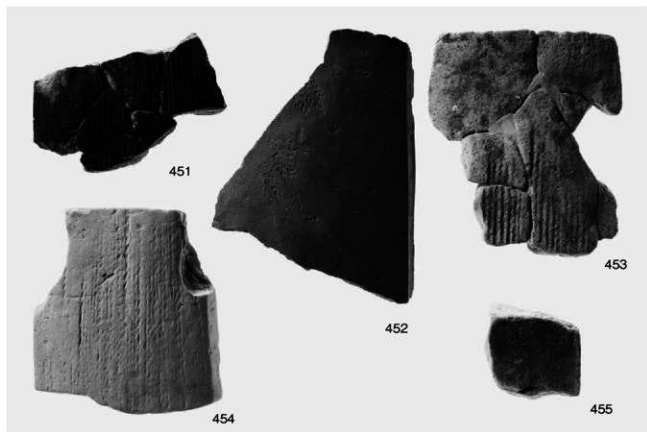


450

(2) 出土遺物20



(1) 出土遺物21



(2) 出土遺物22



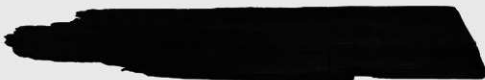
478



474



475



490



505



515



524



525



526



527



530



529



531



535



536



536



537



537



538



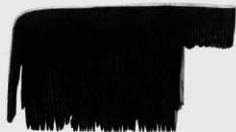
538



539



539



540



540



541



541



545



547



546



546



546



548



570



571



572



554



580



581



682



690



591



588



589



587



590



593



630



617



630



722



643



641



642



644



645



646



647



648



649



650



651



652

報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第180冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第180冊
編著者名	高野陽子・福山博章・田中秀弥・新尺雅弘
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番#3 Tel. 075(933)3877
発行年月日	西暦2020年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡 番号	° ' "	° ' "		m ²	
おかだくに 岡田国遺跡第3 ～6次	きづがわしきつばば みなみ・やいろ 木津川市木津馬 場南・八色	262145 112	34° 43' 46"	135° 49' 22"	20151102～ 20160129 20160526～ 20170228 20170419～ 20170914 20181010～ 20191225	8.880	道路建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡田国遺跡第3～6次	官衙	古墳～中世	道路・掘立柱建物・井戸・溝・土坑・自然流路	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・石器・石剣、	

所収遺跡名	要約
岡田国遺跡3～6次	弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。特に奈良時代の遺構については、道路・掘立柱建物跡・井戸・土坑・柱穴・溝などを検出した。検出した2条の道路は直交して検出しており、基本的には都城で数多く検出される事例である。また、この交差点に接して検出した6棟の掘立柱建物跡や茶掘りの井戸が一定の区画内に配置されており、都城の小規模宅地を彷彿とさせるものである。なお、その区画の周囲には用途不明の溝群が形成されている。このような小規模宅地の可能性のある掘立柱建物群や道路は、出土した遺物から恭仁宮と同時期のものであることが明らかになり、恭仁京の京域を考えるうえで重要な資料である。

京都府遺跡調査報告集 第 180 冊

令和 2 年 3 月 31 日

発行 公益財団法人

京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Phone (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961 Fax (075)231-7141